

# 平ヶ岡太附跡城取鳥跡史 書報告調查掘発

— 第21・26・27・28次發掘調査 —



2013

鳥取市教育委員会



史跡鳥取城跡附太閤ヶ平  
発掘調査報告書

— 第21・26・27・28次発掘調査 —





## 序 文

この報告書は、国庫補助金及び県補助金を受けて、平成21年度から平成23年度に実施した史跡鳥取城跡発掘調査の記録です。

鳥取市の中心市街地にそびえる久松山に所在する鳥取城跡は、国の史跡であり、後世に継承していかなければならない市民の貴重な財産です。鳥取市では、現在『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存整備基本計画』を策定し、関係各機関・専門家の指導を得て長期的な保存整備事業に取り組んでいます。今回報告する発掘調査は、その一環として史跡整備に必要な情報を得るために実施したものです。

なお、この報告書は不十分なところも多くありますが、私たちの郷土の理解に役立てていただくと共に、今後の調査研究の一助となれば幸いです。

平成25年3月

鳥取市教育委員会  
教育長 木下法広

## 例 言

1. 本書は、鳥取市東町2丁目・円護寺・栗谷町・百谷・小西谷に所在する国指定史跡鳥取城跡附太閤ヶ平において実施した、国庫補助事業「史跡鳥取城跡附太閤ヶ平復元保存修理事業」に伴う発掘調査報告書である。
2. 本書は、平成21年度(第21次調査)・22年度(第26・27次調査)・23年度(第28次調査)に実施した鳥取城保存修理事業に伴う発掘調査報告書である。
3. 本書で報告する発掘調査は、鳥取城跡復元整備計画に伴い、鳥取市教育委員会文化財課が実施した。
4. 遺構写真および遺物写真は調査担当者が撮影した。
5. 遺構の三次元測量・図化については、第27次調査をアサヒコンサルタント株式会社、第28次調査を株式会社四航コンサルタントに委託した。
6. 第28次調査出土木材の樹種同定については鳥取大学地域学部地域環境学科準教授 中原 計 氏に依頼した。
7. 本書の執筆は鳥取市教育委員会文化財課が行った。
8. 本書で使用した標高は東京湾平均海面高を基とし、方位は世界測地系座標V系の座標北を用いた。
9. 出土遺物ならびに図面類は鳥取市教育委員会文化財課で保管している。
10. 本報告書において使用する25,000分の1地形図は、鳥取市発行の「鳥取市管内図」を使用し、調査区周辺の地形図については鳥取市発行の都市計画図、史跡指定地範囲については鳥取市教育委員会作成の地形図を使用した。
11. 発掘調査および出土品整理の整理に際しては、下記の機関並びに個人から指導・ご教示をいただいた。記して深甚の謝意を表する。

文化庁記念物課、鳥取県教育委員会、鳥取県立博物館、鳥取市歴史博物館、鳥取市埋蔵文化財センター、田中哲雄、浅川滋男、麓和善、吉村元男、錦織勤、北垣聡一郎、谷本進、西尾孝昌、岡崎雄二郎、八峠興、中森祥、湯村功、鳥取県立鳥取西高等学校、財鳥取市公園・スポーツ施設協会  
(順不同、敬称略)

# 目次

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯

1 保存整備計画の概要	1
2 調査体制	1

## 第Ⅱ章 立地と環境

1 位置と地形	4
2 歴史	4
3 構造	5
(1)山上ノ丸	7
(2)山下ノ丸	7
(3)山腹の遺構群	7

## 第Ⅲ章 調査の概要

1 調査の目的	11
2 調査区の設定	11
3 発掘調査	12
4 鳥取城関連略年表	13

## 第Ⅳ章 調査の結果

IV-1 中ノ御門表門跡発掘調査	15
i 第21次調査(平成21年度)	
1 調査の概要	15
2 調査の成果	15
(1)遺構	15
(2)トレンチ	16
(3)礎石	21
(4)登城路面	23
ii 第26次調査(平成22年度)	
1 調査の概要	23
2 調査の成果	24
(1)遺構	24
(2)トレンチ	29
(3)礎石・柱	30
3 出土遺物	35
(1)第21次調査出土遺物	35
(2)第26次調査出土遺物	35
IV-2 中ノ御門櫓門跡発掘調査	
1 調査の概要	45
2 調査の成果	45

(1)遺構	45
(2)トレンチ	56
(3)礎石	56
3 出土遺物	61
<b>IV-3 擬宝珠橋跡発掘調査</b>	
1 調査の概要	78
(1)調査の経過	78
2 調査の成果	83
i 石垣周辺	83
(1)トレンチ	83
(2)樹	104
ii 橋脚部	105
(1)トレンチ	105
(2)柱群	111
(3)橋脚群	119
3 出土遺物	134
<b>第V章 考察</b>	
1 中ノ御門概略	155
2 門について	157
3 表門の復元	157
(1)礎石の位置	157
(2)門の規格	159
(3)旧溝	161
(4)礎石の再利用	161
4 櫓門の復元	161
(1)礎石の位置	161
(2)門の規格	162
(3)溝	164
5 登城路面	164
(1)幕末期登城路面	164
(2)旧登城路面	166
6 樹形石垣と解体手順	168
(1)樹形石垣の規格	168
(2)解体手順	168
7 擬宝珠橋および堀について	169
(1)橋と堀に関する記録	169
(2)橋の復元	169

## 挿図目次

第1図 大手登城路復元整備イメージ図	2
--------------------	---

第2図	調査区周辺遺跡分布図 (S = 1/50,000)	6
第3図	既往の発掘調査区位置図	3
第4図	大手登城路周辺調査位置図 (S = 1/800)	10
第5図	中ノ御門の名称・櫓形石垣の変遷	14
第6図	第21・26次調査区平面図 (S = 1/50)	17・18
第7図	調査区土層断面図 (S = 1/50)	19・20
第8図	トレンチ土層断面図 (S = 1/50)	22
第9図	礎石3上瓦溜実測図 (S = 1/50)	22
第10図	土坑実測図 (S = 1/50)	22
第11図	櫓形石垣前面瓦溜実測図 (S = 1/50)	22
第12図	表門平面・断面図 (S = 1/50)	25・26
第13図	溝状遺構・栗石群検出状況 (S = 1/100)	28
第14図	第21次調査出土遺物実測図1 (S = 1/3)	31
第15図	第21次調査出土遺物実測図2 (上S = 1/3、中S = 1/2、下S = 1/4)	32
第16図	第21次調査出土遺物実測図3 (S = 1/4)	33
第17図	第21次調査出土遺物実測図4 (刻印拓影) (S = 1/1)	34
第18図	第26次調査出土遺物実測図1 (S = 1/3)	37
第19図	第26次調査出土遺物実測図2 (S = 1/4)	38
第20図	第26次調査出土遺物実測図3 (S = 1/4)	39
第21図	第26次調査出土遺物実測図4 (S = 1/4)	40
第22図	第26次調査出土遺物実測図5 (刻印拓影・鉄器) (上S = 1/1・下S = 1/2)	41
第23図	第27次調査区平面図 (S = 1/50)	47・48
第24図	中ノ御門櫓門周辺遺構・トレンチ配置図 (S = 1/80)	49
第25図	調査区土層断面図 (S = 1/50)	51・52
第26図	トレンチ1・2土層断面図 (S = 1/50)	53
第27図	調査区断面図1 (S = 1/80)	53
第28図	調査区断面図2 (S = 1/80)	54
第29図	SD-01・栗石群・瓦群平面図 (S = 1/50)	57
第30図	柱位置図 (S = 1/100)	59
第31図	第27次調査出土遺物実測図1 (S = 1/3)	62
第32図	第27次調査出土遺物実測図2 (S = 1/3)	63
第33図	第27次調査出土遺物実測図3 (S = 1/3)	65
第34図	第27次調査出土遺物実測図4 (S = 1/3)	66
第35図	第27次調査出土遺物実測図5 (上S = 1/3・下S = 1/2)	67
第36図	第27次調査出土遺物実測図6 (S = 1/4)	68
第37図	第27次調査出土遺物実測図7 (S = 1/4)	69
第38図	第27次調査出土遺物実測図8 (S = 1/4)	70
第39図	第27次調査出土遺物実測図9 (S = 1/4)	71
第40図	第27次調査出土遺物実測図10 (S = 1/4)	72
第41図	第27次調査出土遺物実測図11 (刻印拓影) (S = 1/1)	73
第42図	第28次調査区平面図 (S = 1/200)	79・80
第43図	調査区オルソ・立面・平面・土層断面図1 (S = 1/50)	81・82

第44図	調査区オルソ・立面・平面・土層断面図2 (S = 1/50)	85・86
第45図	調査区オルソ・立面・平面・土層断面図3 (S = 1/50)	87・88
第46図	調査区オルソ・立面・平面・土層断面図4 (S = 1/50)	89・90
第47図	調査区オルソ・立面・平面・土層断面図5 (S = 1/50)	91・92
第48図	調査区平面・トレンチ土層断面図 (S = 1/50)	93・94
第49図	調査区オルソ・立面・断面図1 (S = 1/50)	97・98
第50図	調査区オルソ・立面・断面図2 (S = 1/50)	99・100
第51図	石垣断面図 (S = 1/50)	101
第52図	樫実測図 (S = 1/50)	103
第53図	第1調査区平面図 (S = 1/50)	107
第54図	第2調査区平面図 (S = 1/50)	108
第55図	第3調査区平面図 (S = 1/50)	109
第56図	第1調査区トレンチ1土層断面図 (S = 1/50)	113
第57図	第2調査区トレンチ1・2土層断面図 (S = 1/50)	115
第58図	出土橋脚位置図 (S = 1/100)	117・118
第59図	世代別橋脚位置図 (S = 1/200)	120
第60図	橋脚断面図1 (S = 1/100)	121・122
第61図	橋脚断面図2 (S = 1/100)	123
第62図	橋脚断面図3 (S = 1/100)	124
第63図	第28次調査出土遺物実測図1 (S = 1/3)	126
第64図	第28次調査出土遺物実測図2 (S = 1/3)	127
第65図	第28次調査出土遺物実測図3 (S = 1/3)	128
第66図	第28次調査出土遺物実測図4 (S = 1/4)	129
第67図	第28次調査出土遺物実測図5 (S = 1/4)	130
第68図	第28次調査出土遺物実測図6 (S = 1/4)	131
第69図	第28次調査出土遺物実測図7 (S = 1/4)	132
第70図	第28次調査出土遺物実測図8 (上 S = 1/4・下 S = 1/1)	133
第71図	第28次調査出土遺物実測図9 (S = 1/4)	135
第72図	第28次調査出土遺物実測図10 (S = 1/4)	136
第73図	第28次調査出土遺物実測図11 (S = 1/4)	137
第74図	第28次調査出土遺物実測図12 (S = 1/2)	138
第75図	第28次調査出土遺物実測図13 (S = 1/2)	139
第76図	第28次調査出土遺物実測図14 (S = 1/8)	143
第77図	第28次調査出土遺物実測図15 (S = 1/8)	144
第78図	第28次調査出土遺物実測図16 (S = 1/8)	145
第79図	第28次調査出土遺物実測図17 (上 S = 1/8、中 S = 1/4、下 S = 1/3)	146
第80図	最終段階の鳥取城	156
第81図	中ノ御門櫓門脇石垣積み替え状況	156
第82図	中ノ御門の変遷	158
第83図	石黒火事後石垣崩壊状況	158
第84図	溝位置図	158
第85図	天保期の中ノ御門周辺	158

第86図	中ノ御門復元イメージ図	158
第87図	表門断面・復元イメージ図(S=1/80)	160
第88図	槽門断面・復元イメージ図(S=1/80)	163
第89図	中ノ御門登城路面標高図(S=1/150)	165
第90図	樹形内登城路断面図(S=1/80)	167
第91図	橋脚位置復元図(オルソ図S=1/200)	170

## 挿表目次

表1	調査一覧	9
表2	第21次調査出土遺物観察表	42
表3	第26次調査出土遺物観察表1	43
表4	第26次調査出土遺物観察表2	44
表5	第21・26次調査出土鉄製品観察表	44
表6	表門礎石寸法表	44
表7	第27次調査出土遺物観察表1	74
表8	第27次調査出土遺物観察表2	75
表9	第27次調査出土遺物観察表3	76
表10	槽門礎石寸法表	77
表11	第28次調査出土副木(枕木含む)観察表	147
表12	第28次調査出土杭(枕木含む)観察表	147
表13	第28次調査出土柱観察表1	148
表14	第28次調査出土柱観察表2	149
表15	第28次調査出土遺物観察表1	150
表16	第28次調査出土遺物観察表2	151
表17	第28次調査出土遺物観察表3	152
表18	第28次調査出土遺物観察表4	153
表19	第28次調査出土遺物観察表5	154

## 写真目次

写真1	中ノ御門周辺の現況	14
写真2	鳥取城と久松山	59
写真3	解体途中の鳥取城	163

## 図版目次

図版1	調査区遠景、古写真
図版2	第21次調査1
図版3	第21次調査2
図版4	第21次調査3、空中写真
図版5	第26次調査1

図版 6 第26次調査 2  
図版 7 第26次調査 3  
図版 8 第26次調査 4  
図版 9 第27次調査 1  
図版10 第27次調査 2  
図版11 第27次調査 3  
図版12 第27次調査 4  
図版13 第27次調査 5  
図版14 第27次調査 6  
図版15 第28次調査 1  
図版16 第28次調査 2  
図版17 第28次調査 3  
図版18 第28次調査 4  
図版19 第28次調査 5  
図版20 第28次調査 6  
図版21 第28次調査 7  
図版22 第28次調査 8  
図版23 第28次調査 9  
図版24 第28次調査10  
図版25 第28次調査11  
図版26 第28次調査12  
図版27 第28次調査13  
図版28 第28次調査14  
図版29 第28次調査15  
図版30 第28次調査16  
図版31 第28次調査17  
図版32 第21次調査出土遺物  
図版33 第26次調査出土遺物  
図版34 第27次調査出土遺物 1  
図版35 第28次調査出土遺物 2  
図版36 第28次調査出土遺物 1  
図版37 第28次調査出土遺物 2  
図版38 第28次調査出土遺物 3  
図版39 第28次調査出土遺物 4  
図版40 第28次調査出土遺物 5  
図版41 第28次調査出土遺物 6



# 第1章 調査に至る経緯

## 1 保存整備計画の概要

鳥取市は、昭和32年の指定以来、国史跡である鳥取城跡附太閤ヶ平の保存と活用にとりくんでおり、市民と専門家からなる検討委員会の検討と、パブリックコメントの実施を経て平成17年度に「史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存整備基本計画」、平成18年度に「史跡鳥取城跡保存整備実施計画」を策定し、鳥取城跡の保存整備と調査研究を長期計画に基づいて推進している。

計画では、現在不明瞭になっている近世城郭部分の全体プランの顕在化を大きなテーマとしており、可能な範囲での建造物復元等も含め、江戸時代末期の姿を顕在化するための整備を段階的に進めることとしている。

整備対象の第一段階として位置づけられたのが城のメインルートにあたる「大手登城路」である。この範囲については、遺構の保存状態が比較的良好と考えられ、顕在化による効果も高いため建造物を含む復元整備を視野に入れた整備計画としている。

この大手登城路は、大きく堀を渡る擬宝珠橋、正門にあたる中ノ御門、本丸にあたる三ノ丸入口にある大鼓御門からなり、計画ではこれらの建物を復元予定としている。計画に基づき順次発掘調査を実施しており、平成20年度にはそれまでの調査成果をまとめた大鼓御門跡発掘調査報告書を刊行した。また、中ノ御門跡・擬宝珠橋跡は、復元整備計画の中心をなすものとして、建造物遺構の遺存状況と、調査成果と遺構の関係の確認を目的として平成21年度より調査を実施し、周辺資料等の調査がある程度進展したことから、今回の報告となった。

大手登城路は、現在、鳥取県立鳥取西高等学校の主導線となっているが、建築後50年を経過した校舎は耐震化工事が計画されており、この際に史跡整備に必要な範囲を学校の使用範囲から除外し、大手登城路の整備を高等学校の改築と一体的に行なうこととしている。復元整備範囲は、現在、通学する生徒・学校関係者が使用している状態であり、自家用車や物品搬入トラックなども通行していることから、鳥取県教育委員会及び高校と協議し、調査区を複数箇所に分割して、通行に支障のない道幅を確保するとともに、学校の夏期休暇期間を中心に調査期間を設定するなどして調査を実施した。

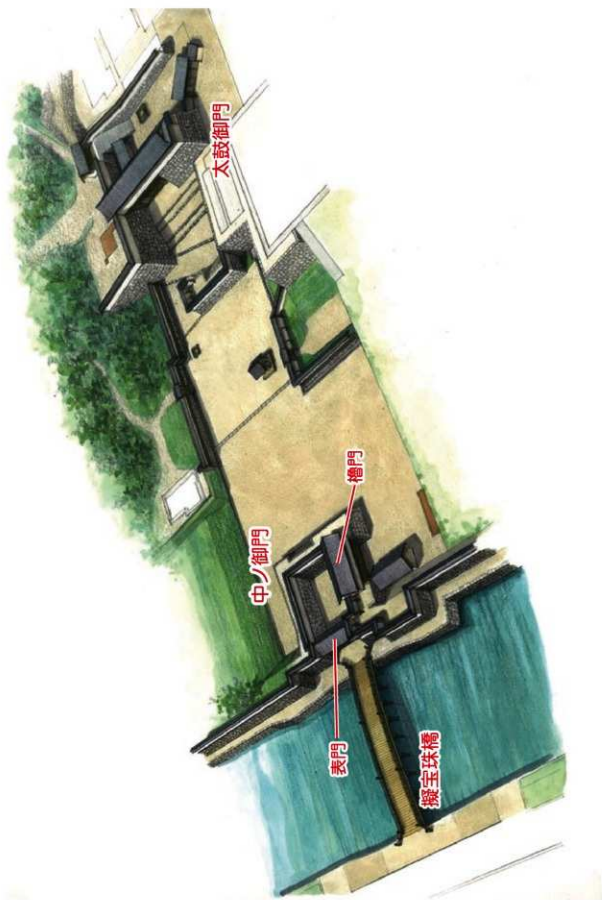
なお、鳥取城跡内には、他にも、鳥取県立博物館が所在するほか、明治40年建築の仁風閣が現存しているが、現在の計画では、これらの併存を当面許容しつつ、史跡の価値を向上するための整備を実施することとしている。

## 2 調査体制

各年度の調査体制等は以下のとおりである。  
調査区の所在地はいずれも鳥取市東町2丁目地内である。

### 【平成21年度】

第21次発掘調査 中ノ御門表門跡  
期 間 平成21年7月1日～8月31日  
面 積 60.3㎡  
事務局 鳥取市教育委員会  
教育長 中川俊隆  
文化財課 課長 平川誠、課長補佐 谷岡陽一



第1図 大手登城路復元整備イメージ図

鳥取城整備推進係 係長兼文化財専門員 佐々木孝文、主幹 松原雅彦  
 主事兼文化財専門員 坂田邦彦、主事兼文化財専門員 細田隆博  
 保存整備係 主査 津川ひとみ、主幹 森佳樹、主任 加川崇、主任 城市索

## 【平成22年度】

第26次発掘調査 中ノ御門表門跡  
 期 間 平成22年7月1日～8月31日  
 面 積 59.5㎡  
 第27次発掘調査 中ノ御門櫓門  
 期 間 平成22年11月1日～平成23年2月25日  
 面 積 76.7㎡  
 事務局 鳥取市教育委員会  
 教育長 中川俊隆

文化財課 課長 林佳史、課長補佐(兼保存整備係長) 谷岡陽一  
 鳥取城整備推進係 係長兼文化財専門員 佐々木孝文、主幹 松原雅彦  
 主事兼文化財専門員 坂田邦彦、主事兼文化財専門員 細田隆博  
 保存整備係 主査 津川ひとみ、主幹 森佳樹、主任 加川崇、主任 城市索

## 【平成23年度】

第28次発掘調査 擬宝珠橋跡  
 期 間 平成23年10月5日～平成24年3月30日  
 事務局 鳥取市教育委員会  
 教育長 中川俊隆

面 積 480.0㎡  
 文化財課 課長 林佳史、課長補佐(兼保存整備係長) 谷岡陽一  
 鳥取城整備推進係 係長兼文化財専門員 佐々木孝文、主任 城市索  
 主任兼文化財専門員 坂田邦彦、主事兼文化財専門員 細田隆博  
 保存整備係 主査 津川ひとみ、主幹 森佳樹、主幹 中野弘昭  
 主任兼文化財専門員 加川崇

## 【平成24年度】

報告書作成  
 事務局 鳥取市教育委員会  
 教育長 中川俊隆(～9月)、木下法広(10月～)  
 文化財課 課長 林佳史、課長補佐(兼保存整備係長) 谷岡陽一  
 鳥取城整備推進係 係長兼文化財専門員 佐々木孝文、主任 城市索  
 主事兼文化財専門員 細田隆博  
 保存整備係 主幹 森佳樹、主幹 中野弘昭、主任兼文化財専門員 加川崇  
 主任兼文化財専門員 坂田邦彦

## 第Ⅱ章 立地と環境

### 1 位置と地形

鳥取県東部に位置する鳥取市は、平成16年に実施された8町村との合併により、面積765.66km<sup>2</sup>、人口19.5万人を要する県庁所在地である。鳥取平野は、中国山地に水源を持つ千代川及びその支流によって形成された沖積平野である。鳥取城は、扇状に広がった鳥取市街地背後、平野の東北端にそびえる久松山(標高263m)に占地する。久松山は中生代末の花崗岩からなる孤立峰で、山頂は鮮新世火山岩類の玄武岩が覆う。鳥取平野は因幡国に所在し、山陰諸国を貫く東西交通と、山陽地方とを結ぶ南北交通との結節点にあたる要衝の地であった。鳥取城はまさにその平野を掌握する場に立地し、山上ノ丸からは、鳥取平野の大部分を見渡すことができ、千代川の河口や西の伯耆、東の但馬へ続く海岸線なども望むことができる。鳥取城を扇の要として鳥取市街地が広がるのも、その起源が鳥取城下町であることを如実に示している。

久松山は南西面とその背面が急峻な地形である。一方、北西は標高100m付近で尾根伝いに丸山方面の山塊と繋がり、他方、東側に横たわる山塊とは標高150m付近で尾根伝いに繋がっている。久松山麓の西面はかつて日本海へと注ぐ釜川の旧河川が蛇行して、低湿地を形成していたと言われ、鳥取の城下町は惣構の開削などで低湿地帯を克服しながら形成された。また、古代の中心地であった国府周辺へと続く古道が山麓を通っていたと考えられ、久松山麓は古くから河川交通と陸上交通の要衝であったと思われる。

### 2 歴史

鳥取城の起源は天文年間(16世紀中頃)に遡る。鳥取城の所在する因幡は、西の伯耆、東の但馬と共に南北朝期以来、代々山名一族が守護職を継承してきた。しかし、天文12年(1543)頃までには伯耆が出雲尼子氏の傘下となり、尼子氏を背景に自国支配の強化を狙う因幡守護山名久通もまたその支配下となった。これに対し、但馬山名守護山名祐意は惣領家として先祖伝来の領国支配の回復などを目指し、山名久通と因幡の支配権を巡り鋭く対立。この過程で但馬山名氏の戦略的拠点として鳥取城は誕生したと考えられている。

まもなく因幡山名氏は滅亡し、以後因幡国内は、かつて因幡山名氏の本拠であった湖山池湖畔の布施天神山城を中心に但馬山名氏による支配が進められる。一方、鳥取城は天神山城の出城としての役割を負った。ところが、これを守る武田高信が永禄6年(1563)に主家山名氏に対して反旗を翻す。これに対し、因幡守護山名豊国は諸勢力の協力を得て武田高信を鳥取城から退け、天正元年(1573)、守護所であった天神山城から因幡の本拠を鳥取城に遷す。

同じ頃、鳥取城は中国地方を勢力圏とする毛利氏の傘下となる。一方、天下統一を目指す織田信長は覇権を因幡に接する但馬や播磨に広げつつあった。両国からの交通の結節点であり、毛利方の最前線となった鳥取城。ここに織田・毛利軍の攻防戦が開始される。

天正8年(1580)、信長に命を受けた羽柴秀吉が因幡に侵攻する。秀吉の巧みな戦略の前に山名豊国は降伏を余儀なくされたが、秀吉が姫路に帰陣すると俄かに情勢が転化する。毛利勢力が因幡まで勢力を盛り返すと、豊国の決定を不服とする重臣たちは山名豊国を追放し、代わって迎えた毛利方の吉川経家と共に、再び秀吉に徹底抗戦し因幡国内を奪還する道を選ぶ。なお、豊国はその後、豊臣秀吉、徳川家康・秀忠のお伽衆として活躍した人物である。

天正9年(1581)、再び因幡に入った秀吉は、周辺の山々に大陣城群を巡らせ、鳥取城を厳重に包囲し

た。いわゆる兵糧攻めである。城兵はおよそ4ヶ月の間、飢餓状態で奮戦したが経家の自決をもって降伏した。この時に構築された秀吉側の陣城群は鳥取城を取り囲む山並みに今でも残る。特に本陣山(標高252m)には秀吉が在陣した太閤ヶ平を中心に“秀吉の長城”とも言うべき長大な防衛ラインがほぼ完存し、織田政権の軍事力の威力をまざまざと伝えている。

織田方に屈した鳥取城には新たに秀吉の有力家臣である宮部継潤が城代として入る。天正17年(1589)に至り豊臣秀吉から正式に知行を宛がわれ、継潤は因幡国7郡の内、4郡の5万石(但馬の一部を含む)を領し、名実ともに鳥取城主となった。宮部氏は息子・長照の時に関ヶ原の合戦で西軍に属し改易となったため、その業績は不明な部分が多いが、宮部継潤父子は因幡における織豊政権の最重要拠点として、鳥取城を大改築したと思われる。それまでの鳥取城は自然地形を利用した土造りの中世城郭であった。一方、宮部氏は装いも新たに石垣などを構築し、織豊系城郭としての鳥取城を築いたと考えられる。

慶長5年(1600)の関ヶ原合戦で徳川政権は樹立されたが、大坂城には豊臣家が健在で豊臣恩顧の大名に対する支配強化のため、徳川家康は厚遇する池田家を西国境に配置したとも言われる。この時、姫路城に池田輝政、岡山城に忠継(輝政の次男)が入り、鳥取城には長吉(輝政の弟)が因幡7郡の内4郡6万石の知行を得て入城した。ここに西国境の瀬戸内から日本海を縦断する徳川政権の拠点城郭網が構築され、鳥取城はその一翼を担った。なお、江戸時代の地誌を根拠に、これまで鳥取城の現存遺構のほとんどは池田長吉が構築したと信じられてきた。しかし、根拠となる『因幡民談記』(17世紀後半成立)には、局所的な普請の様子が詳述してあるが、現存遺構のほとんどを池田長吉が構築したという記載はない。

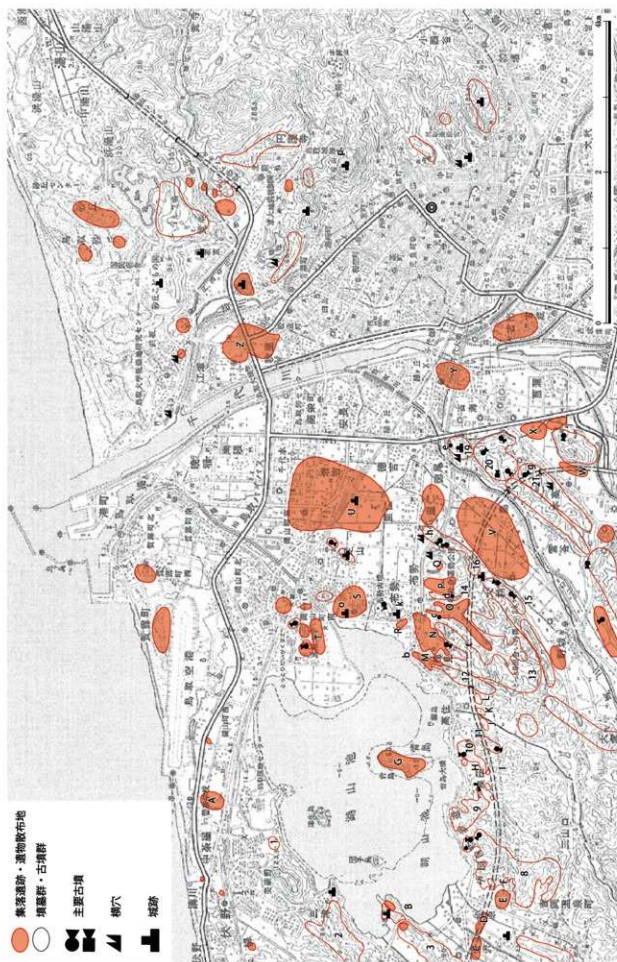
元和元年(1615)、大坂夏の陣で豊臣家が滅亡すると、池田家への処遇は転機を迎えた。元和3年、姫路城主池田光政は所領減封の上、因幡伯耆32万石の領主として鳥取へ転封となり、池田家が構築した姫路城は譜代大名のものとなる。光政入封に伴い小大名に分割統治されていた因幡と伯耆は統合され、現在の鳥取県域とほぼ同じ鳥取藩が誕生した。しかし、鳥取城は宮部時代から5、6万石規模のものに過ぎず手狭であったため、光政は城の大拡張を行なう。『因幡国鳥取絵図』(岡山大学附属図書館蔵)には、当時、最新鋭であった層塔型と想定される白亜の三階櫓が描かれるなどしており、二ノ丸や天球丸といった現存する遺構の大部分は、この時に構築された蓋然性が極めて高い。また、光政は城下町も拡張し、武家地には上水道を完備した。その町割や延長1.6kmの惣構、上水道の水源地はいずれも現存し、鳥取の中心市街地には光政の土木遺産が色濃く残っている。

寛永9年(1633)、岡山城主池田忠雄の死去に伴い、幼少の光仲が家督を継ぐと幕府は従兄弟の光政との国替を命じた。以後、鳥取城は光仲を藩祖とする鳥取池田家32万石12代の居城となり、国内有数の大藩の政庁として改修や拡張が繰り返された。特に幕末には、二ノ丸や三ノ丸の拡張などの大規模な増改築が行なわれ、現存する遺構の姿が整えられた。

明治維新後の鳥取城は、陸軍省の所管となり明治12年(1879)には二ノ丸三階櫓の解体をもって全建物は撤去された。昭和18年(1943)の鳥取大震災により城内の至る所で石垣崩壊という甚大な被害を受ける。その後、昭和32年(1957)には、織豊時代から近世徳川時代に移行する転換期の歴史に深い関係をもつ史跡であること、城跡の構成が前記の歴史的推移と対応し山城の型式を残す山上ノ丸と中腹の磐跡等の古い城跡遺構に対し、近世的城郭形式を残す山下ノ丸を中心とする新しい城跡遺構が新旧重層して併存することが学術的に高く評価され、鳥取城は太閤ヶ平と共に国の史跡指定を受ける。昭和34年からは、山下ノ丸を中心に鳥取大地震で崩壊した石垣の復元事業が開始され現在も実施中である。

### 3 構造

鳥取城は久松山の全域を城郭とし、各時期の遺構が残る。ここでは、山頂部分の山上ノ丸、山麓部分の山下ノ丸、その他山腹部分の3区に分けて概観したい。



第2図 調査区周辺遺跡分布図(S=1/50,000)

### (1) 山上ノ丸

本丸を最高地として、二ノ丸、三ノ丸が階段状に配され、それを巡る帯曲輪から構成される。本丸、二ノ丸の全域、及び帯曲輪の内のうち城下側の部分(出丸)が総石垣化されている。本丸の北西角には天守台がある。宮部期の三層の天守を池田長吉が二層に改築したと考えられ、その改修痕跡と思われる石垣の継ぎ目が天守台の南西角に見られる。その後天守は元禄5年(1692)落雷により焼失し、以後再建されることは無かった。鳥取城内において最古相の石垣が本丸南面を構成するなど、山上ノ丸一帯は、宮部時代に大部分が構築され池田長吉以降において局所的な改修が行なわれたと思われる。三ノ丸から東坂へ続く尾根筋には登り石垣状の遺構も見られ、倭城との関連性が指摘されている。

### (2) 山下ノ丸

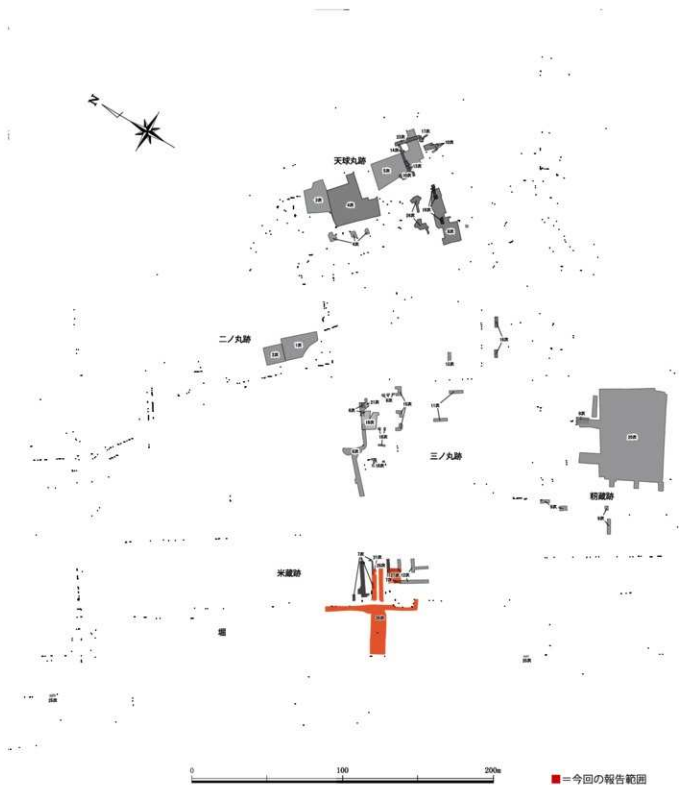
山下ノ丸は主に高石垣で構成される天球丸、二ノ丸と最大面積を有する三ノ丸などからなる。山下ノ丸は幅約30mの水堀が南西側を巡り、三つの門で外部と繋がっていた。天球丸の南東端と二ノ丸の北西端は巨大な堅堀で防御される。幕末の増築を除くと、『因州鳥取之城之図』、『因幡国鳥取絵図』(いずれも岡山大学附属図書館蔵)などから、天球丸、二ノ丸は池田光政期を中心に構築されたと考えられる。天球丸は池田光政の伯母天球院の居所があった場所で、平成4年(1992)から続く石垣の保存修理事業で織豊期と思われる石垣が出土し、平成13年(2001)の橋蔵跡発掘調査では関ヶ原合戦時と想定できる焼土面が出土しており、天球丸周辺が織豊期の中心域であった可能性が高まっている。二ノ丸は池田光政期以降、江戸時代中期まで藩政の中心となった場所である。二ノ丸は、中腹の太鼓ヶ平から三ノ丸入口の太鼓門に至る尾根を削平して構築したようで、二ノ丸背後には石垣石を切り出した痕跡が残る。昭和55年(1980)の石垣解体に伴って現状の高石垣の下層から、池田光政期以前の曲輪を構成した石垣が出土している。三ノ丸は江戸時代中期以降、藩政の中心になった場所である。幕末にも大規模な拡張がなされ、城内最大の面積を有する曲輪として整備された。現在その全てが県立高校の敷地となっている。その他、お堀端沿いの丸ノ内には、馬場や米蔵が存在した。一段高い所には、明治40年(1907)、皇太子(後の大正天皇)の行啓宿舎として旧鳥取池田家が建てた仁風閣(国重文)があり、その北西には県立博物館が立地する。いずれもかつての城内に存在し、山下ノ丸は北西-南東方向に約550m、北東-南西方向に約350mの規模を誇っていた。

### (3) 山腹の遺構群

久松山本体では、山頂から派生する主要な尾根部分と山上ノ丸直下の削平地群と区分できる。主要な尾根に派生する曲輪群は、鳥取城創建期から秀吉の鳥取城攻めまでの中世段階の遺構と考えられる。太鼓ヶ平から山下ノ丸へ派生する尾根は、江戸時代前期の大規模な曲輪造成によって削平されたと考えられ、西坂が旧態を良く残している。松ノ丸では石垣が見られることから織豊期になっても一部利用されたようである。山上ノ丸直下にみられる削平地群は、尾根の主要曲輪群とは独立した一群である。部分的に矢穴による半途中の転石が遺存しており、石取場と考えられる。

### 参考文献

- 大阪城天守閣2007『秀吉お伽衆—天下入をとりまく達人たち—』
- 鳥取県立博物館1989『久松山鳥取城—その歴史と遺構—』
- 鳥取県2007『鳥取県史ブックレット1 織田vs毛利—鳥取をめぐる攻防—』
- 鳥取市教育委員会1997『史跡鳥取城跡附太閤平天球丸保存整備事業報告書』
- 鳥取市歴史博物館2001『大名池田家のひろがり—信長・秀吉そして徳川の時代へ—』
- 細田隆博2008『鳥取城』『決定版鳥取・岩美・八頭ふるさと大百科』



第3図 既往の発掘調査区位置図(S=1/2500)



回数	調査場所	調査期間	面積 (㎡)	報告書名	発行
1	二ノ丸走橋跡	昭和55年11月14日～ 12月24日	250	里仁1号墳発掘調査報告書 ・鳥取城二ノ丸走橋跡 1981(*1)	鳥取市 教育委員会
2	二ノ丸走橋跡	昭和56年5月26日～ 7月27日	130	里仁1号墳発掘調査報告書 ・鳥取城二ノ丸走橋跡 1981(*1)	鳥取市 教育委員会
3	天球丸跡	平成2年5月1日～ 7月31日	320	史跡鳥取城跡附太閤×平 天球丸発掘調査概要報告書 1992(*2)	鳥取市 教育委員会
4	天球丸跡	平成3年8月1日～ 12月20日	530	史跡鳥取城跡附太閤×平 天球丸発掘調査概要報告書 1992(*2)	鳥取市 教育委員会
5	天球丸跡	平成7年10月1日～ 12月12日	164	史跡鳥取城跡附太閤×平 天球丸保存整備事業報告書 1997	鳥取市 教育委員会
6	太鼓御門跡	平成9年8月1日～10年2月28日	170	史跡鳥取城跡附太閤×平 太鼓御門発掘調査報告書 1998	鳥取市 教育委員会
7	中ノ御門跡	平成10年10月20日～11年2月28日	135	史跡鳥取城跡附太閤×平 中ノ御門発掘調査報告書 1999	鳥取市 教育委員会
8	桶藏跡	平成12年10月2日～13年2月23日	340	史跡鳥取城跡附太閤×平 桶藏跡発掘調査報告書 2001	鳥取市 教育委員会
9	桶藏跡周辺試掘	平成15年7月22日～ 9月30日	80	「鳥取城開港遺跡」〔平成15年(2003)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書〕 2004	鳥取市 教育委員会
10	天球丸跡	平成17年6月15日～ 12月27日	73.6	未報告	
11	三ノ丸跡試掘	平成17年8月22日～ 10月26日	40	「鳥取城三ノ丸跡」〔平成17年(2005)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書〕 2006	鳥取市 教育委員会
12	中ノ御門周辺試掘	平成18年10月30日～19年1月29日	100.6	「鳥取城跡」〔平成19年(2007)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書〕 2008	鳥取市 教育委員会
13	天球丸跡	平成18年10月30日～ 11月2日	15	未報告	
14	天球丸跡試掘	平成19年6月28日～ 7月31日	9.1	未報告	
15	太鼓御門周辺試掘	平成19年7月21日～ 11月7日	53.4	「鳥取城跡」〔平成19年(2007)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書〕 2008	鳥取市 教育委員会
16	三ノ丸跡	平成20年5月7日～ 27日	21.4	「鳥取城跡」〔平成20年(2008)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書〕 2009	鳥取市 教育委員会
17	天球丸跡	平成20年7月16日～ 8月8日	10.1	未報告	
18	太鼓御門跡	平成20年7月20日～ 11月21日	110.0	「史跡鳥取城跡太鼓御門跡発掘調査報告書」 2009	鳥取市 教育委員会
19	桶藏跡	平成20年10月31日～ 12月2日	22.9	未報告	
20	桶藏跡	平成21年4月1日～22年3月12日	2,771.7	鳥取城跡桶藏跡(第20次調査)	財団法人鳥取 市文化財団
21	中ノ御門跡	平成21年7月1日～ 8月31日	60.3	本報告	鳥取市 教育委員会
22	太鼓御門跡周辺	平成21年9月8日～ 10月1日	35.0	未報告	
23	天球丸跡	平成21年12月2日～ 12月10日	35.0	未報告	
24	桶藏	平成22年1月25日～ 1月29日	10.5	「鳥取城跡」〔平成22年(2010)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書〕 2011	鳥取市 教育委員会
25	桶藏跡周辺	平成22年2月22日～ 3月26日	69.2	未報告	
26	中ノ御門跡	平成22年7月1日～ 8月31日	59.5	本報告	鳥取市 教育委員会
27	中ノ御門跡	平成22年11月1日～23年2月25日	76.7	本報告	鳥取市 教育委員会
28	擬宝珠橋跡	平成23年10月5日～24年3月30日	480.0	本報告	鳥取市 教育委員会

\*1 鳥取市教育委員会「史跡鳥取城跡附太閤×平保存修理概要報告書」1987 に再録

\*2 鳥取市教育委員会「史跡鳥取城跡附太閤×平天球丸保存整備事業報告書」1997 に再録

表1 調査一覧



## 第三章 調査の概要

### 1 調査の目的

鳥取城の内堀から本丸部分へ至る大手登城路には、大きく分け大手橋にあたる擬宝珠橋、大手門である中ノ御門、本丸入口部分に位置する太鼓御門などの代表的な施設が存在しており、大手登城路復元整備計画では、これらの平成30年度の完成を目指している。

鳥取市は、昭和32年の指定以来、国史跡である鳥取城跡附太閤ヶ平の保存と活用に取り組んでおり、市民と専門家からなる検討委員会の検討と、パブリックコメントの実施を経て平成17年度に『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存整備基本計画』、平成18年度に『史跡鳥取城跡保存整備実施計画』を策定し、鳥取城跡の保存整備と調査研究を長期計画に基づいて推進している。

計画では、現在不明瞭になっている近世城郭部分の全体プランの顕在化を大きなテーマとしており、可能な範囲での建造物復元等も含め、江戸時代末期の姿を顕在化するための整備を段階的に進めることとしている。

整備対象の第一段階として位置づけられたのが城のメインルートにあたる「大手登城路」である。この範囲については、遺構の保存状態が比較的良好と考えられ、顕在化による効果も高いため建造物を含む復元整備を視野に入れた整備計画としている。

### 2 調査区の設定

調査は平成21年度から平成23年度の3か年に渡り実施したもので、調査区はそれぞれ、第21・26・27次が中ノ御門、第28次が擬宝珠橋部分に設定した。大手登城路復元整備計画では、擬宝珠橋・中ノ御門・太鼓御門という3つの施設の復元を基本とし、登城路や周辺施設の一部を球場に復することを目的としている。しかし、復元をめざす部分の総面積は広大であり、現状のすべてを同時に調査対象とすることは、学校運営上からも不可能であるため、鳥取城保存整備検討委員会での検討の結果、まずは建物等の構造物が存在していた範囲の調査を先行し、登城路部分については、後に一括して行うこととした。第1段階として、平成20年度までに太鼓御門周辺の調査を実施し、調査報告書（『平成20(2008)年度 史跡鳥取城跡太鼓御門跡発掘調査報告書』鳥取市教育委員会 2009）を刊行した。

今回の報告は、太鼓御門に続いて、中ノ御門および擬宝珠橋で実施した発掘調査についてであり、第21・26次調査が中ノ御門の表門および辨形内登城路、第27次調査が中ノ御門櫓門、第28次調査が擬宝珠橋にあたる。調査区の現状は、第21・26次調査区が鳥取西高等学校へのアクセスのためのアスファルト道、第27次が高校グラウンド内、第28次が堀水面下である。発掘調査時期については、第21・26次調査は生徒の通行が減少する夏季、第27次はグラウンド利用が減少する秋～冬季、第28次は洪水期を過ぎ、堀内の排水が可能となる秋～冬季に設定した。

調査時期等の詳細は以下の通りである。

- ・第21次調査(平成21年度)  
調査期間 平成21年7月1日～8月31日  
調査面積 60.3㎡
- ・第26次調査(平成22年度)  
調査期間 平成22年7月1日～8月31日  
調査面積 59.5㎡

・第27次調査(平成22年度)

調査期間 平成22年11月1日～平成23年2月25日

調査面積 76.7㎡

・第28次調査(平成23年度)

調査期間 平成23年10月5日～平成24年3月30日

調査面積 480㎡

4次にわたる調査区は近接した位置にあるものの、それぞれの性格が異なっているため、本書では以下のとおり調査地点を建物毎に分けて報告を行う。出土遺物の実測図については調査毎に報告することとし、写真については、遺構写真と併せ巻末に図版として掲載した。

中ノ御門

中ノ御門表門：第21・26次調査(Ⅳ-1)

中ノ御門櫓門：第27次調査(Ⅳ-2)

擬宝珠橋跡

擬宝珠橋：第28次調査(Ⅳ-3)

### 3 発掘調査

近世当時、擬宝珠橋を渡ると正面には表門があり、これらを通ると榊形石垣内を進むこととなる。門を抜けると緩やかに傾斜しながら登城路が上り、榊形石垣奥壁に向かい右折すると、正面に位置するのが櫓門である。石垣間に立つこの2つ目の門を抜けるとようやく城内へと入ったこととなり、さらに登城路を登ると、主要な門である太鼓御門に至り、これらを通った先、現在の鳥取西高等学校のある場所が本丸となる三ノ丸である。

#### ①名称[第5図]

中ノ御門は榊形石垣内に築かれた2つの門から成っており、大手橋である擬宝珠橋の正面にある門と、それを抜け直進、石垣沿いに右折するともう一つの門である内門へ至る。鳥取城の正門にあたる“中ノ御門”とはこの両門の総称であるが、文献上にもそれぞれの門自体に正確な呼称がないことから、便宜上、正面の門を“表門”、内門を“櫓門”と呼んでいるため、調査・報告に際してもこの名称を使用することとする。

#### ②出土遺物

4次にわたる調査で出土した遺物の多くは瓦であり、次いで陶磁器類などが挙げられる。また、第28次調査区は堀内ということもあり、橋脚をはじめとした、橋部材などの木製品や礎などの鉄製品の出土をみた。出土遺物の大半を占める瓦・陶磁器類であるが、いずれも細かく割れた破片ばかりであり、接合が可能なものは少なく、接合できたものを含めても残存率は全体の2分の1以下と非常に小さい。今回報告する遺物は、中でも図化し得た遺物であり、土器類については径を復元できるものを、瓦については瓦当面を有するものおよび全形がわかるものである。出土量と比較すると僅かである。

#### ③これまでの調査[第3図]

昭和55に始まった鳥取城跡内での発掘調査は、平成23年度までに28度を数える。調査面積は様々であるが、山下ノ丸の広範囲にわたり調査が実施されている。当初、調査原因の多くは、石垣解体修理に伴うものであったが、平成17年頃より鳥取西高校の改築に係る小規模な試掘が増加し、近年では、大手登城路の復元計画に係る調査が段階的に実施されている。

## 4 鳥取城関連略年表

良好な立地条件を備える久松山に築かれた鳥取城の成立には諸説ある

正確な築造年代はわからないものの暫定的な中世城館が前身にあったと想定される

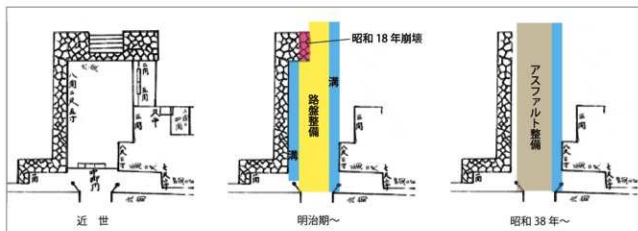
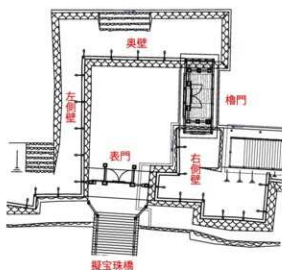
- 水禄6年(1563) 布施から鳥取城に定番として入った武田高信、布施山名氏と対立
- 天正1年(1573) 山名豊国、高信を攻める。居城を布施天神山城から鳥取城へ遷す
- 天正8年(1580) 羽柴(後に豊臣)秀吉の第1次因幡進攻  
城下を焼き払い、2・3町の間隔で15の付城を築いた  
→ 山名豊国降伏 鳥取城は織田方へ 後に豊国は家臣により追放される
- 天正9年(1581) 石見国福光城主の吉川経家が城主として入城。秀吉の第2次因幡進攻  
経家自刃 鳥取城は再び織田方へ → 宮部継潤が城主となる
- 慶長5年(1600) 関ヶ原の戦いで西軍についた宮部氏は没落、城下焼払い
- 慶長6年(1601) 池田長吉が入城し、翌年から城の大改修を行う  
→ 城の骨格部分が造られる
- 元和3年(1617) 池田光政が姫路より移封。城廓の整備が進む  
→ 幕末へと続く城の基本形態が整う
- 寛永3年(1632) 光政、岡山へ移封となり、代わりに岡山の池田光仲が藩主となる  
→ 鳥取池田家の成立
- 元禄5年(1692) 山上ノ丸の天守閣、落雷により焼失。以後再建されず
- 享保元年(1716) 三代藩主池田吉泰、三ノ丸を中心に大改修
- 享保5年(1720) 石黒大火で鳥取城延焼  
→ 橋藏、いくつかの門、山上の櫓を除き城の大部分は焼失。中ノ御門表門は同年中に再建
- 享保13年(1728) 二ノ丸三階櫓再建
- 弘化3年(1846) 二ノ丸御殿再建
- 弘化4年(1847) 二ノ丸西側を拡張
- 万延元年(1860) 三ノ丸内を改修、東側へ拡張、登城路を付け替え  
→ 鳥取城としての最終形態となる
- 明治1年(1869) 版籍奉還、三ノ丸走櫓が政庁となる
- 明治8年(1875) 陸軍により多くの建物が解体される
- 明治12年(1879) この頃までにすべての建物解体される
- 明治22年(1889) 尋常中学校移転開学
- 明治半～後半 樹形石垣解体、擬宝珠橋は近世アーチ橋から近代フラット橋へ変更
- 昭和18年(1943) 鳥取大地震 → 各所で石垣崩落
- 昭和32年(1957) 国史跡指定
- 昭和62年(1987) 追加指定



写真1 中ノ御門周辺の現況



鳥取城修復願絵図〈文化4年(1807)12月〉  
(鳥取県立博物館蔵を切り抜き)



第5図 中ノ御門の名称・樹形石垣の変遷

## 第IV章 調査の結果

### IV-1 中ノ御門表門跡発掘調査

#### i 第21次調査(平成21年度)

##### 1 調査の概要

調査期間 2009年7月1日～8月31日

調査面積 60.3㎡

##### 調査の経過

本調査区は、表門から榊形石垣までの直線部分へ設定した幅3m×長さ21m(第21次)、幅3m×長さ22m(第26次)のトレンチである。土地の現状はアスファルト敷きの道であり、鳥取西高等学校へのアクセス道になっているため、全面調査は不可能であり、調査区を半分ずつ2ヶ年に分割して実施した。登城路の中央部分の幅約1.8mについては道路幅員確保の都合上、掘削が不可能であったため、未調査である。

表門へ向かい左側にあたる。石垣に沿い幅3m、長さ17.6mのトレンチを設定した。調査の進展に伴い北東側(久松山側)へ向かい3.4m拡張したため、調査区全体の形は鍵状を呈している。

現在のアスファルト面(第1層)は、堀側の標高が5.4m、山側が6.3m、5.2%の勾配を持ち緩やかに上る道路である。近代路盤面とみられる層は、この第1層に加え、第2・6層の計3面で確認した。

厚さ10～15cmのアスファルト面を除去すると、直下には黄橙色を呈する近代路盤面である硬化面(第5層)が広がる。昭和38年とみられる舗装以前まで使用されていたものであろう。第5層下の第6層は、近代でも古く明治22年の学校移転開学以前に整地された層であるとみられる。

##### 2 調査の成果

###### (1) 遺構

###### ① 栗石群および溝状遺構

第6層を掘り下げると堆積状況は一変し、一面石材で覆われた層(第7層)が現れる。栗石を伴い検出されたのが石組の壁を持つ溝状遺構である。溝は、現存する榊形石垣(左壁)と対面する形で伸び、使用される石材は榊形石垣(奥壁)へ向かうにつれ大型化し、奥壁と接する形で終わる。後述の近世中ノ御門表門礎石上に築かれていることから近代の所産であることがわかる。奥壁からの5石は、標高5.3mあたりに据えられたとみられ、溝の深さは7～80cmである。いずれも大きさが1m以上もある大型の石が用いられている。使用石材は堀側へ向かい次第に小型化し、調査区中央に設定したTr-5では、標高5.2m付近から幅4～50cm程度の長方形の石が2～3段ほど積み、溝の深さは4～50cmとなる。さらに南西側、Tr-8の礎石上付近では、深さ20cmほどとなる。溝の幅はTr-1で約110cm、Tr-5・8で約90cmとなる。

栗石群は、この溝状遺構の石列の裏込として入れられたとみられ、拳大～人頭大程度の石が一面にみられる。トレンチ北東部分には上部を解体された榊形石垣が残存しており、石垣内側に露出した裏込石の延長上に広がるため、一見すると一連であるかの様に見える。石群は南西(堀側)へ向かい溝側壁の石が小型化するのに合わせて次第に密度が薄くなる。この第7層はTr-1付近では厚く堆積しており、標高4.9m付近より70cm程にもなるが、南西へ向かい薄くなる。

総延長は18.5m、幅約1mというかなり大型な溝状遺構と言えるが、道の途中より始まっている点や、他の水路と接続していない点など、性格は不明である。大正期に同位置を写した写真には、溝やその痕跡はみられないため、早い時期に埋まったとみられる。

これほどの石材を用いた工事がいつ行われたかの記録はないが、明治22年の学校開学までに解体された際、余剰石材を利用することで現況に近い緩やかな傾斜をもつ路を築造したのではないかということが想定できる。

## ② 樹形石垣

樹形石垣の奥壁部分にあたり、トレンチの北東部で検出した。樹形石垣奥壁と直交する形で伸びており、接続部分は両方向から組み合っている。標高5.7~6.1m付近で上部が解体されており、下部については調査で掘削した標高5.3m以下まで続く。検出範囲は狭いが、石の表面には被熱による赤変が明確に残るものが存在しており、かなりの熱を受けたことが分かる。

## ③ 整地層

第7層である栗石層の下には数層の整地層が存在する。砂地ベースの第9層は厚さ20cm程度で広く敷かれており、溝状遺構に伴う層である。さらに下層にあたる第11層もブロック状に土混じり合う整地層である。

第11層下、標高5.1m以下にある黄褐色土の第16層になると状況が変わる。この層は、中ノ御門表門礎石直上に位置しており、上面部分には、明確な層位こそないものの、隅片等が固まる生活面らしき痕跡がみられる。

## ④ 瓦溜〔第9・10図〕

調査区内で3ヶ所確認した。一つは調査区南西側の標高5.0~5.2mに広がる第11層内にあるもので、長さ140×幅40cm程の不定形城の窪みの中に瓦片が散在している。土層断面では掘り込みを確認できたが、平面では明確に確認することができなかった。瓦はいずれも砕片であり図化できたのは一部のみである。

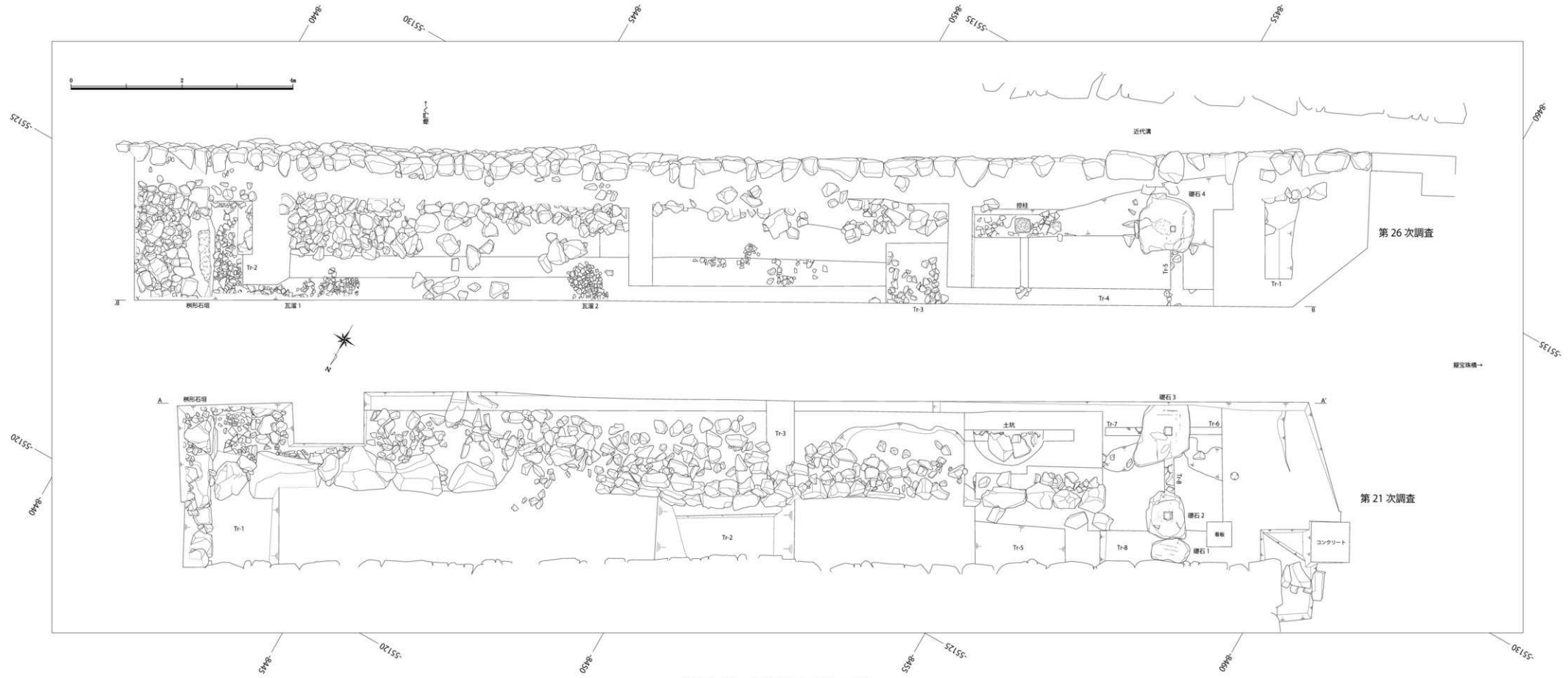
2ヶ所目は、標高5.1mの第16層上面から掘り込まれた土坑である。一部は調査区外へ続くものの、現存長145cm、幅101+a、深さ60cmの平面楕円形の土坑内には多量の瓦片が詰まっていた。瓦片は2~30cm程堆積しており、いずれも破片である。その下には厚さ40cmと20cm程とともに表面が平らな礎石状の石が2石倒れた状態が入っていた。瓦を廃棄するために掘られた土坑とみられるが、下部の石も同時に投棄されたものであろうか。

3ヶ所目は、樹形石垣奥壁前Tr-1の底部、第7層の最下部の標高5.3~5.4m付近にあり、登城路面上に廃棄された形で瓦片が集積している。

## ⑥ 土坑

礎石3の後方285cmには直径135cmの円形の土坑がある。調査区壁面を境として円形の半分程を検出した。登城路面より20cm程高い標高5.1mほどより掘り込まれた土坑であり、内部の上層20~30cmには割れた瓦が多量に詰まっていた。これらの瓦群を除去すると下層には40cm~50cm程の石が数石みられた。第26次調査で検出した鏡柱背後の控柱と対になる位置にあるため、この土坑は礎石の抜き取り穴であり、抜き取り後に瓦を廃棄したものであると捉えた。

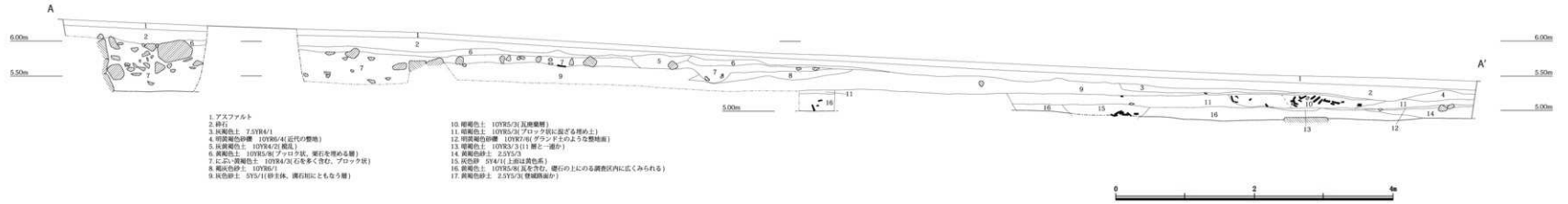




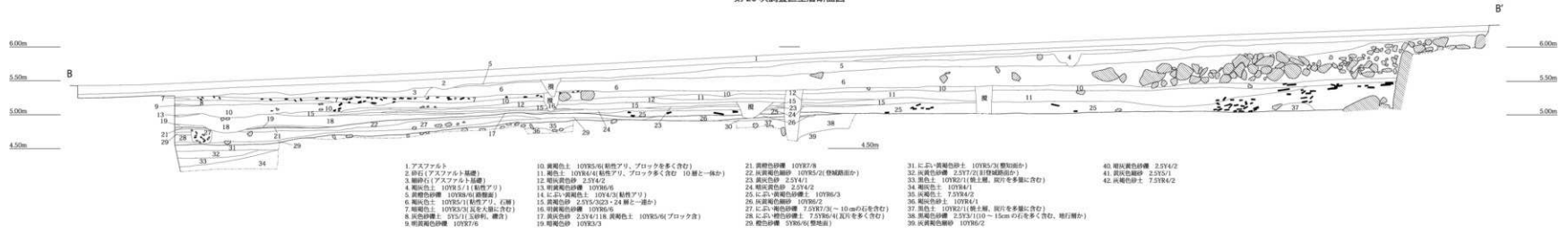
第6図 第21・26次調査区平面図(S=1/50)



第 21 次調査区土層断面図



第 26 次調査区土層断面図



第 7 図 調査区土層断面図 (S=1/50)



**(2) トレンチ****① トレンチ 1 (Tr-1)**

榊形石垣奥壁前、左側壁からの屈折部分に設定した1.2m四方のトレンチである。平成10年度の発掘調査時のトレンチを再掘削したものである。南側には榊形石垣からの転用とみられる大型の石材が並べられていた。

**② トレンチ 2 (Tr-2) [第8図]**

攪乱層や溝埋土とみられる第2・3層の下には瓦片を多く含む第5層があり、その下標高5.1mを上面として登城路面とみられる黄色系の硬化面がみられる。溝状遺構の石垣もこれらの層の上に築かれている。4層に鉄管が入ることから、後世に掘削されていることがわかる。

**③ トレンチ 3 (Tr-3) [第8図]**

トレンチ2壁面の延長上に設定した50×120cmのトレンチである。16層下、標高5.0m付近には登城路面とみられる硬化面があり、上面には瓦片が点在する。溝石垣は、これら硬化面上に構築されている。

**④ トレンチ 4 (Tr-4)**

一連の調査区とは別に、榊形石垣左側壁の前面角に設定した160×100cmのトレンチである。付近にはコンクリート製の設置による攪乱が広がっていた。角部前面には数石の石が集積していたが、明確な形を形成していたわけではなく、遺構の一部かどうかは判断できない。

**⑤ トレンチ 5 (Tr-5)**

溝状石垣と榊形石垣左側壁との間に設定した100×170cmのトレンチである。内部は大きく攪乱を受けており、登城路面を確認することはできなかった。

**⑥ トレンチ 6・7 (Tr-6・7)**

礎石3を挟み込む形で、門の外側から内側へ設定したトレンチである。旧地盤面である第1・7層下にはこれらに似た土質の第5・8層がある。その下、標高4.6~4.7mにある第6・9層になると状況が変わり多量の炭片が混ざりようになる。さらにTr-7側の第9層下には焼土面とみられる第10層がある。標高4.6mを上面とするこの層は厚さ5cm程で硬化した表面部の状況から、この層が旧登城路面であったと想定できる。

**⑦ トレンチ 8 (Tr-8) [第8図]**

礎石2と3との間に設定した60×20cmのトレンチである。1層には路盤面とみられる、黄色系の砂礫が敷かれる。2層も同様に黄色系の砂礫層であるが、拳大の石を多数含み、3層では、色調の暗い土となる。深さ35cm程度まで掘ったが、両礎石はより下部まで続いていた。

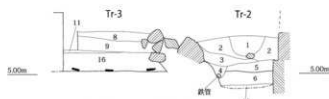
**⑧ トレンチ 9 (Tr-9)**

礎石2と3との間に設定したこのトレンチからは、登城路面である第1層の下、第2層から真っ赤に焼けた石が数石土中に包含された形で検出した。その下、第3層のある標高4.7m付近には、Tr-6・7同様炭片が多く含まれる。

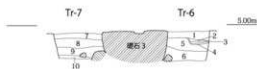
**(3) 礎石 [第7図]**

第16層下、標高4.9m付近からは3つの礎石を検出した。いずれも久松山にみられる花崗岩を使用しており、形態は不定形状を呈し、内2石には柱を組み合わせるための“ほぞ穴”が残る。位置より礎石1・2が脇柱礎石、礎石3は鏡柱礎石に相当すると考えられる。石肌はいずれもうっすら赤みを帯びており、一部には被熱とみられる赤変が認められる。

礎石1は、長さ(奥行き)71cm、幅44cmであり、榊形石垣左壁と接している。表面には斜め方向に伸びる調整痕が数本みられる。上面は、ほんの僅かながら礎石2側へ傾斜するものの、上面標高は平均して4.95m程であり、礎石中央から石垣までの距離は18cmである。



1. 褐色土 10YR4/1(塩びり層の方)
2. 灰色~黄褐色土 10YR4/3
3. 黄褐色土 10YR3/3
4. 黄褐色土 10YR3/2(層の方)
5. 灰黄褐色土 10YR4/2
6. 黄褐色砂土 10YR5/8



1. 黄褐色細砂土 2.5Y5/3(層縁部面)
2. 灰色土 2.5Y2/1(灰化物)
3. 黄褐色細砂土 2.5Y5/3
4. 明黄褐色粘壤土 10YR6/6
5. 黄褐色粘壤土 10YR7/6
6. 埋藏土 10YR3/3(灰化物を含む。層(埋藏面)か)
7. 灰色~黄褐色土 10YR5/3(砂粘壤土)
8. 灰色~黄褐色砂土 10YR5/3(層に似る)
9. 埋藏土 10YR3/3(灰化物を多く含む)
10. 黄褐色土 10YR3/2(粘土層か)

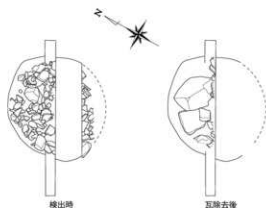


1. 明黄褐色粘壤土 10YR6/6
2. 黄褐色粘壤土 10YR7/1(層大に石多い)
3. 黄褐色土 10YR3/3

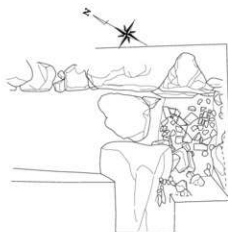
第8図 トレンチ土層断面図(S=1/50)



第9図 埋石3上瓦溜  
実測図(S=1/50)



第10図 土坑実測図(S=1/50)



第11図 樹形石垣前面瓦溜実測図(S=1/50)

礎石2は、長さ72cm、幅90cmであり、上面は僅かに傾斜しながら礎石1と接する。石の輪郭部に欠いたような状態であり、平面部分の規模は65×58cm程度である。上面の標高は4.94mから4.96mまで若干の上下はあるが、ほぼ水平である。これは、熱を受けることで石の表面が剥がれ落ちる“玉葱状剥離”と呼ばれる状態と考えられる。平面部分には表面の調整痕とみられる5cm程度の工具痕が多数確認できる。表面中央部のほぞ穴は、平面は、外径16×15cm、底径9×10cmの正方形状、断面は逆台形状を呈し、深さは6cmを測る。Tr-9で地表下40cmまで掘り下げたが、より下層まで続いていることを確認した。礎石1の中央と礎石2のほぞ穴間の距離は60cmである。

礎石3は、長さ103cm、幅は調査区外へと続くため現状で111cmの大型石材である。門正面側(堀側)の辺は直線状に仕上げられている。ほぞ穴は、外径が15cm四方、底径12×13cmの正方形状であり、深さは4cm程である。礎石2と比べ、穴の側壁は垂直に落ちており、整美な印象を受ける。上面の標高は4.94mであり、礎石1・2にみられた表面の調整痕はみられず平滑に仕上げられている。ほぞ穴付近より、礎石2のほぞ穴へ向かい幅25cmの直線状の僅かな窪みがみられる。柱材等の圧痕であろうか。

さらに、ほぞ穴を囲むように柱の痕跡らしき変色がみられる。薄白く残る痕跡はやや不明瞭な部分もあるが、門の正面からみて横長の長方形であり、規模は長さ39cm、幅47cmである。変色部分との境界線の一部には黒色の直線が残っており、明確ではないが柱設置に伴う墨付線の可能性がある。また、この外側7cmには金属錆とみられる褐色の染みか孔状に残る。柱根元の腐食を避けるために巻かれた金属板の痕跡と考えられる。ここで特徴的なのが、これらの位置である。ほぞ穴を中心としているわけではなく、門の正面からみて手前側(堀側)と右手側(門側)へ長く、反対側と比べ倍の長さの控えを持つ。

礎石2と3との距離は、ほぞ穴の中心で154cmである。

#### (4)登城路面

標高4.9mを上面とする礎石の上面から連続する第17層が相当すると考えられる。上層にあった瓦片や礫混じりの層を除去すると、この硬化面が出現し、一面に広がる。色調は門の外側では褐色であるが、内側では黄色が強く、細かな砂礫を含む様子は、現代の学校グラウンドに使用される真砂土に類似する。栗石群などの問題から全面を検出することは不可能であり、礎石の裏側4m程度までであったが、榊形石垣奥壁へ向かい緩やかに傾斜しながら登って行き、榊形石垣奥壁前で標高5.3mに達する。

## ii 第26次調査(平成22年度)

### 1 調査の概要

調査期間 2010年7月1日～8月31日

調査面積 59.5㎡

#### 調査の経過

表門に向かい右側部分にあたり、現代コンクリート橋との接続部分から榊形石垣奥壁までの区間に設定した幅約2.8m、長さ23.3mの調査区である。調査区際にある溝は、現在も通水しているため、これらを除去することはできず、溝の裏側を40cm程度残して掘り下げることとし、礎石付近等、重要な箇所のみ溝石の一部を取り外して調査を行った。

調査区の南西隅は、かつて路面陥没が起こっており、その復旧の際に多量の真砂が充填されている。当該部分の遺構面は失われており、真砂流出による調査区法面崩落の恐れがあったため、まずは、真砂の一部を土のうにして周囲に積み上げた。

厚さ10cmのアスファルトの下には、同じく10cm程度砕石が敷き詰められている。これらを除去すると、第21次調査同様旧路盤面である第5層が調査区内に広くみられる。旧路盤面下には、拳大～人頭大の石が大量に敷かれた第6層が見れる。

## 2 調査の成果

### (1)遺構

#### ①栗石群(石垣前)

第6層の石層は、樹形石垣奥壁付近で厚さ50cm程もあるが、堀側へ向かい厚さを減じながら続き、石の包含量も次第に少なくなる。溝の裏込め石として入れられたとみられるが、一律ではなく、堀側に近づくにつれ、その量は少なくなる。石の集積状況も第21次調査と同様であり、これらが一連の工程で行われたことが想定でき、その機会として、樹形石垣解体時が挙げられる。解体時の余剰石材を転用したものであろうか。

#### ②溝

調査区と並行する溝は、3段程度の石組で作られており、久松山から城内を通り、堀へ至る重要な排水路である。近世水路を踏襲している部分もあるが、当調査区際については、近代以降石垣を解体した後設置したことが分かっている。近世絵図面をみると、礎石際を通る溝が描かれてはいるが、現在のものとは異なる。幅70～100cm、深さ70cmの溝は、側壁こそ石組であるが底部には玉砂利混ざりのコンクリートが敷かれており、裏込石の上部には河原石のような円形の石材が使用されており、何度か改修されて現在の形に至っていることがわかる。

#### ③樹形石垣

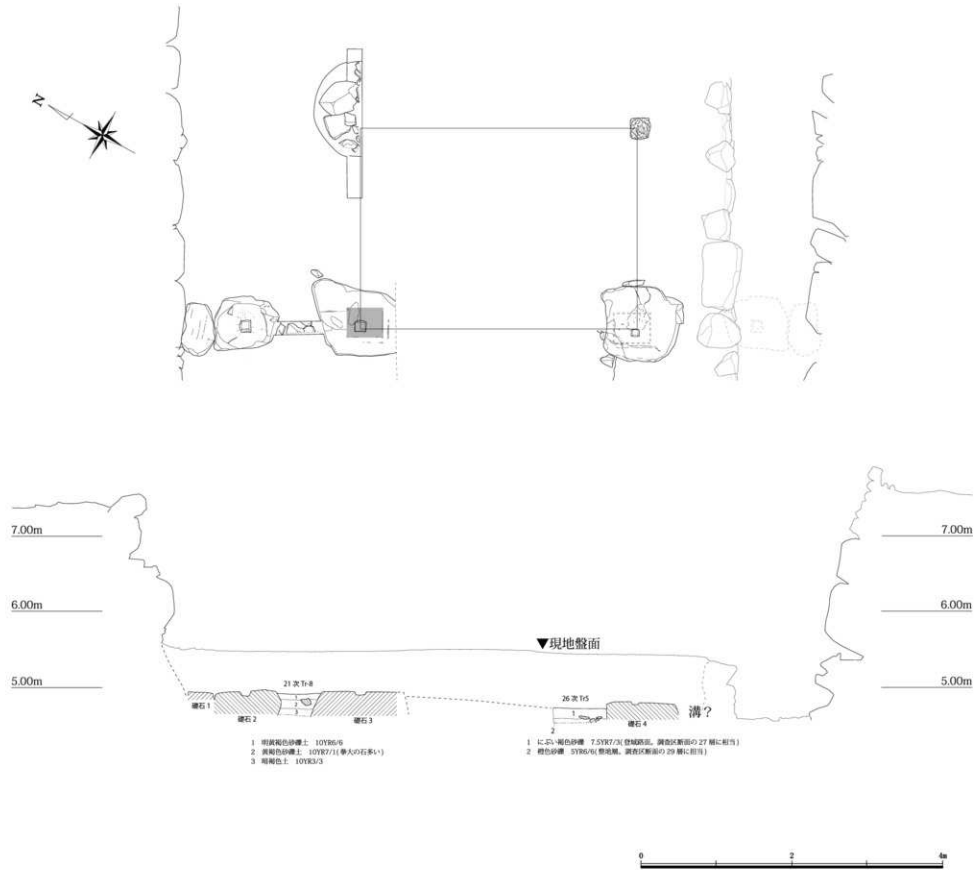
樹形石垣の奥壁部分にあたり、トレンチの北東部で検出した。幅160cm以上、高さ80cm以上の大型の石材と、向かって右側に連続する数石を確認した。石垣は、上部が標高5.8m以上のところで解体されており、下部については標高5.1mの登城路面下まで続く。石垣の上端部10cm程は近代とみられる加工により削り取られている。溝と直交する位置にあるが、溝側面では確認できないため、溝壁石手前で解体された後、溝が造られていることが分かる。石垣の裏側には、全面同様、拳大～人頭大の石群がみられるが、これらについては、オリジナルの裏込石である。奥壁前には登城路面上に沈み込む大きな石材が一石あるが、或いは解体された石垣の一部である可能性がある。

#### ④瓦層および瓦群

瓦片は調査区全体、上層から下層までどの層からも広く出土するが、特に集中するのが第7層と第25層である。標高5.2mにある第7層は、厚さ5cm程度で水平方向へ広がっており、多量の石が含まれる第6層下に位置している。第21次調査側で検出した瓦群と一連であるとみられるが、瓦片はいずれもかなり細かな砕片であり、実測できるようなものはなかった。

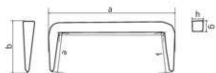
もう一つの第25層は、調査区奥より、手前側まで続く層であり多量の瓦片を包含する。瓦は層全体に包含されるが、樹形石垣奥壁前と、調査区中央付近には特に集中している。石群を除去すると現れるこの層は、奥壁付近では標高5.1～5.5mに亘り厚く堆積しており、堀側へ向かい傾斜をつけながら薄くなる。堆積状況は、奥壁前には掌大のやや大きめの瓦片が多い傾向にある。しかし、その大部分は接合不可能な破片である。調査区中央付近では90cm四方の標高5.0～5.1m付近にあり、その他、堀側へ向かい数ヶ所の集積がみられる。いずれも坑を掘り廃棄したようなものではなく、一面に廃棄する過程で部分的に集積する場所ができたとみられる。これらの瓦はいずれも、登城路面と考えられる黄色系の硬化面直上に堆積している。奥壁側に向かい厚くなる状況は第21次調査と同様であることから、両者は一連の層と考えられ、奥壁側から投棄されたと推察される。堆積時期については、石垣解体以前、明治初期





第12図 表門平面・断面図(S=1/50)





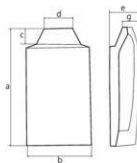
a: 全長、b: 全幅、c: 本体幅、d: 胴長  
 e: 釘長1、f: 釘長2、g: 胴幅、h: 胴厚、i: 釘頭



鋸・釘の計測方法



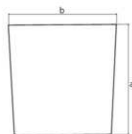
軒丸瓦



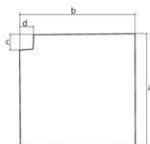
丸瓦



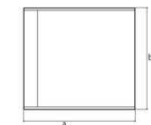
軒平瓦



平瓦

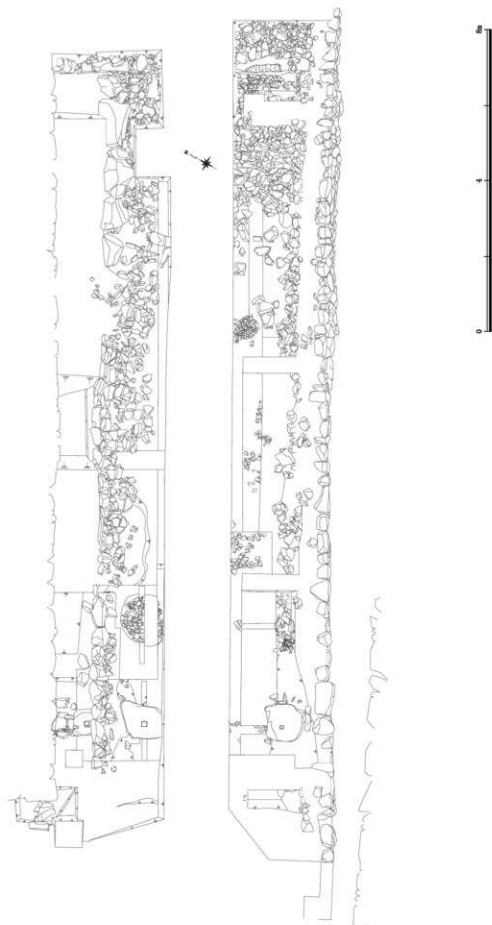


棧瓦



雁振瓦

瓦の計測方法



第13図 溝状遺構・栗石群検出状況(S=1/100)

の城解体時が想定される。

#### ⑤登城路面

第25層の瓦包含層下にある第22・26・39・41層と、第22層上にある第21層が相当する。第41層は枳形石垣奥壁から調査区中央付近まで続く硬化面であり、直上には大量の瓦片が堆積する。上面の標高は、中央部付近で5.0m、奥壁前で5.1mでありほぼ水平方向に敷かれた層であることがわかる。第21次調査側と比べ奥壁前では20cm程低くなる。

第26層は、第41層の延長上、調査区の中央付近長さ3m程に亘ってみられる層である。標高5.0mを上面として水平方向に堆積した細砂を主体とした硬化面である。直下には焼土層(第37層)が広範囲にみられ、これらを埋め立てるように敷かれた層である。

第22層は、第26層と一連の層と考えられ、調査区中央の付近から堀側へ向かって続く。土質は黄色がかった灰色の細砂であり、調査区中央付近で標高5.0m、若干の凹凸はあるものの緩やかに下降しており、調査区南東側、礎石付近では標高4.8mほどとなる。

第21層は、礎石付近の第22層上のみならず敷かれた、厚さ2～4cm程の非常に薄い黄褐色の砂礫層である。層上面は、ほぼ水平の城内路盤面ではよくみられる色調・土質であり、平面的にも広がりながら礎石にすり付く。部分的に敷かれた化粧土のようなものと考えられる。

#### 旧登城路面と整地層

第33・37層の焼土層とそれに接続する第32層が相当するとみられる。厚く堆積する焼土層はそれ自体が被熱時の登城路面と考えられ、焼土範囲の末端より続く灰黄色砂礫層の整地面である第32層と一連の旧登城路面とみられる。

調査区中央部分まで続く焼土層の上から新登城路面との間にはいくつかの整地層がみられる。礎石付近では20cm程になり奥へ進むにつれ薄くなる。焼土層の直上には細砂主体の第31層が、これらを覆うように広がる。礎石付近ではさらに第28～30層が重なり、その中には、幅30cm、厚さ20cm程度の小石が詰まった暗渠状の掘り込みである第28層などがある。第31層は、調査区中央の付近から堀側へ向かって続く。調査区中央付近で標高5.0mから緩やかに下降し、調査区南西側の礎石付近では標高4.6mで水平となる。均一に敷かれていることからそれぞれ自体が、ある時期の登城路面であった可能性も考えられる。その後さらに盛土がされ、最終的に第21層の登城路面となったと想定される。第30層は、上下の層と比べ厚く礎石部分にあった傾斜部分を埋めるように敷かれている。

#### ⑥焼土

Tr-3とTr-4にみられた焼土層は一連のものである。調査区中央付近まで厚く堆積するこの層から、かなり大規模な被熱行為があったことが分かる。礎石や周辺石垣にも焼けた痕跡が確認されることから可能性として挙げられるのが、享保5(1720)年に城内の建物のほぼすべてを焼き尽くしたとされる石黒火事であり、中ノ御門もまた、火事で焼けたことがわかっている。火災の跡である焼土層に対し、上層の整地層は火事後の再整備の様子を示していると考えられる。

#### (2)トレンチ

##### ①トレンチ1(Tr-1)

調査区南西隅、幅140cm、長さ60cmのトレンチである。調査区内堆積土の大半が溝に伴うものであり、第1・2層が溝修理に、第8層が溝構築に伴う層である。遺構面としては、標高付近に黄色系の砂礫層があり、これが他所でもみられた幕末期路盤面とみられる。その下には数層の整地層があり、標高4.5m付近下にみられる。

##### ②トレンチ2(Tr-2)

枳形石垣前に設定した140×80cmのトレンチである。石垣上面の標高6.1mから5.5mには栗石層であ

る6層が厚く堆積する。その下部、25層は瓦群層であり、奥壁前面では特に厚く40cmほど堆積する。これらを除去した標高5.1m付近には登城路面が広がる。また、登城路面には解体された桁形石垣の一部であったと考えられる石材が埋没する形でみられる。

### ③トレンチ3(Tr-3)

登城路面下の状況を確認するため、礎石の後方4m付近に設定した110cm四方のトレンチである。登城路層である第22層を掘り下げると、10cmほどで一面黒色の焼土層である第37層に到達する。標高4.9mを上面とするこの層は、厚さが10cmの中に多量の炭片や橙褐色の焼土片、焼石等を含み、かなり大規模な被熱行為があったことを伺わせる。さらに下の第38層になると焼土は少なくなり、拳大の石や小形の礫が多数みられることから、路盤固めのための地業であったとみられる。

### ④トレンチ4(Tr-4)

中ノ御門前の調査区の壁際トレンチ内の端、礎石脇に設定した幅30cm、長さ150cmのサブトレンチである。登城路面である第21層下の数層の整地層を掘り下げると焼土層である第33層がみられる。標高4.5mにあるこの層はTr-3と同じく10cm程度の中に多量の炭片、焼土片を含むが、直下の第34層には地業らしき痕跡は見られない。第35・36層になると土質は変わり、灰色の砂土となって傾斜がつくようになる。

### ⑤トレンチ5(Tr-5)

礎石4より礎石3へ向けて設定した70×20cmのトレンチである。

## ③礎石・柱

### ①礎石

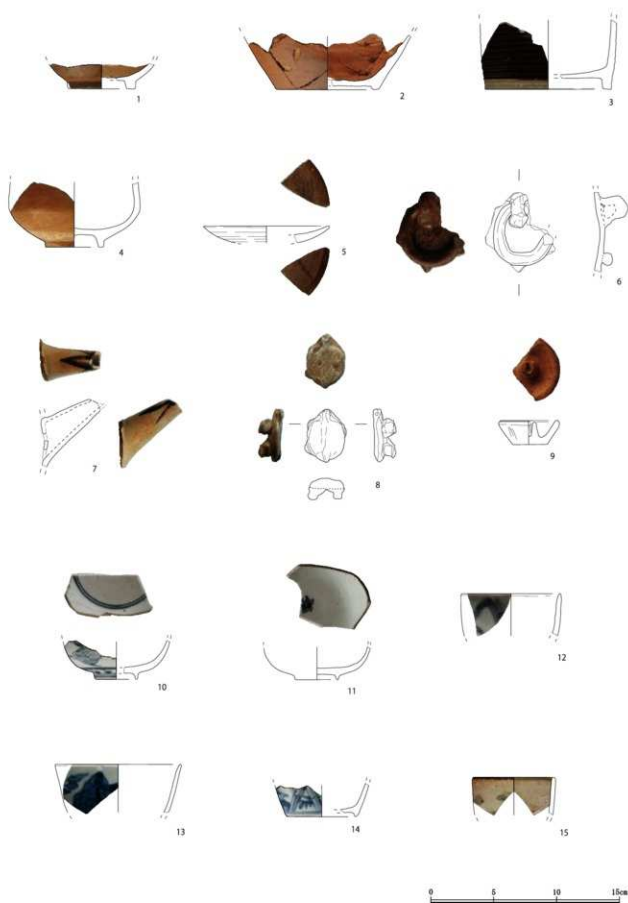
調査区南西で一石確認した。花崗岩製の鏡柱礎石であり幅109cm、長さ100cmの不定形状を呈す。正面側から35cm、左側より40cm、礎石の前寄りの位置には、外径幅11cm、奥行9.5cm、内径幅7cm、長さ6.5cm、深さ3.5cm、断面逆台形状のほぞ穴が残る。第21次調査で検出した、2石のほぞ穴は16cm四方であったのにくらべ当ほぞ穴はやや小振りであるが、穴の中心線は3石がほぼ一直線上にのる。外側から13cm前面側には、幅3cm長さ42cmほどの錆とみられる変色部分がみられる。柱の裾に巻いていた金属板の痕跡であろうか。なお、柱痕跡などは確認できなかった。

全体的に被熱の影響と考えられる赤変がみられ、特に石の後半部分で顕著であり、中央付近では黒変した部分もある。ほぞ穴周辺を除き平滑な部分はなく、石周縁部は玉葱状剥離が顕著であり、平面部分についても表面が剥離した状態である。中央に平面部分は若干の傾斜がみられ、北側(門正面側からみて左奥)が標高4.9mであるのに対し、南側(右手前)は標高4.8m程となる。

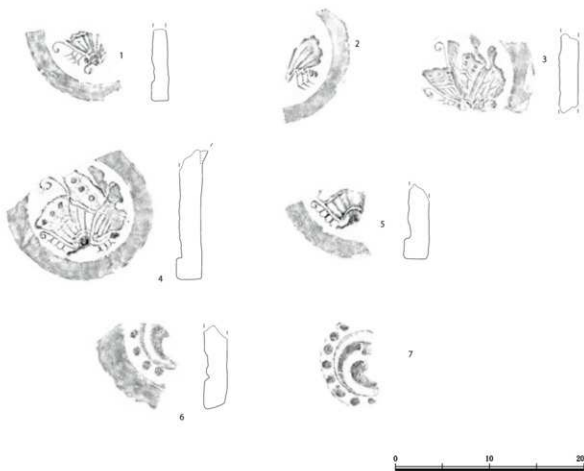
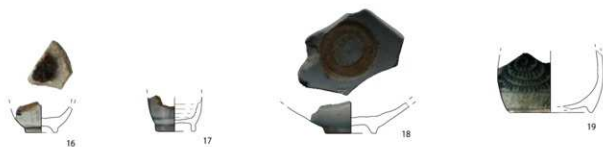
古写真より、鏡柱に向かって右手側には脇柱と側柱が映っており、第21次調査と同様にもう2石の礎石の存在が考えられるが、当該部分は現在水路になっており、脇柱検出のため礎石上面の標高まで溝側壁石を取り外してみたが、より深い位置まで攪乱され、残存していなかった。側柱礎石についても、現状で溝底面が礎石上面より深い位置にあるため残存していない可能性が高い。

### ②柱

礎石の後方270cm(ほぞ穴中心～柱中心)にて、地面に埋設された状態で検出した幅26cm、長さ28cmの柱である。柱の材質は分析の結果「クリ」であり、標高4.6m付近を頂部として折れた状態であったが、下部は残存し、土中へと続いている。礎石のほぞ穴と柱の北西辺(正面からみて左辺)は、直線上に位置しており、第21次調査を含めたほぞ穴列とは直交する位置にあることから、本柱は門の控柱であると考えられる。上面部分は、特に黒変しており、周囲にあった調査区内に広がる焼土層と同じレベルにあるため、被熱により上部を焼失した柱と捉えた。この場合、門の全面部分は礎石立、背面は掘立の形態となる。焼失を石黒火事とするならば、火事後全面部分は再利用、背面部分は同位置に柱は打ち込めな

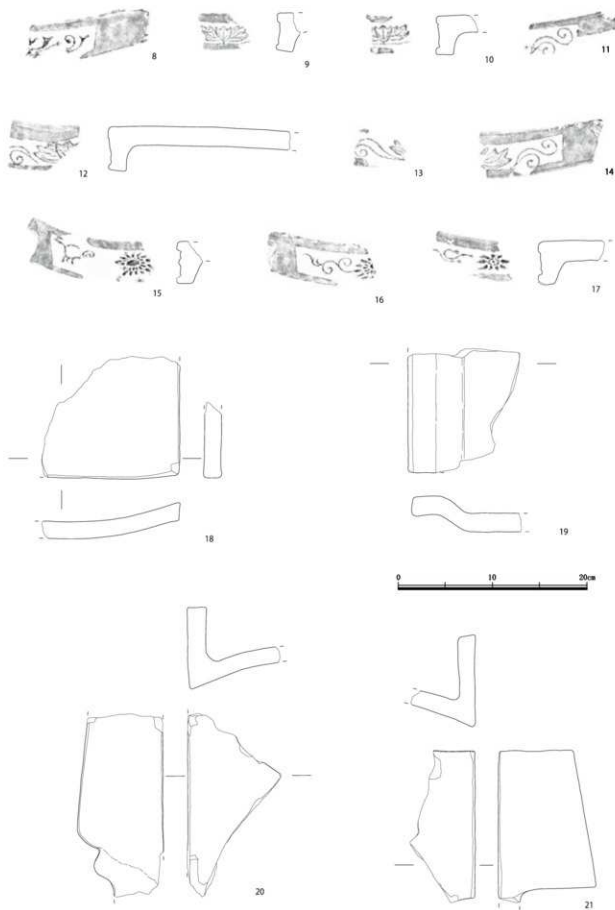


第14図 第21次調査出土遺物実測図1 (S=1/3)

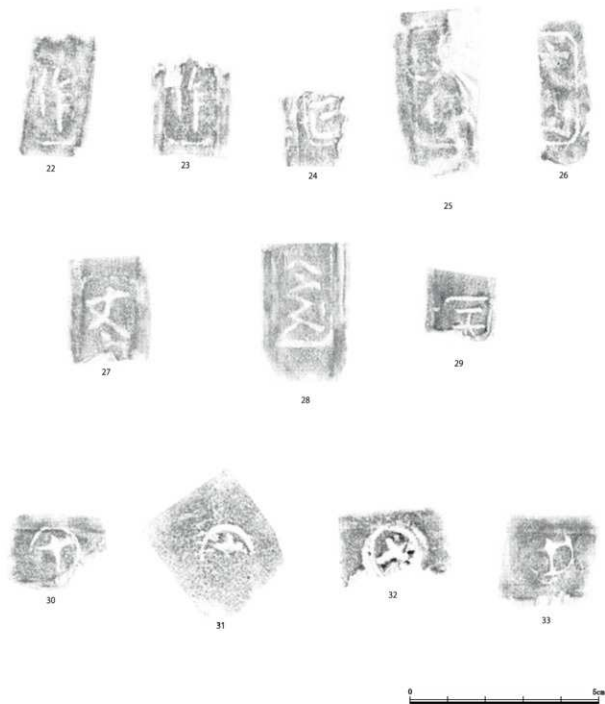


第15図 第21次調査出土遺物実測図2(上S=1/3、中S=1/2、下S=1/4)





第16図 第21次調査出土遺物実測図3(S=1/4)



第17図 第21次調査出土遺物実測図4 (刻印拓影)(S=1/1)

いため、石を置いて礎石立となったものの、後に移動させられたと想定される。周囲は溝構築に伴う攪乱が広くみられ、柱本体に溝の裏込石や瓦片が接していたため、柱設置時期の遺構面は確定しきれていない。また、石垣間を通り流入してくる水を効果的に止めることができず、遺構保護の観点から柱下部状況の調査は実施しなかった。

### 3 出土遺物

#### (1) 第21次調査出土遺物

##### ① 土器類 [第14・15図]

1～8は陶器である。1～3は在地系陶器の底部片である。2は低い高台から外方へのびる。3は台面に細かな節目状の沈線が連続し、内面は露胎する。4は肥前系の碗で上部は僅かに内湾気味となる。5は在地系の灯明皿で、内面には3本の節目がみられる。6は在地系の飾り耳。7は在地系土瓶の注口部であり、城内で多数出土する。8も在地系土瓶の蓋上部に取り付けられた魚形把手であり、これもまた城内に散見される。9は素焼きの乗燭。

10～19はいずれも肥前系の磁器である。10は外面が瑞雲文、内部は二重圓線。11は見込みに虫文。12・13は山水文か。14は竹文の猪口。15は薄い文様に口紅を施す。16・17は小杯。16は内面見込みに黒褐色の沈着物あり。17は内面露胎。18は内面見込みが蛇の目軸割ぎされる。19は蛸唐草文の徳利であり、高台部は軸割ぎされる。

##### ② 鉄製品 [第15図]

釘である。胴部のみ出土であり、断面形態は方形であるが大きく歪んでいる。

##### ③ 瓦 [第15～17図]

1～7は軒丸瓦である。1～5は鳥取城跡出土軒丸瓦の大半を占める揚羽蝶文であり、鳥取城跡出土瓦分類によると、1・2はD、3はE、4・5はI 2となる。揚羽蝶の形態を保っている1～3に対し、4・5は大きく形を変えており、近世最終形態の瓦である。6・7は巴である。明確な分類はないが珠文の多いものが古相を呈すとされる。完形でないため分らないが、6・7とも16～18個の珠文を持っていたと想定される。

8～17は軒平瓦である。いずれも細片であるため瓦当を復元することは困難である。分類に当てはめると8はk類に入る。他の種類と比べ、彫が深く、文様を強調する点が非常に特徴的な瓦である。10～13は三葉文である。9・10の1類と12～14のm類とでは左右の葉の形態が若干異なるがほぼ同じ型式のものであろう。11はいずれかの唐草部分とみられる。15・16は珠文の形態はo類であるが、唐草の形態が異なり、16のものが一般的であり、15のものは他類に多い。17はp類である。8以外は幕末期に多くみられる形態と考えられる。

18は平瓦、19は棧瓦であり、本体部分が扁平な形態である。20と21は袖瓦である。20は左袖瓦であり、袖の高さは9.2cmで、前面へ向かい波状に加工される。21は右袖瓦で、袖の高さは10.3cm、袖部の奥行きが15cm程度しか続かないため、刻袖であろうか。

22～33は刻印瓦の拓影である。22・23は「作」の字を囲うものである。24～29は記年瓦とみられ縦3cm、横1.5cmの囲いの中に二文字を入れる刻印であり、上の字が元号、下の字が干支を示す。25～28の「文」の字は文化もしくは文政期、29の「天」は続く天保期を表していると考えられる。24は文字の形態より上部には「文」が来るとみられ「文巴」、25は判読しづらいものの「文明」、26は「文西」、29は「文寅」、28は「文亥」、29は線が若干細くなり「天□」と判読される。30～33は○内に+を描くもので、線の太さは一定しない。

## (2)第26次調査出土遺物

### ①土器類〔第18図〕

1～7は陶器。1～3は在地系、2は太めの高台を持ち、3は灰釉を施す。4は越前甕の口縁部であり、外面は暗褐色を呈す。5は素焼きの焙烙。6は在地系底部資料で外面には灰釉を施す。7は瀬戸美濃系の碗とみられる。

8～17は磁器である。8は肥前系とみられる口縁部資料である。7とともに焼土層中からの出土である。9～12は近代とみられ、9・10は底裏に「陶山閣」の銘を持つ。11は外面に兎、底裏に「太陽陶園」の銘を持つ。13～17は肥前系である。13は猪口で外面は唐草、見込みには二重圏線と五弁花。14は端反碗で外面は斜格子、内面は渦巻き文。16は色絵の輪花碗であるが、絵はほとんどが剥落している。17も輪花碗で外面は簡略化された唐草、内部には薄と蜻蛉が描かれる。

### ②瓦〔第19～22図〕

1～23は軒丸瓦である。1・2は天球丸、楯蔵跡以外では出土例の少ない種類である。1は古層A類であり、蝶の羽は角張り、他種とは様相を異にしている。2はC類であり、先の調査区以外では出土をみない形である。3・4はD類である。3は瓦当面の大半を残しており、直径は15.4cmである。4～8は細かな文様が特徴的なE類である。縦方向に走る范傷を持つものが多くあり、同範瓦とみられる。瓦当面を完形で残す5は直径が15.4cmである。9～15は唯一の陰刻を用いたF類である。E類と同様に共通する范傷を持つものが多くみられる。26次調査では一番多く出土した種類である。16・17は偏平な珠文が特徴的なH類であり、17も細片であるため明確ではないが同類であるとみられる。19～22は揚羽蝶文最終形態となるI 2類である。23は触角部分を残すが、どの形態かは不明である。

24～26は軒平瓦である。軒丸瓦に対し軒平瓦出土は少なく、24は古相で軟質のc類、25はh類、26はl類である。

27は平瓦であり残存長は24cm程度である。28は棧瓦であり、本体部分が偏平な形態である。29は鬼瓦の端部であり高さは9.1cmである。30～32は丸瓦であり、30・32の裏面には縦方向に棒状の調整痕が残る。

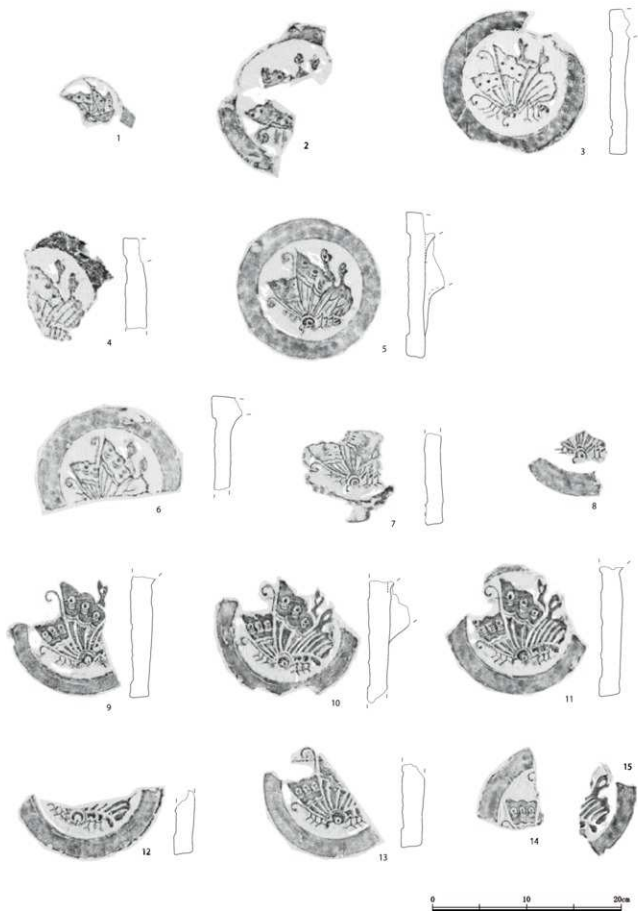
33～45は刻印瓦の拓影である。33は四角囲いに「作」、34は中央に直線を持つ四菱である。35～45は丸に「+」であり、多くは「ナ」字状を呈すものの、中には漢字の「十」字状のものもみられる。

### ③鉄製品〔第22図〕

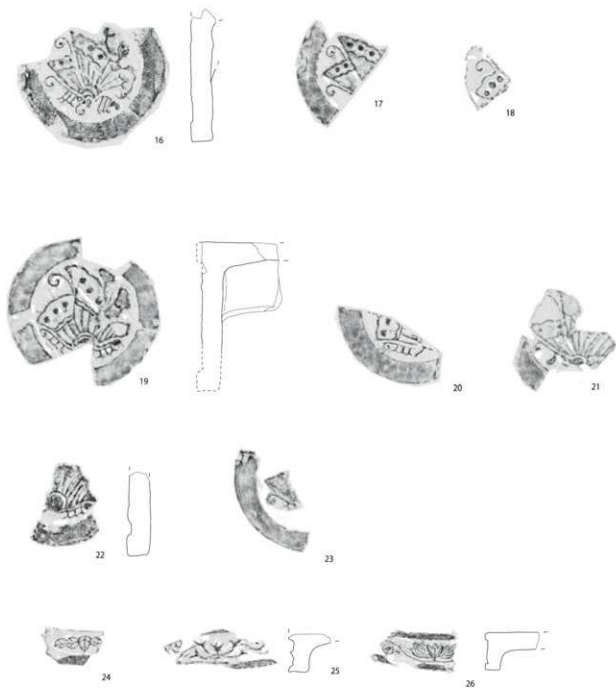
鉄1・2ともに釘である。1は頭部を残しており、断面形態より頭巻釘ともみえるが、明確でない。2は胴部のみ出土である。



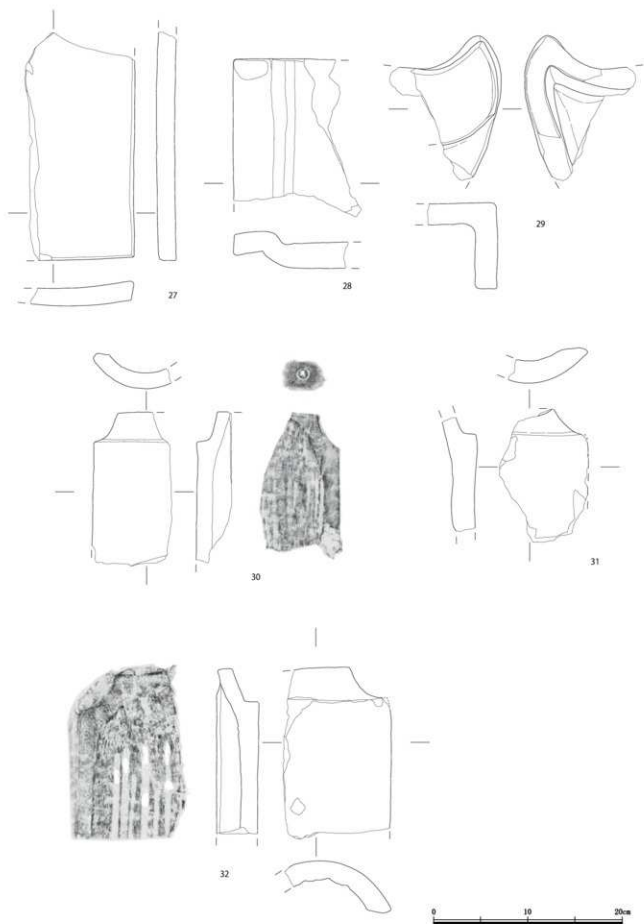
第18図 第26次調査出土遺物実測図1 (S=1/3)



第19図 第26次調査出土遺物実測図2 (S=1/4)

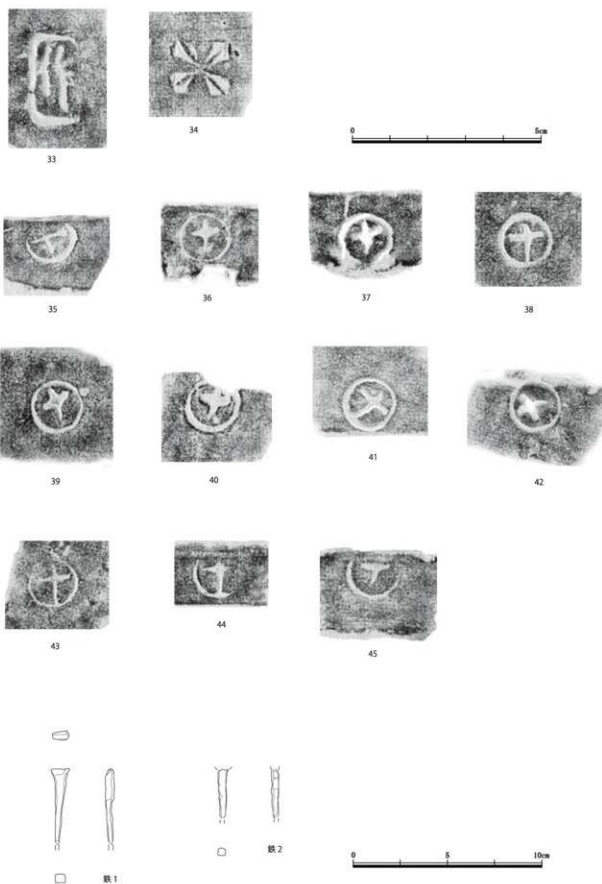


第20図 第26次調査出土遺物実測図3 (S=1/4)



第21図 第26次調査出土遺物実測図4 (S=1/4)





第22図 第26次調査出土遺物実測図5(刻印拓影・鉄器)(上S=1/1、下S=1/2)

第IV章 調査の結果

土器

番号	出土地	層序	種類	器種	文様	器高	口径	底径	高台高	高台径	備考
1	Tr5	表土	陶器	(底部)		△2.0			0.7	(5.4)	在地系
2	西側サプトレ	9層	陶器	(底部)		△4.3		(8.2)			在地系
3	Tr1 奥壁前	7層下部	陶器	碗		△5.2		(10.0)			在地系
4	Tr1 奥壁前	7層下部	陶器	碗		△5.1			0.5	4.6	肥前系
5	Tr1 奥壁前	7層下部	陶器	皿	内)三条櫛目	△1.3	(10.0)				在地系
6	土坑	埋土	陶器			長6.3	幅5.6	厚2.7			在地系
7	Tr5	埋土	陶器	土瓶		長4.7	外1.4	内0.9			在地系、注口
8	土坑	埋土	陶器	土瓶蓋		長4.2	幅3.3	厚1.8			在地系
9	Tr1 奥壁前	7層下部	土師器	甕		1.9	(4.6)	(2.8)			在地系、煤付着
10	Tr1 奥壁前	7層下部	磁器	碗	外)雲文	△3.1			0.5	(3.4)	肥前系
11	Tr1 奥壁前	7層下部	磁器	碗	見)虫文	△2.6			0.3	(3.4)	肥前系
12	Tr1 奥壁前	7層下部	磁器	碗	外)山水文?	△3.3	(7.8)				肥前系
13	Tr1 奥壁前	7層下部	磁器		外)山水文?	△3.8	(10.0)				肥前系、口紅
14	Tr1 奥壁前	7層	磁器	猪口	外)竹花文	△2.7		(5.8)			肥前系
15	Tr5	表土	磁器	碗	外)松文	△3.0	(6.6)				肥前系
16	土坑	15層	磁器	杯		△2.0			0.4	(2.6)	肥前系? 内面軸筋
17	溝状遺構	表土	磁器	瓶		△2.7			0.5	(3.2)	肥前系、内面露胎
18	Tr5	5層	磁器			△2.1			0.5	4.1	肥前系、蛇目軸筋
19	溝状遺構	表土	磁器	瓶	外)胡唐草文	△4.9		(6.7)			肥前系、内面露胎、高台軸筋

瓦

番号	出土地	層序	器種	分類	刷印	最大長	最大幅	最大厚	a	b	c	d	e	f	g	i	備考
1	Tr3	9層	軒丸瓦	D		7.7	12.4	1.8	(7.5)	(5.4)			1.8				
2	視乱		軒丸瓦	D													
3	視乱		軒丸瓦	E		8.6	15.2	2.1	(8.4)								
4	礎石1上ベルト		軒丸瓦	I 2		13.8	15.2	3.3	(13.8)	(11.5)			2.7				
5	溝状遺構	表土	軒丸瓦	I 2		8.4	11.0	2.7	(8.0)	(5.8)			2.7				
6	Tr5	表土	軒丸瓦	巴		9.9	8.6	2.5	(8.8)	(5.5)	(2.6)	2.3					珠文16個
7	溝状遺構	表土	軒丸瓦	巴													珠文18個
8	溝状遺構	表土	軒平瓦	e													
9	土坑	15層	軒平瓦	l		3.5	7.6	4.2	3.9	2.3	1.8						(3.5)
10	溝状遺構	表土	軒平瓦	l		6.9	6.1	4.2	4.1	2.5	1.9	2.4					6.9
11	土坑	15層	軒平瓦	l かも													
12	溝状遺構	表土	軒平瓦	m		20.0	16.5	4.8	4.4	3.7	1.8	2.8			(20.0)	2.7	
13	土坑	15層	軒平瓦	m													
14	土坑	15層	軒平瓦	m													
15	溝状遺構	表土	軒平瓦	o 似		2.7	14.8	4.5	(4.4)	2.6	1.8						(2.7)
16	土坑	15層	軒平瓦	o													
17	溝状遺構	表土	軒平瓦	p		7.5	10.0	4.7	(4.1)	2.5	(1.7)	2.5					7.5
19	土坑	15層	棧瓦			13.1	11.9	3.9	(13.1)	(11.9)				1.9	1.8	2.0	
20	土坑	15層	袖瓦			19.3	9.1	9.8	(19.3)	(9.1)	2.0	(2.8)					左袖
21	土坑	15層	袖瓦			15.9	10.4	6.8	(15.9)	(10.4)	1.9	(2.3)					右袖
22	溝状遺構	表土			「作」												
23	溝状遺構	表土			「作」												
24	溝状遺構	表土			「□巴」												
25	溝状遺構	表土			「文印」												
26	Tr5	埋土			「文西」												
27	土坑	15層	平瓦		「天□」	12.8	14.6	3.9	(12.8)	(14.6)	(13.7)	2.1	12.8				煤付着
28	土坑	15層			「文夾」												
29	土坑	15層			「文寅」												
30	溝状遺構	表土			○+												
31	Tr1 奥壁前	7層下部			○+												
32	Tr2 奥壁前	7層下部			○+												
33	土坑	15層			○+												

表2 第21次調査出土遺物観察表

## 土器

番号	出土地	層序	種類	器種	文様	器高	口径	底径	高台高	高台径	厚	備考	
1	控柱周辺	柱検出中	陶器	碗		△3.7				0.6	4.4	0.6	肥前系
2	控柱周辺	柱検出中	陶器	(底部)		△4.2				0.7	(12.6)	0.7	在地系
3	Tr2	掘り下げ中	陶器	碗		△5.4	(9.6)					0.6	在地系
4	控柱周辺	控柱検出中	陶器	壺									越前系
5	近代溝	表裏層	土師器	焙烙		△6.0	(26.2)					1.2	
6	礎石上ベルト内		陶器	(底部)		△3.9		8.8				0.6	在地系
7	Tr4	34層	陶器			△3.9						0.6	瀬戸美濃
8	Tr4	33層	磁器			△1.6						0.2	肥前系
9	近代溝	表裏層	磁器	碗		△3.2			0.9	(5.0)	0.3	0.3	底外に「陶山園」近代
10	近代溝	表裏層	磁器	碗		△2.7						0.4	底外に「陶山園」近代
11	近代溝	表裏層	磁器	碗	外)兔	4.6	(9.2)		0.6	3.0	0.4	0.4	底外に「大津陶園」近代
12		掘り下げ中	磁器	杯	外)	△3.2			0.7	(3.0)	0.3	0.3	在地系
13	控柱周辺	控柱検出中	磁器	罎口	外)唐草文、内)二重圈線、見)五弁花								肥前系
14		掘り下げ中	磁器	碗	外)斜格子に十字、内)渦巻ぎ文			(8.6)				0.3	肥前系
15	控柱周辺	控柱検出中	磁器	蓋	外)草花文	△2.1	(9.4)					0.3	肥前系
16	近代溝	表裏層	磁器	皿		6.7	(20.2)		0.9	(10.2)	0.7	0.7	肥前系、輪花鉢 近代
17	近代溝	表裏層	磁器	碗	内)薄	4.3	(10.5)		0.7	5.8	0.4	0.4	肥前系、輪花鉢 近代

## 瓦(1)

番号	出土地	層序	器種	分類	刻印	最大長	最大幅	最大厚	a	b	c	d	e	f	g
1	瓦溜1		軒丸瓦	A		7.4	13.6	2.5	(7.4)				(2.5)		
2	瓦溜1		軒丸瓦	C											
3	礎石上ベルト内		軒丸瓦	D		15.4	15.4	2.1	復15.4	11.8			1.8	(2.1)	
4		掘り下げ中	軒丸瓦	D		11.5	11.9	2.5	(9.7)	(7.2)			(2.3)	1.7	
5	瓦溜1		軒丸瓦	E		15.4	15.5	4.0	15.4	10.4			1.9		
6	礎石上ベルト内		軒丸瓦	E		13.4	15.1	3.2	(9.9)	(7.6)				(3.2)	
7		掘り下げ中	軒丸瓦	E		9.7	12.3	2.0	(9.7)	(7.3)			(1.8)		
8	瓦溜2		軒丸瓦	E											
9	瓦溜1		軒丸瓦	F		12.9	12.4	2.7	(12.9)	(11.0)			2.0		
10	瓦溜1		軒丸瓦	F		13.1	16.0	4.5	(12.9)	(11.0)			2.1		
11	瓦溜1		軒丸瓦	F		13.9	15.0	2.5	(13.7)	10.9			2.2		
12	瓦溜1		軒丸瓦	F		8.4	15.2	2.2	(6.8)	(4.4)			2.0		
13	Tr2	奥壁前面瓦層	軒丸瓦	F		9.8	14.2	2.5	(8.7)	(6.7)			2.2		
14	控柱検出中		軒丸瓦	F											
15	瓦溜1		軒丸瓦	F											
16	瓦溜1		軒丸瓦	H		14.0		2.4	(14.0)	(11.8)			2.3		
17	瓦溜1		軒丸瓦	H											
18	瓦溜1		軒丸瓦	H?											
19	瓦溜1		軒丸瓦	I 2		復15.7	16.3	9.0	復15.7	復11.0	2.4	復2.5			復9.0
20	礎石上ベルト内		軒丸瓦	I 2											
21		掘り下げ中	軒丸瓦	I 2											
22	瓦溜1		軒丸瓦	I 2		8.9	7.2	2.5	(8.9)	(6.4)			2.4		
23	瓦溜1		軒丸瓦	?											
24		掘り下げ中	軒平瓦	e											
25	瓦溜2		軒平瓦	h 似		4.4	13.3	4.1	(4.1)	(2.8)	(2.2)	(3.1)			(4.4)
26		掘り下げ中	軒平瓦	l		5.7	9.6	4.0	4.0	2.3	1.6	2.2			(5.7)
27	瓦溜1		平瓦			24.1	11.6	2.0	(24.1)	(11.6)	(10.0)	(0.6)	1.9		
28	瓦溜2		棧瓦			16.8	13.5	4.0	(16.8)	(13.5)			1.4	1.1	2.9
29	礎石上ベルト内		丸瓦			15.2	11.8	9.1	9.1		2.4				
30	瓦溜2		丸瓦	○+		16.2	8.5	3.7	(16.2)	(8.5)	3.1	(5.5)	3.8	1.6	1.5
31	控柱検出中		丸瓦			14.0	9.4	4.1	(14.0)	(9.4)	2.7		4.1	2.5	(1.8)
32	Tr2	奥壁前面瓦層	丸瓦			18.1	11.6	5.5	(18.1)	(11.6)	3.2	(5.8)	5.5	2.1	2.7
33	Tr2	奥壁前面瓦層			「作」										
34	瓦溜1				四菱										
35	礎石上ベルト内				○+										
36	瓦溜1				○+										
37	瓦溜1				○+										
38	瓦溜1				○+										

表3 第26次調査出土遺物観察表1

## 瓦(2)

番号	出土地	層序	器種	分類	刻印	最大長	最大幅	最大厚	a	b	c	d	e	f	g	
39	瓦溜1				○+											
40	瓦溜1				○+											
41	瓦溜1				○+											
42	瓦溜1				○+											
43	Tr2	奥壁前面瓦層			○+											
44	Tr2	奥壁前面瓦層			○+											
45	Tr2	奥壁前面瓦層			○+											
	掘下1号中				スタンプ											

表4 第26次調査出土遺物観察表2

番号	出土地	層序	器種	最大長	最大幅	最大高	a	b	c	d	g	h	i
第21次	1		釘	4.8	0.7	2.2	段(5.45)		0.7	(4.8)	0.7	0.7	
第26次	1	Tr4	32層(焼土)釘	4.0	1.0	0.5	(4.0)	1.0	0.4	(3.4)	0.4	0.3	1.0*0.5
第26次	2	Tr4	32層(焼土)釘	2.6	0.5	0.4			0.5	(2.6)	0.4	0.5	

a 全長、b 全幅、c 本体幅、d 胴長、g 胴幅、i 釘頭

表5 第21・26次調査出土鉄製品観察表

	礎石番号	平面形状	石種	全体		はぞ穴				柱痕	標高	赤み	備考	
						外径		内径						幅
第21次	1	不定形	花崗岩	44	71							4.95	有	上面に斜め方向の調整痕
	2	不定形	花崗岩	90	72	15	16	10	9	6		4.94	有	上面に調整痕
	3	不定形	花崗岩	(111)	103	15	15	13	12	4	47	39	4.94	有
第26次	4	不定形	花崗岩	109	100	11	9.5	7	6.5	3.5		4.8~4.9	有	幅3cm長さ42cmの金属錆付着 玉葱状剥離

数値の内標高はm表記、その他はcm表記。( )は現状の数値。

表6 表門礎石寸法表

※遺物の計測方法については27頁を参照

## IV-2 中ノ御門櫓門跡発掘調査

### 1 調査の概要

第27次調査(平成22年度)

調査期間 平成22年11月1日～平成23年2月25日

調査面積 76.7㎡

#### 調査の経過

第27次調査区は中ノ御門の櫓門跡に設定した8.4m×10mのトレンチである。中ノ御門表門調査(第21・26次)に続き実施した、もう一つの門跡の発掘調査である。石垣の隅角と接する部分については若干の拡張を行った。平成10年度に実施した調査では、礎石1と榊形石垣の一部が、平成18年度に実施した調査では解体された榊形石垣角部が検出されており、部分的なトレンチ調査ではあったが、遺構の一部が確認されていた。しかしながら、その全容は明らかではなく、復元計画の進展に伴い今回の調査となった。全掘へは至らなかった表門調査とは異なり、一度の調査で推定地のすべてをその対象とした。調査区の設定については、現存石垣から解体された榊形石垣までとし、両石垣を横断する形でトレンチを設定した。当該地は現在、鳥取西高等学校のグラウンドとして使用されているため、調査の開始時期は利用が減る冬季を中心にして実施した。

先の調査によりグラウンド整地土は50～70cmにも達し、暮木遺構面から100cm以上も嵩上げされていることが明らかであったため、調査に際してはまず、重機を用いて上層に厚く堆積するグラウンド整地土を除去し、下層については人力による掘削とした。グラウンド土は調査区外の一ヶ所に集めており、調査終了後の埋め戻しの際に再利用した。

グラウンド整地土除去後は、調査区にベルトを十字方向に設定して4分割を行い、それぞれのブロックを1～4区として調査を実施した(第24図)。まずは平成10年度のトレンチを再掘削し、礎石を確認した(礎石1)各区を掘り下げると、解体された榊形石垣と拳大の石が散乱する層、さらには礎石2の上面が現れる。石群を除去すると下には瓦群及びSD01、礎石3・4があり、次いで瓦群を除去すると礎石5・6が現れた。ここから掘り下げると登城路面と思われる硬化面と、礎石に伴う形でSD02を検出した。さらに、ベルトを解体すると中に礎石7・8があり、礎石の数は全部で8個となった。

調査区の南西側に築かれた石垣は、現代の改変を受けてはいない近世石垣であり、上端6.2m、下端は現状で7.5m、天端の標高は8.9mである。

掘削完了後は、空中写真撮影及び三次元計測を実施し、現場内のデータ化を図った後、埋め戻しを行った。

### 2 調査の成果

#### (1)遺構[第23図]

##### ①グラウンド整地層

現在の学校グラウンド表面は平均して標高6.5m付近にある。調査区の位置はグラウンド北西隅にあり、表面高は、脇を流れる溝の天端より20～30cmも高くなる。本来、天端より低い位置にあったが整地を繰り返す度に嵩上げされてきた。戦後は、黄色系の真砂土を用いての整地が合計60cm近くも行われており、次第に高くなった表面高はやがて溝天端を超えるようになった。このため、降雨時などの土砂流出が多くなり、これらを埋め立てるために更なる土積みがなされ、現況の標高へと至ることとなったよ

うである。

表土下には、一層の厚さが3cmから20cmのものまでの整地層が互層状に60cm程重なる。黄色から黄橙色まで若干の色の違いはあるが、一般的にグラウンド土と呼ばれる真砂土であり、主に戦後のグラウンドに使用されたとみられることから、まずは重機を用いてこれらの土を除去した。

掘削を進めるといくつかの攪乱層がみられる。B面の75層は平成18年度、76層は平成10年度のトレンチであり、その若干下、C面標高6.4mを上面とする56層内にある管は1980年代後半に埋め込まれた暗渠管で、その他いくつかの掘りこみがみられる。真砂土層はB面では85層の一部と88層上面、標高6.1m以上にありその厚さは40cm、C面では標高5.85mの61層より上70cmに亘り積まれており、グラウンドの端では薄くなるようである。

真砂土に混ざり、瓦片等の遺物が若干出土しているが、混入物であろう。調査区中央付近、グラウンド整地土除去後の2層上面(標高5.8m)付近からは昭和35年の十円玉が出土した。

#### ②樹形石垣と石群[第29図]

グラウンド整地土を除去した後の標高5.8m付近には、褐色系の土である2層が調査区全体にみられ、その下5および6層と併せ水平方向を意識したほぼ均一な面として広がる。十字ベルトを設定し掘り下げると6層下で変化が現れる。2・4区の5.7~5.8mを上面として、拳大~人頭大の多量の石を包含する39層がみられる。調査区北東側B面の壁中より続くこの層は対面方向へ傾斜しながら2・5・6層の下部へ潜り、調査区中央付近まで伸びる。c-c'、d-d'の土層図をみると39層は壁面より100cm程の所で下方へ下がり、上面が横へ伸びる逆L字状を呈している。壁側には解体された樹形石垣奥壁下部が残存しており、石群はその上を覆うように位置している。奥壁側に厚く、離れるにつれ薄くなる状況は、第21・26次調査で検出した石群のそれと同じであり、樹形石垣解体時に出た裏込石などが廃棄されたものと推定される。

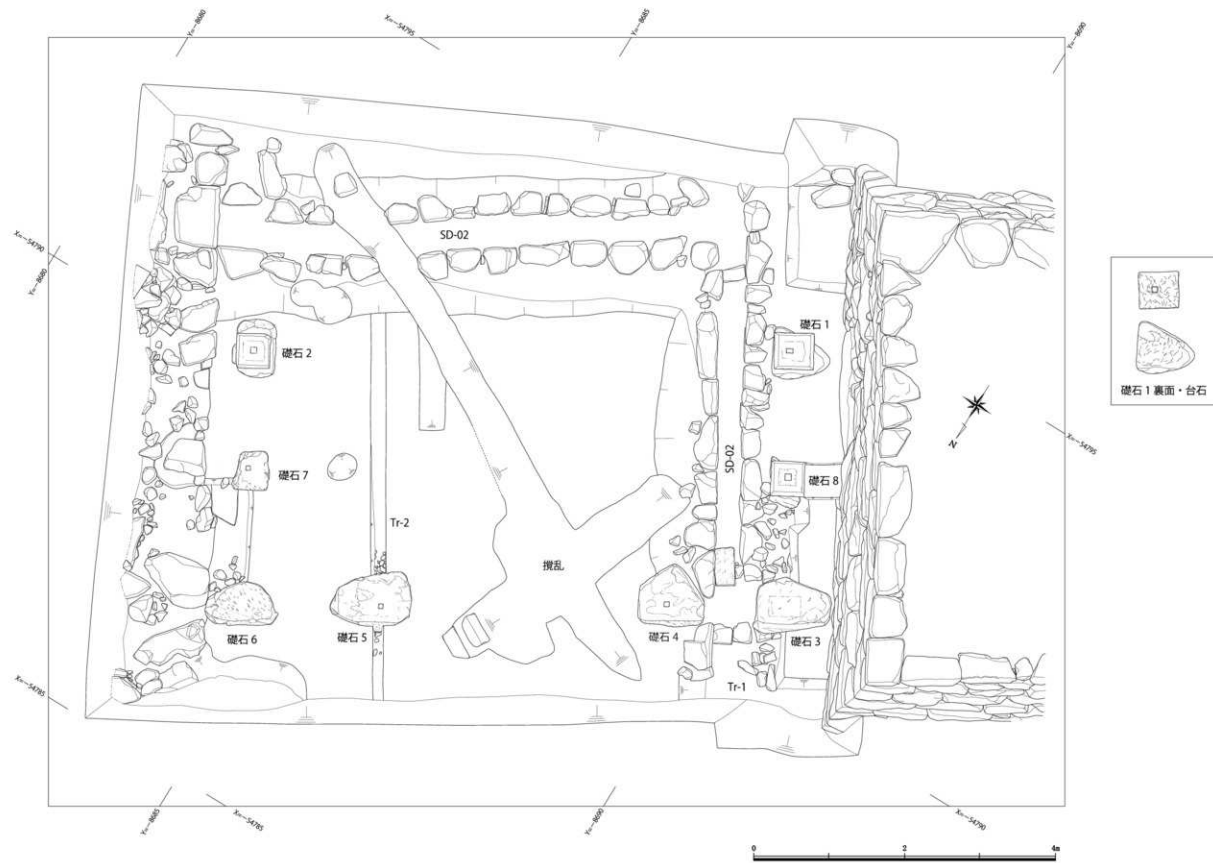
石群を取り外すと下部には樹形石垣の下部が残存している。平成18年度の調査では樹形石垣の隅角石とみられる83×60cmの大型石材を検出しており、今回はこれに連続する形で7~8石確認した。第21・26次で検出した石垣とは一列を成すことから、樹形石垣奥壁であるとみられる。隅角石の上面は標高5.7m前後であり、他の石垣も標高5.3~5.7mを境にして上部が解体されている。検出した石材間には、下部の石垣が残存しているが、周囲には礎石も残存しており、下部を確認するにはこれら及び登城路面を掘り込まなければならないため、今回は行わず、列の確認に留めた。これまでの調査からこれらの石垣は根石であるとみられる。

#### ③焼土面

石群の下、標高5.8m付近に位置する焼土層である10層は、調査区中央付近を中心に4区画にまたがって広がる。瓦片を多量に含む13層の上面部分が被熱したとみられ、炭片を含み、硬化がみられるものの、これまでの調査で検出した火災とみられる大規模な焼土層とは異なる印象を受ける。礎石を覆う層であるため、近代の層であることは明らかであり、範囲も限定的であることから、この場所で火を焚いた痕跡であると考えられる。

#### ④攪乱

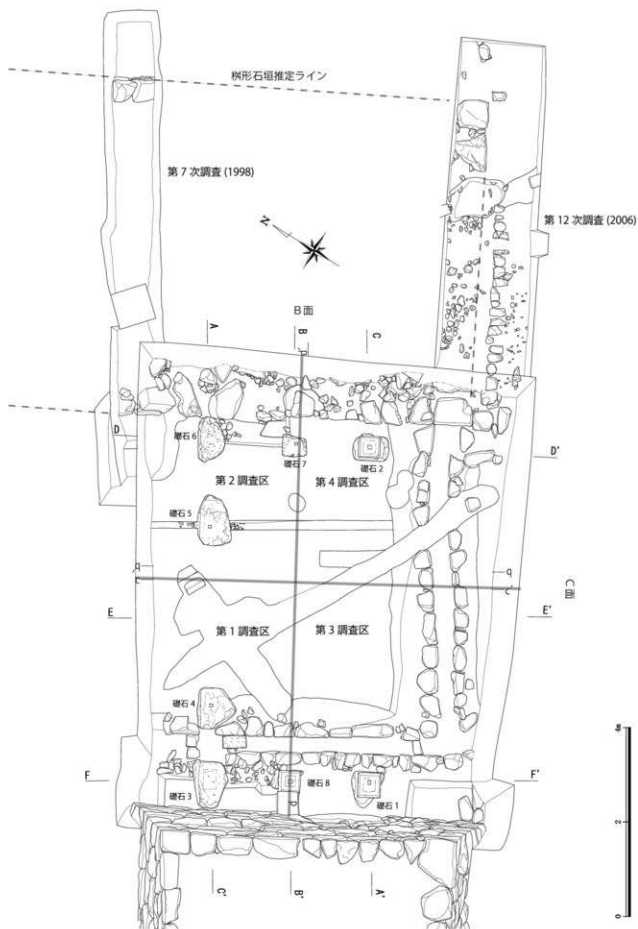
調査区内の東西、南北方向に伸びる十字状の攪乱である。規模は東西方向0.6×8.2m、南北方向0.6×3.7mで交差部分が最も深く50cmほどとなる。標高5.8mの高い位置より掘り込まれていることから近代の掘り込みであることがわかる。北側には長方形の緑色凝灰岩が階段状に2段並べられているが、性格は不明である。掘り方の一部は、近世溝であるSD-02を切り込んでおり、当該部分は溝石が抜き去



第23回 第27次調査区平面図 (S=1/50)







第24図 中ノ御門櫓門周辺遺構・トレンチ配置図(S=1/80)

れたか、原位置より動かされている状況である。

#### ⑤瓦層及び下層

石群と焼土層の下標高5.5m付近に広がる13層は、最大20cmの厚みを持ち、内部には多量の瓦片を含む。調査区全体に広がっているが、1区と4区の中央付近から、樹形石垣奥壁に向かいに集中して堆積する。出土した瓦の大半は平瓦片の碎片であり、完形のものや接合できるようなものは少なかった。この検出状況は、石群とあわせ第21・26次調査と類似しており、まとまった瓦の量からみても城解体に伴う瓦廃棄層である可能性が高い。

瓦層の直下標高5.5m前後には砂礫層の22層がある。調査区全体でみられ、上下層とも性質が異なるため、整地のために敷かれたもので、それ自体がある時期の地盤面であったと考えられる。しかしながら、礎石群の上面レベルより若干上に位置しているため、近代以降の面であると判断した。礎石直上に敷かれた25層とともに、近代でも早い時期に形成された層であろう。

#### ⑥登城路面

13層の瓦を取り外すと、礎石2の上面が現れ、褐色土の25層を掘り下げるとその他の礎石の全体が明らかとなり、これらの礎石の周辺に広がるのが54層である。標高5.3～5.4mに位置するこの層は、黄褐色砂礫の硬化面であり、礎石上面より若干下の位置に接続している点など、先の調査と同様であることから、周囲の状況からみてこれを登城路面ととらえた。門の前面部分にあたる礎石3～6と中間にある礎石7については5cm程度、奥にあたる礎石7については、方形礎石下の旧礎石とみられる不定形状石材の上面下5cm程度に位置する。登城路面の表面は後世の攪乱により、若干の凹凸がみられるところもあるが、ほぼ水平であり、近世溝(SD-02)の手前で落ち込む形となる。

遺物は、登城路面上より鉄製品3～5、面下より鉄製品6～8が出土した。

#### ⑦近代溝(SD-01)[第29図]

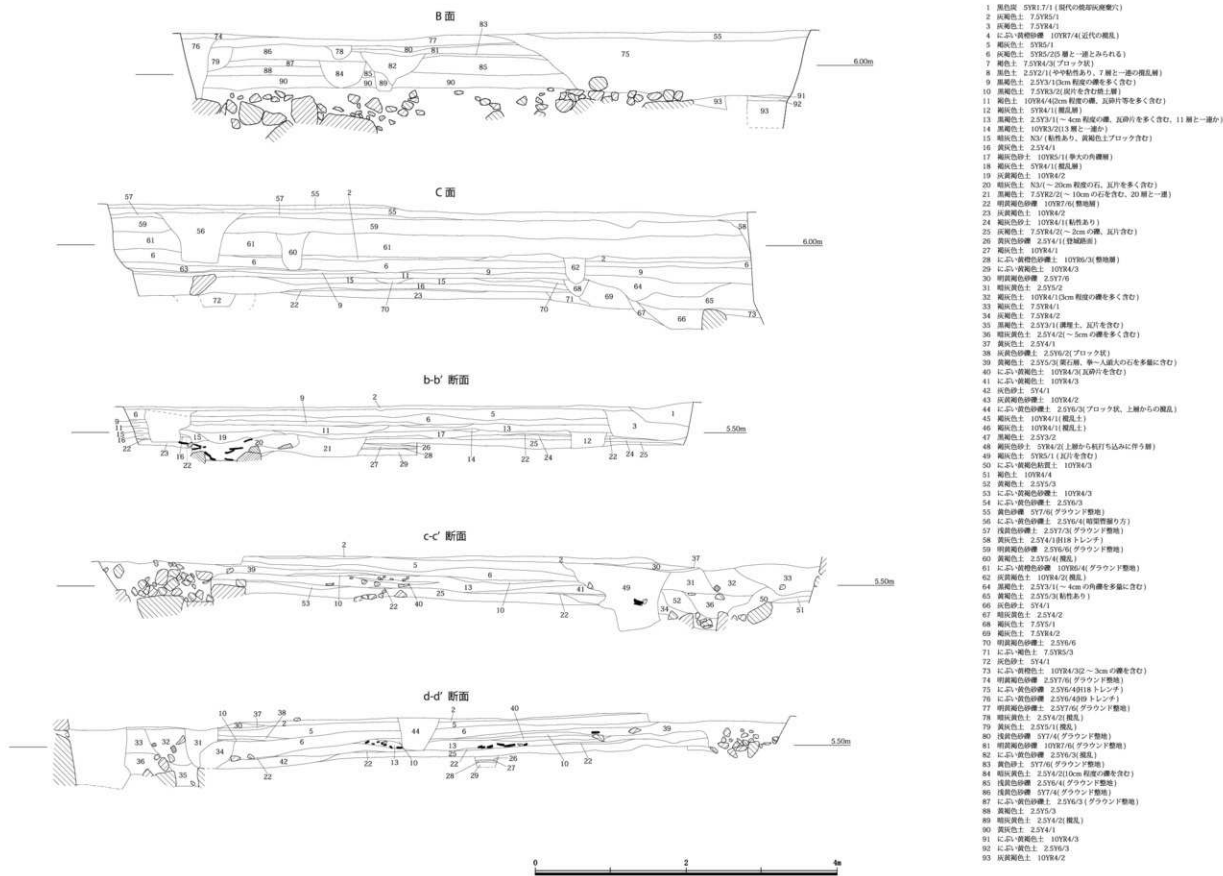
標高5.5～5.6m付近で検出した木組みの溝である。木質は腐食が激しく原型を留めておらず、1・3区の現存石垣前と4区南東面(C面)前で検出であったが、本来は両壁面前をL字状に伸びる溝であったと考えられる。4区C面前では厚さ2～5cmの木材を25cm程の間隔を持って対面方向に並べており、残存長は2.9m程である。3区のC面前でも木材の痕跡らしきものしか残存していなかったが、本来は4区側へ続いていたとみられる。b-b'の土層図にある15・19・20層はこの溝の掘り方に相当すると考えられる。

一方、石垣前では状況が異なる。攪乱のためか、原位置を動いているとみられるが、上面の標高5.5mに直径10cm程度の木材を10～20cm程の間隔を空けて2本並べ、その間を溝としていたようである。また、この木材は建築部材からの転用とみられ、ほぞ穴や丸釘が残る。また、木材の上には20～30cmの石が多く乗っており、1区では蓋石状にコンクリートブロックが置かれている。また、掘り方とみられる掘り込みもあり31・32・34層が対応する。この石が単に廃棄されたものなのか、暗渠状に利用されたものなのかは不明であるが、上層から掘り込みがなされていることから、何度か改変を受けていると考えられる。遺物は木材下部を中心に瓦片が多く出土した。

これらの溝は、後述する近世溝(SD-02)の直上にあり、L字形に折れる流路も同じである。近代以降も、同位置は山側から下がる水が集まり易い場所であったのであろうか。

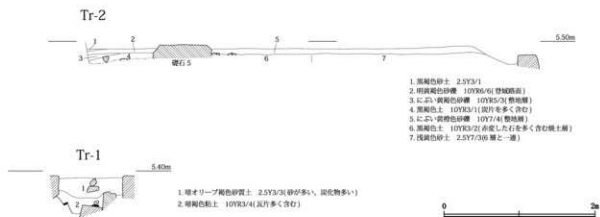
#### ⑧近世溝(SD-02)[第23図]

1・3・4区で検出したL字状の溝であり、総延長は現状で14mを測る。長さ40～70cm程度の石材を

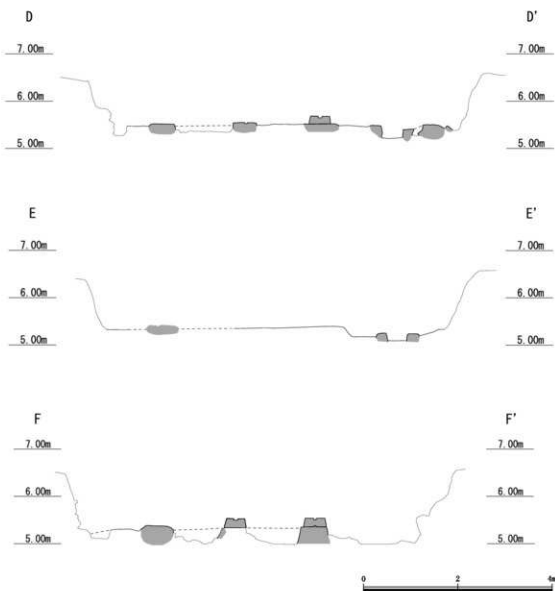


第25図 調査区土層断面図(S=1/50)

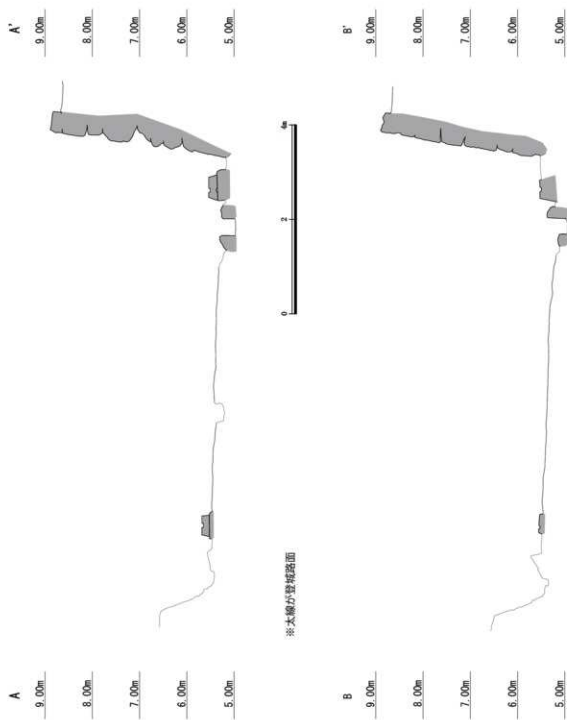




第26図 トレンチ1・2土層断面図(S=1/50)



第27図 調査区断面図1(S=1/80)



第28図 調査区断面図2 (S=1/80)

対面させて並べたもので、溝幅は現存石垣前で30~35cm、C面前で40cm前後である。山側から下りてきた水を堀へ排水するための溝と考えられ、櫓門の背後を横断し、門内を通り、鏡柱と脇柱礎石との間を抜けて門正面へ流れ出す形体である。

C面前、調査区隅部にある溝の始まり部分は、後世の擾乱とみられる石材の流入や移動があり、榊形石垣の隅角石を境にしてB面もしくはC面、もしくは両方向へと続くのが不明瞭である。現状ではC面側へ続く形に見えるが、壁面に連続する石はみられない。一方B面方向では平成18年度の調査で榊形石垣と並行する溝石列が出土しているが、石材の使用法が異なり、長辺を溝壁とするSD-02に対し、短辺を壁としている点や、上面の標高も高くなる点などの問題が残る。先の調査時の見解でも、検出状況からこれを近代溝と捉えているため、今回の溝と連続するとは断言できず今後の検討を要する。

いずれの方向から流入するとしても、榊形石垣隅角に接続するのではなく、一旦隅石の側面部を流れ、80cm進み石端に至ったところで鋭角に折れる。直角に進まない理由は定かではないが、B面(山)側からの下りてきた水を直接現存石垣側へ向けること避け、一旦溝壁石にあてて“乙”字状に流すことで水勢を弱めていた可能性がある。調査区隅部の溝石上面の標高は5.5m程であるが角部を境に20cm程下がる。溝底部は基本的に土のままであるが、所々に敷石があり、段差を利用して高低差をつけており、榊形石垣隅角付近に接する敷石がこれに該当する。

折れた溝は櫓門後方、C面前を直進する。直線部での溝石上面高は、角部で5.5mから5.3mへ下がった後は緩やかに下がって行き、現存石垣側の角部で5.1m程となり、溝底部も同様に、角部の5.2mから始まり、次角付近で5.0m、溝の深度は平均して20cm程度である。溝幅は角部で40cmであるが緩やかに狭まり30cmとなり、長さは7mである。この直線部の石上面は傾斜にあわせて凹凸なく平滑に揃えられている。また、門側およびC面側にみられる登城路面との高低差は15cm程度あり、断面形は窪地となることから、本来石の上には蓋があったと考えられ、側石だけが残っている状況から石蓋ではなく木蓋が想定される。なお、溝石の外側にみられる掘り方については、蓋ではなく上層のSD-02の設置に伴うものと考えられる。

溝は、礎石1後方で再び鋭角に折れ曲がり、C面側から直進してきた溝と合流して櫓門内へ進む。溝の横断方向と縦断方向との角度は82度である。この直線部は、現存石垣と並行して伸びており、溝中央から石垣裾までの距離は約1.5mである。礎石1と8とのすぐ脇を走り、礎石3と4との間を抜ける。礎石前面部分は後世の擾乱がみられ、石材が散在している。対面方向に置かれた溝側壁石は横断方向と比べ、大きさにばらつきがあり、石垣側(門正面からみて右岸とする)の列には小振りな印象を受ける。また、列内や登城路側(左岸)と比べて上面標高にも差があり、5.0~5.3mと様々である。右岸については、石材を2段に積んだ箇所や組み合わせた箇所がみられ、向い合う両岸の高さが異なる理由として上段が抜きとられたと考えられる。溝石左岸は礎石4に接することで一旦途切れ、30cm程間隔をあけ礎石前で再設置されているが、本来は間に一石あったとみられる。一方右岸については礎石3付近から、礎石前にかけて明確なものはみられず、小形の石材が散在する状況である。本来は組み合わせであったものが、擾乱により崩されたか、抜き取られた結果であろう。溝底部には3ヶ所に敷石が置かれており、合流部分から若干門よりの位置(敷石1)、礎石3・4付近(敷石2)、門前面付近(敷石3)で確認した。敷石1・3が花崗岩製であるのに対し、2は緑色凝灰岩製の長方形切石であり、表面には多数の鑿調整痕が残る。底部高は合流部から標高4.96m前後でほぼ水平であり、敷石2を境に7cm程下がり、敷石3を抜け5cm程下がる。僅かではあるが、階段状に流れ下りる形となる。礎石1の下にある旧礎石とみられる石材と右岸との間には調整のためとみられる2石が挟まっている。礎石3と8との間、右岸の背後には裏込石とみられる拳大の石が散見される。

門正面からみて右側を溝が流れることから、門脇にあったであろう潜戸は門左側、礎石5と6の間に位置していたと推定される。

## (2)トレンチ〔第23図〕

### ①トレンチ1(Tr-1)

近世溝であるSD-02の延長方向を確認するため、調査区西隅、礎石3・4の前面に設定したトレンチである。近代に入り作られた中ノ御門で唯一、溝がかかれた絵図「城内調査一件」によると溝は門前で折れ石垣に沿って堀に至っているが、調査では確認できなかった。トレンチ脇に建てられた照明施設工事に伴うとみられる掘削が広がっており、付近には石材が散乱している状況であった。明確ではないが、溝の壁石下部とみられる石が数石残存しており、その状況から溝は、調査区内では直進していたと推定される。

### ②トレンチ2(Tr-2)

登城路面下の状況を確認するために礎石5の縦断方向に設定したトレンチである。礎石前面は調査区壁面まで幅15cm、長さ100cm、背面は幅20、長さ345cmを調査した。前面部分については、地表下10cmまでは路盤面である黄色系の2・5層があり、その下4・6層には15cm程度の石を含む層がある。礎石5の側面部をみると4層が接する部分の表面は未調整であり、2・5層が接する部分は細かい調整が行われている。背面部分は、表面に2～3cm程度は登城路面層があるが、その下は褐色系の6層がみられる。この層中の礎石側から30cm程には赤変した拳大の石が複数みられ、上面は焼土面である。焼土については、表門付近でみられた程度著ではないが、焼けた土と炭片等がみられる。6層は焼土面に敷かれた盛土であり、2・5層は新たに造られた登城路面であると考えられる。

## (3)礎石〔第23図〕

現存石垣と解体された櫓形石垣との間8.3m内から礎石1～8の8個と、旧礎石とみられる2個の計10個を検出した。なお、図中の礎石番号は検出順である。礎石3～6は櫓門正面にあたり、ほぞ穴の残る礎石4・5が鏡柱、礎石3・6は脇柱用であり、礎石1・2が背面の控柱、礎石7・8は中間の控柱にあたる。

本文中の表記として、門の正面からみて横(門と並行)方向を「幅」、奥行き(門と直交)方向を「長さ」として記述している。

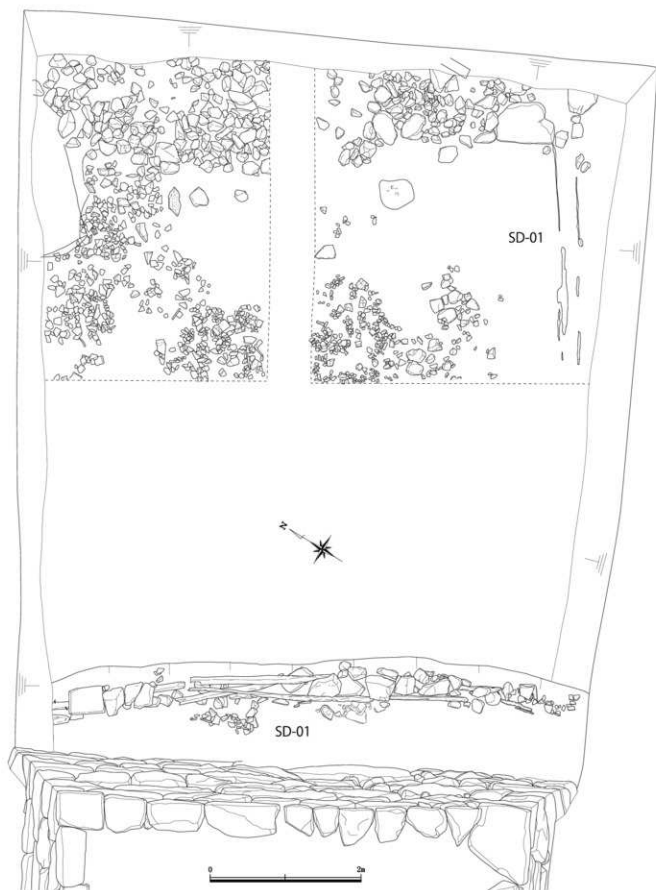
### ①礎石1

平成10年度に一度検出しているものを今回再検出した。門正面から見ると右奥の控柱礎石となる。大きな台石上に乗っており、外径幅54cm、長さ49cm、上面の幅42cm、長さ41cm、厚さ18cmの台形状を呈し、上面標高は四隅とも5.54mと水平である。裾部では長方形であるが、上面はほぼ正方形である。不定形な台石に乗っているため、右奥の角部分は石の外側へはみ出している。基本的に上面・側面ともに平面を意識して平滑に仕上げられているが、裾の6～7cmについては、細かい調整が行われおらず、凹凸が残ったままの状態である。登城路側に寄った位置には外形幅9.5cm、長さ6.5cm、底幅8cm、長さ6cm、深さ3cmの逆台形状のほぞ穴が残る。上面の端部より穴の中央まで15cm、長さ方向では中間地点に位置しており、穴を開くように幅30cm、長さ26cmの柱の設置痕とみられる跡が残る。この痕跡はほぞ穴を中心としておらず、穴の中央からの距離は奥行き方向では中間にあたるのに対し、幅方向では10cmと3分の1の位置にあるのが特徴的である。ほぞ穴の中心から石垣までの距離は70cmである。

### 礎石1裏面

礎石1と2はそれぞれ台石上に乗っており、調査の過程で台石部分が旧礎石である可能性が出てきたため、これを確認するため、史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存整備委員会調査検討部会の了承を得て礎石1を一時的に取り外した。裏面は幅54cm、長さ49cmを測り、上面とは異なり表面部分は平滑ではなく、粗い調整のままである。また、登城路側の位置には幅8cm、長さ7.5cm、深さは穴中央で2.5cmのほぞ穴が





第29図 SD-01・栗石群・瓦群平面図(S=1/50)

ある。上面と同じく片側に寄っており、幅方向では、端部から穴中央までは21cm、奥行き方向では中間地点に位置する。穴の中心点は上面の穴中心からの垂線上にある。現状で面自体に使用痕はみられないため、詳細は不明であるが、「もともと他所で礎石として利用していたものを転用した」や、「礎石1製作途中で反対面を使用することとなった」などの可能性も考えられる。

#### 台石

礎石の下部には幅77cm、長さ68cm、高さ40cmを測る略三角形の花崗岩製の石材がある。上面は幅69cm、長さ61cmの平面を持ち、設置部分を中心に若干の調整痕とみられる凹凸が残るが、標高5.35m前後ではほぼ水平である。登城路面側の辺は直線上であり石垣と並行する。全体に赤みを帯びており、溝側の一部は黒変している。ほぞ穴や、柱の痕跡などは確認できなかった。上面の標高は礎石3・4とほぼ同じことから、上部に礎石1が乗せられるまでの旧礎石として捉えた。

#### ②礎石2

礎石1の対面、門の正面からみると左奥の控柱にあたる。台石上に乗っており、幅45.5cm、長さ46cm、厚さ16cm、上面幅40cm、長さ39cmを測る台形状の礎石である。右奥の角は幅7cm程欠くものの上面、下面ともほぼ正方形に近い。上面は標高5.68mの水平であり、ほぼ中央の位置には幅・長さが8cm、深さ3cmの断面長方形のほぞ穴が作られている。また、ほぞ穴を囲むように幅29cm、長さ26cmの柱痕跡が残る。この痕跡はほぞ穴を中心として、幅・長さとも均等の位置にある。横方向に若干長い、上面の中央部にあることがわかる。平面、側面ともに表面を平滑に仕上げているが柱痕部分は表面が荒れた状態となっており、裾部の一部にも調整の甘い部分が残る。樹形石垣側の辺は、台石寄り2～3cm程度外側にはみ出している。礎石自体を取り外していないが、側面からの観察によると、裏面は平滑な仕上げは行わず礎石1と同様であるとみられる。なお、ほぞ穴の有無は不明である。ほぞ穴の中心から石垣までの距離は50cmである。

#### 台石

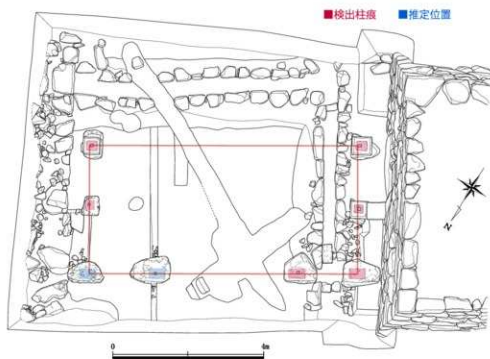
礎石2の下部にある花崗岩製の礎石であり、幅53cm、長さ77cm、厚さは路盤面上に5cm程検出したが、全体は不明である。上面の幅49cm、長さ65cm、標高は5.52mの水平である。登城路側へ向かい石垣と並行する形で、幅方向の両片はいずれも端部が剥離したような状態であり、特に奥側の辺については顕著である。登城路面側の辺は直線上であり石垣と並行する。明確な赤変は見受けられないが、石の状態や標高など礎石1と類似しており、表面が平らなことからも、旧礎石であると推定される。

#### ③礎石3

正面右端の脇柱礎石にあたる花崗岩製の石材である。端部を石垣と接する不定形状の石で、幅1.03m、長さ75cm、高さは現状40cm、上面は93cm、長さ57cmを測る。上面の標高は中央付近から登城路側が5.38m、石垣側が5.33mと若干の傾斜がある。表面は細かな調整により、鑿状の工具痕が全面にみられる。全体に赤みを帯びており、上面には黒変部分、辺縁部を中心に石材の剥離がみられる。SD-02側の側面は垂直方向に面を持ち、本来は溝側壁が隣接していた可能性がある。礎石1・2・8にみられる柱痕のような明確な石面への圧痕はみられないが、柱痕とみられる長方形の幅42cm、長さ27cmの変色部分は確認した。変色部分は、上面部分の中央から登城路側へ寄った、標高5.38mの水平部分にうっすらと残る。中央部分と石垣との距離は65cmである。

#### ④礎石4

正面右側の鏡柱礎石にあたる花崗岩製の石材である。幅88cm、長さ83cm、上面は標高5.35～5.38mで幅82cm、長さ74cmを測る五角形状の礎石であり、登城路面上に5cmほど露出する。石材の中央から前面



第30図 柱位置図(S=1/100)



写真2 鳥取城と久松山

および登城路寄りの位置には外形7cm、底径6cm四方、深さ3.2~3.5cmのほぞ穴が残る。石材の前面部の側面には表面調整のためと思われる斜め方向の細かい整状の調整痕が残る。背面側の三角形の突出部30cmほどには被熱による赤変が著しく、上面全体にわたり石材の表面剥離がみられる。ほぞ穴の周囲には柱の設置痕とみられる白い変色部分が残るが、表面の剥離が激しく、明確な範囲を測ることは不可能であったが、幅45cm、長さ25cm以上はあるとみられる。ほぞ穴中央から石垣までの距離は224cmである。

#### ⑤礎石5

正面左側の鏡柱礎石にあたる安山岩質の石材である。幅107cm、長さ73cm、上面は標高5.44~5.47mで、幅96cm、長さ68cmの不定形状の礎石であり、登城路面上に5cm程露出している。礎石4と同様、前面および登城路寄りの位置に外径6.5cm、底径5.5cm、四方、深さ2.5cmのほぞ穴を持つ。上面辺からの距離は登城路側から40cm、前面から21cmである。前面と登城路側の側面は直線を意識した細かな調整が施されている。明確な赤変はみられないが、表面の剥落が著しく、柱の痕跡等を確認することは困難であった。他の7つの礎石が花崗岩質であるのに対し当石のみが安山岩質である。ほぞ穴の中央から構形石垣までの距離は227cm程度であり、石端部は7~8cm程度は石垣内へ入り込む形であったと思われる。礎石4のほぞ穴中心距離は387cmほどとなる。

#### ⑥礎石6

正面左端の脇柱礎石にあたる花崗岩質の礎石である。幅97cm、長さ59cm、上面は標高5.49~5.53mで、幅78cm、長さ51cmの不定形状の礎石であり、登城路面より5cm程露出している。前面に整状の細かな調整痕を持つ。石材の外観は同じく脇柱である礎石3と類似しており、背面の辺縁部を中心に表面部分の剥落がみられる。門の前面にあたる礎石3~5と同様に、前面部分あたりの辺については直線状に加工されている。全体に赤みを帯びているが、明確な赤変はみられず、柱の痕跡等も確認できなかった。礎石5との距離は70cmほど空いており、この間に潜戸が存在していたとみられる。

#### ⑦礎石7

礎石6の後方、礎石2との中間部分にある控柱礎石である。幅59cm、長さ52cm、上面は標高5.53~5.56mで、幅41cm、長さ52cmの略形状の花崗岩質の礎石であり、登城路面より5cm程露出している。石垣側に近い位置には外径6.5cm、底面5cm四方、深さ2cmのほぞ穴が残る。厚さ10cmほどもない板状の石材であり、石垣側から背面側に向かい、石材の辺縁部を欠いた状態である。明確な痕跡ではないが、石の中央付近には柱痕らしき平滑な部分が25cm四方の範囲に確認できる。比較的薄型の石材であるが、礎石1・2のような台石を持ってはいないことから、後から設置されたものの可能性もある。礎石2とのほぞ穴中心距離は156cmであり、ほぞ穴の中心から石垣までの距離は55cmである。

#### ⑧礎石8

礎石3の後方、礎石1との中間部分にある控柱礎石である。上面の標高は5.33mであり、外形は46cm、上面は38cm四方、厚さ23cmの花崗岩質の台形状礎石である。中央には外径が幅8.5cm、長さ9cm、底部径は幅7.5cm、長さ8cm、深さ3cmのほぞ穴が残る。他の礎石とは異なり、石材のほぼ中央にほぞ穴があるのが特徴的である。外観は礎石1・2に類似し、表面は平滑に調整されるが、ほぞ穴の周囲には幅24cm、長さ22cmの柱の痕跡を確認した。礎石7同様、下部に大型の台石はないものの数石、表面が平らな石材がある。礎石下面と接してはいるものの、それ自体で支え出来る程の規模はなく、礎石設置時に沈下防止などの目的で置かれたものと推定される。ほぞ穴の中心から石垣までの距離は70cmである。

### 3 出土遺物

#### ①土器類[第31～34図]

1～25は陶器である。1～3は肥前系碗の底部資料である。1・2は内外ともに刷毛目がみられる。4～16は在地系である。4は直線的に外方へ伸び、内面には灰白色の釉がうつつらみられる。5は輪花皿であろうか。6・7は碗。8は灯明皿とみられ、暗赤褐色の薄い器壁である。9も灯明皿である。10・11は小皿であり、内面には梅をイッチン描きするもので10は灰色、11は白灰色を呈す。12は器形不明であるが鉢か甕であろうか。13は若干の反りを持ちながら上方へ伸びる。14・15は土瓶である。14は体部と蓋のみ、15は注口までの検出である。ともに城内では多く見つかる瓶である。16は焼塩壺の蓋であり、全体に黒斑がみられる。17～19は関西系の播鉢である。17・18は橙褐色を呈すのに対し、19は暗赤褐色である。口縁部内面に凸状の突起がみられ、描目の施文は口縁部ヨコナデ前である。20については胎土が黒褐色である。太めの7本1単位の描目が間隔を開け、口縁部ヨコナデ後に施文されている。21は関西系播鉢とみられる。黒褐色の胎土であり、口縁部内面の突出部は大きく、描目の施文はヨコナデ前である。22は粗製の播鉢である。全体的に軟質で、口縁部は若干彎曲しており、描目はヨコナデ前である。周辺でみられない器形である。23は播鉢底部である。あまりみられない種類のものであり、防長系の一部であろうか。24・25は越前製の口縁部片である。内面には刷毛目がみられる。24は端部のみであるが、25は頸部を経て胴部へ向かい緩やかに広がる。

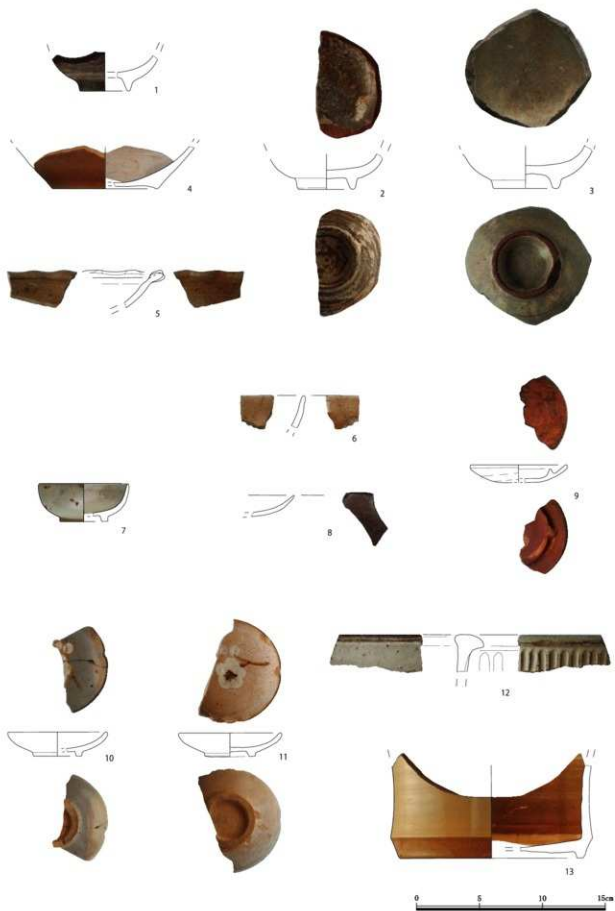
26～42は磁器である。26・27は肥前系の碗である。26の外面は花卉状文様、内面には圏線と五弁花、27は外面に松葉文、内面は圏線がみられる。28は在地系とみられる。29～31は肥前系の碗である。29の文様はわずかであり、看取できない。30は半裁菊花文で、31は無文である。32はクローム釉の青磁小杯である。33～41は肥前系とみられる。33は全体に青味を持つ蓋であり外面は草花文、口縁部内面には雷文帯を持つ。見込みには圏線内に明と制の文字がみられる。22も蓋であり、外面には雲龍文と宝珠文、口縁部内面には四方標文、見込みには二重圏線と松竹梅環状文。35は見込みに二重圏線と五弁花、底裏には大明年制の文字がみられる。36・37は皿である。36は内面に草花文と二重圏線、底裏には圏線が描かれる。37は内面に七宝文と二重圏線、底裏には圏線。38は底部資料、見込みに魚文を描く。39は猪口である。外面には二重線が描かれるが、染付は発色が悪く黒色状を呈す。底部は蛇目凹形高台である。40は内面に繁花文、外面は唐草文である。41は口縁部外面が斜格子文である。42は上層からの出土で日英同盟記念とみられる。

#### ②石製品・金属製品[第35図]

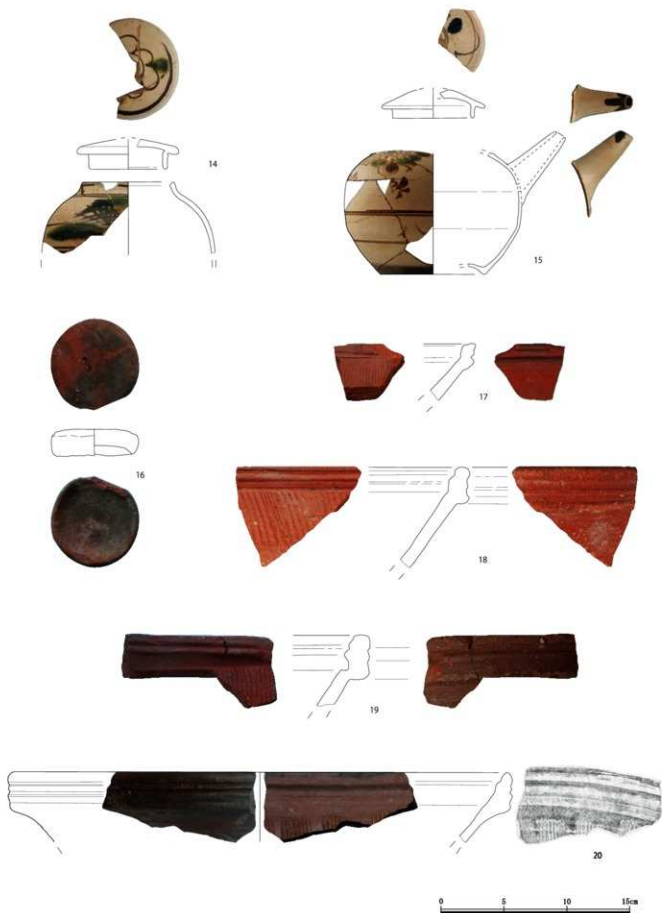
石1は硯で幅7.8cm、高さ1.9cmを測る。3分の1程を欠くが、一部に墨痕が残る。石2は石臼で直径26cm、高さ11.6cmである。1は手違い甕である。長さは17cm、厚みは1.2cm前後の方形を呈す。2～7は鉄釘である。2は断面方形の釘である。大きくL字状に曲がり、頭部と先端を欠く。3は頭部である。4～7はいずれも断面方形の胴部片である。8は鋼製の釘。断面方形で全長は2.9cm。9は煙管内部に木芯が残る。

#### ③瓦[第36～41図]

1～38は軒丸瓦および鳥袋である。1～3はE類である。1は中央付近に縦方向に走る范傷がみられ、2・3は顔部分のみの残存である。4～7は陰形式のF類である。4・5の羽上部には横方向に走る范傷がみられる。8～10はI1類である。蝶の頭の中央とその外側に位置する左右の目玉が特徴的な形態である。8は完形の瓦当面を持つ鳥袋であり、直径は16cm前後である。9・10は軒丸瓦である。11～25はI2類であり当調査区より最も多く検出した種類である。I1と比べ目の形がはっきりしなくなり、



第31図 第27次調査出土遺物実測図1 (S=1/3)



第32図 第27次調査出土遺物実測図2 (S=1/3)

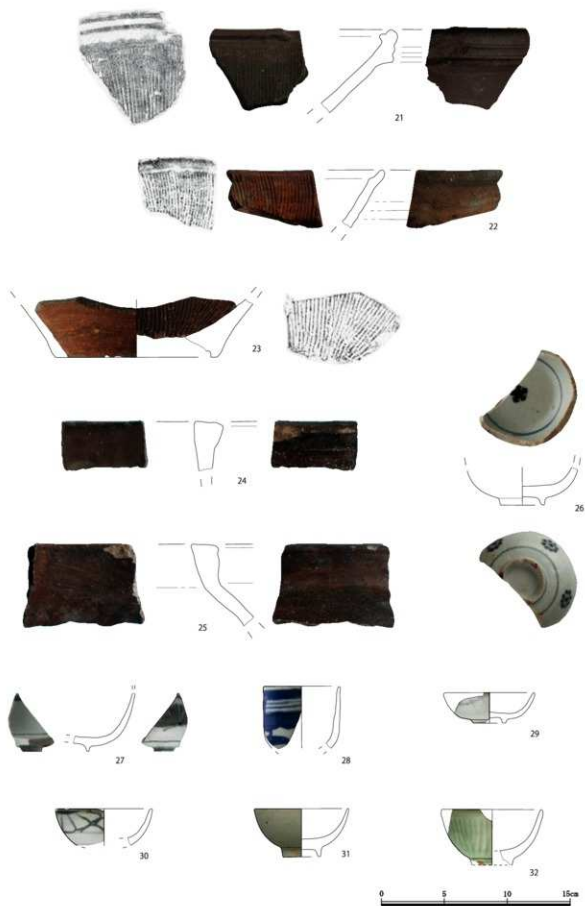
残っていても頭の中央にみられるのみである。15は下半を残す鳥袋である。瓦当面は外側に向かって反っており裏面の中央には文字が掘り込まれている。文字は3列で書かれており、右側に位置する1列目には「、」が2つみられるが、上部を欠くため文字は復元できなかった。中央の2列目は「六丑」、左側の3列目は「保」と彫られており、2列目にみられるとおり、本来は記年銘があったと想定される。製作手順としては瓦当面裏側に文字が彫った後に筒部分を接合している。半分以上残る12・14・15はいずれも直径16cmである。26はL類である。中央に大きな目を並べる形で出土例は数例しかない。27～29は細片であるため明確ではないが29についてはD類の可能性はある。30～34は三つ葉葵文である。葵文は將軍家より文政8(1825)年以降使用を認められたものである。いずれも細片であり、33については表面の磨減が著しい。35～38は巴紋である。35・36の珠紋は小形であり、数は推定で18～20個ほどになるとみられる。一方37・38は珠の直径が大きく、数も少ないとみられる。

39～71は軒平瓦である。出土したものは瓦当面部分の2分の1から3分の1程度の残存であり、中央部の断面を取れたのは5点のみであった。39～42はk類である。文様を深く立体的に彫り込むのが特徴的な種類である。43～45はl類、46～50はm類である。ともに三葉文であるが、左右の葉の形状が若干異なる。51～53は下向きの三葉紋のn類である。m類をそのまま逆にしたものであるため、外側の唐草が下巻きとなる。55～59は1もしくはm類である。端部のみの残存であるが、上段の唐草が外側にあり上巻きになることから判断した。60～64は多くの弁を持つo類である。65はq類である。66・67は唐草のみであるが、o類と推定される。67は正面右側に「作」の刻印を持つ。68・69もまた唐草のみであるがs類とみられる。70は細片であるため明確ではないがc類の可能性もある。71は褐色の軸瓦である。S類に似た文様に軸を掛けたものである。

72・73は丸瓦であり、72の中央付近には孔が残る。74は棧の付いた隅瓦であり、中央付近には断面台形状の孔が残る。75は鬼瓦の一部とも考えられる資料であり、放射状に重なる断面波状の形状を呈し、厚さは2cm程度である。76・77は雁振瓦である。76は半分程度残存しており、全長31.4cm、高さ11.7cmを測る。77の高さは11.3cmである。

78～114は刻印瓦の拓影である。78～83は文化・文政期作製を表す記年銘と考えられる刻印である。78は「文西」、79は「文卯」、81は「文申」、82は「文午」、83は「文子」と読める。一文字目が「文」で始まるものは二文字を四角囲いするのが基本であるが、82には囲いがみられない。84～88は縦2cm、横1.3cmの枠内に「作」の字を配する。89～94は直径1.3cm円の中に+である。+部分は「十」に近い細線の90・92と「ナ」に近い89・91・94とがある。95・96は四葉であり、中央に線を持つ。97は直径7.5cmの円の中に「二」を配する。

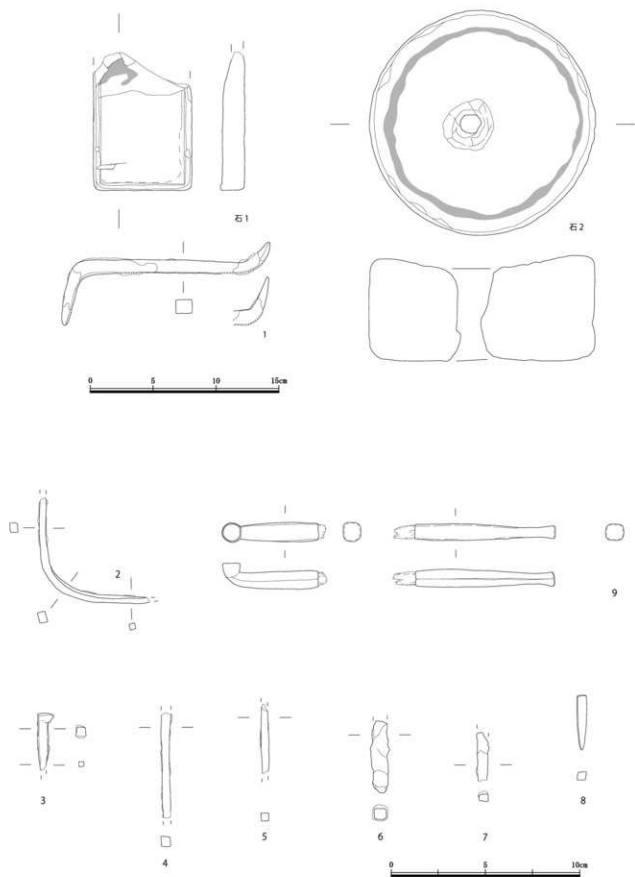




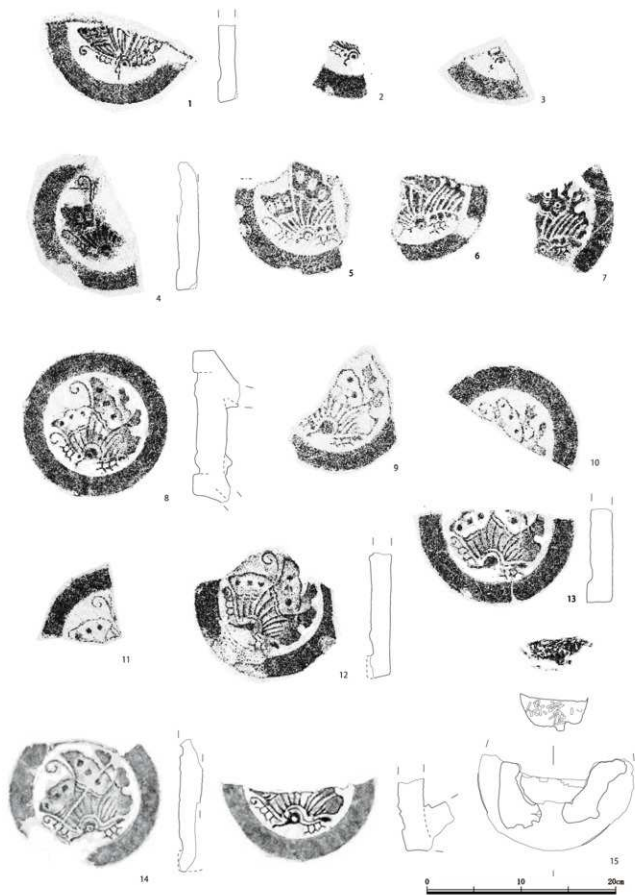
第33図 第27次調査出土遺物実測図3(S=1/3)



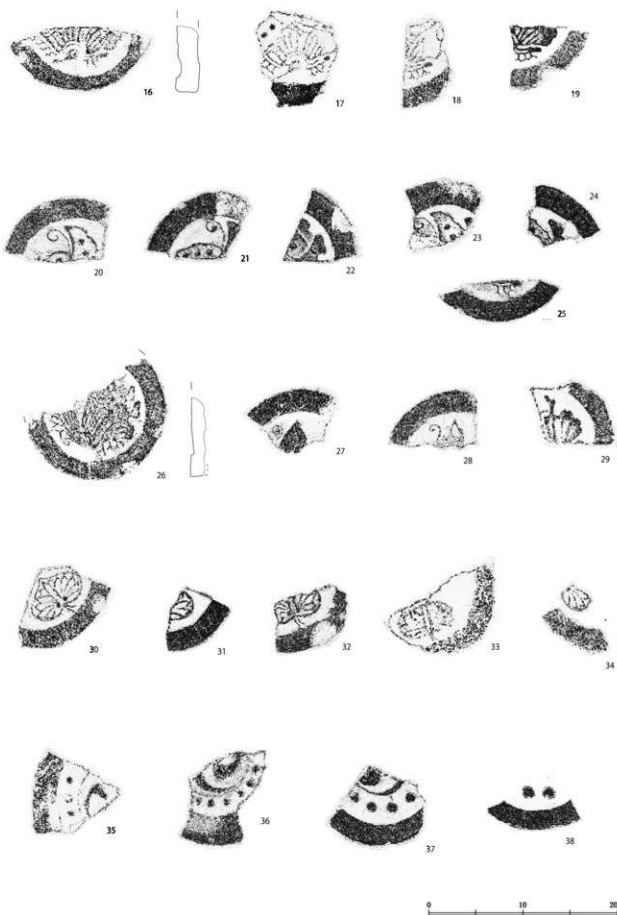
第34図 第27次調査出土遺物実測図4 (S=1/3)



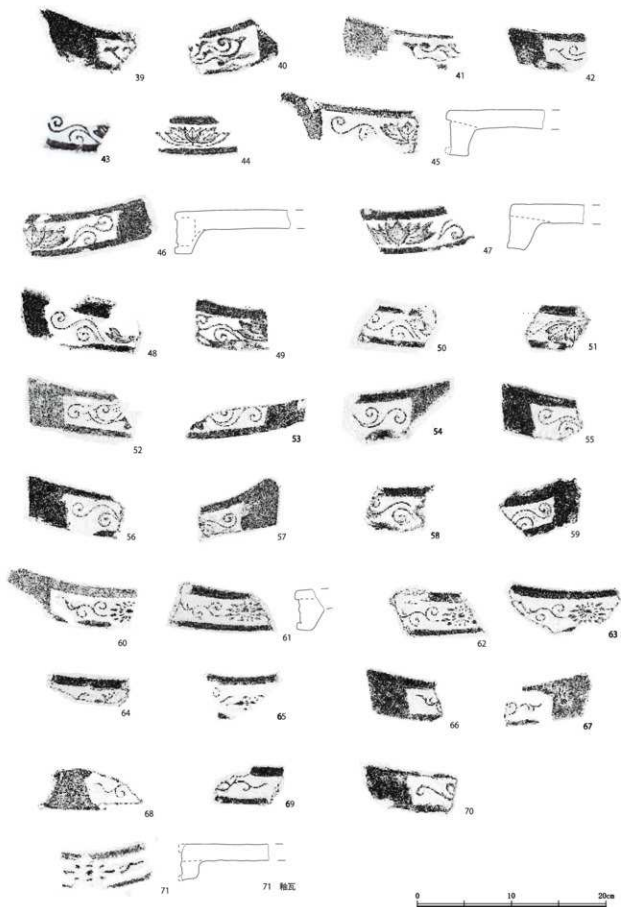
第35図 第27次調査出土遺物実測図5 (上S=1/3、下S=1/2)



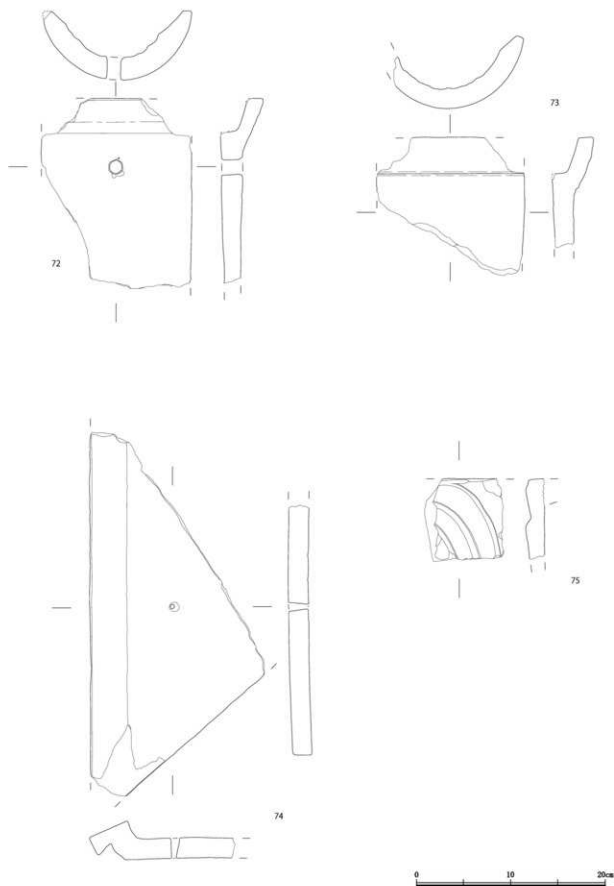
第36図 第27次調査出土遺物実測図6 (S=1/4)



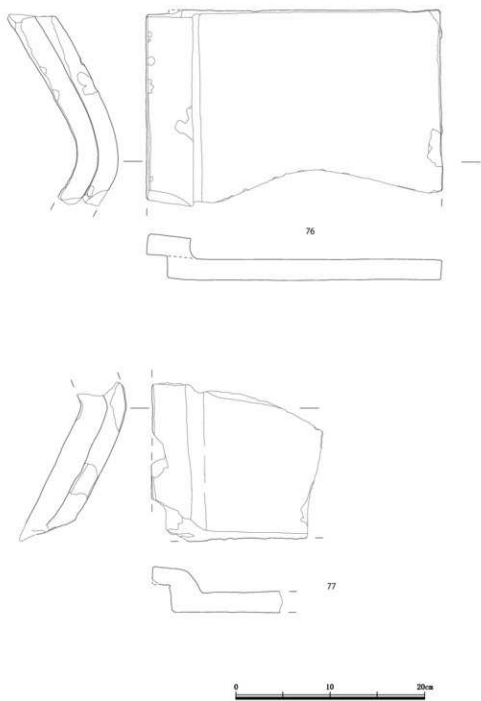
第37図 第27次調査出土遺物実測図7 (S=1/4)



第38図 第27次調査出土遺物実測図8 (S=1/4)

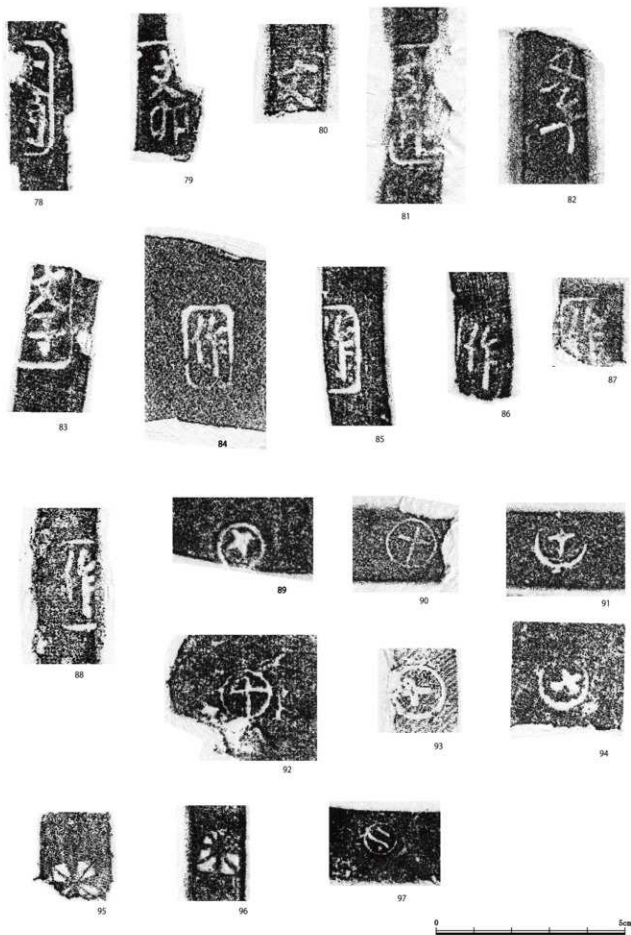


第39図 第27次調査出土遺物実測図9(S=1/4)



第40図 第27次調査出土遺物実測図10(S=1/4)





第41図 第27次調査出土遺物実測図11(S=1/1)

## 土器・石器

番号	出土地	層序	種類	器種	文様	器高	口径	底径	高台高	高台径	備考
1	1区	13層	陶器	碗	外)刷毛目	△2.8			0.7	(4.1)	肥前系
2	2区	13層	陶器	碗	外)刷毛目	△2.8			0.9	(4.6)	肥前系
3	ベルト中		陶器	碗		△3.4			0.7	5.3	肥前系
4	4区SD02	20層	陶器	(底部)		△3.5		(8.8)			在地系
5	4区SD02	20層	陶器	皿?		△3.0					在地系
6	Tr2	登城路南下	陶器			△2.6					在地系?、内外輪
7	3区SD02	20層	陶器	小碗		3.0	(7.0)		0.4	(3.8)	在地系?
8	Tr2	登城路南下	陶器	灯明皿?		△1.7					在地系?
9	3区SD02	35層	陶器	灯明皿?		△1.4	7.4	(4.0)			在地系
10	4区SD02	20層	陶器	皿	内)梅文	1.7	(7.7)		0.3	(3.7)	在地系、イッタン楕
11	1区Tr1 SD02	35層	陶器	皿	内)梅文	1.9	(8.2)		0.2	(4.0)	在地系、イッタン楕
12	2区	13層か	陶器	甕?		△3.0					在地系?
13	3区SD01 掘り方内	32層	陶器	瓶		△7.3				(14.4)	在地系
14	4区SD02	検出中	磁器	蓋	見)環状松竹梅門	△2.4	(6.3)				在地系
14	4区SD02	検出中	磁器	土瓶	見)環状松竹梅門	△5.6	(7.2)				在地系
15	ベルト中		陶器	土瓶		△11.3				(14.0)	在地系
16	1区	攪乱	陶器	桃塩蓋		高2.2	6.9				在地系
17	1区	13層	陶器	摺鉢		△4.5					関西系
18	3区SD02	20層	陶器	摺鉢		△7.9					関西系、7本1条
19	3区	13層	陶器	摺鉢		△5.6					関西系
20	4区	13層	陶器	摺鉢		△5.5	(40.0)				備前?、8本1条
21	2区	13層	陶器	摺鉢		△6.6					関西系
22	3区SD02	35層(埋土)	陶器	摺鉢		△4.6					在地系?
23	2区	13層	陶器	摺鉢		△4.6		(12.8)			防長系か
24	3区	13層	陶器	甕		△3.9					越前系
25	3区	13層	陶器	甕		△6.5					越前系
26	3区	13層	磁器	碗	外)花卉?、見)五弁花	△3.0			0.6	(5.6)	肥前系
27	ベルト中		磁器	碗	外)松葉文	4.6			0.4		肥前系
28	3区SD02	35層(埋土)	磁器	筒形碗	外)?	△3.1	(5.9)				在地系?
29	4区SD02	検出中	磁器	小碗	外)?	2.4	(7.0)		0.3	(2.6)	肥前系、澁着
30	3区SD02	35層(埋土)	磁器	小碗	外)半莖菊文	△2.9	(7.6)				肥前系
31	ベルト中		磁器	碗		3.8	(7.2)		0.8	(3.0)	肥前系
32	2区	13層か	青磁	小碗	外)鎧	△4.4	(4.1)		△0.5	(3.2)	在地系、クローム釉
33	表土	グラウンド土	磁器	蓋	外)草花文、内)雷文帯、 見)口明二箇	2.9	(9.0)		0.8	(3.8)	肥前系
34	4区SD02	検出中	磁器	蓋	外)宝珠雲文、内)四方障文、 見)環状松竹梅門	2.6	(10.3)		0.5	(4.4)	肥前系
35	ベルト中		磁器	皿	底外)大明年製、見)五弁花	△2.6			1.4	6.4	肥前系
36	1区	13層(瓦層)	磁器	皿	外)内)草花文	△2.1					肥前系
37	1区	13層	磁器	皿?	内)七宝文	△1.8					肥前系
38	1区	13層	磁器		内)魚文	△1.3					?
39	2区	13層	磁器	猪口	見)?	△1.1		(6.2)			肥前系? 蛇ノ目凹形高台
40	4区	25層 (登城路上)	磁器	?	外)唐草文、内)涅槃文	△3.2					肥前系
41	4区SD02	20層	磁器		内)斜格子文	△5.2					肥前系
42	表土	グラウンド土	磁器	皿		2.4	(11.6)		0.2	(6.4)	日英同置記念
石1	表土	グラウンド土	石製品	硯		長10.9	幅7.8	厚1.9			溝痕あり
石2	SD02	埋土中	石製品	石臼		11.5	24.6	36.6			

表7 第27次調査出土遺物観察表1

※計測方法については27頁を参照

## 瓦(1)

番号	出土地	層序	分類	器種	刷印	最大長	最大幅	最大厚	a	b	c	d	e	f	g	i	孔
1	3区SD02	20層	E	軒丸瓦		9.2	14.6	2.4	(8.1)	(5.4)		(1.9)					
2	Tr2	登城路面下	E	軒丸瓦													
3	1区	32層		軒丸瓦													
4	3区SD02	20層	F	軒丸瓦		13.9	12.0	3.5	(13.5)	(11.3)		(2.2)					
5	1区Tr1	覆乱	2	軒丸瓦													
6	SD02	覆乱	F	軒丸瓦		9.3	10.6	2.6	(9.2)	(7.6)		2.3					
7	1区	13層	F	軒丸瓦													
8	表土	グラウンド	1 1	軒丸瓦		16.2	15.7	4.9	15.1	10.9			2.3				
9	1区Tr1	覆乱	1 1	軒丸瓦		12.2	12.4	2.6	(11.2)	(7.7)		2.6					
10	3区	20層	1 2	軒丸瓦													
11	3区	20層	1 2	軒丸瓦													
12	表土	グラウンド	1 2	軒丸瓦		13.4	15.3	3.2	(13.2)	(10.7)		(1.8)					
13	3区SD02	35層	1 2	軒丸瓦		10.0	16.0	3.8	(9.8)	(7.3)		(2.7)					
14	3区SD02	35層	1 2	軒丸瓦		14.1	15.9	2.5	(14.0)	11.0							
15	4区SD02	20層	1 2	軒丸瓦		37.5		40.5									
15	4区SD02	20層		表													
16	2区	10~13層	1 2	軒丸瓦		7.2	15.2	2.8	(7.0)	(5.2)		2.4					
17	2区	10~13層	1 2	軒丸瓦													
18	3区	20層		軒丸瓦													
19	3区SD01	直土	1 2	軒丸瓦													
20	4区SD02	20層	1 2	軒丸瓦													
21	4区SD02	20層	1 2	軒丸瓦													
22	2区	13層	1 2	軒丸瓦													
23	2区	13層	1 2	軒丸瓦													
24	4区SD02	20層	1 2	軒丸瓦													
25	4区SD02	20層	1 2	軒丸瓦													
26	1区Tr1	覆乱	L	軒丸瓦		13.0	14.8	3.4	(9.3)	(6.1)		(1.5)					
27	表土	グラウンド土?		軒丸瓦													
28	1区Tr1	覆乱	?	軒丸瓦													
29	3区	20層	?	軒丸瓦													
30	3区	20層	莖	軒丸瓦													
31	2区	13層	莖	軒丸瓦													
32	2区	13層	莖	軒丸瓦													
33	3区	SD01直土	莖	軒丸瓦													
34	表土	グラウンド土	莖	軒丸瓦													
35	パルト	13層周辺	巴	軒平瓦													
36	4区	13層	巴	軒平瓦													
37	4区	13層	巴	軒平瓦													
38	4区SD02	20層	巴	軒平瓦													
39	4区	39~22層	k	軒平瓦													
40	1区SD01	直土	k	軒平瓦													
41	1区Tr1	覆乱	k	軒平瓦													
42	3区	20層	k?	軒平瓦													
43	1区	13層	l	軒平瓦													
44	1区SD01	直土	l	軒平瓦		4.7	8.8	4.2	4.0	2.4	2.1					4.0	
45	1区Tr1	覆乱	l	軒平瓦		10.4	15.0	4.9	(4.8)	(2.8)	(1.9)	3.0				10.2	5.1
46	3区	20層		軒平瓦		12.5	14.7	4.4	4.4	2.9	0.8	2.7				12.5	3.3
47	1区SD01	直土	m	軒平瓦		11.7	15.2	4.9	4.6	2.3	1.7	2.9				11.7	
48	3区	20層	m	軒平瓦													
49	1区	SD01直土	m	軒平瓦													
50	1区	32層	m	軒丸瓦													
51	4区	13層	n	軒平瓦													
52	表土	グラウンド土	n	軒平瓦													
53	1区Tr1	覆乱	n	軒平瓦													
54	3区SD01	直土	n?	軒平瓦													
55	1区	覆乱	lかm	軒平瓦													
56	4区SD2	検出中	lかm	軒平瓦													
57	1区SD01	直土	lかm	軒平瓦													
58	4区	39~22層	lかm	軒平瓦													
59	3区	13層	lかm	軒平瓦													
60	表土	グラウンド土	o	軒平瓦													
61	3区	20層	o	軒平瓦		10.3	3.1	4.3	3.2	2.5	1.7					3.1	

表8 第27次調査出土遺物観察表2

## 瓦(2)

番号	出土地	層序	分類	器種	刷印	最大長	最大幅	最大厚	a	b	c	d	e	f	g	i	孔
62	3区	35層	n	軒平瓦													
63	3区	20層	o	軒平瓦													
64	ベルト	13層周辺	o	軒平瓦													
65	1区Tr1	攪乱	q	軒平瓦													
66	3区	20層	o?	軒平瓦													
67	表土	グラウンド土	o?	軒平瓦	「作」												
68	1区Tr1	攪乱	s?	軒平瓦													
69	3区	20層	s?	軒平瓦													
70	4区SD02	検出中	c?	軒平瓦													
71	表土	グラウンド土	s軸	軒平瓦		9.2	10.9	3.9	(3.9)	(2.3)	(1.7)	2.2				9.2	
72	3区	検出中		丸瓦		20.0	15.9	7.4	(20.2)	(15.9)	2.5	(10.3)	7.4	2.4	4.7	1.4	1.4
73	3区	20層		丸瓦		13.9	15.7	7.7	(13.9)	(15.7)	(3.6)	(12.0)	7.7	2.2	5.0		
74	1区SD01	埋土		隅瓦		38.4	18.3	4.1	(38.4)	(18.3)			1.8	1.9	2.2	1.1	1.0
75	4区SD02	20層		鬼瓦?		8.7	8.3	2.0	(8.7)	(8.3)	2.0						
76	1区	32層	E	腰板瓦		31.4	20.7	4.5	(31.4)	(20.7)	11.7	7.3	4.9	2.2	5.3		
77	3区SD02	検出中		腰板瓦		18.1	16.8	11.5	(18.1)	(16.8)	11.3	6.5	4.8	1.4	5.8		
78	4区SD02	検出中		平瓦	「文西」												
79	3区	20層		平瓦	「文南」												
80	3区	20層		棧瓦	「文」												
81	3区SD02	35層		軒丸瓦	「文中」												
82	4区SD02	20層		平瓦	「文午」												
82	1区Tr1	攪乱		棧瓦	「文子」												
84	3区	13層		丸瓦	「作」												
85	4区SD02	検出中		平瓦	「作」												
86	3区	20層			「作」												
87	3区	20層		平瓦	「作」												
88	3区	20層		平瓦	「作」												
89	4区	39-22層		丸瓦	○+												
90	3区	13層		平瓦	○+												
91	3区	13層		平瓦	○+												
92	1区	攪乱		丸瓦	○+												
93	3区	35層		平瓦	○+	24.6	17.2	2.2	(24.6)	(17.2)	(16.2)	1.3	2.0				
94	1区Tr1	攪乱		丸瓦	○+												
95	4区	25層		平瓦	四妻												
96	4区SD02	検出中		平瓦	四妻												
97	4区	39-22層		平瓦	○二												

## 鉄

番号	出土地	層序	器種	最大長	最大幅	最大高	a	b	c	d	e	f	g	h	層序
1	1区SD01		鋸	17	6.5		17	6.5		12.4	3.9	3	1.1	1.3	掘方内
2	3区	20層	釘	5.6	5.9		復(8.9)		0.5	復(8.9)			0.5	0.6	レンス状堆積土
3	4区	25層	釘	3	0.9	0.7		3	0.9	0.3			0.6	0.5	幕末登城路面上
4	4区	25層	釘	5.5		0.6	5.5	0.6	0.5				0.5	0.6	幕末登城路面上
5	4区	25層	釘	3.8		0.5	3.6	0.5	0.4				0.4	0.4	幕末登城路面上
6	Tr2	5層	釘	3.8	1.1	0.9	3.8	1.1	0.9				0.7	0.6	幕末面下
7	Tr2	5層	釘	2.6	0.7	0.6	2.6	0.7	0.6				0.5	0.4	幕末面下
8	Tr2	5層	鋼釘	2.9	0.5	0.5	2.9	0.5					0.5	0.5	幕末面下
9	2区	ベルト	槽管	5.5	1	1	5.1	1.1	0.9	0.9	0.5	1			ベルト
9	2区	ベルト		8.6	0.9	1	7.4	1	0.9						ベルト

a 全長、b 全幅、c 本体幅、d 胴長(内)、e 釘長1、f 釘長2、g 胴幅、h 胴厚、i 釘頭径

表9 第27次調査出土遺物観察表3

礎石番号	平面形状	石種	全体			上面			ほぞ穴				柱 疵	標 高	被熱	備 考	
			4	長	厚	幅	長	上 面		底 面		幅					長
								幅	長	幅	深						
1	方形	花崗岩	54	49	18	42	41	9.5	6.5	8	6	3	30	26	5.54	断面台形	
1 (裏面)	方形	花崗岩	54	49	18			8	7.5			2.5				ほぞ穴の位置は表面の延長上	
1 (台石)	三角形状	花崗岩	77	68	(40)	69	61								5.35	表面に調整痕	
2	方形	花崗岩	45.5	46	16	40	39	8	8	8	8	3	29	26	5.68	断面台形	
2 (台石)	長方形状	花崗岩	53	77	(5)	49	65								5.52		
3	不定形	花崗岩	104	76	(41)	93	57						42	27	5.33~5.38	表面に細かい調整痕	
4	五角形状	花崗岩	88	83	(5)	82	74	7	7	6	6	3.2~3.5	(45)	(25)	5.35~5.38	表面剥離、赤変顯著	
5	不定形	安山岩	107	73	(5)	96	68	6.5	6.5	5.5	5.5	2.5			5.44~5.47	表面剥離	
6	不定形	花崗岩	97	59	(5)	78	51								5.49~5.53	表面に細かい調整痕	
7	略方形	花崗岩	59	52	(10)	41	52	6.5	6.5	5	5	2	(25)	(25)	5.53~5.56	柱痕跡は不明瞭	
8	方形	花崗岩	46	46	38	38	23	8.5	9	7.5	8	3	24	22	5.33	断面台形	

数値の内標高はm表記、その他はcm表記。( )内は現状での数値。

表10 櫓門礎石寸法表

## IV-3 擬宝珠橋跡発掘調査

### 1 調査の概要

第28次調査(平成23年度)

調査期間 平成23(2011)年10月5日～平成24(2012)年3月30日

調査面積 480㎡

#### (1) 調査の経過

##### 調査区の設定

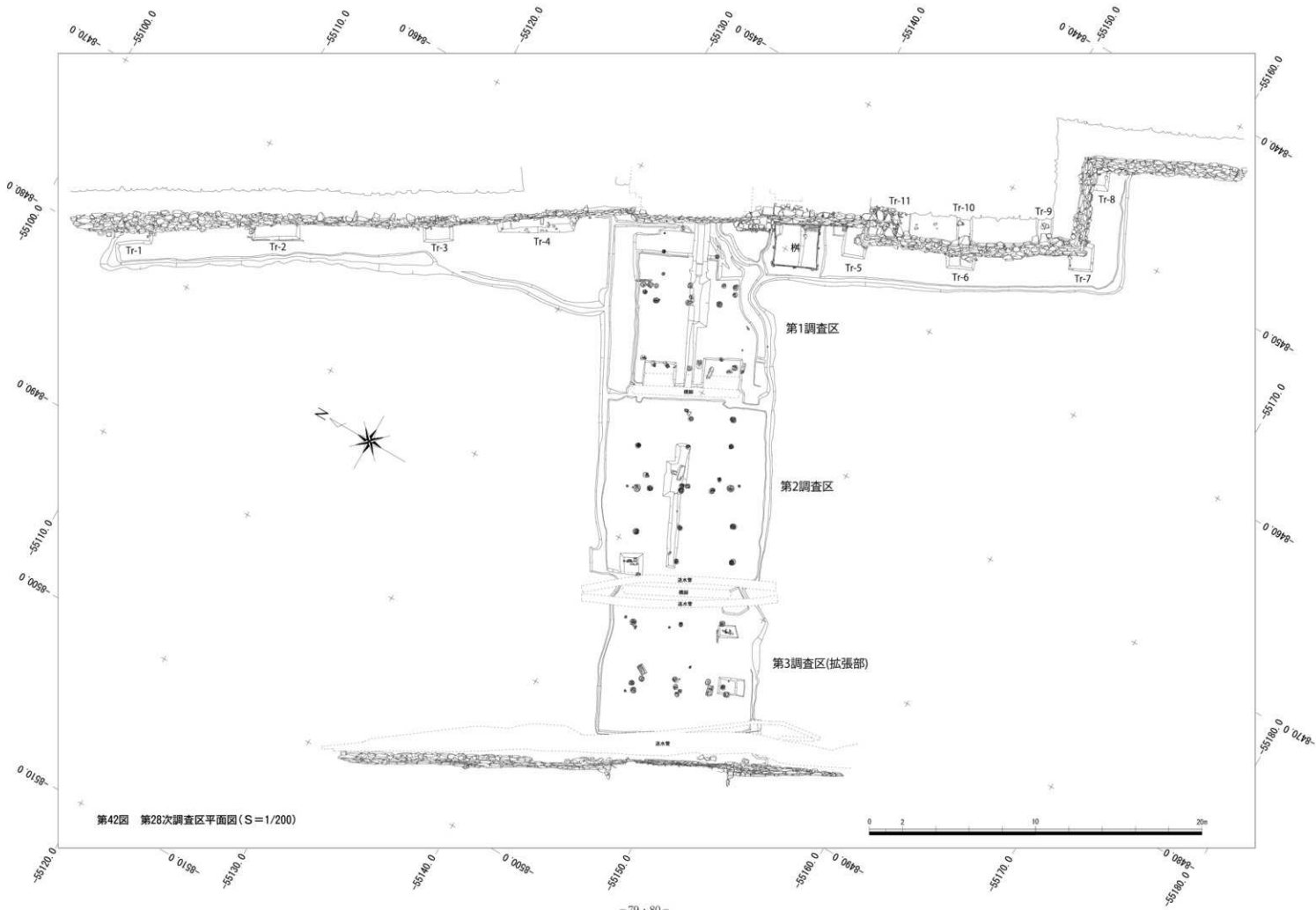
鳥取城内堀内に存在した大手橋である“擬宝珠橋(ぎはしぼし)”跡の発掘調査である。現在の堀は久松山から下りてくる水を溜めるものであり、他用途に使用はされていない。現在の水面高は3.0m付近にあり、夏季には5cm程下がる状況である。鳥取城解体前の古写真によると、アーチ状の橋が写されており、不等ピッチで並ぶ橋脚も確認できる。しかしながら、写されているのは橋の3分の2ほどであり、堀外側の接続状況などは知ることができない。また、現在はコンクリート橋が架けられており、橋台設置の際にどれほど遺構面が掘削されているか不明であった。加えて、昭和48・49年には堀に繁茂していたハスの撤去に伴う大浚漕が行われており、特に前者は堀底にブルドーザーを入れ堆積土を除去したという記録が残っていたため、事前の検討では遺構残存の可能性は低いと考えられていた。

調査に先立ち平成22年度には調査工法の検討を行った。調査にあたっては、調査区周辺への水の流入を防ぐ必要があり、そのためには、下流の堰を下げ全体の水を抜き、山からの水はポンプにて排水するという方法と、調査区周囲に矢板を打ち込み止水した後にポンプで内部の水を排水するという2つの方法が検討された。その結果、後者については堀底の遺構残存状態が不明であり矢板を打つことで遺構を傷める恐れがあることや、工法上矢板と石垣との間にはどうしても隙間ができてしまうことから、止水は困難であると判断されたため、前者の工法を採用することとなった。調査区の設定については2基ある現橋脚で三分割された範囲の内、城側の2ブロック幅10m、長さ21mを対象とし、外側の1ブロックは堀内へ常時流入する水の通水路とした。同時に、城側の石垣下部の状況を確認するため、石垣から2mの位置まで、橋中央から北西側へ32m、南東側へは石垣沿いに32mの範囲を調査対象とした。なお、調査期間については、下水道部局との話し合いにより、排水路に負担をかけない渇水期が望ましいとのことと10月以降の着手となった。

##### 準備工

まず、堀底の状況を確認したところ、城内側の橋の取り付け部分の南東側に接する溝の吐水部下を中心に土砂が多量に堆積しており、外側へ向い傾斜が付く。堆積土は堀底全体でヘドロ化しており橋の中央付近で上面の標高が2.3m前後から30cm以上も堆積していた。堀の西端、鳥取県立博物館には雨水排水路に接続する水門があり、これを開けることで水面高2.52mまで下げることが可能である。擬宝珠橋の北西側、堀に架かるもう一つの橋である宝珠橋までの堀底は2.3m程であり、橋の反対側では4～50cm程深くなる。このため、橋の下部を大型土のうで止水し大型ポンプ(150mm 1台、200mm 2台)を3台設置して反対側へ排水することで宝珠橋までの堀底を露出させることが可能となった。しかし、4ヶ所の水路から流入する水は、通常364㎡/時であることからポンプは常時稼働として排水を続けた。

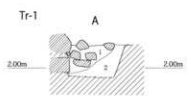
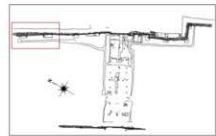
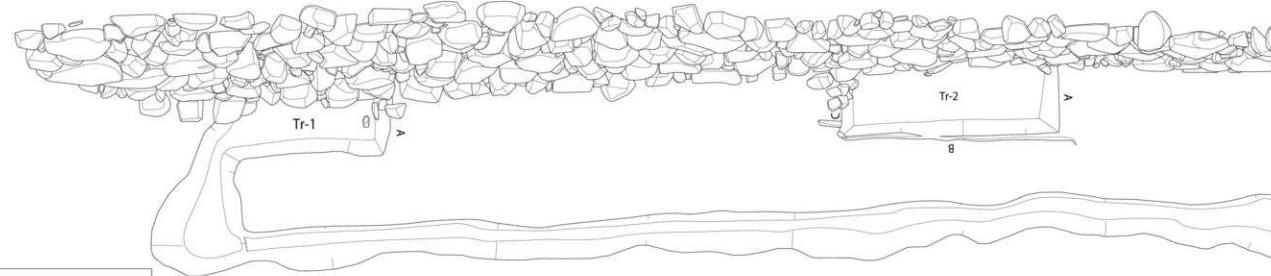
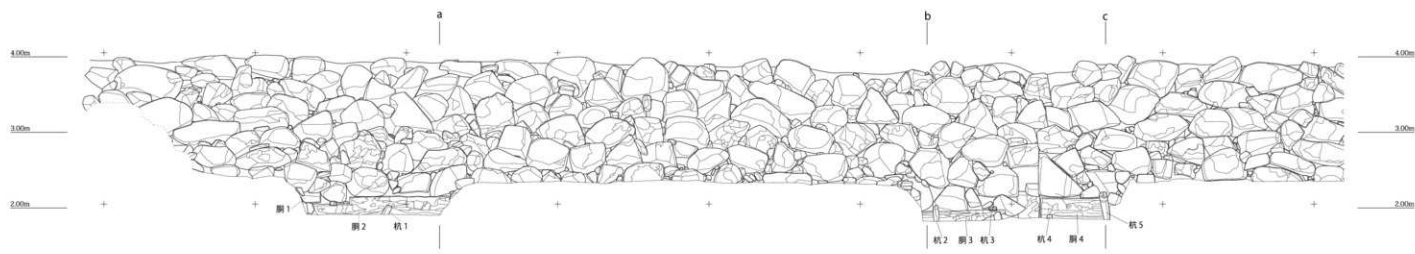
続いて、橋を挟む堀内両側に鉄板敷きの仮設進入路を設けることで堀内へ下降が可能となった。バキューム吸引とあわせ、重機を堀内に降ろし堆積したヘドロの除去を行い、進入路からダンプを使い搬出した。また、調査区脇の久松公園内に工事ヤードを設け搬出した浚漕土の脱水などを行った後、処理を行い指定地へと搬出した。調査区内の堆積土を除去後は水の流入を防ぐため大型土のうを2列並べた。



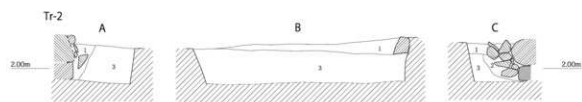
第42図 第28次調査区平面図 (S=1/200)







1. 赭灰色粘土 N3/ (準大の石を含む。石垣設置の廻り方)
2. 灰色粘土 75Y6/1 (地山)



1. 灰色砂土 75Y4/1 (増城土)
2. 赭灰色粘土 N3/ (石垣設置の廻り方)
3. 灰色粘土 75Y4/1 (地山)

第43図 調査区オルン・立面・平面・土層断面図1 (S=1/50)



また、擬宝珠橋脇にある水路については排水管を接続し調査区外に排水した。ヘドロおよび堆積土の除去中、近代橋脚である柱13～15などの頂部の一部が検出されたため、その周囲は手をつけず、人力作業時に再検出を行った。

### 調査区拡張

人力による発掘調査を開始し、橋脚部の粘土を掘り下げると、標高2.4m付近より旧橋脚とみられる木柱が次々と見つかった。その数は40本にも上り、その多くは横桁となる三本一組にて検出された。現代橋脚にてそのいくつかは失われているようであるが、当該部以外の残存状態は良好であることが明らかとなり、同時に、通水部としていたもう1ブロックにも相当の残存が想定された。この状況を受けて急遽委員会に調査区の拡張と期間の延長の提案を諮り、了承を得た。

現橋脚と堀の外側石垣とのブロックは第3調査区とした。第2調査区同様、橋と並行する形に大型土のうを配置して止水した。このことにより、橋を挟み左右両側が分断されてしまったため、ポンプを設置し常時排水することとした。ポンプから延びる送水管は橋脚が存在していないと考えられる石垣際に設置した。また、宝珠橋側のポンプも増設した。

### 発掘調査

大規模な準備工に要した期間はおよそ2カ月であり、現場作業員を投入しての調査を開始したのは12月からである。ヘドロを除去後の標高2.2m以下は、調査区内全体で粘土層が広がる。調査に際しては、現コンクリート橋台を区切りとし、城内側より第1調査区、第2調査区とした。昭和48・49年の浚渫工事の際、石垣根石下より胴木が見つかったとの報告があり、今回橋脚部分の調査と併せ、石垣下部の状況を確認するために石積みの変換点部分などを中心として、堀内にTr-1～Tr-8、地表部にTr-9～Tr-11までの計11カ所のトレンチを設定した。

橋脚の大半を検出した後、打ち込み状況を確認するために、第1・2調査区にTr-1を設定したところ、柱は堀底面より深くまで打ち込まれており、周辺を拡張したものの最深度までには至らなかった。また、橋脚の存在が想定されるものの検出できていない位置などにトレンチを設けた。

調査を実施した平成23年度の冬季はかつてない程の大雪に見舞われ、厚く降り積もった雪が解けることで、堀内に流入する水が急激に増加した。ポンプを増設したものの排水能力を大きく上回る水のため、現場内は度々水没することとなった。発掘作業の大部分が終了した2月の下旬には遺構の三次元計測とオルソ画像の作製を行った。また、2月上旬に実施した現地説明会では、事前の新聞報道にもより100名を超える参加者となった。調査終了後は、橋脚を不織布で養生し、真砂土を敷いて現状へ復した。

## 2 調査の成果

### 1 石垣周辺

#### (1) トレンチ

石垣下部および石垣間の接続状況を確認するため、中ノ御門表門(城内)側へ向かい、橋の左手の堀内にTr-1～Tr4の4区、右手の堀内にTr5～Tr8の4区と上段との間の地上部にTr9～Tr11の3区の計11区の設定した。橋の取り付け部分にあたる幅7.6mの範囲の石垣は、コンクリート橋の架橋時に一旦解体され、30cm程前に積み直しがされていることが分かっているため、特にトレンチは設定せず、1区トレンチ1にてその下部を確認した。

#### ① トレンチ1 (Tr-1) [第43図]

橋の中央より石垣沿いに北西へ34m、調査区の端の大型土のう脇に設定した幅2.2m、長さ0.7mのトレンチである。現堀底の標高は2.30～2.35m付近であり、粘質土を掘削すると20cm程度で胴木が検出された。胴木は2つ検出され、いずれも整形された角材で、材質は胴木1がニヨウマツ、胴木2はヤマザ

クラである。向って右手の胴木2は上面標高が2.14m、厚さ20cm、左手の胴木1は上面標高が2.22m、厚さ15cmである。また、材の前には胴木の飛び出しを防ぐためと思われる直径7～8cmのヤマビワ材製の杭が胴木下部へ向かい斜め方向に打ち込まれていた。右手の胴木1には高さ10cm程度のホゾが切っており、左手の胴木は、面を合わせる形に位置している。きれいな整形面を持つ角材であることから、建築材からの転用と考えられる。石垣上面の標高は4.0mであることから、この胴木上に積まれた石垣の高さは1.85m、勾配は56°であり、堀底面から頭を出している石材が石垣根石にあたる。土層断面をみると石垣の前方60cmの位置より、胴木下部へ向かい石垣構築に伴う掘り方(1層)がみられる。地山である灰色粘土層(2層)に掘り込まれたこの層の内部には拳大の石が多く含まれており、深さは40cm、平面をみると石垣前面には栗石が帯状に広がる。

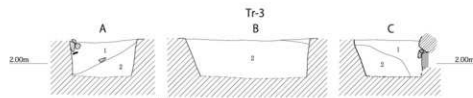
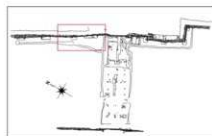
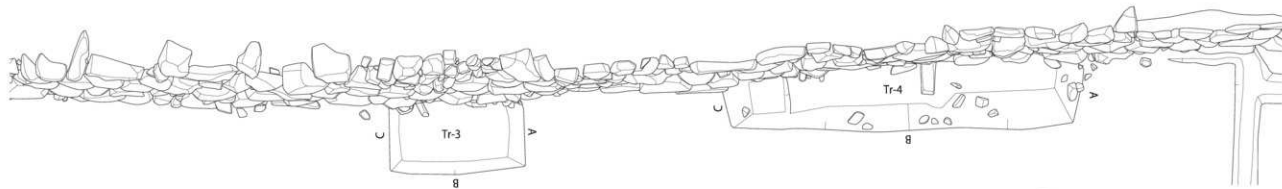
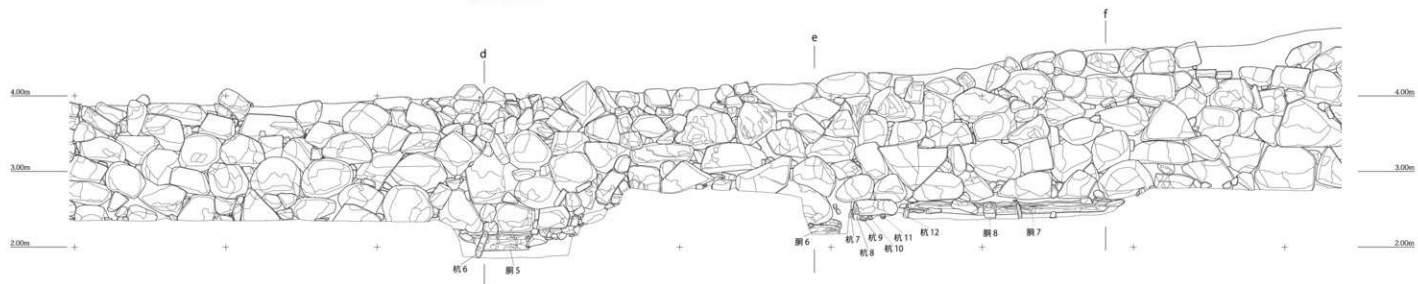
### ②トレンチ2(Tr-2)[第43図]

橋の中央より北西に25m、石垣前面の堀底に設定した幅2.8m、長さ0.8mのトレンチである。標高2.35m前後の堀底より掘り下げると2つの胴木を検出した。向って左側の胴木3は上面の標高が1.98mで、厚みは18cmの丸みをもった木材で、材質はクマノミズキ材である。トレンチ外より伸び、壁面より1.1m続いている、右端には、ホゾと思われる切り込みがあり、上面は10cm四方のホゾ穴が作られている。整形された木材であるため、建築材からの転用と考えられる。一方、左側の胴木4はイヌザンショウ材で、上面の標高は2.1m、厚さは24cmの角材である。壁面より1m程の位置で終わっており、両者の間には45cmほど胴木がない部分が存在する。木の固定とみられる杭は計4本(杭2～5)打たれており、材質は杭2はニヨウマツ、杭3・4がクマノミズキ、杭5がクリである。胴木3に対しては2本打たれており杭2が前面に、杭3はホゾ穴の中に、胴木4に対しては前面部分に杭4・5が位置する。

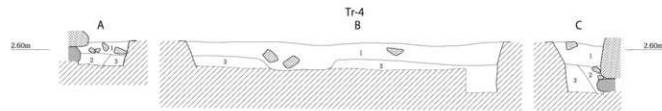
石垣の天端標高は3.9m前後であることから、胴木3・4上の石垣の高さは1.9mと1.8m程度となる。胴木の据え付け位置と距離の違いは、後述するが構築年代に時期差があると考えられる。胴木3上の石垣は断面bより、傾斜角は68°であるが、胴木4の断面cでは76°となる。Tr-1より胴木3までの石垣は傾斜が緩い傾向にあり、胴木4以降は傾斜がきつくなる傾向にある。胴木4の左端部の直上にある三角形の石材は面を胴木の端部と垂直方向に揃え、胴木3との間には後に充填されているようである。胴木3側の土層では石垣より40cm程離れた位置から、胴木下まで深さ40cm程度の石垣構築のためとみられる掘り方があり内部にはTr-1同様拳大の石が充填されている。一方胴木4側では石垣より30cmほど手前より胴木まで深さ50cm程の掘り方がみられ、内部には1石のみである。両胴木位置、掘り方、勾配の違いなどの相違点がみられることから、この胴木の空白部分を境に石垣の積み直しが行われていると考えられる。

### ③トレンチ3(Tr-3)[第44図]

橋の中央より北西に16m、石垣前面の堀底に設定した幅1.6m、長さ0.8mのトレンチである。堀底の標高は2.3mであり、その下、標高2.18mを上面として厚さ20cmの胴木5を検出した。材質はイヌザンショウで角は落ちているものの角材であるとみられる。石垣の天端標高1.7m程で、傾斜角は4.0mであり、石垣高は1.7m程である。胴木はトレンチの中ほどまで確認し、まだ続くものの、向かって右側付近では、石垣石材が前方までせり出しており、胴木を露出させると石垣崩落の危険性があるため、現状の位置までの検出とした。また、胴木の前面にはクリ材製の直径10cmの杭6が上面標高2.22mから打たれている。石垣構築時とみられる掘り方が、石垣より80cmの位置から胴木の下まで深さ50cmほどみられた。Tr-1や2でみられた掘り方とは違い、手前に引いた位置より、胴木よりさらに下部にまで掘削が及んでいるのが特徴的である。



1. 灰色粘土 S16/1 (石垣設置の盛り方)
2. 灰色粘土 S16/1 (地山)
3. 灰色粘土 7.5Y4/1 (地山)

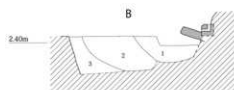
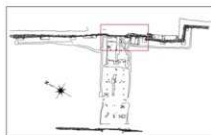
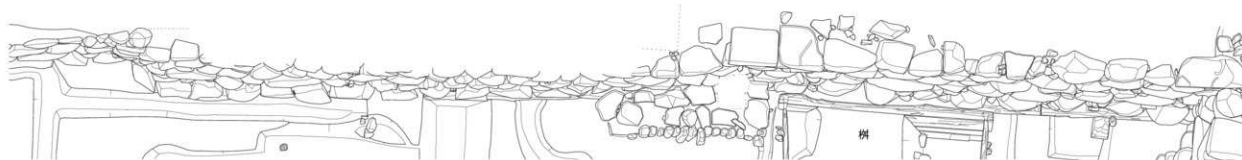
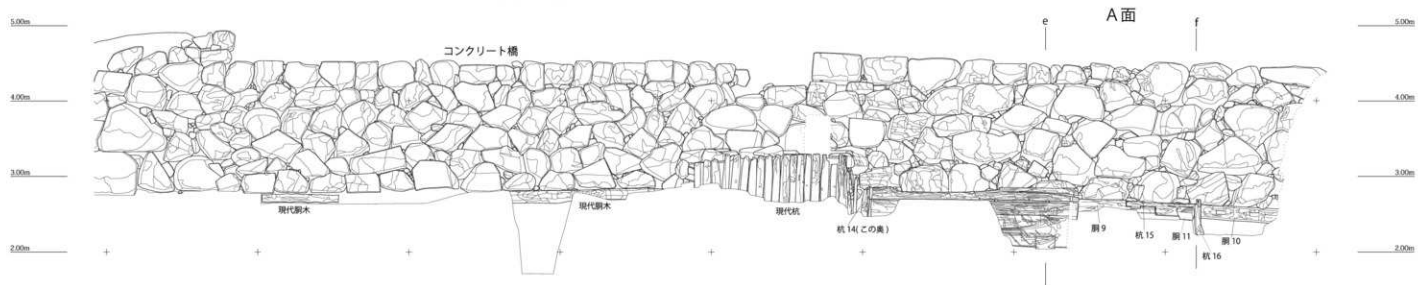


1. 灰色粘土 7.5Y4/1 (パイロン等を含む増しの層積)
2. 暗灰色粘土 N3/ (石を含む、石垣設置の盛り方)
3. 灰色粘土 7.5Y4/1 (地山)

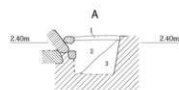


第44図 調査区オルン・立面・平面・土層断面図2 (S=1/50)





1. 灰褐色粘土・2.5Y3/1(石組露部の覆り方)
2. 灰褐色粘土・5Y5/1(石組露部の覆り方)
3. 灰褐色土・7.5Y6/1(樹上)

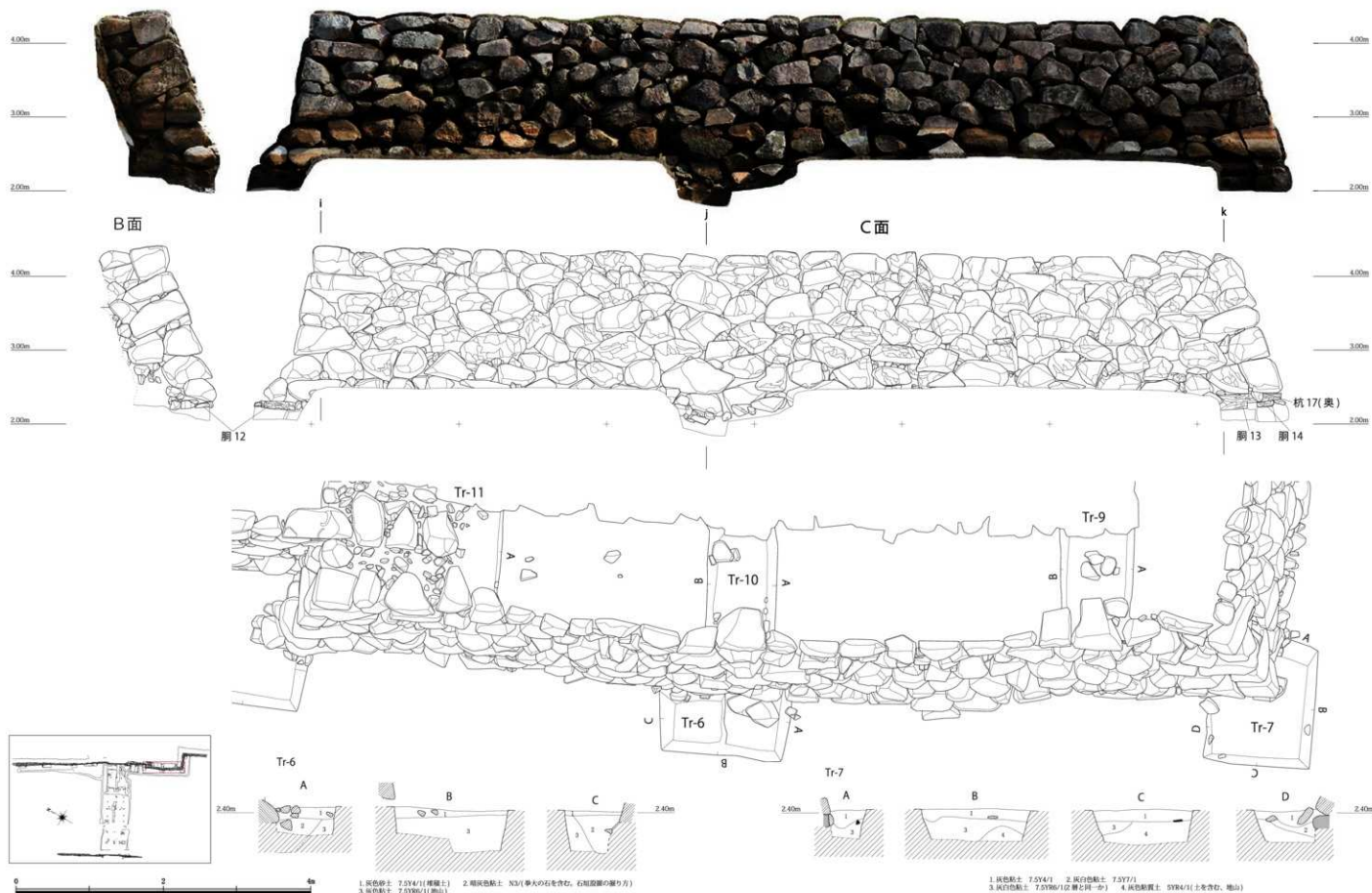


1. 灰褐色粘砂土・5Y4/1(樹露上)
2. 赤褐色粘土・8.5Y1(樹木の石を含む、石組露部の覆り方)
3. 灰褐色土・2.5Y6/1(樹上)

第45図 調査区オルン・立面・平面・土層断面図3(S=1/50)

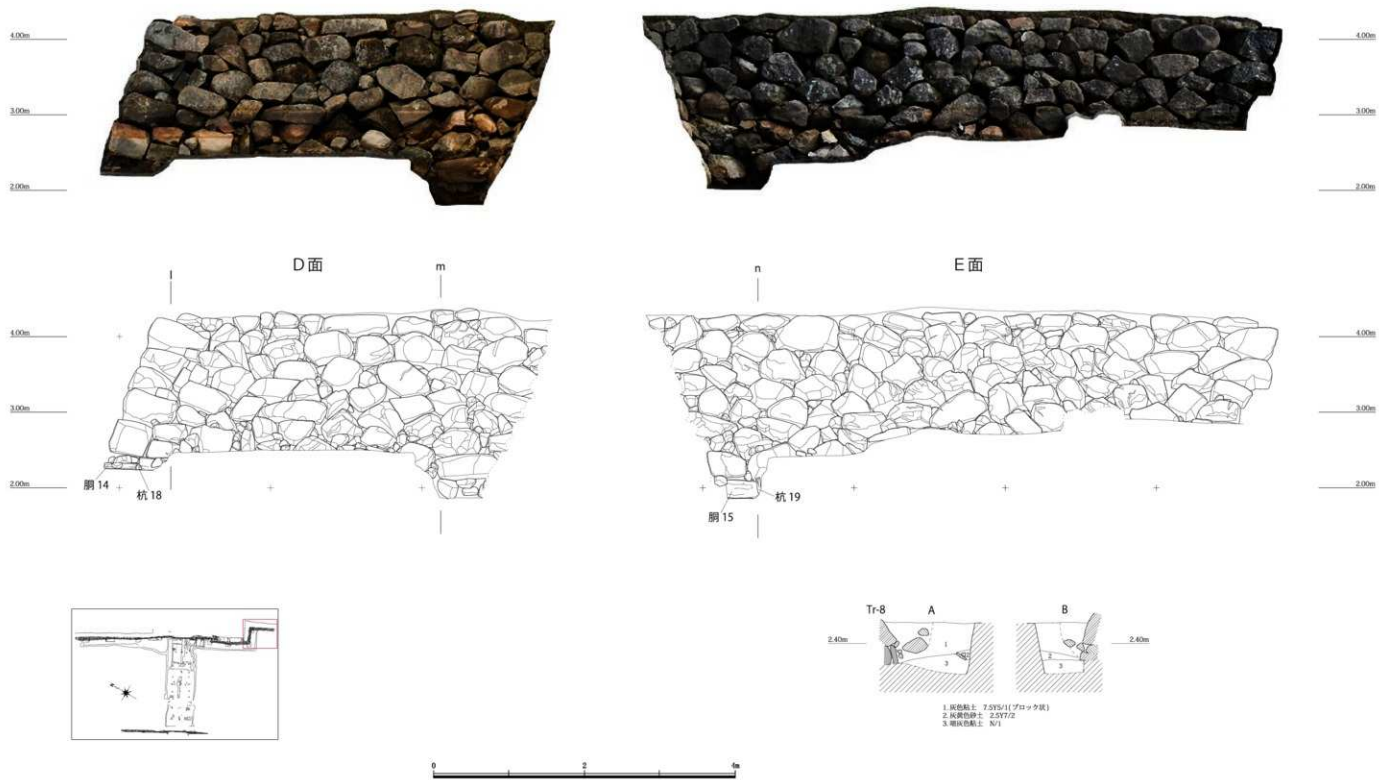






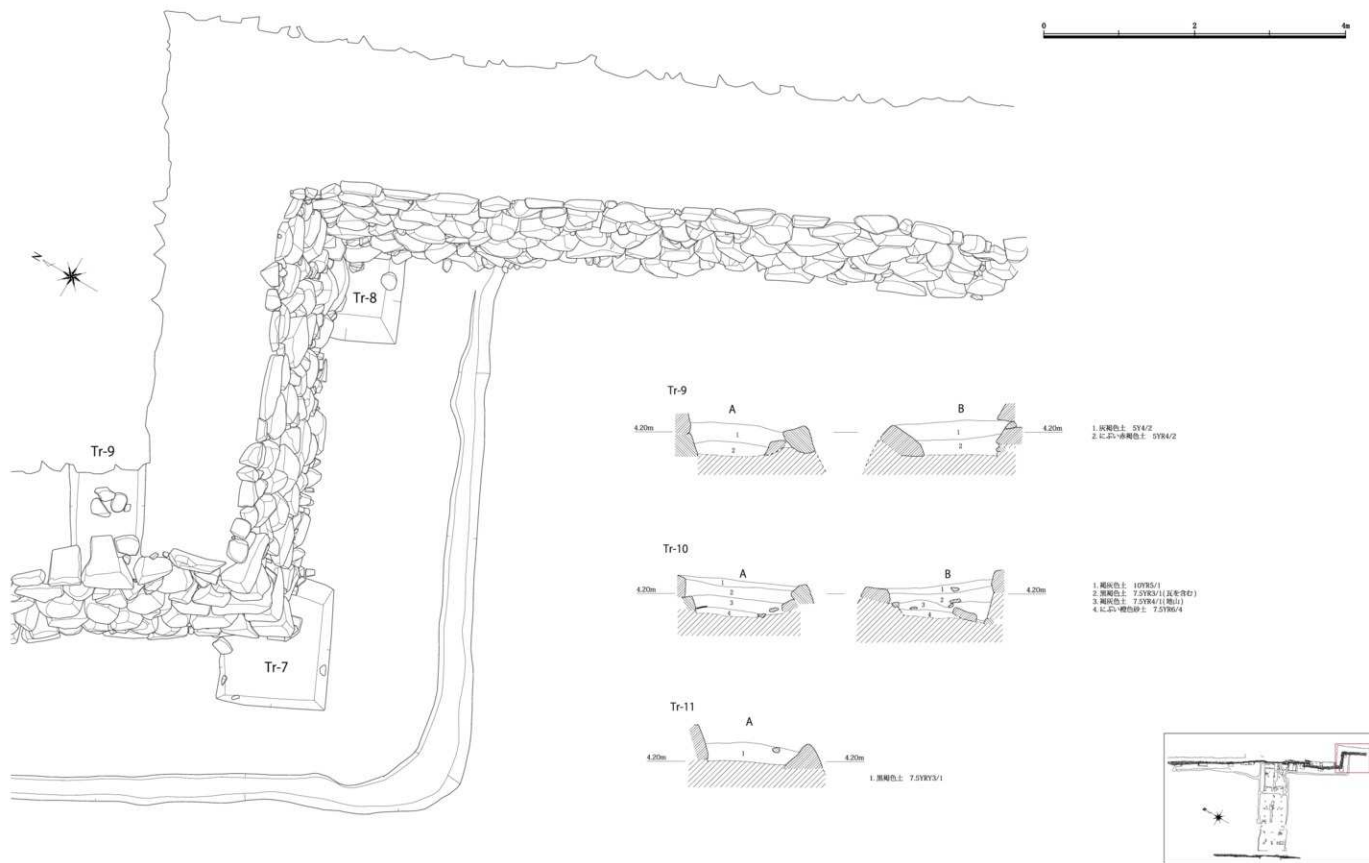
第46図 調査区オルン・立面・平面・土層断面図4 (S=1/50)





第47図 調査区オルン・立面・平面・土層断面図5 (S=1/50)







## ④トレンチ4(Tr-4)[第44図]

橋の中央より北西に9m、石垣前面の堀底に設定した幅4.2m、長さ0.6mのトレンチである。胴木6と7という上面標高の異なる2つの胴木を検出した。標高2.7mの堀底にはナイロンゴミを含む現代の堆積層(1層)が20cm程みられる。所々深くまで及んでおり、現代の浚渫の際、旧堀底以下まで掘削が及んでいる可能性がある。1層を取り除くと、ブナ材である胴木7の上半が露出する。上面の標高は2.55mで、厚さは15cm程である。向って右手、橋側より続いており、調査区内では280cm程を確認した。一度浚渫されているせいか、他の胴木とくらべて保存状態は悪く、表面は傷んでいた。左端の前面部分には直径7cmのコナラ材製の杭12が打ち込まれる。中央付近の胴木から20cm程離れた位置にはヒノキ材製の杭13があるが、直接的に関係しているかは不明である。また、特徴的なのが枕木の存在である。胴木8とした枕木は縦14cm、横18cmのニヨウマツ製の角材であり、胴木7と組み合わせるように設置されている。また、胴木7の左側、胴木6との間には、胴木の空白部分があり、その部分には胴木7と上面を揃える幅60cm、厚さ20cmの胴木状の石材が置かれ、その下には杭7(クリ材)・9(クリ材)・11(コナラ節材)という杭を転用した枕木が3本並ぶ。さらにこれらの枕木の間には杭8(材質不明)・10(モチノキ材)の2つの杭があり、杭一枕木一杭の順に並んでいることが明らかとなった。石垣の左側では胴木7の標高には胴木はみられず、まだ下部まで石垣が続いていたため、さらに深く掘り下げると標高2.29mを上面として胴木6が検出された。材質はニヨウマツで、端部の上面にはホゾが切られた直径17cmの丸材である。

胴木の段差については、やはり石垣の積み直しが考えられる。胴木7の左側の扁平な石の端部を境に縦方向の目地が通っていることから、橋方向へ向かい積みなおされているとみられる。断面e付近では石垣天端標高4.2mであり石垣高は1.9m、断面fでは天端標高は4.6m程であるが、一番上の石については積み足しの可能性があり、これを外した4.35mが本来の天端とみられ、石垣高は1.75m程である。傾斜角はそれぞれ85°前後、83°とほぼ垂直である。

また、現在の水面高は3.03m前後であるが、以前実施した堀端の排水溝の調査により、近世当時の水面もほぼ同じ高さにあることがわかっており、胴木上面の標高と比べても橋付近の水深は50cm程度しかなかったことが確認された。

杭7・9・11の枕木前面付近から銭貨がまとまって出土した。これは、現代の堆積層である1層の直下、標高2.4m付近の地山直上より寛永通宝12枚がまとまって出土した。橋や石垣修理などに伴う地鎮として、置かれたものであろうか。

## ⑤トレンチ5(Tr-5)[第45図]

橋中央より南東に9.5m、石垣の出張り部分の隅角部堀底に設定した幅1.4m、長さ1.8mのトレンチである。現水路吐水部の地点までは、現在橋の架橋時に積み替えられた範囲であり、近世石垣面より30cm程前方へ飛び出した状況である。吐水部の直下の杭列は堀内へ下りるためのコンクリート製階段の外側にあたる。杭列の右側からは現存する石垣列である。また、周辺を掘り下げる過程で堆積土を除去するとすぐに板材を組み合わせた木製の柵が顕わとなった。詳細は後述するが、近世当時の水路から流れ込む土砂受けの柵とみられる。そのため、この柵を避ける形で石垣の隅角部にトレンチを設定した。

## A面下部

この付近も、Tr-5周辺と同様に近代と思われる浚渫が及んでいるとみられ、堆積土を除去すると、胴木9と10のほぼ全体が露出する状況であった。胴木9は上面標高が2.7m、厚さが18cm、長さが388cm、材質はニヨウマツであった。中央付近には幅20cm程のホゾ穴がみられ、右端部の40cmは細かく加工により胴木10と完全に組み合わせられていた。左側では断面形状は丸形に近いが、右端の接合部分では角型気味に加工されている。胴木10は全体にやや傾斜が付いており、上面の標高は左側で2.65m、右側では2.56m程である。200cmを確認し、さらに石垣内部へと続いている。厚さは19cmで角を落とした断面八

角形状を呈し、材質はニヨウマツである。組み合わせられている左端から測り、上面には17cm、60cm、119cm、163cmの四ヶ所、側面には73cm、119cm、163cmの計7ヶ所にホゾ穴が作られている。両面にある右2つについては幅13cm、5cmとはほぼ同様の大きさであり、10cm程度奥へ入り、断面L字状に結合する。側面の左側については幅13cm、高さが4cm程に対し、内部で接合する上面ホゾ穴は大型である。上面左から2つ目のホゾ穴は幅が26cm、長さが7cm程である。あまりに大きな穴であり、石垣の負荷による胴木の破損を恐れたためか、内部には幅15cm程の扁平な石が詰められている。残る上面左端のホゾ穴は、端部よりわずか17cm、胴木9との接合部分につくられた幅15cm、長さ6cmの規模である。穴には内径を超える直径7cm程の杭15(コナラ節材)が打ち込まれおり、縁が若干広げられている。杭は、おそらく胴木9側にも貫通していると考えられるが下部を掘削していないため確認はできていない。胴木9・10ともに建築部材からの転用とみられる。また、胴木10の下には胴木11とした幅18cm、高さ14cmの枕木があり、胴木と組み合っている。また、この枕木の脇には直径8cmの杭16(クリ材)が打たれている。胴木の上面高はTr-4同様にかなり高い位置にあり、胴木直上、石垣根石下を堀底としても堀の水深は30~40cm程度しかないことが明らかとなった。

#### B面・C面

A面より折れ、1.1mほど前方へ張り出す。B面はA面に張り付く形で築かれており、主に角石のみであり、下段の石材とA面との間には石はなく土のままである。この面に対しての胴木は設置されておらず、C面に伴う胴木の端部がみえる。C面の下には胴木12がある。上面のレベルは230m前後であり、材質はニヨウマツで、右側の壁中より続いており、60cm程を確認した。厚さは12cm、上面の奥行きは25cm、他の胴木とは異なり、断面長方形の板材である。左端の14cmは加工がされ、縄掛け状の約4cmの溝が掘られている。

A面の石垣天端の標高は4.5mであることから石垣高は1.8~1.9m程であり、断面gでの勾配は73°、hで78°となる。B面右端の隅角部の勾配は71°であるが、C面左端では上部は79°で下部は52°と途中に屈曲点がみられる。C面断面iの勾配は71°であり、石垣高は2.1mである。

A面の土層断面(A面)をみると石垣設置に伴う大きな掘り込みが確認できる。石垣から150cmほど離れた位置から2段階で掘削しており胴木の下20cm以上下まで達しており、他のトレンチのものとは若干異なる。一方C面の土層(B面)では、石垣から60cmの位置より胴木の下部標高2.0m付近まで掘り込まれる。

#### ⑥トレンチ6(Tr-6)[第46図]

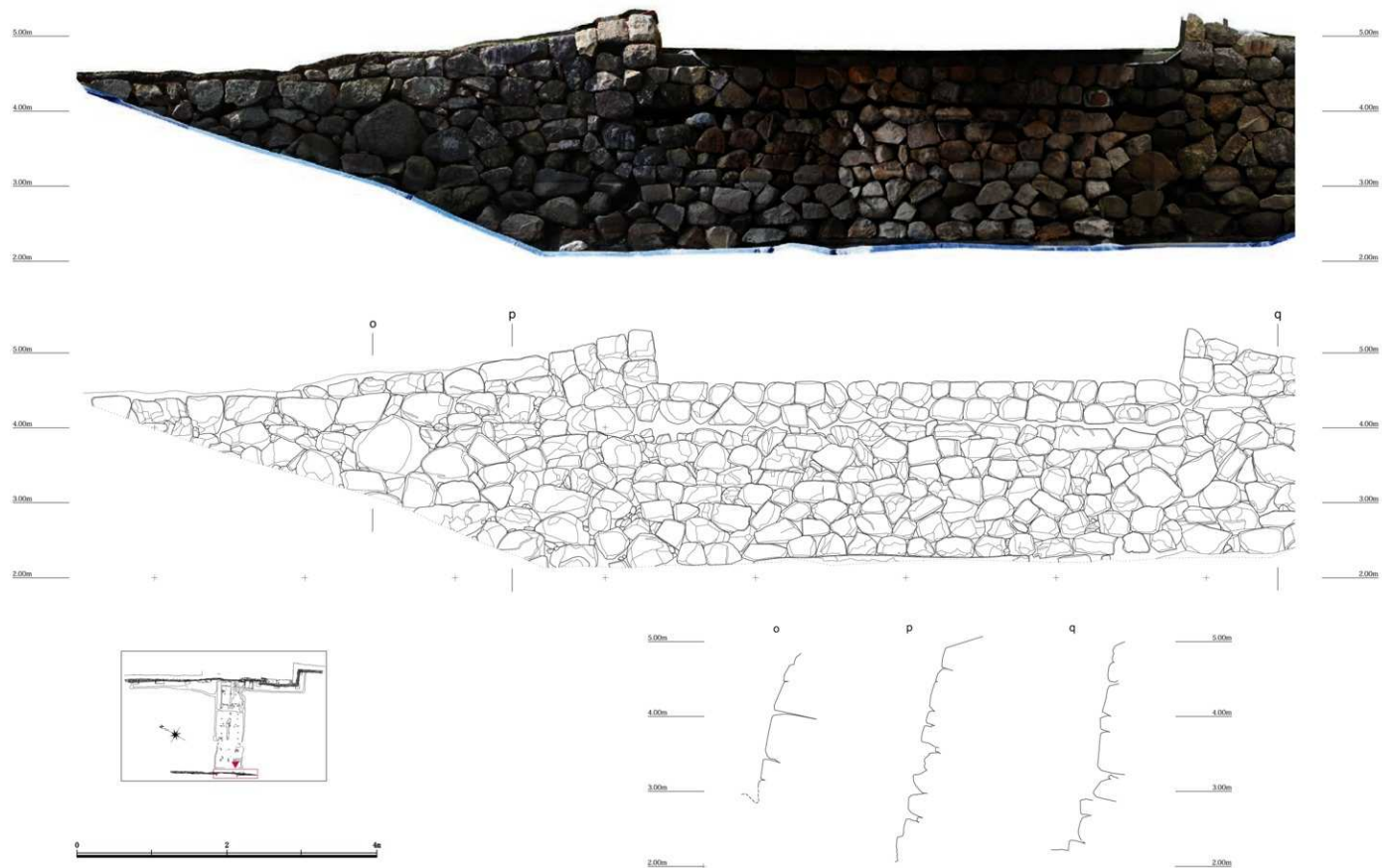
橋中央より南東へ16m、C面石垣中央部の堀底に設定した幅1.5m、長さ0.8mのトレンチである。他のトレンチとは異なり、石垣下に胴木はみられなかった。石垣の根石は標高2.1m付近より積まれており、その下には拳大の石がみられる程度である。Tr-5・Tr-7の胴木下と近い位置まで一段低く石垣がみられる状態である。

断面jの石垣天端標高は4.5mであり、石垣高は2.1mである。断面土層は、石垣の設置に伴う掘り方が石垣より40cm程の位置よりみられ、石垣下30cmほどまで深く掘削されている。

#### ⑦トレンチ7(Tr-7)[第46図]

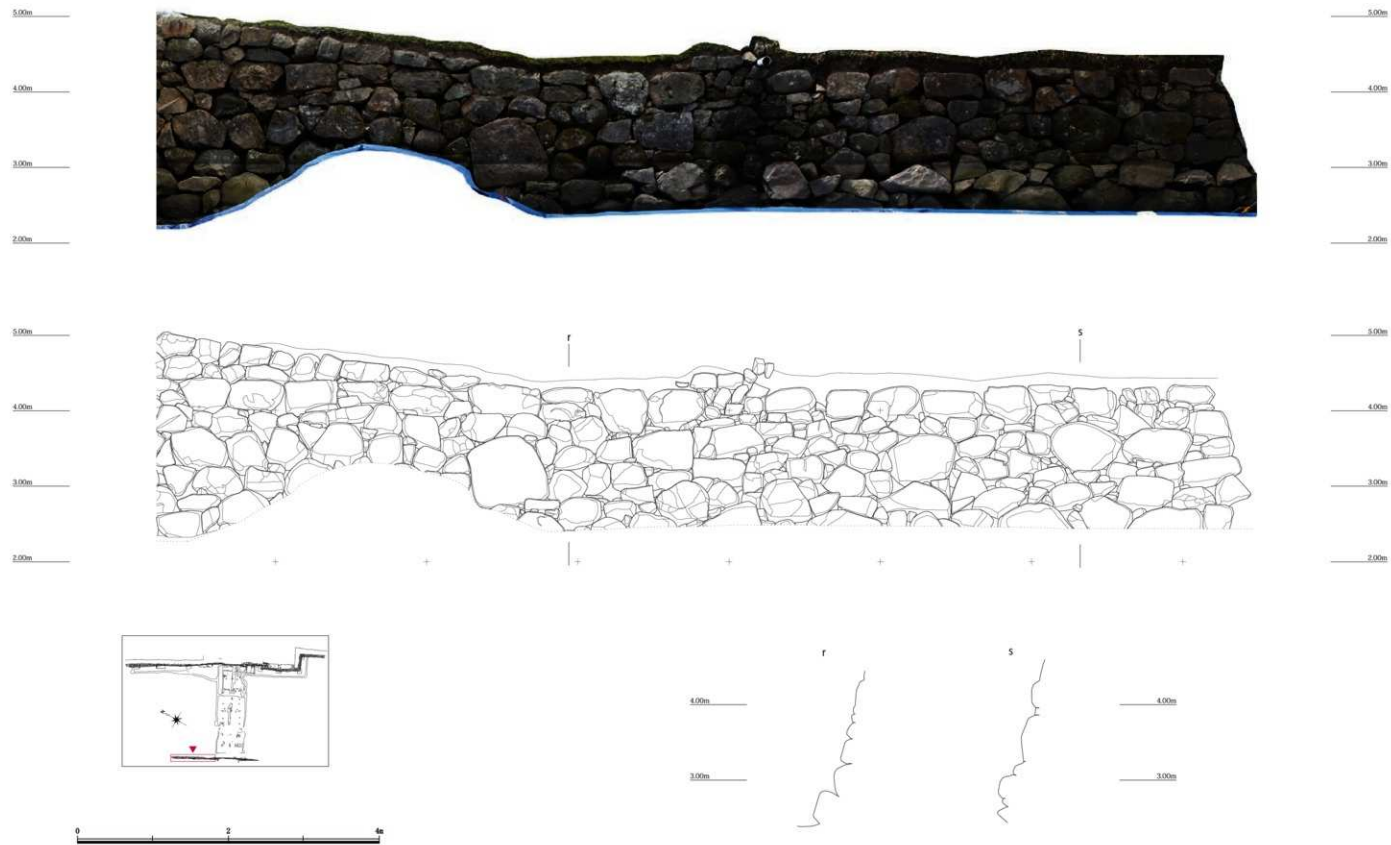
橋中央より南東へ23m、石垣隅角部堀底に設定した幅1.4m、長さ1.5mのトレンチである。標高2.45mの現場底より僅かに下より胴木13・14を検出した。胴木13はC面に伴うものであり、上面標高は2.41m高さ20cm、奥行き24cmで、胴木14はD面に伴うもので上面標高2.40m、高さ17cm、奥行き24cmで材質はともにヒノキの角材である。両者はそれぞれ45cm、55cmにホゾが切っており、端部は石垣隅角にあわせている。両者は石垣同様、直交した位置関係にあり、胴木14が下になる形でホゾ部分を組み合わせ





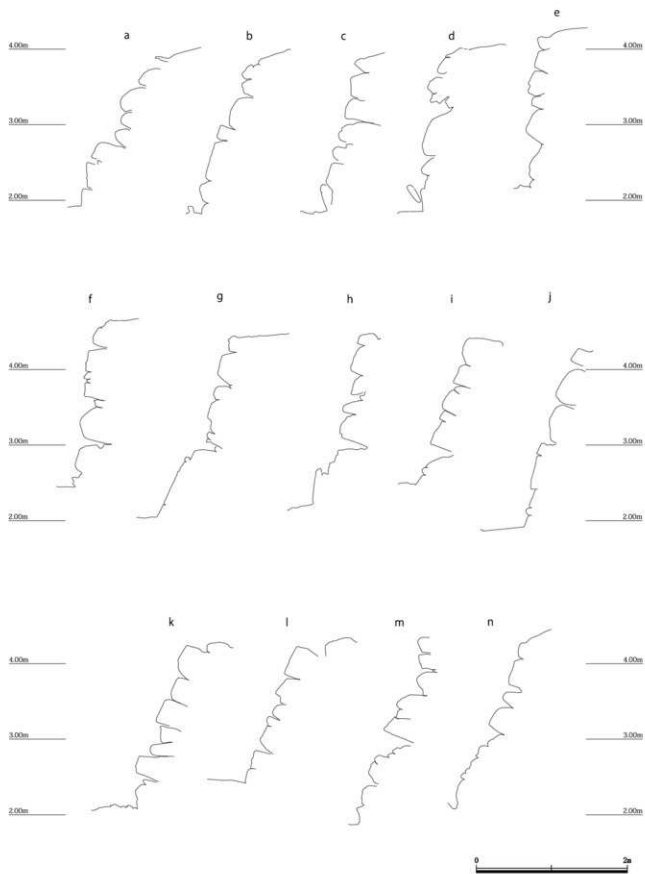
第49図 調査区オルソ・立面・断面図1 (S=1/50)





第50図 調査区オルノ・立面・断面図(S=1/50)





第51図 石垣断面図(S=1/50)

いる。両面は標高2.32m程で接しており、接合部の胴木13上面には方形の穴が開けられ中には直径7～8cmのニヨウマツ材の杭17が打ち込まれる。杭17は胴木14も貫通しているとみられ、直交する2つの胴木がずれるのを防ぐためと考えられる。D面胴木14のホゾ上には胴木13との間に幅10cm程の隙間が空いており、その部分を埋めるために拳大の石が挟まれる。また、胴木13の上面、石垣根石との間には厚さ3cm程の板材が挟まれている。杭17の脇にも石がはめ込まれており、各所で微調整が行われていることが分かる。胴木14の前には直径8cmのイヌザンショウ材の杭18が打ち込まれる。

土層をみると、表面は粘質土であるが、その下標高2.3m付近より、若干土を含む地山である4層がみられる。これらを掘り込む形で石垣設置に伴う掘り方とみられる2・3層が緩やかな角度で掘り込まれる。調査区内の地山は基本的に混入のない均一な灰色粘質土であり、土を含むのは当トレンチ付近のみである。

断面kの石垣勾配は、若干凹凸があるものの、1と同様に69°、天端標高は4.27であり石垣高は1.84mとなる。

#### ⑧トレンチ8(Tr-8) [第48図]

橋中央より南東へ25m、調査区の端、石垣の隅部の堀底に設定した幅0.7、長さ1.2mのトレンチである。直交する両石垣であるが、D面には胴木は設置されておらず、E面では確認できた。エノキ材である胴木15は上面標高が2.14m、高さが26cm程の丸材であり、向かって左側の石垣中から続いていた。一方組み合うE面の下部は胴木15の位置にまで石が確認でき、底付近には拳大の石を置きその上から石垣を積み上げている。胴木の前面、トレンチの端には直径8cm程度のイヌザンショウ材の杭19が打ち込まれている。

石垣天端の標高は断面m付近で4.36m、勾配は69°であり、石垣高2.44m、断面n付近では天端高は4.38m、石垣高は2.14m、石垣勾配は67°である。

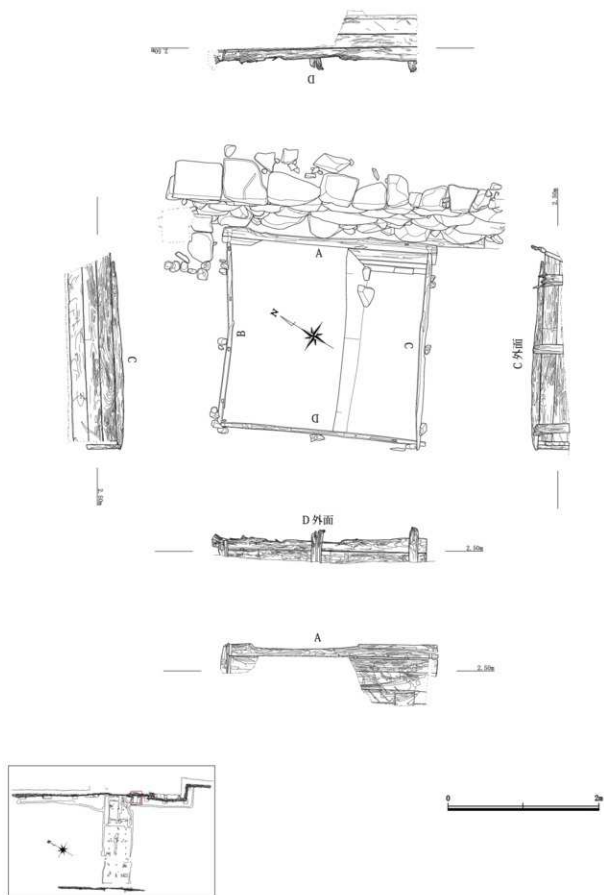
土層断面は、胴木下の標高2.0m付近までブロック状の粘質土が堆積しており、石垣前には拳大の石が確認できるものの、他のトレンチで見られたような、胴木設置とみられる掘り方は検出できなかった。

#### ⑨トレンチ9(Tr-9) [第46・48図]

橋中央より南東へ21m、上下2段ある石垣の中間部分、中ノ御門より続く犬走り部分に設定した幅1m、長さ1.3mのトレンチである。現地表面の標高は4.35m前後にあり、下段石垣の天端標高は4.30mである。上段石垣根石部については標高3.90付近まで確認しており、石材の規模にもよるが、地面したに1～2石程度埋め殺されている。埋土中には石が散見されるが、詰められたものではなく、下段石垣の裏込石に相当するような石群は検出されなかった。

#### ⑩トレンチ10(Tr-10) [第46・48図]

橋中央より南東へ16m、上下2段ある石垣の中間部分、中ノ御門より続く犬走り部分に設定した幅1m、長さ1.5mのトレンチである。下段石垣天端標高は4.30m、現地表面の標高は前側で4.30m、後側で4.45mとやや傾斜が付いている。表土である1層を掘り下げると、褐色系の土である2・3と続き、黄色系の土である4層に至る。4層の上面標高は4.00m前後であり、B面にみる上段石垣はちょうどこの層上から積まれているようである。一方B面では地面付近にみえる石材が標高4.40mまで20cm程度入り込むのみで、その下40cm程は土であった。Tr-10同様、1～2石程度の埋め殺してあろうか。また、下段石垣に伴う裏込石は見られなかった。



第52図 樹実測図(S=1/50)

## ①トレンチ11(Tr-11)[第46・48図]

端中央より南東へ12m、上下2段ある石垣の中間部分、中ノ御門より続く犬走り部分の石垣隅角付近に設定した幅2.5m、長さ1.2mのトレンチである。下段石垣の張り出し部分、A面とB面との接続状況を確認することを目的とした。現地表面の標高は4.5m前後にあり、前面石垣の天端の標高は4.4m前後にあった側面および、Tr-5の調査より、A面およびその下部にある胴木は、壁内へ続くことが分かっていたが、掘り下げの結果、連続する天端石を検出した。天端石は上面の標高が4.4m程であり、地表面より僅か数cm下で3石連続しており、幅にして1.9m程内側に入り込んでいた。しかし、連続するのはこの3石のみであり、その先には確認できず、下段石垣は前面部に貼りついている形であった。また、3石と、接続部にあたる1石の計4石および、石列の前面にあたる下段石垣(C面)角より4石の裏側には拳大の裏込石が充填されている。A面とC面との重なり合う部分のみに裏込石を入れる点が特徴的である。上段石垣の下部は、標高4.20m付近まで確認したが、石群があるため、それ以下どこまで続くかは不明である。

## ②柵[第52図]

橋中央より南東へ6m、橋の脇で検出したクリ材で作られたはほぼ方形の柵で、規模は現状で幅286cm、長さ272cm、内寸は幅262cm、長さ245cmである。石垣に接するように設置されており、古写真にも水面上に上部を出している状況がうっすらと見て取れる。上面の標高はA面の2.86mが最高点であるが、実際はもう一段以上組み合わせられていたことがわかる。B・C・D面が垂直に木を組むのに対しA面は石垣に沿う形に64°の傾斜を持つ。柵内中央付近では、枠材であったとみられる板材を一枚検出した。

A面は4段の板材を重ねており高さは下から18cm、23cm、19cm、17cmで、厚みは3段目が4.5cm、4段目が3.5cm程度、板幅は282cm、内幅262cmである。また、底部には内面角から16cm程離れた位置に幅25cm、高さ17cmの枕木状の材が置かれており、柵の内面と面を均一に揃えながら、1段目と組み合っている。1～3段目までは板どうしが隙間なく接している。また、外れかけた3段目の上面には4段目との間に接合のための幅4cm、長さ1.3cm、高さ2cmのホゾが4つみられた。右側より内面の角から3cm、残りは67cm間隔で設けられている。4段目については、下面だけでなく、上面にもホゾ穴がみられた。3段目との接合のためのホゾ穴の上部に位置しており、幅4cm、長さ1.5cm程度の穴が開けられていた。4段目については、保存状態が悪く、上面部分は割れてしまっているため、穴は1ヶ所のみ確認であったが、5段目以上の存在が考えられる。板の両端には端部より8cm程度の位置より、それぞれB面・D面と組み合わせるためのホゾが4cm程度切られており、固定のためとみられる釘が、板の裏(石垣)側より打ち込まれていた。釘は、3段目左に1ヶ所、4断面は左側に2ヶ所、右側に2ヶ所確認した。

B面で検出した枠材は1枚であり、中央付近が曲がっているが、長さ247cm、厚さは6～8cm、内寸は240cm程度の板材である。上面の標高は2.56m前後であり、幅4cm、長さ1.3cm程のホゾと、ホゾ穴が66～70cm間隔で2ヶ所ずつ交互に並んでいた。上面はA面の2段目上面と同じであることから、2段目の板材と推定される。また、柵の外側には枠を固定するための幅14cm、長さ10cmの角材が、3ヶ所設置されている。

C面で検出した枠材は3段3枚であり、幅272cm、厚さは7cm前後、内寸は262cmの板材である。標高2.12mより積まれた板材の高さは下から20cm、17cm、19cmで上面の標高は2.60m前後である。1段目、2段目は隙間なく設置しているが、標高2.50m前後にある2段目と3段目は若干の隙間が空いており、66cmの間隔をあけて2段目上面から出張る幅4～5cm程度のホゾが2つ確認できる。3段目の上面は遺存状態が悪く剥落しているため、本来の上面は端部以外残っていないとみられ、ホゾ穴はD面寄りの位置に幅5cm、長さ1.5cm程度のものを1ヶ所確認するのみであった。枠の外側には固定とみられる幅13



cm、厚さ8cm程度の角材が3ヶ所に設置されており、いずれも上部を欠いているとみられるが、最も残りの良いD面側のもので上面標高2.79mである。

D面で検出した枋材は4段4枚であり、幅、内寸247cm、厚さ6cm前後の板材である。C面の端部より8cm程の位置に接合している。枋底部は、石垣側で標高2.12m、堀側で2.18と、やや傾斜をつけており、そのままの角度で上段は積まれており、高さは下から19cm、19cm、19cm、12cm、上面の標高は2.7～2.8m前後である。4段目は、原位置より堀側へ動いており、現状、端部がC面上に重なっているが、本来は下段と同様にC面A面内に設けられたホゾと組み合う形となっている。下3段は同じ高さの材であり、ほぼ隙間なく積まれている。C面側の接統部に関しては、据え付け面が6cm程高いため、1～2段目、2～3段目の接合部はそれぞれC面の2段目、3段目の中間付近に位置する。一方、A面側の接統部の状況は据え付け部の標高も同じであり、1段目こそ若干段差があるものの、2段目、3段目は同じ標高に位置している。また、枋の外側には他面同様固定のための幅14cm、厚さ8cm程度の角材が3ヶ所に設置されている。

地山と考えられる灰色粘質土中に組まれた当榭は底部には木材を置かず、粘土層そのままであった。堀底面上に枋を設置するのではなく、70cm以上も掘り込んでいる理由は、水深が40～50cm程度しかなかったことやそれだけの多量の土砂が流入するためであろうか。現在、山側より堀へつながる3ヶ所の溝の吐水口付近でも 僅かの期間で多量の土砂が堆積している状況である。堀内の浚渫記録の多さもこのこと由来するのであろう。また、『因府歴年大雑集』によると、享和2(1802)年の記録に「～山手より流出候水口は栗にてさしたる大なる榭を水中にすえ置、此中へ砂の滞り候へば少し水を落し浚へ上べき支度なり。去共後此砂を上させられたること聞えされはいつの此よりか溢出て暫くお堀埋り可申事と被推量候。」とあり、土砂受けのためのクリ材の榭を設置したが、浚渫をしなかったため埋まってしまったとあり、当時からかなりの土砂流入があったことがわかる。

## ii 橋脚部

現橋の下部、堀底の橋脚推定範囲の調査範囲は、堀両端間の距離が33m、幅11mにも及ぶため、2つある現コンクリート橋脚毎に区切り、城内側から第1調査区と第2調査区に分け、その後の拡張に伴い第3調査区を設けた。調査範囲中、第1調査区の堀底には山から流入した土砂が標高3.0mの水面付近まで、第2・3調査区には標高2.6m付近までヘドロが厚く堆積していた。水面上にみえるコンクリート橋脚は厚さが0.5mであるが橋台部分は階段状に2段階、1.2m広がり、その厚さは合計で2.9mに達する。設計図上ではコンクリート橋台下深くまで杭を打ち込んでいるため、この部分に遺構は残存していないとみられる。

### (1) トレンチ

トレンチには2種類あり、①橋脚の打ち込み状況を確認するために設定したもの(第1調査区トレンチ1、第2調査区トレンチ2)と、②橋脚想定位置に検出を目的に設定したもの(第1調査区トレンチ2・トレンチ3、第2調査区トレンチ2、第3調査区トレンチ1)とがある。

①は第1・2調査区内に調査区を縦断する形で設定した。橋脚は横方向に3本で1列を成すが、3世代の橋毎に横の間隔は様々であるため、比較的同一線上にある中央柱を中心にしてトレンチを設定した。また、柱の下部を確認するため、部分的に拡張を行った。

#### ①第1調査区トレンチ1(1区Tr-1)[第53・56図]

城側の石垣からコンクリート橋脚間に設定した長さ10mのトレンチである。幅は当初0.6mであったが橋脚および石垣下部を確認するために拡張を行ったため、中央付近では1.3m、石垣付近で0.9mとな

る。トレンチは、近世クリ材橋脚である柱7と、近世マツ材橋脚である柱11、近代マツ材橋脚である柱14に併せてトレンチ壁面を設定した。壁面はそれぞれA～D面とし図化を行った。

1～3層は現代の層である。1層はコンクリート橋敷設に伴う堀弧込み層である。トレンチの接する現橋下の石垣は昭和38年頃の積み直しある。石垣下の丸太胴木の上面標高は2.80mであり、その前には現代の堆積土である2層がある。石垣の直前深めの掘り込みがなされ内部には石が入る。3層もまた現代の堆積土である。4～6層は黄色系の砂を含む堆積土である。A面では4層が近世橋脚である柱14の打ち込み時の巻き込み、或いは、打ち込み後の窪みへ堆積した状況が確認できた。C面では5・6層の上に4層が堆積しており、堀中央へ向かい緩やかに傾斜して行く様子が分かる。近代橋は明治の後半代に作られているため4～6層は近代、或いは近世まで遡る堆積土の可能性はある。

7層は標高2.25mの現地表面より厚く堆積した、灰色粘土がブロック状に混ざりあう層である。B面で顕著であるが、標高2.0m付近まで8・9・10層を掘り込んだ後、10層下の層を切りながら堀中央へ向かい標高1.4mまで降下する。A面では標高2.0m付近まで掘り込んだ後水平方向へ進み柱11を越えたところで1.6m程まで降下する。この大規模な掘り込みは堀の浅深の痕跡であるとみられる。浅深の記録は多く残されており、定期的に行っていたことが確認されている。また、A面で柱7・11をかわすように掘り込まれているのは、浅深時にこの2本が存在していることを示していると考えられる。

8～18層は、橋脚設置以前から堆積していた層とみられる。16層までは遺物等を含まない均質な粘質土が基本である。8層は標高2.6m付近から60cmほど厚く堆積した粘質土である。現石垣胴木もこの層の上に置かれており、この石垣の背後30cm程にあったとみられる本来の石垣もまた、この層上に築かれていたと考えられる。石垣裾部に設定したトレンチにおいて地山とした層と同一層とみられる。その下部は厚さ3～4cm程度の薄い灰白色粘質土の9層を挟み灰色粘質土である10層が20cmほど堆積する。その下は若干の色調の違いはあるものの粘質土である11～13層が続く。色調に変化がみられるのは14層からであり、褐色を呈する14層に続き、15層は黒褐色の粘質土である。その下、標高1.4～1.5m付近には厚さが2～3cm程度の灰白色粘質土である16層を挟み黒色粘質土である17層へと続く。最深部の18層はそれまでの粘質土とは様子が異なり、流木とみられる自然木片を多く含む層である。遺物等は見られなかった。

19層は近世クリ材橋脚である柱7の掘り方埋土である。標高2.0m付近より向かって右手、石垣側は柱より15cm、左側は若干の凹凸があるものの30cm程度の掘り込みがなされ、内部にはきめの細かい灰黄色の砂が充填される。標高1.3m付近まで掘り下げたもののさらに下層まで続いていた。掘り方を持つ柱はここだけである。19層中には丸瓦片と鏝(18)の2点の遺物が含まれていた。鏝については柱に刺さってはならず、砂層に包含されていた。

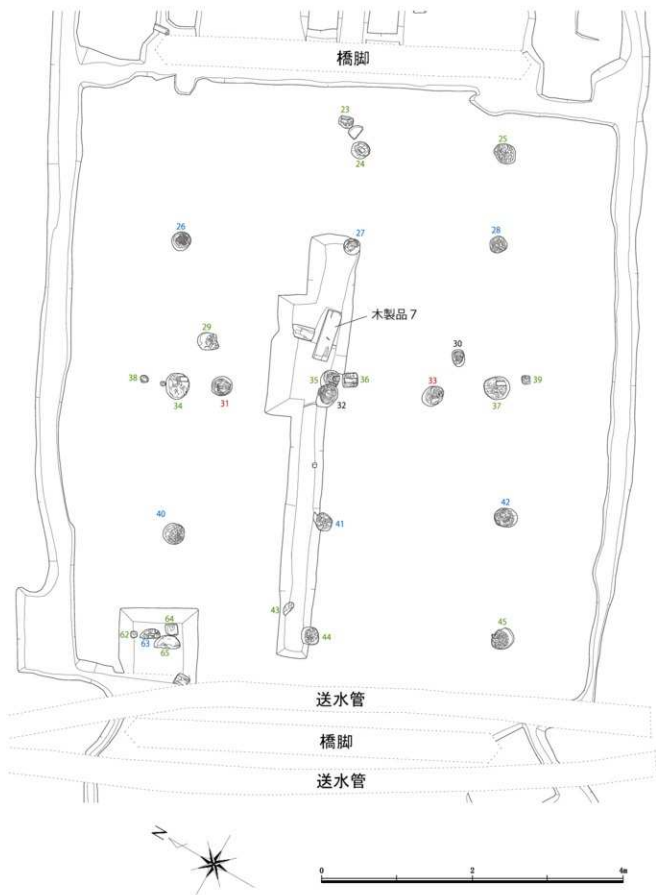
また、A面の近世マツ材橋脚である柱11の左右の層をみるといずれの層も柱に寄りかかるように“ハ”の字状になっている。水平堆積を他所では水平堆積を見せる層がこのように湾曲する理由としては、地震の影響が考えられる。当初これを柱打ち込みによる巻き込みの影響とも考えたが、他の発掘調査例でも同様の状況がみられるため、これを地震の影響として捉えた。なお、第2調査区でも確認した。

結果、柱14については、現地表面より若干上から、柱7は標高2.0m付近から打ち込まれたことが分かったが、柱11については、打ち込み面を確認することはできず、可能性としては①調査区底面よりさらに下、②もともと層位の乱れなく打ち込んでいるため土層からは見てとれない、③7層付近にあったが浅深により削平されてしまった、等が挙げられる。

柱付近は調査区を広げ、地表面からおよそ1m、標高1.2～1.3m程まで掘り下げを行ったが、柱の底部までは至らず、かなり深い位置まで打ち込まれていることが分かった。これ以上下層を確認するためには、更なる拡張が必要であり、その場合、柱8・15付近まで掘り下げを行わなければならない、柱本体への影響を考慮して、ここまでの調査とした。



第53図 第1調査区平面図(S=1/50)



第54図 第2調査区平面図(S=1/50)



第55図 第3調査区平面図(S=1/50)

## ②第1調査区トレンチ2(1区Tr-2)[第53図]

近世クリ材橋脚の推定位置に設定した幅2.4m、長さ1.6mのトレンチである。トレンチの半分以上はコンクリート橋台が入っており、堆積土もまた工事に伴う攪乱土である。20cm程掘り下げた標高2.0m付近で上部が切断されたクリ材の柱67とヒノキ材の柱68を検出した。第2調査区トレンチ2でも同じであるが、橋台裾付近の旧橋脚は上部が切断されるようである。遺物は攪乱土中から鏝11・13・32などを検出した。

## ③第1調査区トレンチ3(1区Tr-3)[第53図]

トレンチ1を挟み、トレンチ2の対面にあり、近世クリ材橋脚の推定位置に設定した幅2.0m、長さ1.5mのトレンチである。トレンチ2同様、内部は橋台および工事攪乱土であった。調査区際にあるクリ材の柱19は上部が大きく曲っており、ヒノキ材の柱20は倒れた状態であった。遺物は攪乱土中より鏝40を検出した。

## ④第2調査区トレンチ1(2区Tr-1)[第54・57図]

コンクリート橋脚間、柱27・32・35・41・44の断面を確認するため、堀中央部分に設定した長さ7.5m、幅0.6mのトレンチである。柱の下部を確認するため、中央部分を1.3mまで拡張した。ヘドロを除去した現地表面は標高2.1m前後にあり、柱の上面標高は近代橋脚である柱32の2.75m以外、いずれも2.4m前後であり30cmほど上部を見せる状況である。堆積土は第1調査区同様基本的に粘質土である。地表から40cm程には褐灰色の粘質土である1層が厚く堆積する。ほぼ同質の堆積であるが、柱27の左右に9・10層、柱41には2・3層という厚さが2～3cm程度の薄い砂礫層がみられる。2層と9層は標高1.8m、3層と10層は標高1.7mと、同じ高さであり、ともに粘土層中にある砂礫層である。水平方向の長さも20～30cm程度と部分的であり、柱にすり付く形であることから、1層が堆積する間に柱周辺に流れ着き滞留した砂礫であると考えられる。第1調査区の7層、浚渫後の堆積層に状況が似ている。1層下には厚さ2～3cmの灰白色粘質土である4層が全体にみられる。A面の柱27側、B面、E面の堀外側では標高1.6m付近で水平方向に広がるが、C面・D面、E面右半では標高1.6～1.8mの間を波打って上下する。A面柱35の左側では標高1.3m付近まで緩やかに下降し、柱32右側では一旦は厚さが1cm程に薄くなるものの、標高1.6mで水平に続き、柱44の20cm左側で上方へ屈折する。この屈折や層の上下については、第1調査区同様地震の影響が想定される。4層下には同質の黒褐色粘質土である5・6層がある。ほぼ一体的な層とみられるが、調査区の底面以下まで続いている。6層には黒色の腐植物が若干混ざる。また、E面を中心として部分的ではあるが、炭化層である黒色土の7層が、標高1.5m付近に厚さ2cm、幅1.8mで広がる。

橋脚の状況を確認するために最深度で標高1.3mまで掘り下げをおこなったが、現状では明確な柱の打ち込み面を確認することはできなかった。調査区内の堆積土は、第1調査区とは異なり、近世のものとみられるため、本来の打ち込み面は調査区下にあるか、もしくは浚渫により失われてしまったのであろうか。柱の形状は、柱27と41の近世マツ材橋脚はやや曲っており、27については“く”の字状となるのに対し、柱35・44の近世クリ材橋脚および、32の近代マツ材橋脚は垂直に伸びている。

遺物は、4層および6層を中心として、鏝や、橋の部材とみられる板材などを確認した。1層には鏝(22・24・37)、釘(13・14・15)、4層の灰白色粘質土内に釘(17)、6層には鏝(5・6・7・12)、橋部材とみられる木製品(7・8・9・11)がある。

## ⑤第2調査区トレンチ2(2区Tr-2)[第54・57図]

近世クリ材橋脚の想定位置であったが、地面上では確認できなかったため、これらを検出する目的

で設定した1.3m四方のトレンチである。橋台部分が階段状に広がっており、調査区の大部分は攪乱されていることが明らかとなった。先述のとおり、柱はいずれも途中で切断されており、他のものより深い位置での検出であった。土層はA・C面の大半は橋台設置に伴う掘り込み層(1層)であり、B面を中心にかろうじて旧土層が残存していた。2～4層はいずれも粘質土であり、標高2.1mから50cm程度厚く堆積する褐色粘質土の2層の下、標高1.6mには灰白色粘質土の3層が3～4cm程薄く水平堆積する。その下4層はやや褐色を帯びた色調を呈す。2～4層はそれぞれ2区Tr-1の2・4・6層と非常に類似しており、位置する標高も同じであるため、一連の層である可能性が考えられる。

#### ⑥第3調査区トレンチ1(3区Tr-1)[第55図]

周辺に木片が散乱していたためにこれらの検出を目的として設定した幅1.4m、長さ0.8mのトレンチである。杭状の角材が2本土中に立つ以外は、特に製品と呼べるようなものはなかった。遺物は埋土中より総34が出土した。

#### ⑦第3調査区トレンチ2(3区Tr-2)[第55図]

近世マツ材橋脚推定位置に設定した幅1.6m、長さ1.0mのトレンチである。標高1.9m程で柱69を検出した。遺物は出土しなかった。

#### (2)柱群[第58図]

堀底に堆積していたヘドロや、山から流入した土砂を除去するとすぐに、旧橋脚と考えられる柱が多数出土した。また、橋脚に加え補強のためとみられる添柱なども検出されており、これらを合わせ合計69本の橋脚連柱が検出された。柱の材質はニヨウマツとクリが大半であり、その他ツガやヒノキ、ヤナギなどがみられる。検討の結果、これらの柱群は材質と立地場所の違いから大きく3つの世代(近代マツ材橋・近世クリ材橋・近世マツ材橋)に分けることができた。3世代はそれぞれ柱列の数が異なっているもの、横方向は3本並びが基本であり、周囲に補強用とみられる柱が別途添えられる場合がある。近世の2橋は横幅が5.6mであるのに対し、近代橋は3.7m程と短いのが特徴的である。近代マツ材橋は推定5列(3列検)、近世クリ材橋は7列すべて検出、近世マツ材橋は推定6列(4列検出)であった。

以下では一連のものである横列を一組として記載する。なお、柱番号は検出順に付けた番号である。

#### ①第1調査区内

1・2は直径26cm前後のスギ材であり、残存部の上面の標高は2.8～2.9と極めて高い。両者の距離は3.2mであり、その位置から元々2本並びであったと推定される。スギ材はこの全体でも3本だけであり、近代橋の幅に近いことや、戦後の写真にも同位置に柱がみられることから、後に加えられた近代橋補強柱であると考えられる。3は直径21cm前後の小形のクリ材である。特に対になるような柱は見当たらず単独のようである。柱の依存状態は悪く表面はボロボロの状態であった。

4～9は一連の近世クリ材橋の一部である。中でも5・7・9は中心となる柱と考えられ、上面にはホゾが残る。5についてはクリ材ではなくツガ材であり、一辺32cmの角材を用いている。ホゾは、ほぼ一直線上にあり中央の柱である7では上面を横断し、5・9については内寄りの位置にある。上面の標高は2.37m前後にあり、高さも8cm程度とほぼ同じである。5を挟むように位置する4・6の上面標高は5のホゾ下と同じく2.3m付近にあり一面をなしている。4の上面にはホゾ状の22×12cmの方形の圧痕が残る。7・8・9もまた、ホゾ下部分の標高は2.29mとほぼ同じである。ホゾを持つ柱を中心にして横方向に土居桁が渡り、その上に橋脚の上部が築かれていたとみられる。ホゾを持つもの以外は、土居桁を補強するものか、或いは橋脚修理の際に打ち替えられたものの可能性がある。橋5～9中心間の

距離は5.2mであり、4～9間の場合、距離は5.6mで7はちょうど中間の位置にあたる。トレンチ調査により柱7は標高2.0m付近から設置されており、多量の砂が入った柱掘り方を確認した。

10・11・12は近世マツ材橋脚のである。橋脚上面の遺存状態は悪く、表面は縁を中心に剥落している。破断面をみてもホゾの痕跡は確認できなかった。11はトレンチ調査により約1m下、標高1.30m付近まで掘り下げを行ったが、打ち込み面は確認できなかった。柱の断面には樹皮らしき痕跡も残っていた。3本は一直線上には乗らず、10・12を結ぶと11は若干内側に位置する形となる。10～12の柱中心間の距離は5.4mである。

13・14・15は近代マツ材橋脚である。上面標高は2.7m付近とかなり高い位置にあり、13にのみホゾが残り、14・15については切断されたような状態であった。13は丸材の縁部分を加工した八角形状を呈し、中央付近には高さ5cm程のホゾが残る。15はもともとホゾがあったと推定されるが、最終的に切断されたようである。13～15の柱中心間の距離は3.85mであり、14はほぼその中間に位置する。

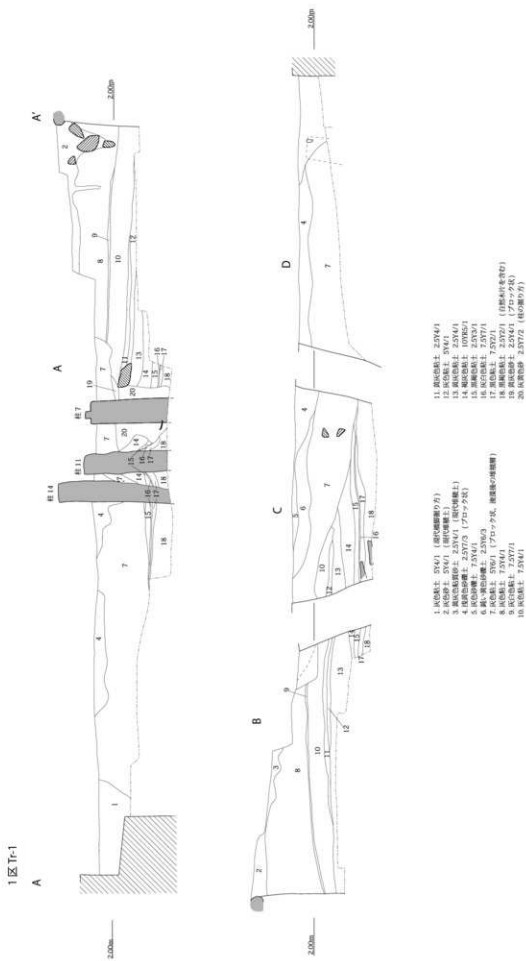
16～22および後の拡張で発見された66～68の計10本は近世クリ材橋と数種類の柱が混在している。コンクリート橋脚敷設に伴う掘削とみられる攪乱により19は上部折損し、20・21・22・66は傾倒した状態である。大方の位置は示しているものの原位置からは動いているとみられる。工事に伴い67は上面を低い位置で切断され、68は位置こそ動かされていないものの、橋脚側の半身を削り取られている。中心になるとみられる柱は16・17・67のクリ材であるとみられる。16は大型のホゾを持つ。多くのホゾは平面上に棒状の突出部を持つ断面“凸”字状であるのに対し、この柱は平面を縦方向に切る断面“L”字状を呈し、段差部分の高低差は40cm程である。17は橋台の際にあり、かろうじて工事掘削を免れていた。上面の票子は2.15mであり、堀中央側に寄った位置に高さ5cmのホゾが残る。67は上面標高が2.09mであり、68とともに低い位置で上面が切断された状況であるためホゾの有無は確認できない。また、19・21・66もまたクリ材である。19上部が折れており、21・66は完全に倒れた状態であった。66については15cm四方の角材であり、補助的な柱とみられる。これらの柱は、平面的には一直線上には乗らず、67を軸に16と結ぶと中心間の距離は5.5mとなり21は少し離れた位置となる。67と19とを結ぶと中心間の距離は4.9mで、若干幅狭となる。18は直径24cmとやや小型のヤナ属の柱である。一般的には水場では用いられない材であるため、補助的な柱であったとみられる。20と68はともにヒノキ材であり、20は傾倒、68は上面が切断されていた。ヒノキ材は全体でこの2本のみであり、一対に置かれた可能性がある。22はスギ材であり、完全に倒れているものの表面の遺存状態は良く真新しい感じを受ける。1・2同様、近代橋に伴う補助的な柱であろうか。

## ②第2調査区内

近代コンクリート橋脚に挟まれた11.5m、堀中央部分にあたる。第1調査区側の橋台部分には、近代マツ材橋および近世マツ材橋の列があったと推定される。23～25は近世クリ材の橋脚である。3本並びの内2つは検出できたが、城へ向かい左部分は確認できなかった。推定位置付近を20～30cmほど掘り下げてみたが、検出することはできず、橋台工事に伴い撤去されたか、より深い位置で切断された可能性がある。23は橋台の基礎工事に伴い3分の1程欠損している。上面には高さ5cmホゾが残る。24は上面2.63mであり、中央部は陥没し空洞がみられ、一見加工にも見られるが人為的なものではないと判断した。25は表面が平らでありホゾは見られなかった。23と25との柱中央間の距離は2.85mであり、24と25では2.55mである。

26～28は近世マツ材橋脚である。26は直径34cm、上面は切断されたように平らであり、標高2.19mである。橋脚は橋の中央へ向け僅かに傾斜する“内転び”がみられる。27は上面の遺存状態が悪く大部分が剥落した状態であった。トレンチ調査により下部を確認したところ、直線上の材ではなく、途中で若干の屈曲がみられることが分かった。28も上面の大半が剥落している。一見ホゾのような段差がみられ





るが、剥落の結果であり、26同様に上面は平らであったと想定される。3本は一直線上に並んでおり、26と28との柱中央間の距離は5.60m、26と27とは3.0mである。

29はクリ材、30はツガ材の柱であり、3本並びの両端よりは若干内側に位置する。上面標高はそれぞれ2.60m、2.39mであり、平面部分の一部は残るものの、全体的に遺存状態が悪く29は上面の大半が割れており、30は外周の大半が剥落する。29は橋の内側へむかい若干傾斜する。その位置より両者は一対になると考えられ、材質などから近世クリ材橋に伴う可能性がある。両者の中心間の距離は4.4mである。

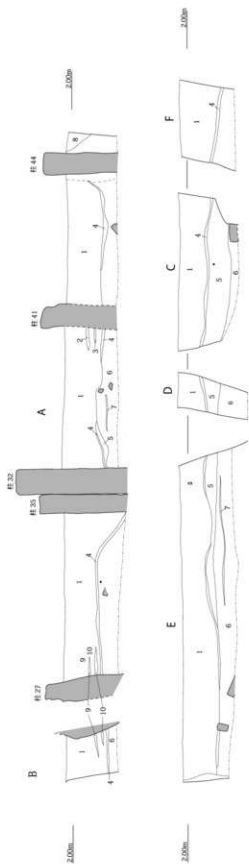
31～39は堀の中央部分に位置し、33.5mある内外石垣の天端石間の中心にあたる。奇数列の橋脚で建てられた近代マツ材橋、近世クリ材橋の中央列が位置する場所である。31～33は近代マツ材橋の橋脚である。上面の標高は2.74m、2.75m、2.70mと高い位置にあり、柱の大きさもほぼ同じである。上面の中央付近には本来ホゾがあったが剥落したとみられ、現在は痕跡のみである。3本は一直線上に並んでおり、31～33の柱中心間の距離は3.80mで、32はその中間部分にあたる。

34～39は近世クリ材橋に伴う柱である。34～37は近世クリ材橋の橋脚でいずれも上面にホゾを持つ。34は直径46cmの大型材を用い、上面の城側、内寄りの位置に高さ6cmのホゾが設けられ、上面の標高は2.43mである。橋の内側への内転びが顕著である。35は中央の橋脚である。上面中央36寄りの位置にホゾが設けられている。上面には本来上部に組み合わせていた土居桁との接合のためとみられる手違い継ぎ(33)が乗ったままの状態であった。脇に接する形で、32の近代マツ橋脚が設置された影響で、若干ではあるが城側へ移動している可能性がある。35から5cmほどにある36も同じく中央の橋脚である。角材の柱であり、ホゾの形は横並びのものとは異なり、上面を横断する。中央を挟んで34の対面に位置する37は直径46cmの大型材で、上面の標高は2.43mである。上面の城側外寄りの位置には材の半径程度のホゾを持つ。34とはほぼ同じ規模、標高であり、やはり橋の中央へ向かい内転びが顕著である。34～37の柱中心間の距離は5.65mであり、その中間は35の端にあたる。35と36の2つの橋脚のどちらかが先行するか、あるいは同時に設置されたのかは現状からは判断できないが、同じ高さのホゾが残る点から考え、幕末時には両方とも機能していたとみられる。34の外側に位置する38は丸材を4分割した材である。添柱とみられるが橋脚設置時の足場的なものの可能性も残る。39は38の対面に位置する。上面の遺存状態が悪く、形態ははっきりしないが角材状であるとみられる。その位置からも用途は38と同様であると推測される。38～39柱中心間の距離は6.75mとなる。左右に大型の材を配するのは、アーチ橋の中央という耐荷重的にも最も重要な位置にあたるためと考えられる。

40～42は近世マツ材橋の橋脚である。40の上面は半分程が剥落するものの、残存部分については切断されたように平らであり、上面標高は2.30mである。橋の中央へ向かい内転びが顕著である。41は中央の脚にあたるが、上面の遺存状態が悪く表面剥落が激しい。42もまた遺存状態が悪く上面の大半は剥落する。40と同様に橋中央へ向かい内転びをみせる。40～42の柱中央間の距離は5.80mで、41はその中間より15cmほど40寄りに位置する。3本はおおよそ直線上に並ぶものの、橋梁に対しては直交せず5°程の角度をつけた位置に設置されている。

43～45、62～65は近世クリ材橋を中心とした柱群である。43～45は全体的な平面調査により検出された。3本並びの橋脚のうち、44・45についてはそれぞれ、城へ向かい中央および右側に相当するとみられるが、左側にあたる位置には何も検出されなかったため、想定位置にトレンチ(Tr-2)を設定し掘り下げを行うと地表面から30～40cmほど下がった位置で柱を4本検出した。クリ材である62・64・65の柱上面標高はいずれも1.60～1.70m程であり、周辺のものから60～70cmも低い位置にある。上部はいずれも切断されたような状況を示す。また、65の半分はコンクリート橋台設置に伴い削取されていることから、この3本の柱も同時期に切断されたものと推定される。中心となる柱は65・44・45であるとみられる。65は上部、半身を共に欠くが、残存部の直径は47cmと調査区内では最大級の規模である。低い位置

## 2区 Tr-1



1. 擬宝珠橋土 10794.1
2. 擬宝珠橋土 10794.2
3. 擬宝珠橋土 10794.3
4. 擬宝珠橋土 577.6 (1) (橋脚一帯部)
5. 擬宝珠橋土 10792.2 (土層断面を平均含む)
6. 擬宝珠橋土 10792.2 (土層断面を平均含む)
7. 擬宝珠橋土 10792.2 (土層断面を平均含む)
8. 擬宝珠橋土 10794.2 (コンクリート橋脚部の方)
9. 擬宝珠橋土 10794.2
10. 擬宝珠橋土 10794.2

1. 擬宝珠橋土 10794.2 (コンクリート橋脚部の方)
2. 擬宝珠橋土 10794.3
3. 擬宝珠橋土 10794.3
4. 擬宝珠橋土 10793.1

## 2区 Tr-2



第57図 第2調査区トレンチ1・2土層断面図(S=1/50)

での検出であるため明確ではないが、端中央へ向かう内転びと思われる傾斜がみられる。65の脇に接して角材である64が位置する。一辺の長さは20cm程度であり、他の橋脚と比べても小形であるため、添柱であると考えられる。44は中央の柱であり上面標高は2.38mであるが上面は遺存状態が悪く、ホゾの有無は判断できなかった。45の上面の遺存状態は悪く全体的に剥落がみられるものの、内寄りの位置には僅か2cm程度の高さであるがホゾの一部が残る。橋脚は65と同様に橋中央に向かい内転びがみられる。64～45との柱中心間の距離は5.85mであり、中央の44は35cmほど64側に位置する。65の外側にある62と44の北側にある43はともに小形の材であることから添柱とみられる。63はマツ材である。丸材の中央から2分割された状態であった。状況から、65のような近代の削取ではなく、65の打ち込みの際に割れたと考えられ、上面は剥落するものの、中央付近にはホゾとみられる突出部が残る。想定されるマツ材橋脚はコンクリート橋脚下であり、63の位置とは異なる。また、標高1.5m地点のホゾは他の柱よりも80～90cmも低い位置にあることになり、現在の所、同様のものはない。単独の添柱か、あるいは未だ検出していない別世代の橋脚の可能性も残る。

### ③第3調査区

第1・第2調査区での橋脚検出を受け設定した拡張区であり、コンクリート橋脚をはさみ堀外側の石垣までの9.8mが対象である。ヘドロを除去すると他の調査区同様に多数の橋脚の残存を確認することができた。また、橋脚の推定位置にあるが、検出できなかった部分については、トレンチ(3区Tr-1)を設定して掘り下げを行った。

第2調査区側の橋台部分には近代マツ材橋と近世マツ材橋の列があったと推定される。コンクリートの脇には46～50の近世クリ材橋にともなう柱がみられる。46～48は橋脚であり、上面にはホゾが残る。46の上面標高は2.39m、中央には横断する形のホゾが設けられる。橋の中央に向かい内転びをみせる。47はやや楕円形状であり。上面標高は2.38mである。ホゾは中央より若干城寄りの位置にあり、端部は剥落するが、残存部からみると上面を横断するものでなく、一部が突起する形のものである。48は上面の遺存状態が悪く、ホゾも一部を残すのみであるが、残存部からみても横断する形のものである。3つのホゾは一直線上に並んでおり、46～48の柱中央間の距離は5.35mであり、中央の47は20cmほど48寄りに位置する。49は46の外側に位置する15cm四方の芯持ちの角材であり、橋脚同様に内転び状に傾斜を持つ。50は47の脇に位置する直径14cmの丸材である。その位置より両者とも添柱とみられる。また、53寄りの位置にはクリ材の51がある。添柱とした小形の柱の多くは、橋脚の脇にあるものが多いが51については若干離れた位置にある。

52～61までの群は3世代すべての橋脚が含まれる。第1調査区の1～15までの群と同じく、列の間隔は異なっているが、1列目と最終列とは同じ位置にくるためと考えられる。52～54は近代マツ材橋の橋脚である。52は標高2.12mで切断されている。切断面された上部は、脇に倒れている(52)である。両者を元の位置に復元すると、標高は2.64mであり、上部にはホゾがみられる。切断面は非常に新しく、変色もしていないことからコンクリート橋敷設時以降に切倒されたものであろうか。53も標高2.48mで切断されているが、切断面は52・54とは異なり変色がみられ、付近に切りはなされた上部も見当たらない。54は52同様に標高2.13m付近で切断され、切り離された上部(54)はすぐ脇に倒れている。本来の位置に復元すると上面標高は2.78mでホゾをもつ橋脚であることがわかる。切断面は52と同様で新しい。52～54の柱中心間の距離は4.0mであり、中央橋脚にあたる53はその中間にあたる。

55・56・69は近世マツ材橋脚である。いずれも上面の遺存状態は悪く大きく剥落しており、本来の面は残存していない。55は直径35cm前後で、中央の芯部分が円形に突出した状態で遺存しているもののホゾではないとみられる。橋の中央に向かい内転びをみせる。56は中央の橋脚であり、上面は大きく剥落しており、現状の標高は2.24mである。53・57・59など特に柱が密集した場所に位置する。橋脚の大半



第58図 出土橋脚位置図(S=1/100)



を検出した時点で、55・56と列を形成するもう1本は確認できなかったため、トレンチを設定し、掘り下げを行った結果69を検出した。他の2本より20cm以上も下からあった69は上面の剥落が著しく、平面的な検出であったため、内転びかどうかは確認できなかった。55～69の柱中心間の距離は4.5mであり、中央の56はその中間にある。

57～61は近世クリ材橋に伴う柱である。57は1辺22cm程度の芯持ちの角材である。上面にホゾはなく、標高2.30mの上面は、隣接する59のホゾ下部分と同じ高さである。この柱自体が土居桁下の橋脚であったか、或いは添柱であったのかは不明であるが、59のホゾをみるとかなり端にあることから、土居桁がはみ出していた可能性が想定されるため、これらを支える脚であったと考えられる。58は上面標高が2.34mである。中央より若干堀外側の位置に独立するホゾがみられ、平面的に外形の痕跡は確認できるが、全体の半分程度は欠損する。橋中央へ向かい内転びをみせる。59は57と接しており、上面の城寄りの位置には正方形のホゾが残る。他の橋脚とくらべてもホゾの位置は端部に寄りすぎている。60は上面の直径が33cmの橋脚であり、上面堀外側の位置にはホゾが残る。3本のホゾは一直線上に乗っており、位置にばらつきがあった橋脚上を結ぶために、ホゾの位置が端部寄りになったと考えられる。61は添柱と考えられ、丸材を4分割したものの1つである。58～60の柱中心間の距離は5.65mであり中央の59は20cm程58寄りに位置する。

### ③橋脚群[第58図]

検出した69本の柱を材質別に色分けしたものが第58図である。傾倒したものは色をつけてはいないが、3世代のグループに分けることができる。

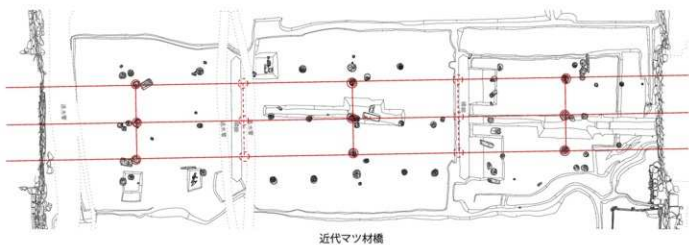
#### ①近代マツ材橋

まず一見して規格の異なる橋脚が赤色をつけたマツ材である。3列を検出したが上面の標高が2.7mと非常に高く、左右橋脚の横幅は3.9m前後であり、他の橋脚と比べてみても明らかに短い。加えて、柱の直径も大きく、左右橋脚に内転びは見られない。3列の距離を測ると中心より11mずつと均等であり、それぞれを半分に区切れば、現橋脚下にもう1列ずつが想定でき、幅5.5mの均等割りの5列橋脚が復元できる。

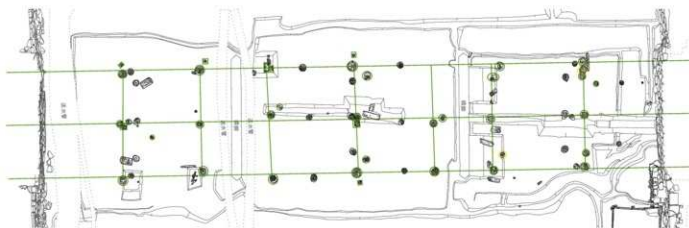
大正・昭和期に残る写真より、この橋脚は明治期に架けられ、昭和38年に現在のコンクリート橋となるまで使用された近代橋と判断できる。堀中央を中心列とし、柱を均等に配する理由として、近世までの橋上面がアーチ状をなすものから平らなものへと変更になったためと考えられる。橋は度々修理されていたようであり、欄干の形態も大正期・昭和初期・戦前後で仕様が変更されている。また、写真にはこれらの本柱とは別に支柱とみられる柱が度々写っており、柱1・2、18等が相当するとみられる。残存する1・3列目は上面標高が2.7m程であり、切倒された5列目も復元すると同じくらいの高さとなる。橋脚上面にはホゾがみられることから、当初は1本の柱で立っていたものが、途中の改修時に標高2.7m前後で一旦切断され、新たに継ぎ直されたと推測される。

#### ②近世クリ材橋

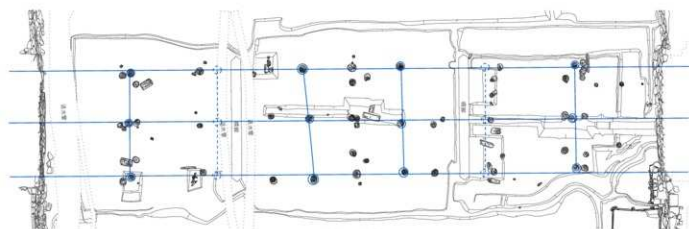
3世代の中でもっとも残りが良く、多くの柱を検出した。経年変化により全体が黒色化するのが特徴的である。本柱中にはツガ材(柱5)を1本含んでいるが、明らかにクリ材橋脚の並びであるため、一連のものとして捉えた。計7列検出しており、城側から3列目、柱24・25と並ぶ1本が未検出であるが、その他は3本並びをすべて検出した。近代橋とは異なり各列の横幅は様々であり、一番短い1列目(5-7-9)で5.2m、一番長い5列目(65-44-45)で5.85mと平均して5.6m前後である。柱本体の並びは一直線上にはないものの、上面のホゾは直線を意識しており、その結果、柱上面の端部などに位置することとなっている。ホゾを結んだ直線も1～7の縦列とも直交しておらず、2・5列目はかなり傾斜する。



近代マツ材橋



近世クリ材橋



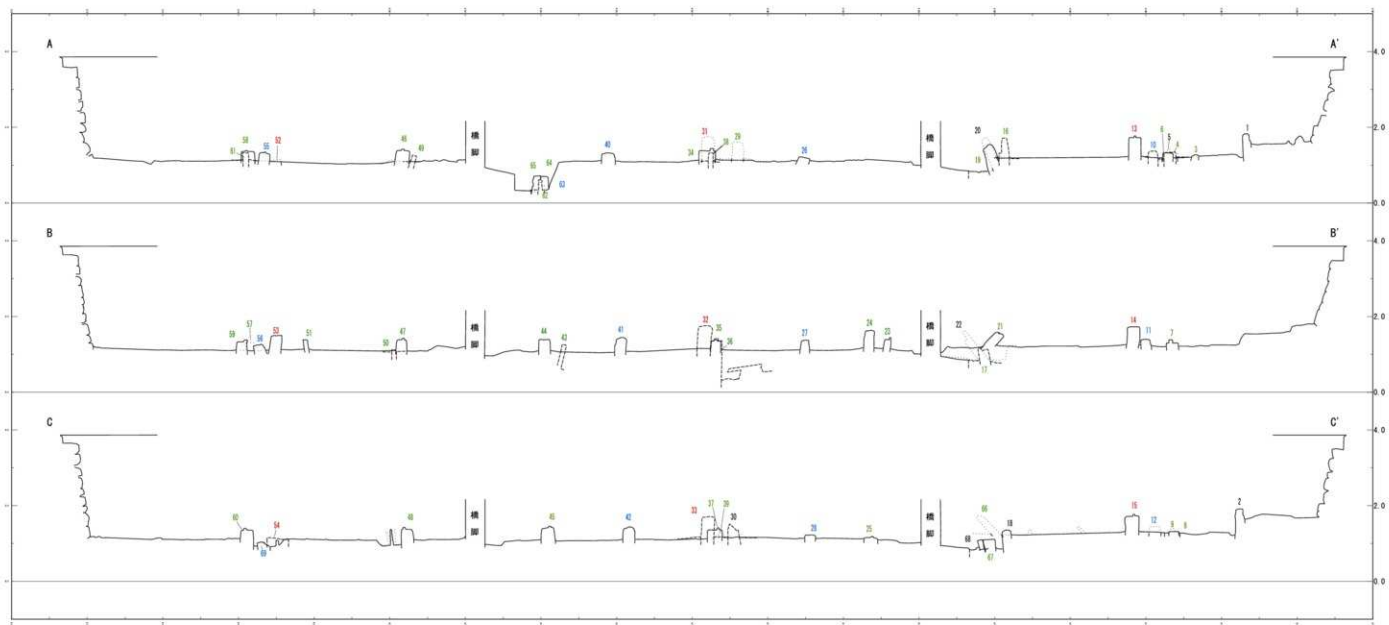
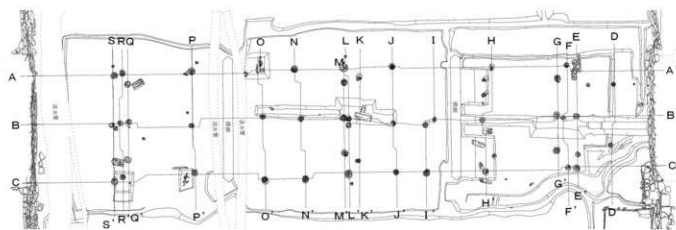
近世マツ材橋

※遺存していない脚列については  
前後列の中間地点に復元



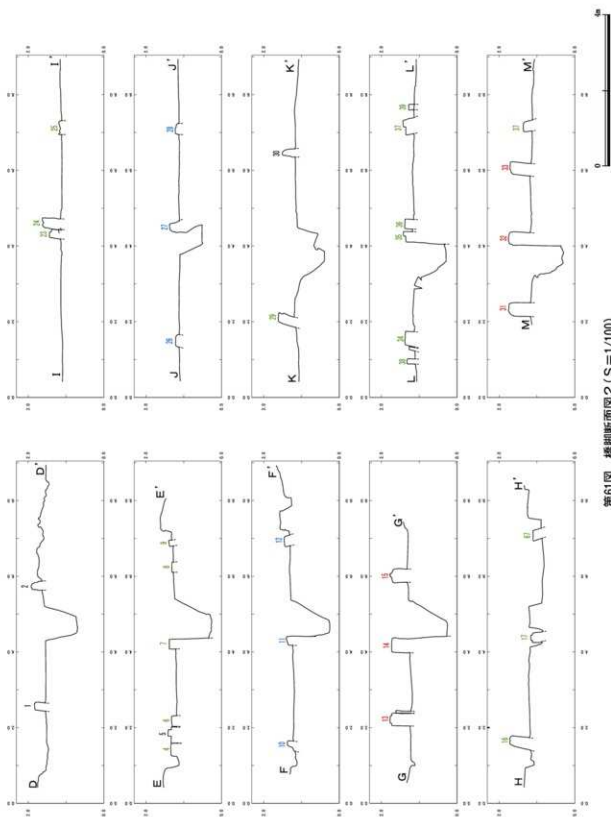
第59図 世代別橋脚位置図(S=1/200)



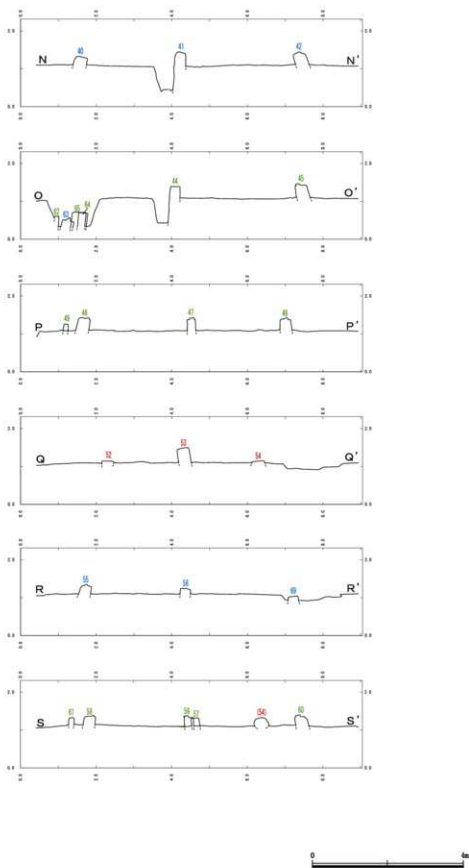


第60圖 構脚断面図1 (S=1/100)





第61図 横断面図2 (S=1/100)



第62図 橋脚断面図3(S=1/100)

縦(堀横断)方向の左右中央の3列は横方向以上に一直線上にはなく、ある程度のばらつきがみられる。第60図のとおり極力すべての柱を通りように線を引きと、堀外側の7列目では5.6mあった幅が、城側の1列目付近では5.2mほどと狭くなっている。しかしながら、これは橋脚の最下段の状況であり、上部の橋梁部分を構築する際にこれらの差異は解消できたものと考えられる。

列間の距離も一定ではなく、ばらつきがみられる。中央の4列目を中心として両端の1・7列目までは12mずつであり、さらにそこから石垣天端まで4.3m程度と均等である。中央から3・5列目までは30cm程5列目側に長いものの比較的似たような距離であるが、2・6列目は異なる。2-3間の距離は3.0m程しかなく、5-6間は3.5m程である。中央と両石垣間の中央付近がそれぞれ短くなるという形である。城解体中の古写真からも2-3列間が極端に短いことがわかるが、理由は明確ではなく、修理などの際に位置を動かした結果とも考えられる。

本柱とは別にこれらに隣接する柱4・6・36・57・64については横方向への意識があるとみられる。すなわち上部に土居桁をのせた際、柱上面の端にあたる場合などに補強的に置かれたものではないであろうか。また、本柱から少し離れた位置にある柱3・8・23・29については、橋自体の補強として置かれた支柱である添柱とみられる。さらに、左右外側の柱のさらに外側にある38・39・43・49・50・61は杭状の小形の材であり4列目以降多くみられる。同じく支柱的な添柱としているが、橋脚工事に伴う足場の一部である可能性も残る。

ホゾは大半の柱に設けられており、上面の標高は2.30~2.35m前後であり、形態は上面を横断する横長のものと、直径の3分の1程度をブロック状に残すものがある。すべてではないが、中央の柱には前者が、左右の柱には後者が用いられる傾向にある。当初は地中から水面上まで1本の橋脚であったとみられるが、やがて水面付近を中心に傷みが出てきたため、ある時点でこれを切断し、ホゾを設けて継ぎなおしたものであると考えられる。

打ち込み工法は2様あり、第1調査区のトレンチ1でみられた柱7については標高2.0mからの掘り方がみられ、内部にはきめの細かい砂が詰め込まれていた。しかし、これ以外の柱17・35・44には掘り方らしきものは全くみられない。柱35下付近では標高1.3m付近まで掘削したものの、特に土に動いた形跡はなく、深凌にともない掘り方を消失したか、或いはより深い位置からの打ち込み、現在の堆積土中からの打ち込みであるが土層に変化は見られない、という可能性が挙げられる。

アーチ橋の中央にあたる4列目の左右の橋脚は大型の材を用いられる点や、左右の橋脚が端中央に向かい内転びを見せることは、耐荷重を考慮しての構造であろう。

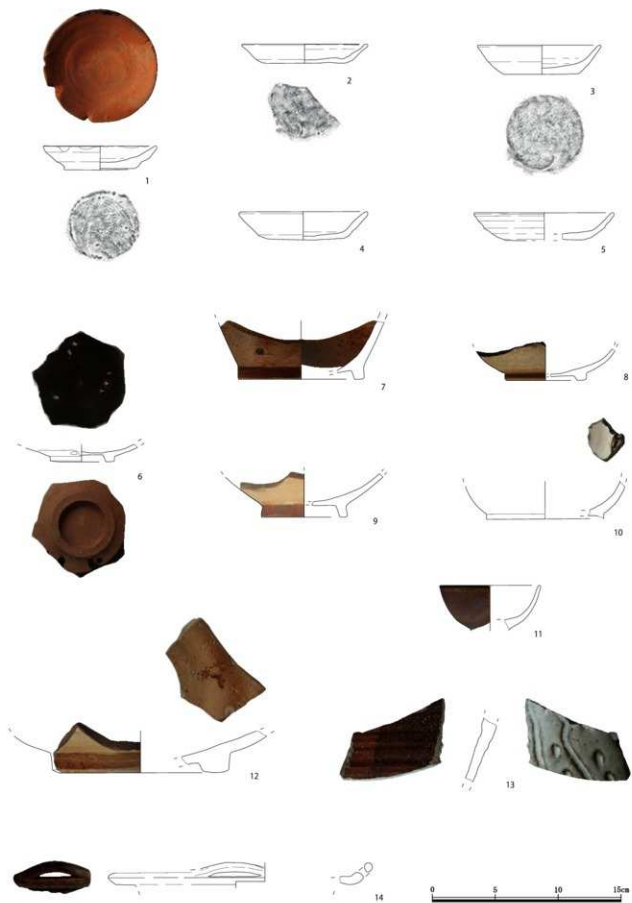
### ③近世マツ材橋

横3本を4列および、若干位置の異なる1本、計13本の橋脚を検出した。上面標高は現状で2.1~2.3m前後にあり、クリ橋脚より若干低い位置にある。横方向の3本は一直線上には乗り難く、直線と結ぶと橋に対して直交せず、やや傾斜する形となる。

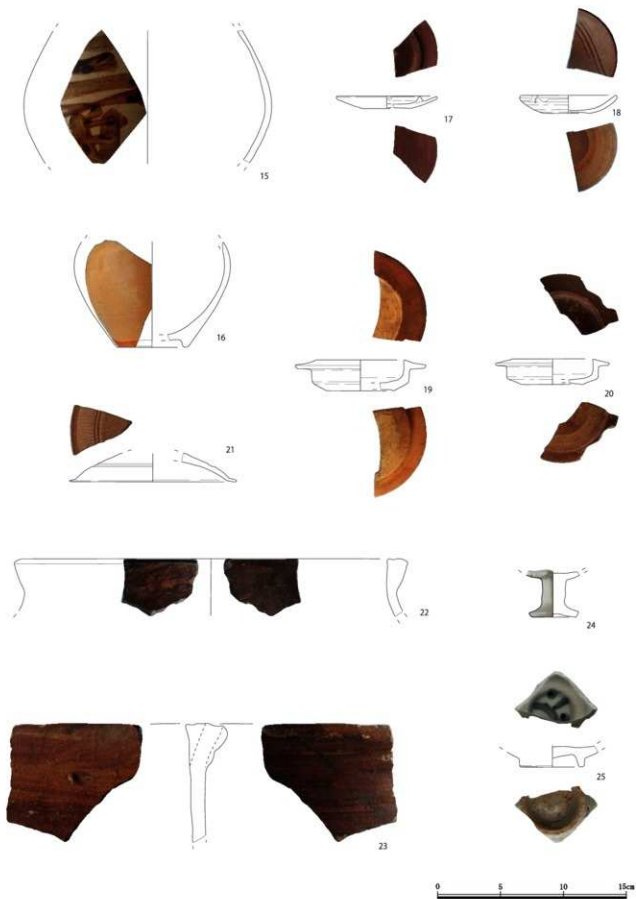
中央に残る2列間の距離は4.6m前後であり、両石垣寄りにある列より石垣天端までの距離もほぼ同様である。さらに、中央2列から左右の2列までの距離は9.0~9.2mとほぼ倍であるため、間には本来もう1列ずつがあったと推定でき、その場合6列の橋脚が復元できる。失われた2列はコンクリート橋台下に位置するとみられる。図に示した復元列は列幅4.5m前後の均等割りの場合であり、クリ材橋のように2列目と3列目の距離が短くなる場合も想定しなければならない。

いずれの橋脚も遺存状態が悪く上面辺縁部を中心に剥落するものが多いため、本来の面を確認できたのは僅かであったが、ホゾを持つものはみられない。柱26~28の比較的残りの良いものをみると上面は切断されたように平である。橋脚が破棄される際に切断された可能性がある。

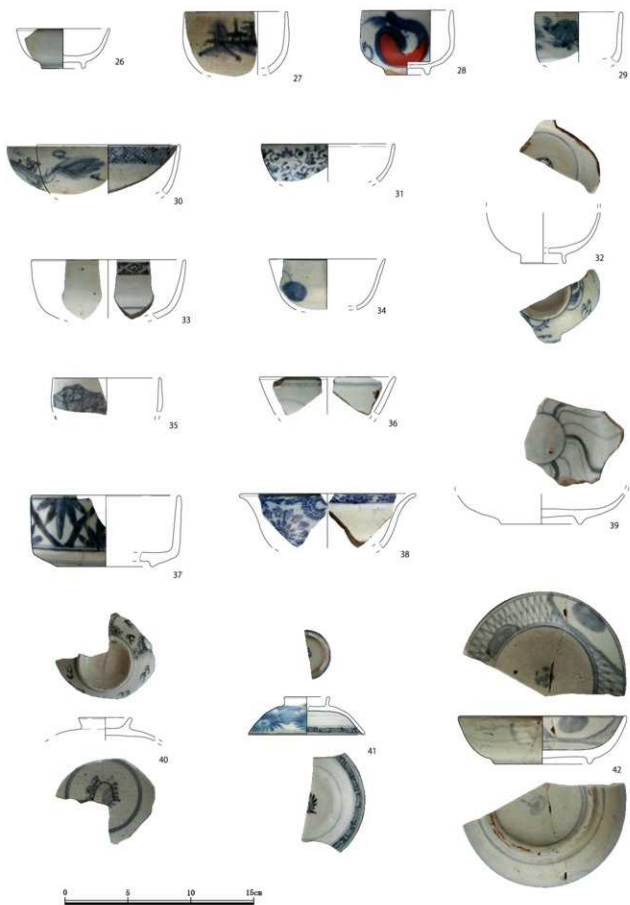
第1調査区で地表から1m近く掘り下げをおこなったが、橋脚の打ち込み面は残っていないかった。第



第63図 第28次調査出土遺物実測図1 (S=1/3)

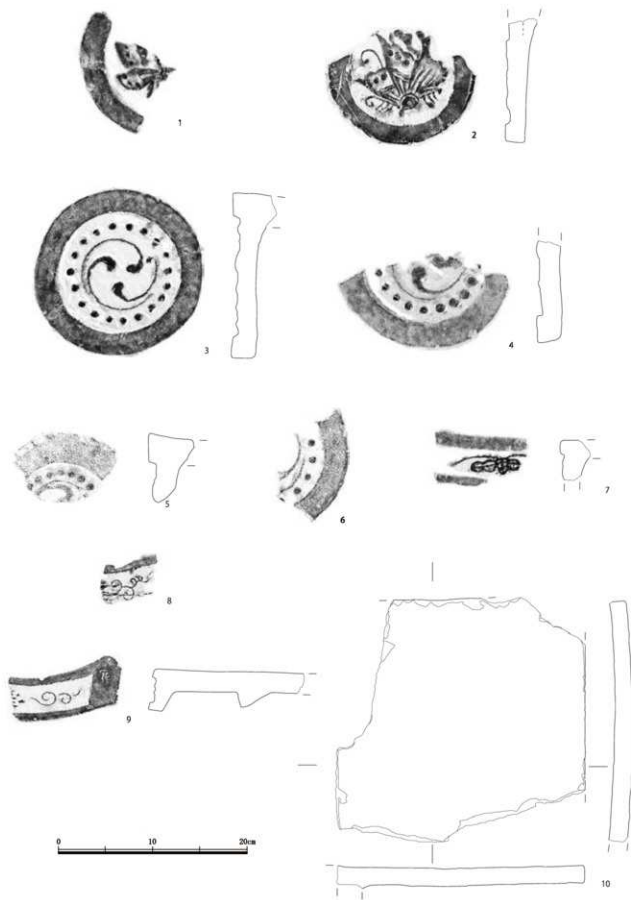


第64図 第28次調査出土遺物実測図2(S=1/3)

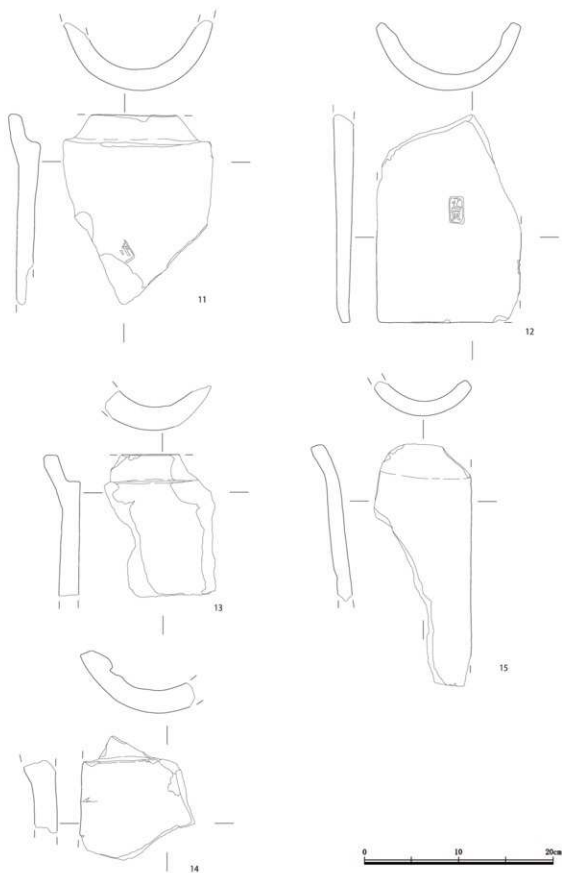


第65図 第28次調査出土遺物実測図3(S=1/3)

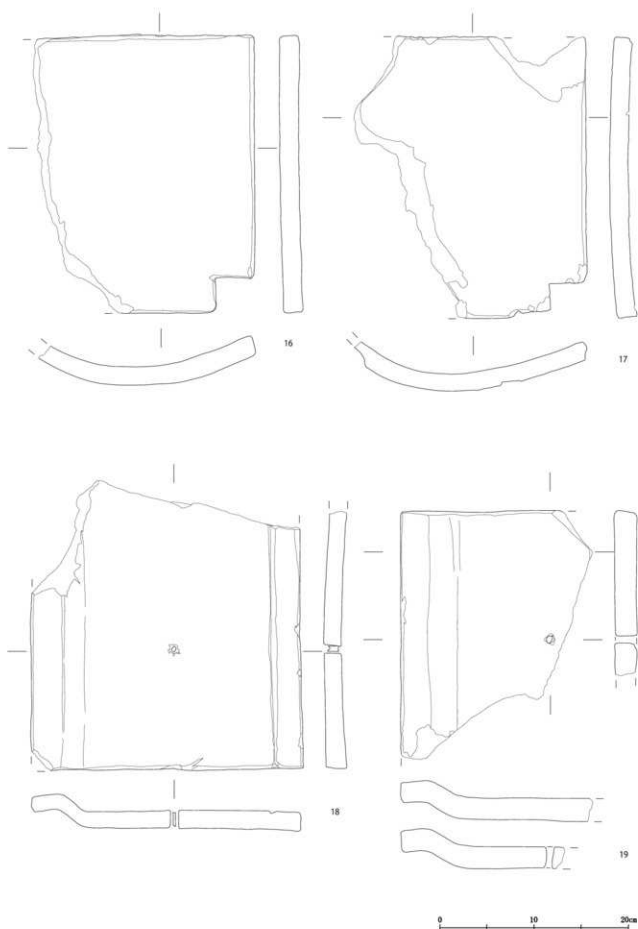




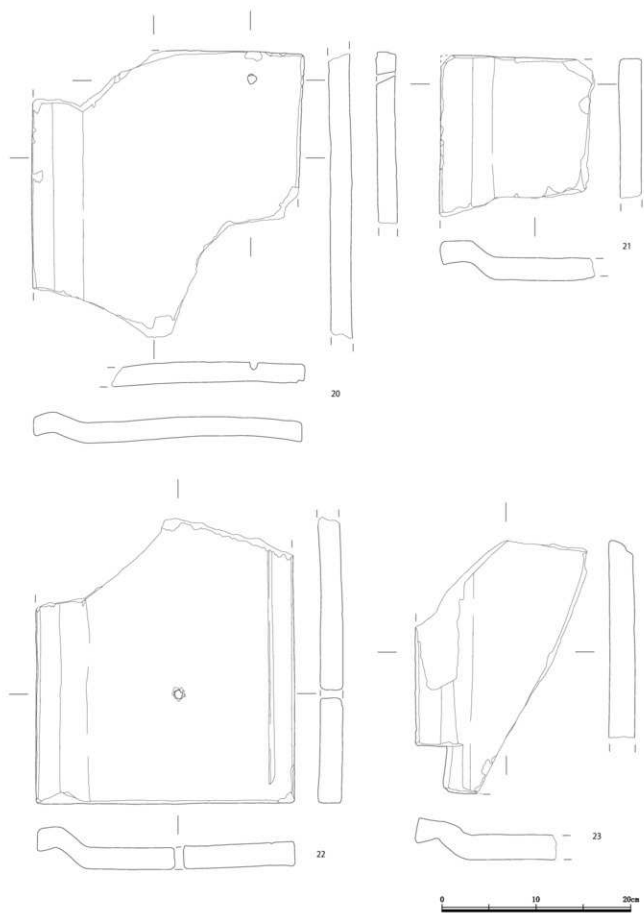
第66図 第28次調査出土遺物実測図4 (S=1/4)



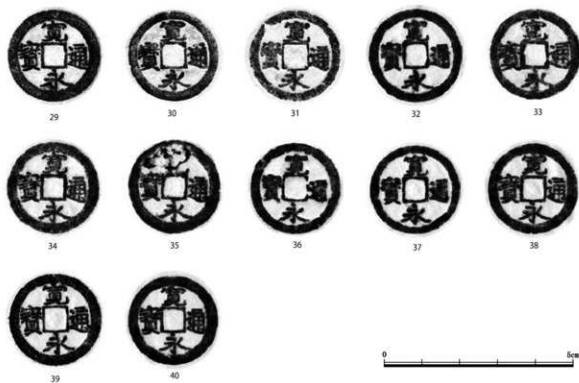
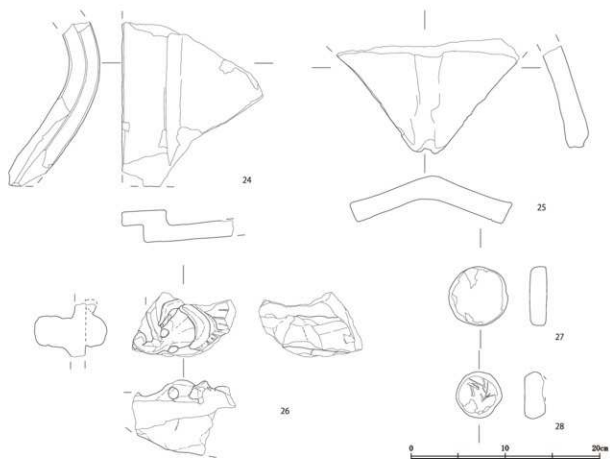
第67図 第28次調査出土遺物実測図5 (S=1/4)



第68図 第28次調査出土遺物実測図6(S=1/4)



第69図 第28次調査出土遺物実測図7(S=1/4)



第70図 第28次調査出土遺物実測図8(上S=1/4、下S=1/1)

1 調査区においては、掘削が橋脚設置以前の堆積層まで達したが、土層に変化は見られなかった。標高1.5m以上の場所より打ち込まれていることは分かるが、浸漬により滅失したものとみられる。第2調査区の場合はクリ材同様、打ち込み面が消失、或いはより深い位置からの打ち込み、もしくは堆積土中に土層の変化なく打ち込まれる、といった可能性が挙げられる。

## 4 出土遺物

調査区が堀内であるため、瓦の出土量も少なく、土器類も含め基本的に落下物とみられる。堀底には粘土が厚く堆積しているため、近世橋の部材とみられる板製品や橋の接合に用いられたとみられる銚や釘などの金属製品が良好な状態で遺存していた。

### ①土器類〔第63～65図〕

1～5は土師皿である。1はほぼ完形で底部は糸切り、口縁部に黒斑を有する。2と3は復元口径が9.7・9.8cmであり底部は糸切である。4・5は全体が磨滅するが、4については底部糸切りの痕跡らしきものがみられる。

6～23は陶器である。6～21は在地系である。6～10はいずれも底部資料で6は内面黒褐色である。10の外表面は暗灰色の胎土が露胎する。11は小杯。13は外面に波・点を施文する。14は耳部分。15は瓶で外面には文字が描かれる。16は瓶。17・18は灯明皿で17は暗赤褐色を呈す。18は内面に3本の欄目を持つ。19・20は蓋。中央に付いていたとみられる把手は残存していない。19は無軸で、20は外面無軸である。22・23は越前甕の口縁部片である。内面の刷毛目が顕著であり、22は頸部から外側に開く形で、23はまっすぐ下方へ伸びる形である。

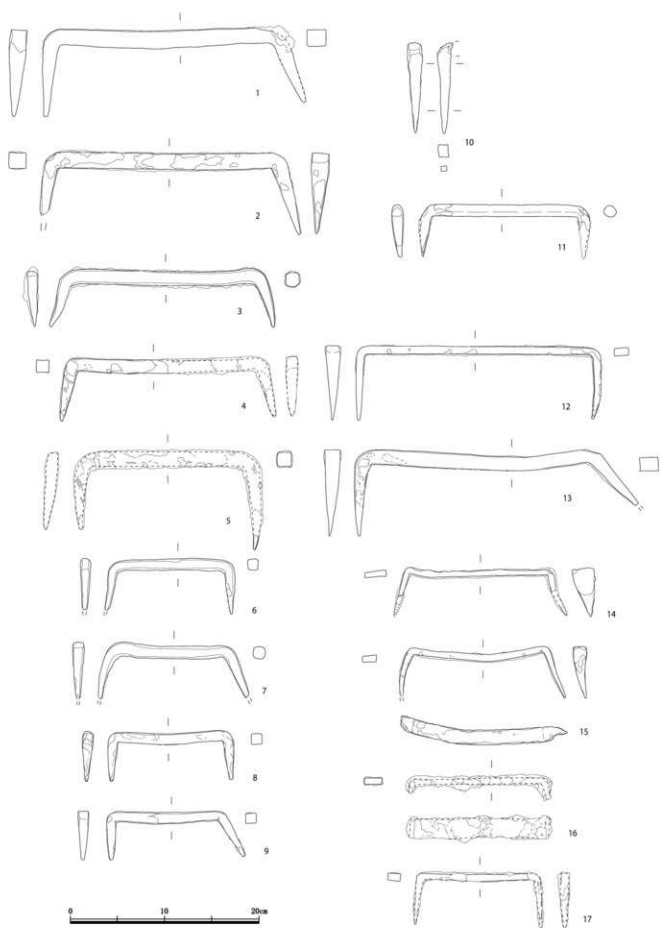
24～42は磁器である。24・28・38は在地系とみられ、それ以外は肥前系と考えられる。24は仏飯器であるが軒部を欠く。25は見込みに文様を持つ。26～38は碗である。26は無文。27は外面山水文。28は高台が露胎する。29は外面に花文。30は外面に雲龍文、口縁部内面には四方禪文。31は外面草花文。32は外面が雲龍文とみられ、見込みには圏線と環状松竹梅文の一部がみられる。33は内面に四方禪文と二重圏線。34は外面に葵文。35は外面に東屋が描かれる。37は筒型碗で外面には竹文。38は端反碗で花文を型紙擦する。39は皿で内面には振花文。40・41は蓋。40は外面雲龍文、内面は二重圏線と宝珠文が描かれる。41は外面に花文、内面は雷文帯と圏線、見込みに外面同様の花文らしきものがみられるが、欠損しているため不明である。42は皿で外面は唐草、内面は斜格子に丸が描かれ、二重圏線および見込みには五弁花、底裏は渦福文である。

### ②瓦〔第66～70図〕

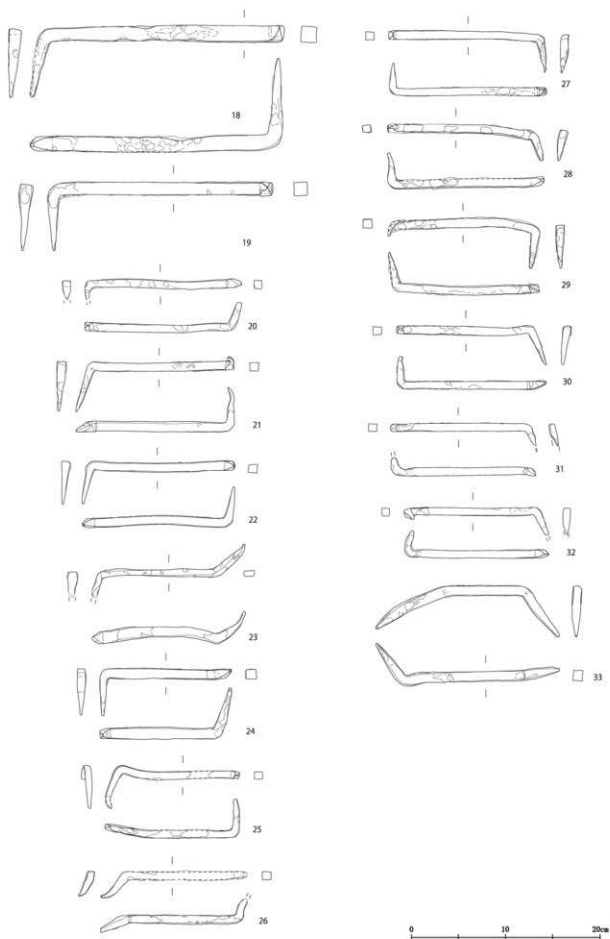
1～6は軒丸瓦である。1はB類である。右向きの蝶はこの類のみであり、翅の形などがC類以降と大きく異なり古相を呈する。2は新出の種類である。全体的な様相は1類に類似するが、顔の形や羽の反り等、若干異なる部分が見られる。1点のみの出土であるが現在のところ1類に含める。3～6は巴紋である。3～5は珠文を多く種類である。瓦当面が完形である3は珠文が19個あり、直径は19cmにもなる大型である。4・5は細片であるが3同様多くの珠文を持つとみられる。この珠文を多く持つ種類は古相とみられ、直径が16cm前後である揚羽蝶文より大きくなる。

7～10は軒平瓦である。7はc類である。左右に伸びる葉文を持つ種類であり、焼成は軟質である。8はo類である。9はq類であり正面右縁には「作」字の刻印を持つ。10は瓦当面が剥落したもので、長さは26.3cmである。

11～15は軒丸瓦である。11は外面の中央付近に「作」字の刻印を持つ。12は幅15.2cm、高さ7.1cmで

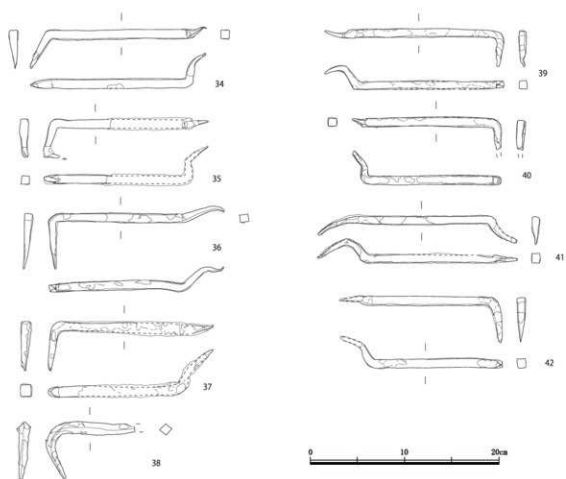


第71図 第28次調査出土遺物実測図9(S=1/4)

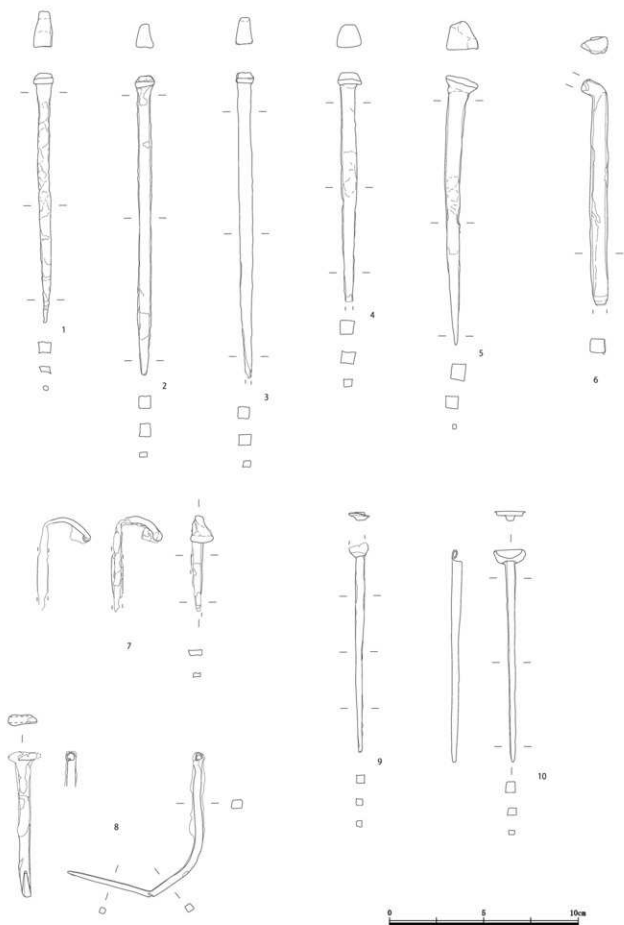


第72図 第28次調査出土遺物実測図10(S=1/4)

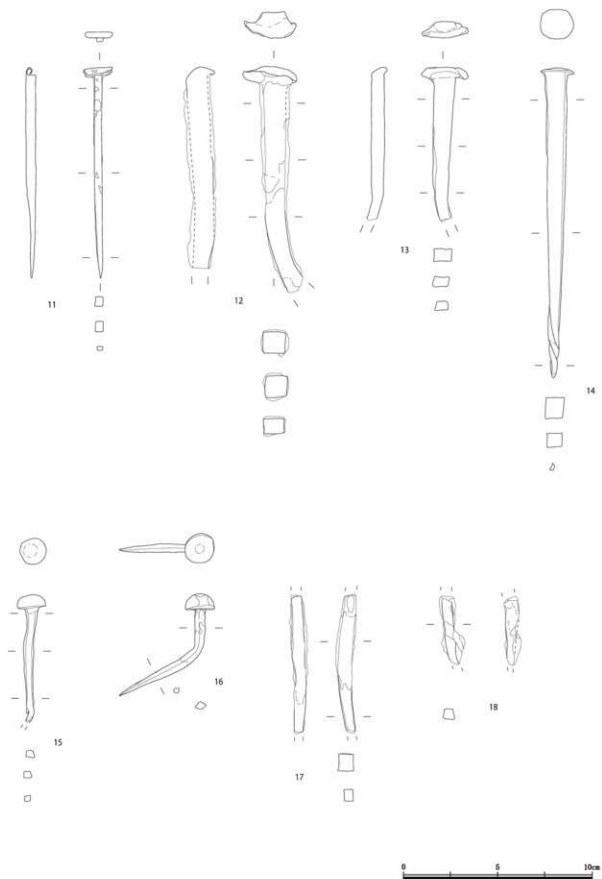




第73図 第28次調査出土遺物実測図11(S=1/4)



第74図 第28次調査出土遺物実測図12(S=1/2)



第75図 第28次調査出土遺物実測図13(S=1/2)

あり、外面中央に「文寅」の刻印を持つ。13・14は細片である。14は柱7の掘り方埋土からの出土である。15は形態が若干異なっており、幅が10cm程と狭く階段状の玉縁を有さず、スロープ状となる。16・17は棧瓦もしくは平瓦である。長さはともに29.7cm前後であり角部には切込みを持つ。断面形態は弧状を呈しており、片側が欠損することから棧瓦であった可能性が高い。18～23は棧瓦である。本体が平らな形態のものである。18は幅29cmであり、棧の対面には切込み線を持つ。中央の直径1cm程の孔の中には一辺5mm程度の角釘が残存している。19の中央部分には9mm程の孔がみられる。20は幅26.3cmであり、隅に近い位置に斜め方向の孔を穿つ。22は幅31.3cmであり、棧の対面には切込み線を持つ。23は棧側に切込みが施される。切込みは必ずしも施されるわけでもないと思われる。24は雁振瓦であり高さは9.6cmである。25は隅瓦である。26は鬼瓦片とみられる。上面には蝶を作り付けており、本資料はその顔部分にあたる。短い口吻を持ち、背面には棒状の粘土帯がみられる。軒丸、鳥衾瓦以外の窯文は例がなく、全形は不明である。焼成は軟質で、古相の瓦にみられる断面サンドイッチ状である。27・28は菊丸瓦の可能性のある円形状の瓦である。ともに側面は磨滅しているものの、直径は27は6.2cm、28が4.9cmである。

### ③ 銭貨

29～40は第4トレンチより出土した寛永通宝である。計12枚がほぼ近接した位置より出土した。直径はいずれも2.4cm前後である。

### ④ 金属製品

掘内の堆積土を中心として60もの金属製品が出土した。大半は鏝であり、粘土内に遺存していたため保存状態は良く、地金が残っている状態であった。

#### 鏝

鏝は形態より大きく3つに分かれる。①釘部は同一方向を向いた通常の状態、②手違い鏝と呼ばれる釘部の片方が上を向く状態、③手違い鏝のうち、先端部が折れた状態のものがある。②と③とは一連のものとも取られるが、本書では分けて掲載した。また、断面形態は方形が中心であるが、一部に長方形のもの、円形のものがある。各部の計測方法については27頁の通りである。

1～9については①としたコの字形の鏝で断面形状は方形のものである。1・2はほぼ同じ規格にあり、胴部の長さはそれぞれ、22.7cm、22.2cm、釘部の長さも欠損部分を考慮すると左右で7.5cmずつとほぼ同様である。断面形は1.8cmの方形で、今回検出した方形類中では最も厚い。3・4の胴長は19.0cm、18.7cmとほぼ同じである。釘長は5cm程度と長さに対してやや短い。4の断面形態はやや膨張気味の方形である。5はやや形が異なり16.1cmの胴長に対し、6.65cmと8.7cmと長さの異なる釘部が取りつく。6・7は木製品8、クリ材製の橋部材とみられる板材の両側面に打ち込まれていたもので、胴長11cm前後、釘長4～5cmとほぼ同じ規格である。断面形は直線的な方形ではなく、やや丸みを持つ方形である。続く8・9も同様の胴長であるが、断面形は角張った方形である。

10は釘部のみの残存であるため、本来の形態は不明であるが、釘長8.1cmと極めて長いのが特徴である。11は唯一の断面円形であり、胴長15.2cmと唯一の15cm台にある。出土が掘乱内であるため詳細は不明である。

12～16は断面長方形の鏝である。同じく長方形については手違い鏝中の24にも一例確認できる。12は胴長が23.5cmあり、胴部から直角に折れた釘部を持つ、胴部幅が8mmに対し厚さが16mmあり、断面比率は1:2となる。釘部の側面形状は細くシャープなつくりである。13は胴長が22.8cm、片側の釘部は外側に向かい開いている。片側の釘長は7.45cmであり、平面的な規格は1・2に近い。14は柱7の掘り方内より検出したものであり胴長14.3cm、胴部の幅は6mmに対し、厚みは2.5倍の15mmとなるため、釘部の

側面形状はかなりの厚みを持った三角形形状となる。15は全体的に歪みがみられる。16は堀内ではなく地上にあるトレンチ10での検出であり、土中にあったため錆跡が著しく、釘部を欠くが、幅/厚の断面比率は1:2.7となることから、14に近い形状であったと推定される。17は胴長11.6cmに対し、釘部の長さは5cm前後と長めである。

18~24は右手遣の籠である。18は胴長23.2cmで、釘長は6.8cm、8.05cmと大型の籠である。19は胴長20.8cmである。20は若干歪みがみられ、釘部の先端を欠く。21は胴長13.7cm、手遣いの釘部先端は若干湾曲する。22も胴長13.7cmで釘部はともに3.5cmである。23は胴部がやや湾曲しており、胴長は現状で11.5cm、断面形状は長方形形状であり、6mmの幅に対し、厚さは11mmである。24は胴長11.3cmに3.9cmと4.6cmという手遣側が若干長い形となる。25・26は胴長が11.3cm、11.2cmとほぼ同じ長さである。

27~33は左手遣の籠である。27は14.65cmの幅に対し釘部は短い。28は胴長14.2cmであり、釘部は短い。29は胴長13.8cmである。30・31はともに胴長13cmであり、31は釘部の先端を欠く。32は胴長12.65cmで釘部の端部を欠く。33は胴部の7.7cmほどで一旦曲がった後、釘部へと折れており、現状で胴長12.2cmを測る。

34~37、39~42は手遣いの籠のうち釘部先端が折れているものである。本来は手遣いであったものが、後に曲がったものであろうか。34~37は右手遣いであり34は胴長14.3cmで手遣い部の先端は僅かに曲がる。35・36はともに胴長が13cmである。13は両釘部とも先端が曲がっている。14は釘部の長ささほともと同じ様である。38は胴部の中位から釘部にかけての残存である。本体はかなりねじれた状態にあり本来の形は不明である。

39~42は左手遣いの籠である。39は胴長14.3cmで釘部の中位程で折れている。40・41はともに胴長12.6cmである。40は釘部の端部を欠いており、41は長めの釘部を大きく曲げている。42は胴長12cmである。

以上、42点の籠を胴長からみて行くと大きく20cm(5点)以上と15cm以下(29点)の2群に分かれる。

15cm以下のものについては14cm前後の中型と11cm前後の小型との2つのまとまりがあるとみられる。今後、釘部の長さや断面形態を含めた検討が必要である。

## 釘

1~18までの18点を検出した。1~5は皆折釘である。1は全長が13.2cmあり、釘頭は1.9cmと長い。2は全長15.8cm。3は先端部を欠くが、全長は16.2cmともしっかり長い。4・5は釘頭の長さが短く、代わりに横に長く、釘部より数ミリ外側へはみ出す。6は釘頭端部および、釘部の先端を欠く逆L字状の釘である。頭が若干外側へ開くため、皆折釘ではなく、折釘の可能性が高いと考えられる。

7~11は釘頭部分を薄板とし巻き込む頭巻釘・巻頭釘である。7・8は遺存状態が悪く、1は頭の下1.5cm程でL字に曲がる。2は先端へ向かい湾曲し、途中で折れる。9はほぼ完形であり、全長は11.25cmである。10・11は釘頭の幅が横に長い巻頭釘である。10は釘部の幅が狭く全長は11.3cmである。11も釘部の幅が5mm程度と狭く、全長は11.2cmである。

14は丸頭釘である。全長16.3cmであり、頭は厚さ2~3mm、直径1.6cm程度の円形である。釘部は根元付近で幅が1.1cm程もあり、先端部の3.5cmにはひねり加工が施されている。

15・16は鉋釘である。15の釘頭は直径1.5cm、厚さ7mmの円形である。断面は半円形を呈し、釘部は先端を欠くものの、長さは6.1cmである。16の釘頭も直径1.5cm厚さ8mmの円形である。断面も同じく半円形である。釘部は途中で折れているが、7.6cmの釘部が復元できる。

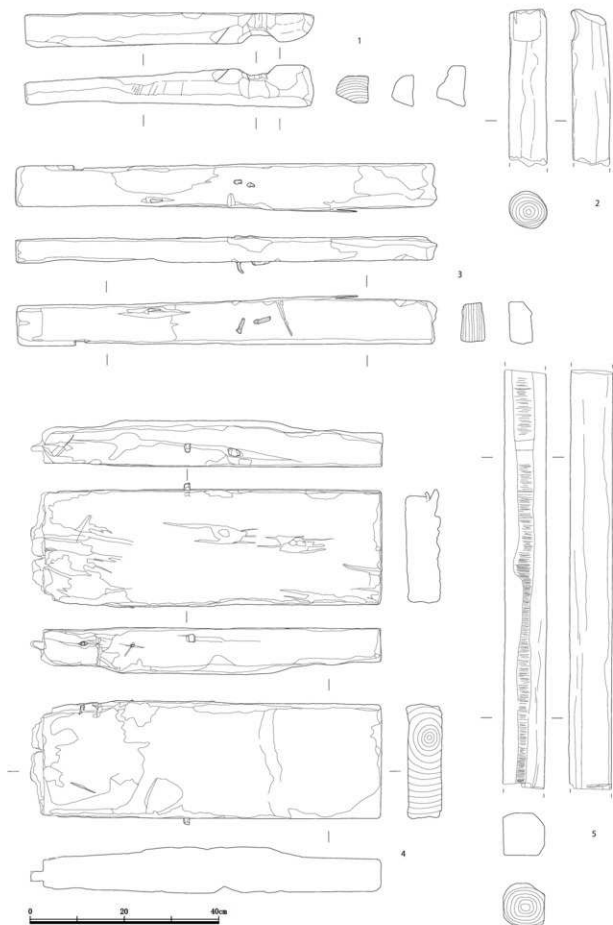
17は両端部を欠いている。やや膨らみのある中央部から両端部へ向かいやや細くなることから合釘の可能性はある。18は木製品3、堀底で見つかった橋部材とみられる板材に打ち込まれていたもので全体の大半を失っているようである。前端部の3.6cmを残すのみであり、全形は不明である。

#### ⑤木製品

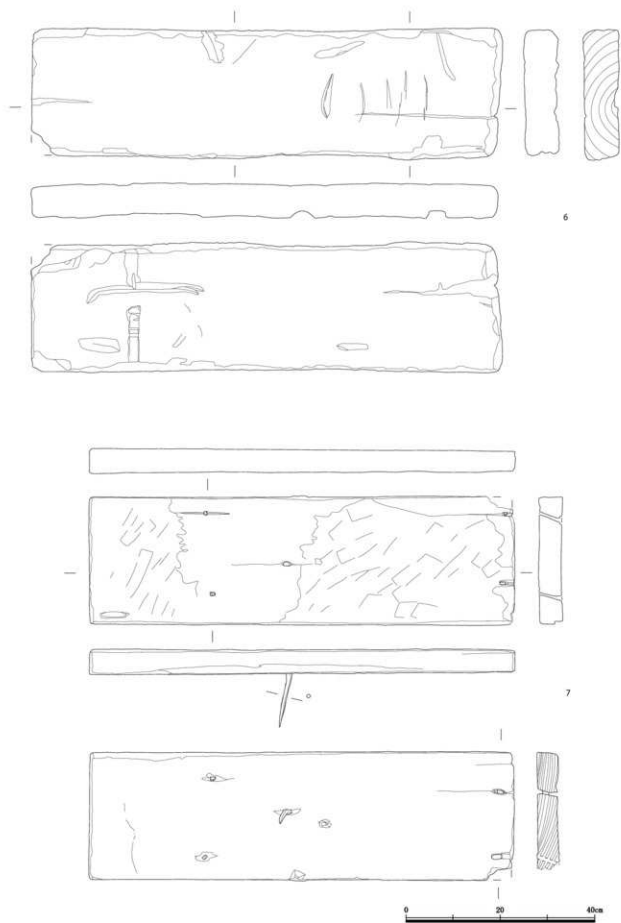
1はクリ材である。杭状の形態をしており、一部に窪みがみられる。2は石垣裾のトレンチ2の杭4本体である。樹種はクマノミズキで直径8cm、断面円形の杭で、上部に窪みを持つ。3は長方形のヒノキ材であり中央付近には釘が2本打ち込まれている。4は長さ74cm、幅34cmのクリ材である。図左端は全体的に欠損しているものの、組み合わせのためか、断面凸状に突起している。中央部の厚さ10cm程であるが、左右は大きく窪んでいる。本来、別の材と重なっていた部分が窪んだためとみられる。中央部の両側面には釘部で折れた鏝が残存しており、これらとは別に折れた釘が2本と、鏝が打ち込まれていたとみられる孔が1ヶ所残る。5は残存長89cmの断面方形のヒノキ材である。6は長さ100cm幅27cmの長方形のクリ材である。7は長さ77cm、幅23cm、厚さ5cmの長方形のヒノキ材である。中央部には長さ17cm程の釘が打ち込まれている。これとは別に釘孔とみられる孔が4ヶ所みられる。孔は材に対して垂直方向ではなく、斜め方向に打ち込まれており、1ヶ所については、内部に折れた釘の一部が残存している。8は長さ77cm、幅23cmの板材で、材質はクリである。図面右端部は、材の組み合わせのためか凹型に窪んでいる。両端部裏側は他材との重なりとみられる窪みがみられる。両側面の中央上部付近には上向きの鏝(第71図6・7)が打ち込まれていた。本来上面には別の材が乗っていたとみられる。9は長さ90cm、幅29cmのカヤ材である。中央付近には2本の釘が打ち込まれている。上面は長さ30cm程度の窪みがみられ、図面左側はコの字状に切り取られている。

10・11は下駄である。10は丸型の削り下駄で長さ21.4cmを測る。後歯はすり減っている。11は連歯下駄で長さ21.4cm、高さ5.8cmである。

12・13は漆器である。12の外面には揚羽蝶が描かれる。13は椀である。

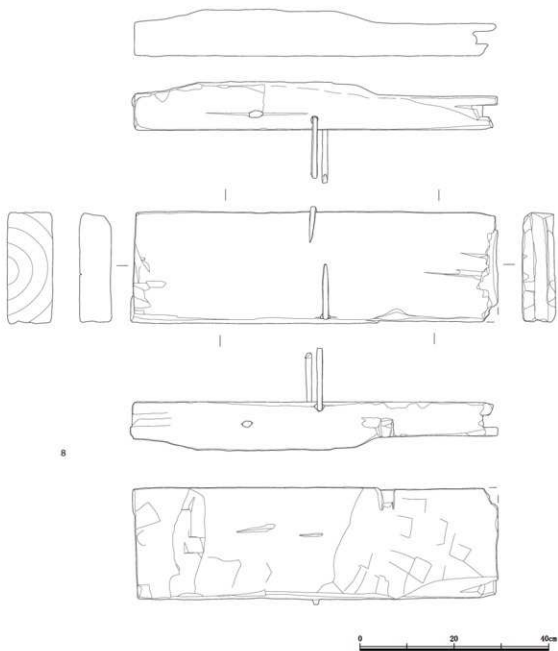


第76図 第28次調査出土遺物実測図14(S=1/8)

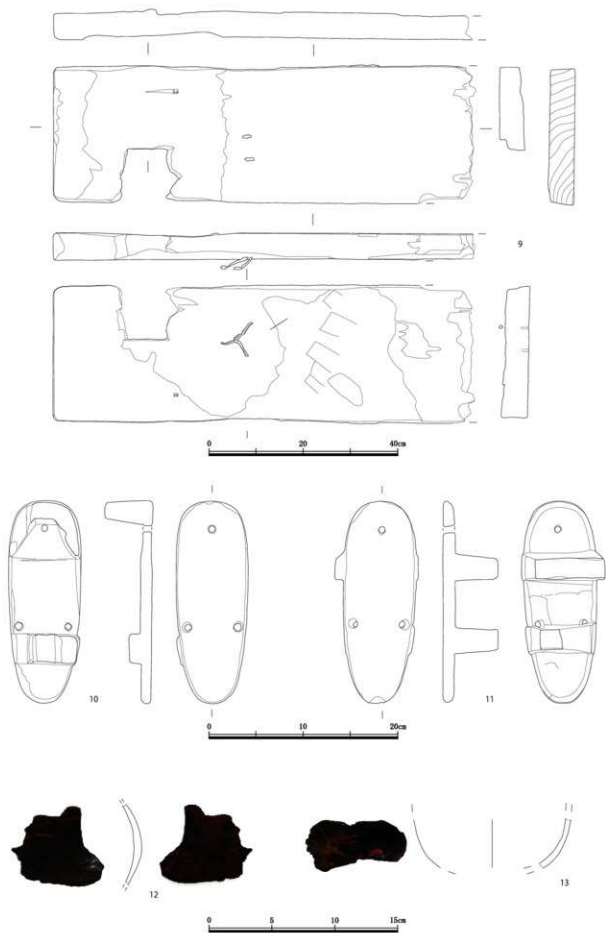


第77図 第28次調査出土遺物実測図15(S=1/8)





第78図 第28次調査出土遺物実測図16(S=1/8)



第79図 第28次調査出土遺物実測図17(上S=1/8、中S=1/4、下S=1/3)

出土地	番号	樹種	備考	厚み (cm)	上面高 (m)	幅×高 (cm)	断面形
Tr-1	胴木1	ニヨウマツ(マツ属複雑管東亜属)		15	2.22		角
Tr-1	胴木2	ヤマザクラ(サクラ亜属)		20	2.14		角
Tr-2	胴木3	クマノミズキ		18	1.98		丸
Tr-2	胴木4	イヌザンショウ		24	2.21		角
Tr-3	胴木5	イヌザンショウ		20	2.17		角
Tr-4	胴木6	ニヨウマツ(マツ属複雑管東亜属)		17	2.29		丸
Tr-4	胴木7	ブナ		15	2.60前後		?
Tr-5	胴木8	ニヨウマツ(マツ属複雑管東亜属)	枕木	17	2.60	18×14	角
Tr-5	胴木9	ニヨウマツ(マツ属複雑管東亜属)		18	2.70		丸
Tr-5	胴木10	ニヨウマツ(マツ属複雑管東亜属)		19	2.65~2.56		角(隅切)
Tr-5	胴木11	ニヨウマツ(マツ属複雑管東亜属)	枕木	8	2.60	18×14	角
Tr-5	胴木12	ニヨウマツ(マツ属複雑管東亜属)		12	2.30		板
Tr-7	胴木13	ヒノキ		20	2.41		丸?
Tr-7	胴木14	ヒノキ		17	2.41		角
Tr-8	胴木15	エノキ		26	2.12		角?

表11 第28次調査出土胴木(枕木含む)観察表

出土地	番号	樹種	備考	直径 (cm)	最高点 (m)	備考
Tr-1	杭1	ヤマビワ		8	2.18	
Tr-2	杭2	ニヨウマツ(マツ属複雑管東亜属)		8	2.04	
Tr-2	杭3	クマノミズキ		7	1.98	
Tr-2	杭4	クマノミズキ		8	2.15	上部折損
Tr-3	杭5	クリ		10	2.21	
Tr-4	杭6	クリ		10	2.22	
Tr-4	杭7	クリ	枕木	6	2.46	
Tr-4	杭8	—		8	2.60	樹皮
Tr-4	杭9	クリ	枕木	8	2.60	
Tr-4	杭10	モチノキ		6	(2.42)	上部欠損
Tr-4	杭11	コナラ節	枕木	6	2.45	
Tr-4	杭12	コナラ節		7	2.57	
Tr-5	杭13	ヒノキ		5	2.64	
Tr-5	杭14	—		8	2.78	
Tr-5	杭15	コナラ節		7	2.66	
Tr-7	杭16	クリ		8	2.69	
Tr-7	杭17	ニヨウマツ(マツ属複雑管東亜属)		7~8	2.41	
Tr-7	杭18	イヌザンショウ		8	2.31	
Tr-8	杭19	イヌザンショウ		10	2.10	
榾		クリ			2.86	

表12 第28次調査出土杭(枕木含む)観察表

第IV章 調査の結果

番号	器種	樹種	年輪	上面 標高	外縦	外横	内縦	内横	高さ	ほぞ					備考	
										外幅	外長	上幅	上長	高		
1	柱	スギ	34	2.80	28	24	24	22	62							補助的
2	柱	スギ	43	2.91	27	25	21	18	34							補助的
3	柱	クリ	—	2.26	22	20	16	14	53							補助的、上面欠損
4	柱	クリ	45	2.33	36	34	32	30	16							圧痕あり
5	柱	ツガ	138	2.40	34	34	32	32	23	17		16	8	8		角材
6	柱	クリ	49	2.30	30	28	26	24	13							
7	柱	クリ	22	2.37	32	30	30	26	18	24	12	24	8	8		
8	柱	クリ	25	2.29	28	28	26	26	3							
9	柱	クリ	54	2.36	38	32	35	30	9	2	1	16	10	8		
10	柱	ニヨウマツ	21	2.29	28	26	27	24	13							
11	柱	ニヨウマツ	16	2.40	34	28	24	20	114							
12	柱	ニヨウマツ	23	2.44	32	30	28	24	15							
13	柱	ニヨウマツ	95	2.76	34	34	34	32	55	20	6	19	3	5		8角形状
14	柱	ニヨウマツ	62	2.72	48	38	36	32	50							上部切断
15	柱	ニヨウマツ	100	2.71	40	36	32	30	44							上部切断
16	柱	クリ	48	2.68	36	28	33	20	58	21	4				39	
17	柱	クリ	30	2.15	32	26	26	24	39	17	9	14	7	5		
18	柱	ヤナギ属	—	2.35	24	24	20	18	52							補助的
19	柱	クリ	30	2.43	40	27	22	16	60							上部折損
20	柱	ヒノキ	20	2.61	48	21	19	12	82							傾倒
21	柱	クリ	—	2.45	54	32	26	20	30							傾倒
22	柱	スギ	—	2.19	74	26	22	10	32							傾倒
23	柱	クリ	78	2.44	26	22	22	16	26	(5)	(17)	(4)	(16)	5		欠損
24	柱	クリ	42	2.63	32	31	24	18	48							
25	柱	クリ	25	2.15	42	35	38	32	4							
26	柱	ニヨウマツ	28	2.19	34	34	32	30	9							内転び
27	柱	ニヨウマツ	24	2.36	30	28	22	22	85							
28	柱	ニヨウマツ	25	2.22	31	30	30	30	10							
29	柱	クリ	—	2.60	40	30	28	22	49							内転び
30	柱	ツガ	27	2.39	30	30	26	20	22							
31	柱	ニヨウマツ	60	2.74	38	36	34	30	61							ほぞ剥落か
32	柱	ニヨウマツ	46	2.75	43	36	36	34	135							ほぞ剥落か
33	柱	ニヨウマツ	46	2.70	42	34	34	30	54							ほぞ剥落か
34	柱	クリ	63	2.43	46	44	42	36	35	16	10	13	8	6		内転び
35	柱	クリ	39	2.42	38	34	32	28	106	13	10	12	9	6		上面に総33
36	柱	クリ	41	2.38	28	24	25	24	25	26	9	24	9	3		
37	柱	クリ	—	2.43	46	44	40	39	36	20	9	18	8	8		内転び
38	添柱	クリ	13	2.32	14	14	13	12	24							添柱
39	添柱	クリ	—	2.29	16	16	14	13	12							添柱
40	柱	ニヨウマツ	40	2.30	38	38	34	33	21							内転び

表13 第26次調査出土柱観察表1

41	柱	ニヨウマツ	35	2.43	32	30	30	30	39											
42	柱	ニヨウマツ	39	2.44	42	33	35	34	37											内転び
43	添柱	クリ	16	2.24	26	14	11	10	80											添柱、傾斜
44	柱	クリ	43	2.38	30	31	28	24	31											
45	柱	クリ	40	2.43	42	36	31	28	34	12	9									(2)
46	柱	クリ	59	2.39	40	38	32	32	35	30	8	24	6	2						内転び
47	柱	クリ	60	2.43	30	24	25	21	31	(14)	8	(12)	7	4						
48	柱	クリ	60	2.43	34	34	27	27	30	(10)	8	(9)	5	6						
49	添柱	クリ	16	2.24	16	15	12	10	20											添柱
50	添柱	クリ	20	2.11	14	14	12	12	6											添柱
51	添柱	クリ	16	2.38	18	13	13	12	26											添柱
52	柱	ニヨウマツ	61	(2.12)	34	32	31	31	3											切断
(52)	柱	ニヨウマツ	61		37	37	34	34	52	24	6	20	5	6						切削
53	柱	ニヨウマツ	41	2.48	40	30	31	28	38											切断
54	柱	ニヨウマツ	65	(2.13)	37	31	34	28	3											切断
(54)	柱	ニヨウマツ	65		34	37	32	34	65	22	6	20	5	6						切削
55	柱	ニヨウマツ	45	2.33	36	35	37	30	24											上面欠損
56	柱	ニヨウマツ	31	2.24	33	30	32	28	14											上面欠損
57	柱	クリ	43	2.02	23	22	21	20	21											芯持角材
58	柱	クリ	71	2.34	37	34	34	29	24	14	8	(5)	7	3						ホゾ一部欠損、内転び
59	柱	クリ	60	2.38	28	28	26	24	22	12	11	8	9	5						
60	柱	クリ	63	2.40	38	34	33	29	41	16	9	15	7	5						
61	添柱	クリ	50	2.31	16	12	14	11	22											添柱、4分割材
62	柱	クリ	—	1.60	12	12	11	10	27											上部切断、添柱
63	柱	ニヨウマツ	—		36	16	30	14	15	12	7									削取
64	柱	クリ	—	1.69	22	21	17	17	34											上部切断、削取、添柱か
65	柱	クリ	—	1.70	47	23	42	22	37											上部切断
66	添柱	クリ	—	2.72	66	21			50											添柱か 傾斜
67	柱	クリ	—	2.09	35	32	30	26	22											
68	柱	ヒノキ	—	2.08	38	23	31	12	24											1/2欠損
69	柱	ニヨウマツ	—	2.02	32	28	30	27	10											上面欠損

※本来の立った状態に復元しての計測

表14 第28次調査出土柱観察表2

番号	出土地	層序	文様	種類	器種	器高	口径	底径	高台高	高台径	備考
1	廃土中			土師皿		1.9	8.8	5.7			未きり
2	1区	掘下付中		土師皿		1.5	(9.8)	(6.4)			未切り
3	表採	陶西側		土師皿		2.3	(9.7)	6.0			未切り
4	1区	掘下付中		土師皿		2.2	(10.0)	(7.0)			未切りか
5	Tr-3	1層		土師皿		△2.2	(10.7)	(6.3)			
6	表採			陶器	(底部)	△1.4			0.4	5.1	在胎系
7	Tr-11	埋土		陶器	(底部)	△4.6			1.0	(10.0)	在胎系
8	Tr-11	埋土		陶器	(底部)	△2.5			0.6	(6.6)	在胎系
9	Tr-11	埋土		陶器	(底部)	△3.5			0.9	(6.8)	在胎系
10	3区Tr-1	埋土		陶器	碗	△2.9				(11.4)	在胎系
11	Tr-8	1層		陶器	杯	△3.6	(7.8)				?
12	1区Tr-2	埋土		陶器	(底部)	△3.3			1.6	(14.0)	在胎系
13	Tr-9	2層		陶器	鉢?	△5.4					在胎系
14	Tr-8	1層		陶器	(4)	△2.0	(20.2)				在胎系
15	1区	掘下付中		陶器	瓶	△10.0					在胎系
16	Tr-10	2～3層		陶器	瓶	△8.3	(5.6)				在胎系
17	1区	掘下付中		陶器	灯明皿	0.8	(8.0)	(4.0)			在胎系
18	Tr-8	攪乱		陶器	小皿	1.4	(7.6)	(3.4)			在胎系
19	Tr-10	2～3層		陶器	蓋	△2.4	(7.1)	(5.3)			在胎系
20	Tr-11	埋土		陶器	蓋	△2.0	(6.4)	(4.8)			在胎系
21	Tr-10	2～3層		陶器	鉢	△2.2	(13.2)				在胎系
22	1区	掘下付中		陶器	碗	△4.5					越胎系
23	Tr-10	2～3層		陶器	碗	△8.8					越胎系
24	1区	掘下付中		磁器	仏飯器	△3.6			0.7	底径3.9	越胎系?
25	2区	掘下付中		磁器	(底部)	△1.6		3.5		(5.1)	肥胎系
26	Tr-8	1層		磁器	小碗	3.1	(7.4)		0.5	(3.6)	肥胎系
27	表採		外)東照山水文	磁器	小碗	△4.9	(8.0)				在胎系
28	石垣際間			磁器	小碗	5.1	(7.2)		0.6	(3.4)	在胎系?
29	Tr-11	埋土		磁器	小碗	△3.9	(6.6)				肥胎系
30	1区	掘下付中		磁器	碗	△3.9	(11.0)				肥胎系
31	1区Tr-2	粘砂	外)雲龍文、内)四方髹文	磁器	碗	△4.0	(10.4)				肥胎系
32	Tr-11	埋土	外)雲龍文、内)環状松竹梅文	磁器	小碗	△4.0			0.7	(3.6)	肥胎系
33	Tr-7	砂粘層	内)四方髹文	磁器	碗	△4.7	(12.0)				肥胎系
34	Tr-11	埋土	外)葵文	磁器	小碗	△4.0	(9.0)				肥胎系
35	Tr-3	粘砂	外)山水文	磁器	小碗	△2.7	(8.2)				肥胎系
36	1区Tr-2	粘砂		磁器	碗	△3.0	(10.6)				肥胎系
37	Tr-11	埋土	外)竹	磁器	筒形碗	5.7	(11.6)	(7.6)			肥胎系

表15 第28次調査出土遺物観察表1

番号	出土地	層序	文様	種類	器種	器高	口径	底径	高台高	高台径	備考
38	Tr10	2~3層		磁器	碗	△4.2	(13.8)				在馬系?、型底探
39	表採	東西側	内) 盛花文 外) 雲龍文、内) 宝珠文	磁器	皿	△2.4			0.4	(6.5)	肥前系、型底探
40	Tr5	1層	外) 盛花文、内) 雷文帯 見) 花文?	磁器	蓋	△1.8			0.9	4.2	肥前系
41	Tr11	埋土		磁器	蓋	3.0	(9.2)		0.7	(3.6)	肥前系
42	Tr10	2~3層	外) 唐草、内) 斜格子に丸、 見) 五弁花(コンニャク印刷)、底外) 渦輪	磁器	皿	3.8	(13.0)		0.4	(7.6)	肥前系

番号	出土地	層序	分類	器種	刻印	最大長	最大幅	最大厚	a	b	c	d	e	f	g	h
1	1 区柱5・6間		B	軒丸瓦		13.1	10.7	3.4	(13.1)	(11.2)		2.1				
2	2 区柱28間辺		I 断	軒丸瓦		17.6	18.3	4.8	17.4	12.9	11.0	2.6				
3	1 区溝		巴	軒丸瓦		9.7	17.8	2.3	(9.6)	(7.0)	(4.4)		2.2			
4	表採		巴	軒丸瓦		7.6	6.9	4.9	(7.3)	(4.3)						
5	3 区		巴	軒丸瓦												
6	1 区		掘下/中	軒丸瓦												
7	Tr7		砂粘層 c	軒平瓦		4.2	10.3	3.2	(4.2)	(2.8)					3.2	
8	1 区Tr3		粗点 o	軒平瓦	[作]	16.4	15.0	4.5	4.5	2.7	1.4	2.1	1.6	3.7	16.4	3.7
9	石垣隙間		q	軒平瓦		25.9	26.3	7.5	(25.9)	(26.3)			(0.4)	0.5	2.0	
10	表採			棧瓦		20.1	15.9	2.5	(20.1)	(15.9)	2.6	13.2	7.5	2.2	5.4	
11	表採			丸瓦		21.9	15.2	7.1	(21.9)	(15.2)			7.1	1.8		
12	表採			丸瓦	[文裏]											
13	表採			丸瓦		15.0	11.6	5.3	(15.0)	(11.6)	2.9	(9.3)	5.3	2.5	2.9	
14	1 区Tr1	4層		丸瓦		13.1	12.1	6.6	(13.1)	(12.1)	2.7	(5.9)	6.6	2.4		
15	Tr2	1層		丸瓦		25.5	20.3	4.8	25.5	10.3	3.3	9.6	4.8	1.7	1.6	
16	表採			棧瓦		29.5	23.4	5.1	29.5	(23.4)	(10.4)	3.2	1.9	4.2	3.8	
17	表採			棧瓦		29.8	24.6	5.2	29.8	(24.6)	(10.0)	(3.3)	1.9			
18	表採			棧瓦		25.6	28.9	3.9	(25.6)	28.9			2.0	1.8	2.0	Φ1
19	石垣隙間			棧瓦		26.3	20.3	4.3	(26.3)	(20.3)			1.9	1.8	2.4	
20	表採			棧瓦		31.5	28.8	3.3	(31.5)	28.8			1.1	1.2	2.1	
21	表採			棧瓦		17.0	16.4	4.2	(17.0)	(16.4)			2.0	1.8	2.4	
22	1 区Tr3	粗点		棧瓦		31.3	28.3	4.7	(31.3)	28.3			2.5	2.3	2.7	
23	Tr4	1層		棧瓦		26.8	18.2	4.4	(26.8)	(18.8)	5.1	3.3	4.4	1.8	2.7	1.0(Φ0.8)
24	Tr4	1層		無掘瓦		14.9	17.3	9.6	(14.9)	(17.3)	9.6	6.4	3.2	1.5	5.0	
25	Tr4	1層		丸瓦		12.0	19.2	5.3	(12.0)	(19.2)			2.5	2.8	2.5	1.2(Φ0.6)
26	1 区		掘下/中	丸瓦		10.9	6.9	7.9	長6.9	幅10.9	厚7.9					
27	表採			菊丸?		6.2	6.3	1.8	長6.2	幅6.3	厚1.8					
28	1 区		掘下/中	菊丸?		4.9	4.8	2.2	長4.9	幅4.8	厚2.2					

表16 第28次調査出土遺物観察表2

番号	出土地	層序	器種	種類	最大長	最大幅	最大高	a	b	c	d	e	f	g	h	i	備考
1	1区	掘り下中	鏡		27.4	8.6		27.4	8.6		22.2	(5.2)	7.5	1.8	1.8		
2	2区	掘り下中	鏡		28.3	9.5		28.3	9.5		22.7	7.7	7.2	1.8	2.0		
3	2区Tr		鏡		24.0	6.0		24.0	6.0		19.0	4.8	4.8	1.5	1.5		
4	2区	掘り下中	鏡		23.0	6.5		23.0	6.5		18.7	5.5	5.0	1.3	1.3		
5	2区Tr1	6層	鏡		20.1	10.3		20.1	10.3		16.1	6.7	8.7	1.5	1.5		木製品8より取り外し
6	2区Tr1	6層	鏡		13.7	5.8	1.3	13.7	6.8		11.2	4.0	4.5	1.2	1.1		
7	2区Tr1	6層	鏡		15.9	6.0	1.4	15.9	6.0		10.9	5.0	5.0	1.3	1.3		
8	2区表上下	粘土層	鏡		13.4	5.4	1.2	13.4	5.4		10.9	4.2	4.2	1.2	1.2		
9	1区表上下	粘土層	鏡		14.5	5.1		14.5	5.1		10.6	4.0	4.0	1.0	0.8		
10	1区Tr1	砂層 粘砂	鏡			9.5	1.6					8.1					釘部分のみ
11	1区Tr2	泥乱土中	鏡		18.1	5.5		18.1	5.5		15.2	4.4	4.4	1.2	1.3	丸	
12	2区Tr1	6層	鏡		26.2	7.9		26.2	7.9		23.5	6.9	6.5	0.8	1.7	長方形	
13	1区Tr2	泥乱土中	鏡		29.5	9.1		(29.5)	9.1		22.8	7.5	(6.7)	1.4	2.0		
15	1区	掘り下中	鏡		18.4	5.1		18.4	5.1		14.3	4.7	4.6	0.6	2.1	長方形	
14	1区Tr1	19層	鏡		17.5	5.4	3.0	17.5	5.4		13.7	(4.6)	5.3	0.6	1.5	長方形	柱7堀方内
16	Tr10	2~3層	鏡		(14.5)	(2.4)	(1.9)	(14.5)	(2.4)		(13.2)	(1.1)	(1.7)	0.7	1.9	長方形	
17	濠掘削中	粘土層	鏡		14.1	5.8		14.1	5.8		11.6	4.8	5.1	0.8	1.3	長方形	
18	2区	掘り下中	鏡	右手遣	27.0	6.8	10.1	27.0	6.8		23.2	6.3	8.1	1.7	1.8		
19	1区	掘り下中	鏡	右手遣	23.9	7.2	7.2	23.9	7.2		20.8	5.5	5.6	1.4	1.3		L=2.2~2.4
20	2区表上下	粘土内	鏡	右手遣	16.6	2.2	3.2	16.6	2.2		14.2	(1.5)	(2.4)	0.9	0.9		
21	1区	掘り下中	鏡	右手遣	16.6	5.7	4.7	16.6	5.7		13.7	4.8	2.6	1.3	0.9	0.9	
22	2区Tr1	1層	鏡	右手遣	16.3	4.6	4.3	16.3	4.6		13.7	3.8	3.5	1.0	1.0		
23	2区Tr1	4 or 6層	鏡	右手遣	16.0	5.5	1.3	16.0	5.5		11.5	(2.1)	3.2	0.6	1.1		
24	2区Tr1	1層	鏡	右手遣	14.2	5.5	4.9	14.2	5.5		11.3	3.1	3.9	4.6	1.0	1.1	
25	1区	近代堆積土	鏡	右手遣	14.3	4.5	4.1	14.3	4.5		11.3	3.1	3.9	3.3	0.8	0.9	
26	1区	近代堆積土	鏡	右手遣	15.6	2.8	3.5	15.6	2.8		11.2	2.6	1.0	(2.0)	0.8	0.9	
27	2区Tr1	柱35上	鏡	左手遣	16.6	4.5	3.5	16.6	4.5		14.7	2.7	3.2	0.9	0.9		上面にのる
28	1区	掘り下中	鏡	左手遣	16.4	3.8	3.8	16.4	3.8		14.2	2.9	2.4	0.7	0.9		
29	1区	掘り下中	鏡	左手遣	15.9	5.2	4.6	15.9	5.2		13.8	3.5	3.7	0.9	1.0		
30	2区	掘り下中	鏡	左手遣	15.9	4.1	3.6	15.9	4.1		13.0	2.6	3.7	0.8	0.9		
31	1区Tr1	7層	鏡	左手遣	15.2	2.2	2.0	15.2	2.2		13.0	(1.2)	(1.9)	0.8	0.9		L=1.9m
32	1区Tr2	泥乱土中	鏡	左手遣	15.2	2.9	2.8	15.2	2.9		12.7	(2.0)	2.4	0.8	0.8		

表17 第28次調査出土遺物観察表3



表18 第28次調査出土遺物観察表4

番号	出土地	層序	器種	種類	最大長	最大幅	最大高	a	b	c	d	e	f	g	h	i	備考
33	1区	掘り下付中	鏡	左手遣	19.4	5.4	4.5	19.4	5.4	12.2	4.6	6.7	1.0	0.7			
34	3区Tr1	埋土	鏡	右手遣	18.7	4.4	3.7	18.7	4.4	14.3	3.8	3.4	1.0	0.9			
35	1区	掘り下付中	鏡	右手遣	17.3	4.2	4.0	17.3	4.2	13.0	(2.7・1.3)	1.9・2.6	0.8	0.8	0.8	0.8	長方形
36	表採		鏡	右手遣	18.5	6.6	2.6	18.5	6.6	13.0	4.8	2.7*2.2	0.8	0.9			
37	2区Tr1	1層	鏡	右手遣	17.4	5.2	5.1	17.4	5.2	12.5	4.2	5.1	1.2	1.2			
38	1区表上下	粘土層	鏡		9.5	6.0	1.4	(9.5)	6.0	(7.7)	2.2・3.5	1.0	0.9				
39	2区表上下	粘土層	鏡	左手遣	18.9	4.0	2.7	18.9	4.0	14.3	3.1	2.5・2.3	0.9	0.9			
40	1区Tr3	1層	鏡	左手遣	15.8	3.4	3.6	15.8	3.3	13.1	1.15*1.8	(2.3)	0.8	0.9			
41	1区	掘り下付中	鏡	左手遣	21.0	2.8	2.7	21.0	2.8	12.6	2.5・3.7	3.6	0.8	1.0			
42	1区Tr1		鏡	左手遣	17.1	4.9	3.4	17.1	4.9	12.0	2.3・2.1	3.9	0.9	0.9			
1	1区	掘り下付中	釘	皆折	13.2	1.0	2.0	13.2	1.0	0.7	12.6		0.7	0.6	0.9*1.5		
2	1区	掘り下付中	釘	皆折	15.8	1.1	1.5	15.8	1.1	0.8	15.3		0.7	0.7	1.3*1.0		
3	1区	掘り下付中	釘	皆折	16.2	0.9	1.4	(16.2)	0.9	0.7	(15.6)		0.6	0.6	1.4*0.9		
4	1区	近代堆積土	釘	皆折	12.1	1.2	1.2	12.1	1.3	0.8	11.5		0.8	0.8	1.2*1.2		
5	2区Tr2	1層	釘	皆折	14.3	1.8	1.5	14.3	1.7	1.0	13.6		0.8	0.8	1.7*0.8		
6	2区	掘り下付中	釘	皆折	12.1	1.5	0.9	(12.1)	(1.4)	(11.1)	(0.7)		0.8	0.7			
7	1区	掘り下付中	釘	頭卷	5.1	1.2	2.7	(6.9)	1.2	0.6	(6.0)		0.6	0.5	1.9*1.0		
8	2区	掘り下付中	釘	頭卷	8.3	1.5	7.1	復13.7	1.5	0.6	復13.2		0.5	0.4	1.5*1.6		
9	2区Tr1	2層	釘	頭卷	11.3	1.0	0.4	11.3	1.0	0.5	10.5		0.5	0.4	1.0*0.5		
10	1区Tr1	埋土	釘	巻頭	11.3	1.7	0.6	11.3	1.7	0.7	10.7		0.5	0.6	1.6*0.2		
11	3区Tr1	埋土	釘		11.2	1.5	0.5	11.2	1.5	0.6	10.8		0.5	0.6	1.4*0.3		
12	2区	掘り下付中	釘		12.0	3.1	1.4	(12.0)	3.1	1.6	(11.1)		1.5	1.4	2.8*1.3		
13	2区Tr1	1層	釘		8.3	2.4	1.0	(8.3)	2.4	1.3	(7.6)		1.1	0.7	2.4*0.8		
14	2区Tr1	1層	釘		16.3	1.7	1.6	(16.3)	1.7	1.2	(16.0)		1.0	1.1	1.7*1.5		
15	2区Tr1	1層	釘	鉞	6.8	1.5	1.4	(6.8)	1.4	0.7	(6.1)		0.5	0.3	1.4*1.4		
16	1区	近代堆積土	釘	鉞	5.3	5.0	1.5	復7.6	5.0	0.6	6.7		0.6	0.4	1.5*1.5		釘部分のみ
17	2区	4層	釘		7.4	7.4			7.4		7.3						本製品1より取り外し
18	1区	Tr-3	釘		3.6	1.3	0.9	3.6									

第IV章 調査の結果

番号	器種	樹種	出土地	層序	最大長	最大幅	最大厚	備考
1	橋材	クリ	1区Tr3	攪乱	61.2	8.8	7.2	
2	杭	クマノミズキ	Tr-2		33.5	8.0	8.2	杭4本体
3	橋材	ヒノキ	2区	掘下げ中	89.1	10.2	7.8	
4	橋材	クリ	2区	掘下げ中	74.1	31.4	9.7	
5	橋材	ヒノキ	2区	掘下げ中	88.5	9.0	9.0	
6	橋材	クリ	2区Tr2	攪乱	99.8	27.4	7.6	
7	橋材	ヒノキ	2区Tr1	6層	89.9	27.4	16.6	L=1.6m
8	橋材	クリ	2区Tr1	7層	77.4	23.7	9.9	L=1.35m
9	橋材	カヤ	2区Tr1	8層	89.3	29.3	5.8	L=1.35~1.50m
10	下駄		表採		21.4	7.6	5.0	
11	下駄		2区Tr1	6層	21.4	8.8	5.8	
12	漆器		1区	掘下げ中	器高△6.4			
13	漆器		溝掘削中		器高△4.3			

表19 第28次調査出土遺物観察表5

※計測方法については27頁を参照

## 第V章 考察

これまでの通り、4次にわたる調査についての報告を行った。4つの調査区の内、第21・26・27次は中ノ御門、第28次については擬宝珠橋の調査である。本章ではこれらの個々の調査成果を門と橋との2つへ分けて整理し、まとめとする。

### 1 中ノ御門概略

藩士岡島正義(1784～1859)著され、文政12(1829)年成立とされる『鳥府誌』(註1)では各施設について詳細な記述があり、中ノ御門については下記の通りである。

「中の御門」

当城の大手の御門なり。是に架せる橋を、葱宝珠橋と云。御在府の間は閉切にて、御帰城に日より御開門あり。

・渡り槽

此御門の上に梁せる御槽なり。庚子の災に焼失し同九年御再建あり。

・単門

ギボシ橋にかゝる処にある御門なり。回祿の後、其年に建てらる。

・枘形

享保の初年損壞を修せらる。因幡年代記に御城石垣普請と載たるは此等の事を云。

・幕番所

内の御門の向見に在り。三の道具を傍り、御譜代の軽卒出番して警守す。丸の内三御門共同様なり。

・御番人廠

幕番所と御門の間に在り。

調査の報告でも述べた通り、中ノ御門は鳥取城の正門にあたり、内堀に架かる大手橋である擬宝珠橋を渡ると正面に位置する。城内側へ向かい鉤形に石垣を築く“内枘形”と呼ばれる入口部を形成しており、橋に面した最初の門である“表門”と表門を抜けた後、少し進み右に折れると正面に位置する“槽門”との2つの門から構成される。城へ入る門としては、同じく掘り沿いにある北御門と城の南側に位置する南御門の大きな門があるが、南御門については城外へ向かい石垣を築く“外枘形”を形成しており、大手門とは異なる様相を呈する。近世初めの絵図より中ノ御門は内枘形として描かれており、記録上は近世に2度の改修と近代に2度の改変を受けていることが分かる。

①享保初(1716)年修理

②享保5(1720)年石黒火事以降の石垣修理

③明治期の枘形解体

④昭和38年頃石垣修理

近世の修理については、具体的な範囲は分からないものの改修を受けていることが資料からも分かっており、近代以降の改変を受けていない槽門脇の石垣内をみても石垣の積み替え痕跡が確認できる(第81図)。③については、城解体後のものであり、橋から城内へ直線的に入ることができるように行われたものと考えられる(第4図)。



第80図 最終段階の鳥取城

鳥取城修覆願絵図（万延元年(1860)10月）（鳥取県立博物館所蔵を切り抜き・加筆）



第81図 中ノ御門櫓門脇石垣積み替え状況

## 2 門について

門については上記の烏府誌に書かれているとおり、藩主が在府の時には閉め切られ、堀城に伴い開けられる特別な門であり、常時通行人がいる状況にはないことが分かる。烏府誌記載中の渡り槽とは槽門、単門とは表門を指すものである。絵図からみる門の形態は大きく2種類ある。表門は当初より単門と書かれているように独立した門のみが描かれている。一方、槽門は当初、左右の石垣に跨り、堀側まで伸びる幅長の建物として描かれており、槽の1階部分を門として使用する渡槽門であったものが、後に短い建物へと変化している(図3)。現存する古写真(写真1)をみても幅は短く、すでに渡槽ではなく渡っただけの建物へと変化している(図3)。現存する古写真(写真1)をみても幅は短く、すでに渡槽ではなく渡っただけの建物へと変化している(図3)。現存する古写真(写真1)をみても幅は短く、すでに渡槽ではなく渡っただけの建物へと変化している(図3)。

烏府誌の記載にある「庚子の災に焼失し同九年御再建あり」の災いとは享保5(1720)年に発生した周辺を含む鳥取城最大と言われる石黒火事を指しており、火事により焼失した門を4年後に再建したことが分かる。享保5年4月1日に起こった当火事は「前代未曾有ノ大火ナリ。」(烏府誌)とされるほど大規模なものであり、城下から城内までを焼き尽くすものであった。火は標高263mの久松山頂にある山上ノ丸まで及んでおり、城の中心となる山裾に広がる山下ノ丸に至っては、櫓蔵1棟を残してほぼすべてが灰燼と化したとされている。

中ノ御門の両門ともにこの火事で焼失しており、石垣自体にも火を受け赤変した石が多数みられる。火事の翌年に幕府へ提出された鳥取城修葺願絵図には槽下を指し「此所石垣高サ老丈尺横折回り六間四尺崩申候」とあり、延焼した建物が石垣ごと大規模に崩れたと推定される(第83図)。また、渡槽直下の石垣が積み直されているということは、槽が存在しない状態でなければ行えないため、修理後の再建であることが分かる。

一方、表門については絵図上からみると、形態に違いはないものの、高さの違いがあることに気付く。古写真(第87図)をみると門が周囲の塀より低い位置にあることがわかり、門屋根の上に櫓形石垣上の塀の側面が見え、軒先は堀沿いに続く塀の中位付近と接する形となる。左右の石垣はそれぞれ門の後ろ側で40cm程の段差がついて高くなり、門は両石垣上の段差前部分に軒先を架けるような形となる。絵図をみると、古い絵図を写したと思われるものは塀が低くなるのに対し、その他の絵図では写真のとおり門が低く描かれる(第82図)。正門が塀より低いという状況は一般的とは言えず、時期の特定はできないが、ある時点での門または塀の高さの変更が考えられる。当門もまた石黒火事で焼失したとされるが、烏府誌によると正門であるためか、その他の建物に先駆けて同年中に再建されたこととされている。門前面に架かる擬宝珠橋の架け替えが完了するのが3年後の享保8年であることからみても再建の早さは特別である。段差部分を含む石垣上は平成24年度に調査を実施しており、結果については今後報告書を刊行する予定である。

## 3 表門の復元

### (1) 礎石の位置

第21・26次の2次にわたる表門発掘調査では、表門の礎石と見られる礎石がそれぞれ3石と1石の計4石検出した。門に向かって左の礎石より礎石1～4とすると各礎石のほぞ穴中心間(礎石1については石中央付近)の距離は以下の通りである。

■石垣～礎石①=18cm、礎石①～②=60cm、礎石②～③=154cm、礎石③～④=364cm

■礎石3～後方木柱=270cm

第12図のとおり、礎石1～3の上面標高は4.94～4.95mとほぼ同じであるが、礎石4については標高

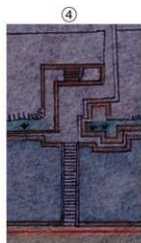


第82図 中ノ御門の変遷

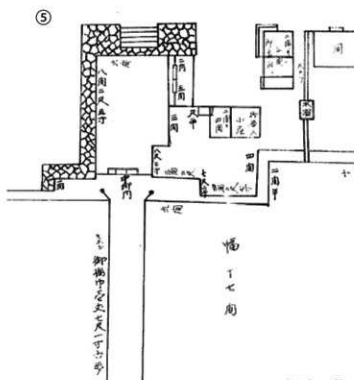


此所石垣高サ壹丈貳尺損  
折廻リ六間四尺崩申候

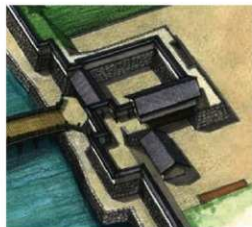
第83図 石黒火事後石垣崩壊状況



第84図 溝位置図



第85図 天保期中ノ御門周辺



第86図 中ノ御門復元イメージ図

- ①鳥取城破損御修復願図（天和3年(1683)）
- ②鳥取城修復願絵図（文化4年(1807)12月）
- ③鳥取城修復願絵図（享保6年(1721)5月）
- ④城内調査一件
- ⑤鳥府久松山御城積問図写（天保15年(1844)）  
（鳥取県立博物館蔵を切り抜き）

4.8~4.9mと若干低い。石本体が現溝側へ向かい傾斜するのは、周辺から流れ込む水の影響も考えられるが、槽門同様地盤面自体が溝側へ向け僅かに傾斜する可能性もある。礎石横断面図と古写真をならべたものが第87図であるが、門柱はそれぞれ4つの礎石上に位置することから礎石3・4が鏡柱礎石と判断される。上記のとおり礎石3と4とのほぞ穴間の距離は364cmでありこの部分が扉に相当するとみられる。古写真との対比によると門正面からみて礎石4の右側には脇柱、石垣に接する添柱が確認でき、本来、柱の基礎部分には礎石1・2と対をなす礎石があったと推定されるが、現在の溝が作られるにあたって抜き取られている。

礎石4の後方270cmには旧段階の控柱とみられる柱が立った状態で検出されており、その対面、礎石3の後方285cmを中心とした大規模な土坑は礎石の抜き取りとみられる。このことから、ある時点で廃棄された柱の上部に新たに礎石を置いて控柱の基礎としたと考えられ、城解体後左右両控柱礎石とも抜き取られたと考えられる。

## (2)門の規格

門の規格を古写真から復元したものが第87図である。門に対し、僅かに斜め上方から撮影されたものであるため、誤差はあると考えられるが、概略の規格である。

表門の左右にある石垣の標高は、左側の天端石の角部が7.6mであり、右側の角石の標高は7.8mである。左側は近世当時の石垣であるが、右側については昭和18年の鳥取地震の影響で崩落が進み、大きく積み替えられているため元々の標高ではない。古写真をみても左右石垣の標高はほぼ同じとみられることから、本来は標高7.6m前後であったと推定される。

礎石3に残る柱痕とみられる幅47cm、長さ39cmの変色部分はほぞ穴を中心としてはおらず、穴は正面からみて左前方付近に位置している。ほぞ穴の中心から測ると左側壁方向に18cm、扉中央方向へ29cmの柱であったことが分かる。対となる鏡柱礎石である礎石4には柱の痕跡は確認できないが、礎石3と同規模の柱を想定すると、両鏡柱の端部間距離(扉幅)は306cmとなる。

礎石上面付近での両石垣間の距離は8.4m程であり、扉中央に相当する礎石3と4との中間部分から石垣までの距離は左側が414cm、右側が426cmと右側に長いことが分かる。古写真からの復元では礎石3上の鏡柱中央から、右側の脇柱の中央はおおよそ180cmほどある。

表門の規格について表記のある絵図には下記の通りである。

■鳥取御城之図 享保~宝暦年間成立か

「御門幅四間二高サ壱丈四尺」

■鳥取御城内手配之図 天保期の成立か

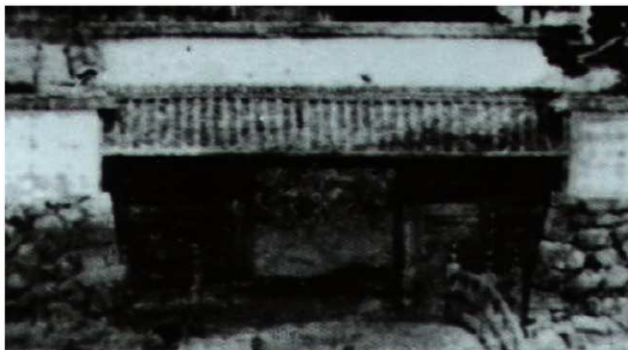
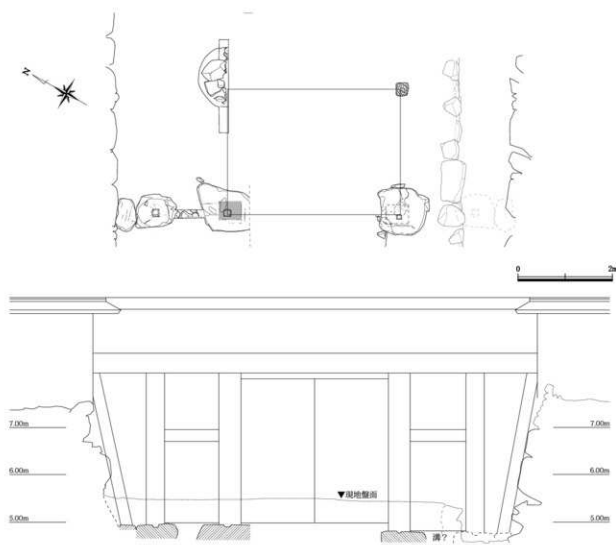
「御門幅四間高壱丈四尺」

近年の検討により、城内で使用される尺は壱間が六尺五寸(≒197cm)であることが明らかとなっており、門両端の柱で測ればかなり近い数値であるとみられる。また、石垣間の全体を門と捉えていることがわかる。一方高さについては壱丈四尺(≒424cm)では想定される門扉よりは高く、棟よりは低くなり、壱丈四寸(≒315)では想定される門扉の高さに近いとみられるが、今後の更なる検討が必要である。

礎石上面と石垣上面との比高差は2.7m程であり、さらにその上70cm程で軒先へ、そこから1.4m程度で棟へ至ると推定される。おおよそ礎石上面から軒までの比高差は3.4m程、棟までは4.8m程となるが、今後の検討が必要である。背面については、2本の鏡柱の背後に控え柱を持つ構造であり、様式についての資料は残存していないものの、高麗門であったと推定される。

## (3)旧溝

明治12年の城内建物完了後、明治22年頃までに行われたとみられる枳形石垣解体までの期間に実測さ



第87図 表門断面・復元イメージ図(S=1/80)



れたとみられる「城内調査一件」(註2)中の一葉(第84図)をみると、櫓門側から石垣沿いに続く溝があり、表門の右端を抜け堀へと至る。本丸である三ノ丸方面から延びる溝であり、現在と同じく、堀へ排水するための主要な溝の一つであるとみられる。第27次調査では、絵図のとおり櫓門の右側の礎石間を流れる溝を検出した。調査では門の左側に礎石上を通る近代溝状遺構は確認できたものの、近世溝は存在しておらず、右側には近代溝が深い位置まで入っているため、遺構は確認できなかった。このことから、近世溝は絵図の通り現在の溝に近い位置を流れていたと考えるのが自然である。現在の溝は石垣際をながれているものの、本来、石垣には添柱が沿っており礎石が存在したとみられるため、近世溝は石垣から若干離れた位置、礎石4と脇柱との間を通っていたと考えられる。

#### ④礎石の再利用

石黒火事で焼失した中ノ御門であるが、その痕跡は礎石本体からも見受けられる。検出した礎石はいずれも表面には被熱により赤変し、礎石2・4などは辺縁部が弧を描いて分離する玉葱状剝離とよばれる高温被熱特有の状況が確認できる。同じ登城路沿いの上方、三ノ丸入口にある太鼓御門の発掘調査(註3)では、被熱した礎石を含む登城路面を埋め立てて、新たな礎石を据え直しているが中ノ御門では、登城路面こそ若干の整地を行っているが、礎石については再利用している。

## 4 櫓門の復元

表門を通り、枳形内を進み右折すると正面に位置するのが中ノ御門内門である櫓門である。第27次発掘調査では原位置を保つ8つの建物礎石を検出した。門を正面にして右側の石垣は近代の改修を受けることなく近世当時のまま現存しているが左側については礎石上面に近い位置で解体されているため上部は残存していないが、登城路面下、根石から1〜2石程度は残存していることを確認した。礎石は3列になっており、各礎石の寸法は表10のとおりである。石の形態は不定形状の礎石と方形の切石の2種類があり、材質は、礎石5が安山岩である以外はすべて花崗岩である。

### (1)礎石の位置

礎石3〜6は門前面部分にあたる礎石であり、ほぞ穴のあいた礎石4と5が脇柱、礎石3・6が脇柱にあたる。いずれも平面形は不定形状であるが、4つの礎石の前面は一直線上に位置する傾斜した面を持っており、正面からみた場合に整美な印象を受けるような造りとなっている。礎石3と6は上面に細かい表面調整痕が多く残る。ともに幅が100cmを越える大型の石材であり、3は石垣と接しており、6は端部が若干石垣中に入り込む形となるため、脇柱とともに石垣沿いの添柱の基礎も兼ねていたと考えられる。礎石4と5は表面の剝落が激しく、4は石全体が赤変している。両礎石のほぞ穴間の距離は387cmであり、この部分が扉のあった範囲である。礎石3と4の礎石上面の標高は5.36m前後と、ほぼ同じであるが、礎石5は+10cm、礎石6はさらに+5cmとなり、左から右へ向けて傾斜を持つ。

礎石3・6の背後には控柱の礎石である礎石7・8が位置する。3分の1程を欠く礎石7に対し、礎石8は断面台形状の整った切石である。上面の標高は礎石8が5.33mであり礎石7より20cm程低い。礎石3上面に残る柱痕らしき変色部分の中央から、礎石8のほぞ穴の中心までの距離は166cmであり、礎石6には柱痕跡は残らないため、礎石5のほぞ穴の延長上の位置から礎石7のほぞ穴中央までの距離は177cmである。

さらに、礎石7の背後は礎石2が、礎石8の背後には礎石1が位置する。ともに整った断面台形状の切石であり、礎石7と2とのほぞ穴中心間の距離は156cm、礎石8と1との距離は167cmである。距離はそれぞれ異なっているが、前面の礎石3と6からの距離はともに333cmと同じである。台石の上に乗っ

ており礎石1の上面標高は5.54mと、礎石2と比べ14cm程低くなる。

左側の礎石列に比べ右列の上面標高は15cm～20cm程も低く、登城路面もまた同様な傾斜をみせる。

## (2)門の規格

槽門は、左右石垣間の距離822cmの間に現状の8石で建っていたと考えられる。前面列にある礎石3の上面に残る脇柱痕は42×24cmで正面からみると横長であり、礎石4に残る柱痕らしき痕跡も現状で45×25cmと横長である。礎石5・6に柱痕は確認できなかったが、同様の横長の柱が設置されていた可能性は高いと思われる。また、礎石3・6は石垣と接するため石垣の勾配に沿って置かれた添柱の礎石を兼ねていたとみられる。礎石4と5とのほぞ穴中心間の距離は387cmであり、幅45cm程度の鏡柱がほぞ穴を中心として置かれたとするならば、間にあった門扉部分の幅は340cm程度であったと推定される。門の中央から左右石垣までの距離はほぼ均等であり礎石3と4との間には溝が通っているため、通常門扉脇に設置される藩戸は左側、礎石5と6との間に復元が可能である。

右列をみると、柱の形態は礎石1・3が長方形であるのに対し、8は方形である。ほぞ穴は柱の中心には位置しないが、柱本体はその中心が一直線上に並ぶ。このことから礎石1・2・3・6上の柱中心間を結ぶと幅723cm、長さ333cmとなる。

礎石の上面標高をみると、左列の礎石6・7と同じ高さであるのは2の台石部分であり、同様に右列の礎石3・8と同じであるのは1の台石である。両台石ともに上面は平らであり、不定形の形態は前列に共通する様相であることから、旧礎石と考えられ、ある時期台形状の新礎石が置かれたとみられる。

不定形状の礎石が切石礎石に置き換わるのは太鼓御門でも確認できており、変更の時期は石黒火事後の再建にともなうものである。また、城内に遺存する礎石の多くは切石状である。表門も含め、この不定形状礎石は創建当時からのものであり、礎石4や石垣中にみられる赤変した石材は石黒火事の影響である可能性が極めて高いと考えられる。

このことから、当初の表門は台石および前列の4石の計6石で構成されていた可能性がある。礎石1・2・7・8の設置時期については、火事後の再建時というよりは、建築材の根柢ぎの様に柱の腐朽に合わせて修理として段階的に入れられたものではないかとの意見を委員会より得た。礎石7と8とに位置や形状の違いがあることからその可能性は高い。

先述の第82図の通り、絵図からみる槽門の構造は両石垣間を大きく跨ぐ渡槽から、幅の短い槽への変更が推測される。渡槽が描かれる絵図は17世紀台と、享保6(1721)年の石黒火事に伴う修復願図までであるが、規格等の寸法が記載されたものはない。記載があるものは以下の通りである。

■鳥取御城之図 享保～宝暦年間成立か

「中渡り御槽五間二間高サ二丈五尺 同御門四間左右石垣高サ一丈」

■鳥取御城内手配之図 天保期の成立か

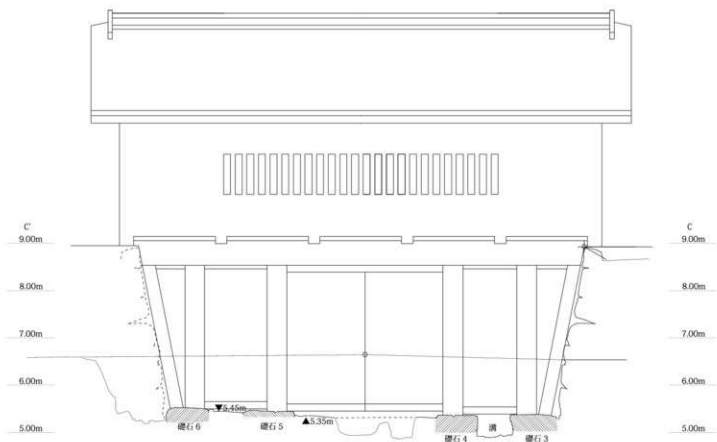
「中御門渡御槽桁行五間 式間梁御門四間左右 石垣高サ老丈貳尺」

■鳥府久松山御城積間図 天保15(1844)年

「五間二間」

以上3つの資料に共通するのは五間×二間の規格である。これは門の寸法ではなく上部の槽部分の規模を示しているとみられ、一間＝六尺五寸で計算すると985×394cmとなる。石垣間の距離は礎石付近で822cmであるが、現存する右側の石垣の勾配と高さで解体された左側の石垣を復元すると天端間の距離は932cm程となる。槽部分が礎石上に均等に配置されていたと仮定するならば、古写真からの想定通り、槽の左右は天端石上に若干はみ出す形となる。高さ二丈五尺(≒757cm)はおそらく棟までの高さには達しないとみられる。

石垣の高さについては右列の礎石3・8上面(標高5.35m)から右側石垣の天端石の標高8.85mまでの



第88図 櫓門断面・復元イメージ図(S=1/80)



写真3 解体途中の鳥取城

明治8～12年頃撮影。中ノ御門や土塀は解体されているが、背後の二ノ丸三階櫓は残存する。

比高差は3.5mである。絵図にある壱丈(303cm)と壱丈貳尺(363cm)と比較すると後者に近いが、上面標高の異なる礎石6・7との比高差は3.3m程となり完全に一致はしない。

### (3)溝

礎石3と4との間を抜けて表門側へと続く。第89図をみると溝は堀と並行する形で調査区外まで直進している。調査では溝の直進も確認したが、分岐して登城路を横断する部分も検出した。後述の第90図の断面図をみても明らかのように溝側壁石の天端は登城路面より低く、上面は平坦である。溝が露出していたならば通行の妨げになることは明らかであることから、本来は横断部分には蓋がされた暗渠であったとみられる。溝の内部に瓦が散乱していたことからみて城解体時には蓋は抜き取られていたとみられる。一方、門下を直進する溝側壁石の上面は平らではなく自然石の形状そのままであるため、この部分については開渠であったとみられる。

## 5 登城路面

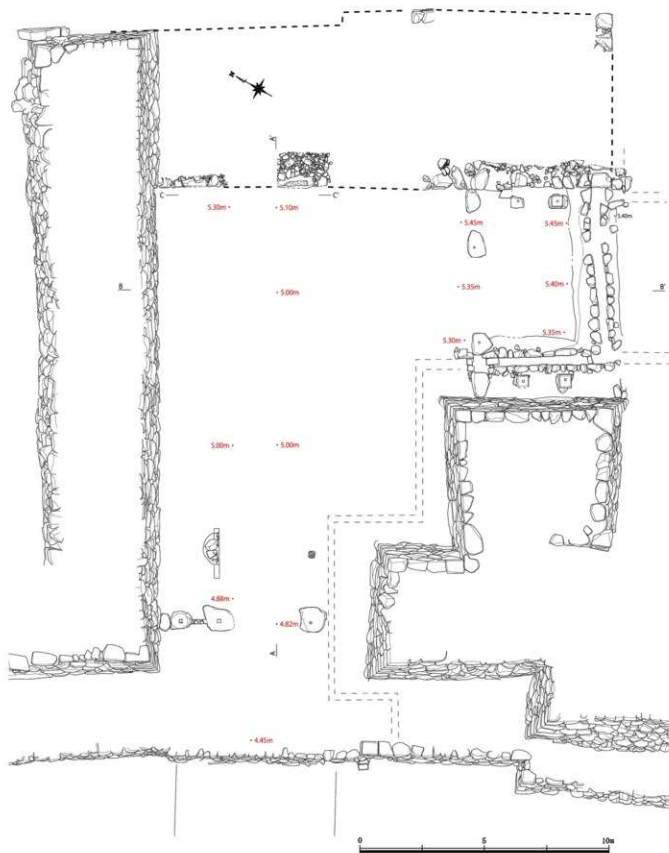
### (1)幕末期登城路面

3次にわたる調査により、表門と櫓門との両門の礎石の位置と高さを確認することができた。表門の前面列での標高はおおよそ4.9m、櫓門では5.4m前後であり、その比高差は50cm程度である。両門の前面列の中心を進むなら表門から直進13mで右折し、8.5mで櫓門に到着することとなり、この21.5mの間に50cmの高さを上る路面であったことがわかった。各調査区で報告の通り明治12年の城解体後に様々な改変が行われ、旧登城路面も厚い堆積層に覆われている状況にあるため、そのすべてを確認することは叶わなかったが、各所に登城路面を確認した。

登城路面と思われる層は、色調に若干の違いはあるが基本的に黄灰色を呈す粗粒砂で構成された砂礫層であり、現在のグラウンドや公園整備など広く使用される素材に良く似た外観である。調査区内の下層には城解体時の廃棄と考えられる多量の瓦片を含む層が広く確認でき、これらを取り除くと下層より登城路面が露出する。

表門礎石周辺では第21次調査の17層が相当する。礎石の上面標高が4.94m程であるのに対し、登城路面は僅かに下、標高4.88m付近にある。第26次調査側では第21・22層が対応し、礎石上面標高が4.8～4.9mにあるのに対し、標高は4.82mほどにあり、第21次側よりは僅かに低くなる。櫓門でも同様であるが、正面右手にある溝へ向かい僅かに傾斜していた可能性がある。次に確認したのは榊形石垣奥壁までの登城路の中間にあたる礎石後方7mの地点であり、第21次調査側ではTr-3内最下部で検出した17層が相当し、第26次調査では22層より続く26層が相当する。標高はともに5.0mを測り、ここまでで10～20cm上昇したこととなる。第26次調査の土層断面をみるとこの後はほぼ水平に続いており、表門礎石から13m、櫓門の中央へと右折する地点で再びゆるやかに上昇し始める。次に確認したのは榊形石垣前面であり、第21次調査側では標高5.30m、第26次調査側では5.10mでありその差は20cmとなる。第26次調査側でみると、表門周辺と榊形石垣奥壁前面での登城路面の比高差は30cmである。

表門から直進し右折してから、櫓門までの間の7.5m程は未調査である。櫓門の前面礎石付近の標高は礎石の上面より5cm程度下にあり、礎石4前で5.30m、礎石4と5の中間(門中央)付近で5.35m、礎石5と6の中間で5.45mである。礎石の上面標高同様、正面右側に向けて緩やかに下降していることが分かる。第26次調査側との比高差は30～40cm程度であり、未調査部分については表門～榊形石垣にかけての範囲と比べわずかではあるが勾配がきつくなるとみられる。続く礎石の中列付近では礎石7付近で5.45m、中央で5.35m、礎石8寄りの溝付近で5.25mと左右での比高差は20cmとやや傾斜がつく。さらに礎石後列付近での標高は礎石2付近で5.45m、中央で5.40m、礎石1寄りの溝付近で5.35mとなる。



第89図 中ノ御門登城路面標高図(S=1/150)

以上のとおり門礎石の内側は溝へ向けて傾斜することがわかった。

門の背後には登城路面を切り込むかたちで登城路を横断する溝および、掘り方がみられる。溝側壁石の上面は平らであり、標高は合流部で5.20m前後から緩やかに上昇して行き、礎石2の後方屈折部にて5.35m前後となる。また、礎石2の後方、溝石を挟んだ調査区際には対面する掘り方の一部も見えており、続く登城路面の標高は5.40m前後である。礎石後列付近と溝上面との比高差は10～15cmであり、先述の通りこの溝には蓋がされていたとみられる。

各地点での登城路面の標高をまとめると下記の通りである。

幕末期登城路面相当層

第21次調査：第17層

第26次調査：第21・22・26・39・41層

■表門礎石付近

第21次調査(17層)：4.88m 第26次調査(21層)：4.82m

■礎石より7m

第21次調査(Tr-3 17層)：5.00m 第26次調査：5.00m

■辨形石垣前面

第21次調査：5.30m 第26次調査：5.10m

■槽門礎石前列前

礎石4前：5.30m、礎石4と5の中間(門中央)付近：5.35m、礎石5と6の中間：5.45m

■槽門礎石中列付近

礎石7付近：5.45m、中央：5.35m、礎石8寄りの溝付近：5.25m

■槽門礎石後列付近

礎石2付近：5.45m、中央：5.40m、礎石1寄りの溝付近：5.35m

■槽門後方溝付近

調査区際：5.40m

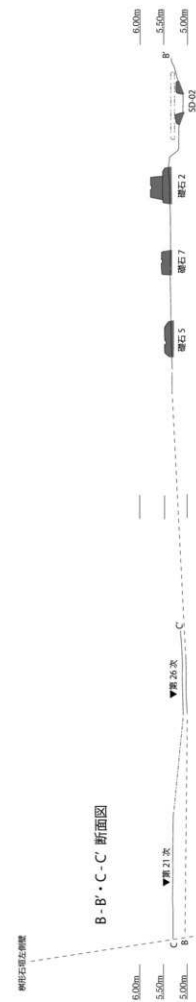
以上のように、復元を目指す幕末期の登城路面は勾配に変化を付けながら、上昇していることが、また、路幅に対しては必ずしも水平ではなく、正面から見ると、全体的に右下がりの傾斜で上っていくこともわかった。

## (2)旧登城路面

完全に検出しきれてはいないが、登城路面の下部には別時期の登城路面とみられる整地層が存在していることが明らかとなった。その一つが焼土面であり、炭や焼土を含む層である。第26次調査の表門付近では33層が相当し標高4.55mから10cm程度、多量の炭と焼土をともなって堆積する。Tr-3で検出した標高4.9mを上面として10cm程堆積する37層もおなじであり、一面黒色の焼土層である。37層下には拳大の石が多く入った層があり、登城路面の地盤地行であったとみられる。本来は38層を基礎とした37層が登城路面であったが、かなりの規模の被熱行為の影響でこれを破棄することとなったようであり、焼土面が露出する範囲にはそれらを覆い隠すように31層を敷いている。この場合、初期の登城路面の段階では表門の礎石は30cm程頭を地上に出していたことになり、路の勾配もその分、急であったようである。また、旧登城路面上の整地は一律の厚さではなく、礎石より6mほどの範囲に厚くみられることから、31層を敷いた後は段階的に傾斜をうめたて、最終的には21層が上面となり緩やかな登城路面となったようである。焼土面は第27次調査でもみられ、登城路面の下10cmにはそれほど多量ではないものの炭を含む層がみられる。これら、広範囲の焼土面とそれに伴う焼けた礎石は石黒火事の影響と捉えるのが自



A - A' 断面



B - B' - C - C' 断面図

第90図 樹形内登城路断面図 (S=1/80)

然である。この場合第26次調査の31層もある時期の登城路面であった可能性が高く、これを仮に中期登城路面と呼ぶ。火事後同年中に再建された際の緊急的な路盤面とも考えられ、2年後の擬宝珠橋架け替え、4年後の櫓門再建にあわせ再整備が行われた可能性もある。

#### ■初期登城路面

第26次調査 表門付近 第33層 標高4.55m、Tr-3 第38層 標高4.90m

第27次調査 Tr-2 第6・7層 標高5.20m

#### ■中期登城路面

第26次調査 表門付近 第31層

## 6 枳形石垣と解体手順

### (1) 枳形石垣の規格

検出した枳形石垣の規格は第89図の通りである。石垣の下端での距離は、表門入口から奥壁までの左側壁は19.3m、左側壁との接合部から櫓門後方の解体された石垣である奥壁は18mである。平成18年度の調査ではそこから左に折れ6.9m続くことが明らかとなっており、平成9年の調査では奥壁の距離が7.1mあることも確認されている。

一方、石垣の寸法が記載された絵図として天保15(1844)年の「鳥取久松山御城積間図」(第85図：写し)がある。記述には左側壁が八間二尺五寸(≒16.51m)、奥壁が六間(≒11.82m)とある。先のとおり、この寸法では石垣全面の長さとしては足りておらず、左側壁と奥壁との隅角部を中心とするならば、おおよそ表門の背後と櫓門の前面部までの距離となる。建物を避けて実測したならば、この数値が門までの距離を示していると考えられる。

### (2) 解体手順

明治12年に二ノ丸三階櫓の解体を持って完了したとされる鳥取城の解体は段階的に実施されていることが明らかとなっている。明治8年頃には多くの建物が解体されたとされており、写真3の古写真でも分かる通り、二ノ丸三階櫓は残っているが、堀沿いの門や塀は撤去されている。陸軍省の管理となった後は明治22年に三ノ丸部分に、現在の鳥取県立鳥取西高等学校の前身である尋常中学校が移転開学することとなる。枳形石垣もまた、この頃までには解体されたと考えられるが明確な裏付けはない。明治44年の学校資料には枳形石垣は描かれていないため、ここを下限とした時期に解体されていることは明らかである。

発掘調査では第13・29図の通り、登城路面の直上に多量の瓦が廃棄されている様子を確認した。土層断面図でも分かる通り奥壁寄りには特に厚く堆積しており、奥壁上から投げ捨てたような状況である。平成24年度に実施した左側壁上でも多量の瓦片の集積を確認しており、やはりこれらは建物解体時の廃棄瓦と考えるのが妥当である。さらにこの層の直上には枳形石垣を解体した際に出た栗石などが多量に敷かれる。第21・26・27次いずれの調査でも同様であり、瓦層の直上には石群が乗り、奥壁付近で厚く離れる程薄くなる。

また、瓦群・石群の両層ともに明らかな近代的な遺物片を含んではおらず、報告にもある日英同盟記念の皿はこの層よりも上からの出土である。以上のことから考えても、枳形石垣の解体は、建物解体からそう時間を置かない頃に実施されたと考えるのが妥当である。



## 7 擬宝珠橋および堀について

17世紀の前半代に大手橋となった擬宝珠橋であるが、創建年代は不明である。しかし、元和5(1619)年の絵図である「因幡国鳥取城図」や19世紀の写しであるがそれ以前の鳥取城を描いた「池田長吉・長幸時代因州鳥取之城之図」においても同所には橋が描かれているため、古い段階より存在していたとみられる。

関ヶ原の合戦の翌年慶長6(1601)年、宮部氏に替わり鳥取城主として入城した池田長吉は翌年から城内の大改修を行った。擬宝珠橋南東(城へ向かい右側)あたりもこの頃拡張され堀となったとされる。この場合、長吉以前に橋は存在し得ないこととなるが、大改造論には異論もあり、具体的な範囲を特定しきれてはおらず不明確な部分が多いため、創建についての一つの可能性として挙げておく。

### (1) 橋と堀に関する記録

欄干に擬宝珠を置いたことで擬宝珠橋と呼ばれる当橋であるが、橋および堀に関する記録としては下記の通りである。

成立年代は不明であるが、17世紀前半代、御国換の頃には大手橋となる

寛永9(1632)年 御国換 池田光仲が鳥取城主となる(鳥取池田家の成立) この後橋補修

享保5(1720)年 石黒大火で焼け落ちる

享保7(1722)年 堀浚渫

享保8(1723)年 橋再造(前後に毎々架け替え)

享保18(1733)年 内堀浚渫

寛政12(1800)年 内堀浚渫

享和2(1802)年 内堀浚渫、樹設置

明治後半頃 近世アーチ橋から上面フラットな木造橋へ架け替え

昭和30(1955)年頃 老朽化により通行禁止

昭和38(1963)年 現コンクリート橋へ架け替え

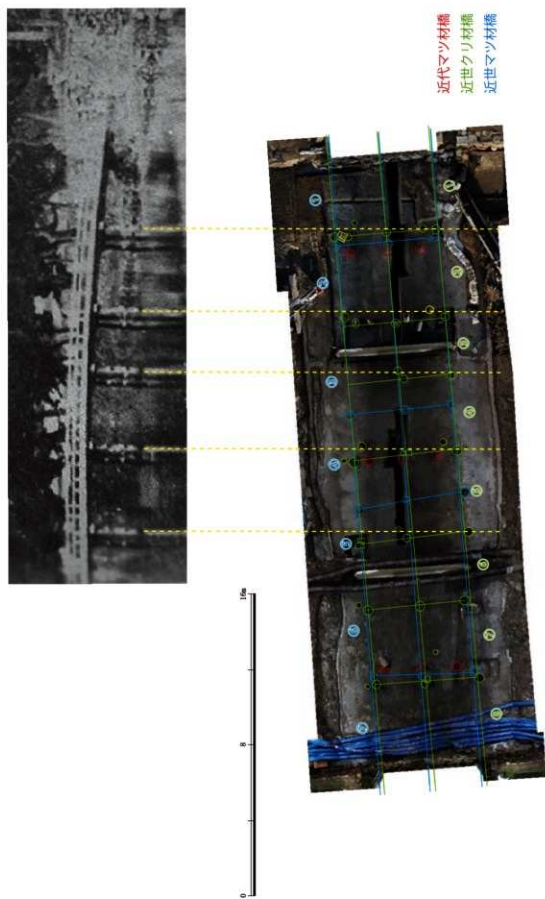
調査ではマツ材およびクリ材の近世2世代(或いはもう1世代)分の橋脚群を検出した。時期の特定こそ困難であるものの、ある時点での架け替えが行われたことが分かる。創建年代は不明であるが、架け替えの記録としては、享保8(1723)年の橋再造がある。これは享保5年の石黒大火で焼けた橋を再建したというものである。しかし、同時に「前後に毎々架け替え」とも書かれており、これ以外の架け替えも考えられる。橋脚自体に何度まで変更は見られないため、この架け替えとは基礎は変更しない主に水面付近より上の変更であった可能性が高い。先行するマツ材橋は上面が切り取られているため判別できないが、クリ材橋脚上面にはホゾがみられるためこより上での改変があったことが確認できる。再造と架け替えとを使い分けていることから、前者は大規模な工事を伴うものであったと考えられるが、マツ材からクリ材への変更を、直ちにここへ当てはめることはできず、今後の検討を要する。

### (2) 橋の復元

橋の設計図面や橋脚本数を伝える資料は現在のところ見当たらないが、堀や橋自体の寸法が記載された記録は下記の通りである。なお、数値については沓間を六尺五寸で計算した。

■鳥府久松山御城積問図 天保15(1844)年

橋「御橋巾沓丈七尺沓寸六歩」、堀「幅一七間」



第91図 橋脚位置復元図(オルソ図S=1/200)

橋幅：1丈7尺1寸6歩=約518cm(長さの記載はなし)

堀幅：17間=約33.49m

■鳥取御城内手配ノ図 天保頃

「御橋渡拾八間 幅式間四尺」

橋幅：2間4尺=515.2cm

橋の長さ：18間=35.46m

両絵図にみられる橋幅の寸法はほぼ同じであり、現在の堀幅33.5m(堀石垣天端間)とも一致しており、橋の長さとしたものは橋本体の距離である。橋脚間の距離はおおよそ5.3~5.8mと様々であるが、上面では5.2m程度になっていたようである。他城郭の例をみると松江城の北惣門橋では橋脚土上部とその上に乗る土居桁が検出されている。橋脚は横一直線に並んではおらず、その上に乗る土居桁は柱の中心からずれた位置にあり、柱の横には支えとみられる別の柱が並んでいる。土居桁上に空いたほぞ穴は橋脚土上部より内側にある。つまり橋脚は土居桁を挟み上下で場所が全く異なっている。今回の調査で検出した3本並びの橋脚の内、左右の柱はいずれも内側へ傾斜する内転びを見せているため柱を設置した当初は一本の地中から橋梁まで一本の柱であった可能性はあるが、修理の際に変更されたとみられる。

出土した橋脚と古写真を対比させたのが第91図である。城側から数え2列目の位置が写真とは完全に一致しないが、他の柱はいずれも一致し、2列目と3列目の間隔が極端に狭くなるのも同じである。また、柱中の横桁は1・2列目では1段であるが、3・4・5列目には上下2段あることが分かる。下段の標高は近い位置にあるようである。別の角度から撮った写真では不鮮明ながら6本目は1段に見えるため、7本目も同じであった可能性は高い。左右2列は1段、中間の3列は2段に復元ができる。

## 註

- (1) 岡島正義「鳥府誌 上の天」『鳥取県史』第6巻 近世資料 1974
- (2) 「城内調査一件」『秋田政蔵文庫』鳥取県立博物館蔵 資料自体は大正6年頃の作成とされているが、五輪ある絵図の原因は数時期に分かれてつくられていることがわかる。
- (3) 鳥取市教育委員会『史跡鳥取城跡太鼓御門跡発掘調査報告書』2009



# 写真図版



調査区透景



烏取城古写真(幕末～明治8年頃撮影)



第21次調査区全景



Tr-1 (北西から)



Tr-1 栗石取り外し状況(北西から)



Tr-2 (北西から)



礎石3上瓦溜 (南西から)



土坑検出状況 (南東から)



土坑内瓦除去後 (南東から)



礎石検出状況 (南西から)





礎石周辺(北西から)



礎石3(南西から)



礎石周辺土層(北西から)



Tr-3土層(北西から)



中ノ御門空中写真



第26次調査区全景(南西から)



栗石検出状況(南東から)



栗石堆積状況(南東から)



調査区全景(北東から)



瓦溜 1(北東から)



瓦溜 2(南東から)



樹形石垣(南西から)



瓦除去後(南西から)



礎石 4上堆積状況(北東から)



調査区中央土層(南東から)



礎石 4・控柱検出状況(南西から)



礎石 4 (南東から)



礎石 4 (南西から)



控柱検出状況(南西から)





Tr-4 (南西から)



Tr-3 (北西から)



Tr-3 焼土除去後 (北西から)



礎石周辺土層 (南東から)



Tr-3 周辺土層 (南西から)



礎石4 周辺 (南西から)



調査終了後 (南西から)



第27次調査区空中写真



栗石群検出状況 (北東から)



瓦群検出状況 (南東から)



SD-01(南西から)



Tr-1 溝内堆積状況(北西から)



第3調査区 b-b' 断面土層(北東から)



第2調査区b-b'  
土層断面(南東から)



第2調査区c-c'  
土層断面(北西から)



第1調査区c-c'  
土層断面(北西から)





SD-02横断方向(南西から)



SD-02縦断方向(北西から)



完掘状況(南東から)



礎石 1 (北西から)



礎石 2 (北西から)



礎石 3 (北西から)



礎石 4 (北西から)



礎石 5 (北西から)



礎石 6 (北西から)



礎石 7 (北西から)



礎石 8 (北西から)



礎石 8 側面(北西から)



礎石 8 側面(南東から)



礎石 1 側面(北西から)



礎石 1 台石(北西から)



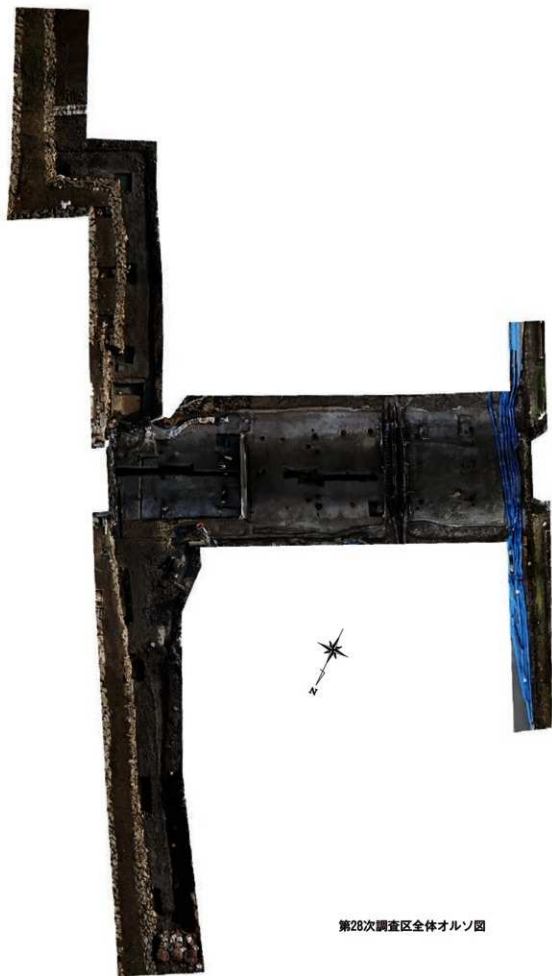
礎石 1 裏面(北西から)



Tr-2 土層(北西から)



Tr-2 (南東から)



第28次調査区全体オルソ図



概脚検出状況オルソ図(S=1/80)



調査区遠景(南東から)



Tr-1(南西から)



Tr-2(南西から)



Tr-2 C面土層(南西から)



Tr-2杭3打ち込み状況(西から)



Tr-3(南西から)



Tr-4(南から)



Tr-4杭7~11検出状況(北西から)





Tr-5 (南西から)



Tr-5 B面土層(南から)



Tr-5 (西から)



Tr-6 (南西から)



Tr-6 A面土層(北西から)



Tr-7 (南から)



Tr-7 隅角部 (南から)



礎石5 (北西から)



Tr-8 (西から)





Tr-9 (南東から)



Tr-9 B面土層 (北西から)



Tr-10 (南東から)



Tr-10 B面 (南東から)



Tr-11 (南東から)



Tr-11 (南東から)



樹内面 (南西から)



樹内面 (南西から)



樹外面 (南から)



樹 (南西から)



第1調査区(東から)



第2調査区東側(南東から)



第2調査区西側(南東から)



第3調査区(南東から)



柱3・7・10・11・13(北から)



柱8・9・12・15(北東から)



柱16・19・20(南から)



柱23・24(南西から)



柱26(南西から)



柱28(南西から)



堀中央柱群(南西から)



柱38・34(南西から)



柱32・35・36(南西から)





柱37・39(南西から)



柱40(南西から)



柱41(南西から)



柱42(南西から)



柱群(北西から)



柱44(北西から)



柱45(北東から)



第2調査区Tr-2柱62~65(北東から)



柱46~50(北西から)



柱46(南西から)



柱47(南西から)



柱48(北西から)



柱58(南西から)



柱51~60(北西から)



柱52・55・58・61(南西から)





柱47・50・51・53・56・57・59(南西から)



柱56・57・59(南西から)



柱60・69(南西から)



柱54・69・60(南から)



第1調査区Tr-1  
A面土層図(南から)



第1調査区Tr-1  
C面土層図(南から)



第1調査区Tr-1土層(南西から)



第1調査区Tr-1 B面土層(北から)



第2調査区Tr-1  
土層断面(北から)



第2調査区Tr-1  
A面土層断面(北西から)



第1調査区Tr-1  
C面土層断面(南東から)



第2調査区Tr-1木製品7出土状況(北西から)



第2調査区Tr-1木製品8出土状況(北西から)



第2調査区Tr-1柱44周辺土層(北西から)



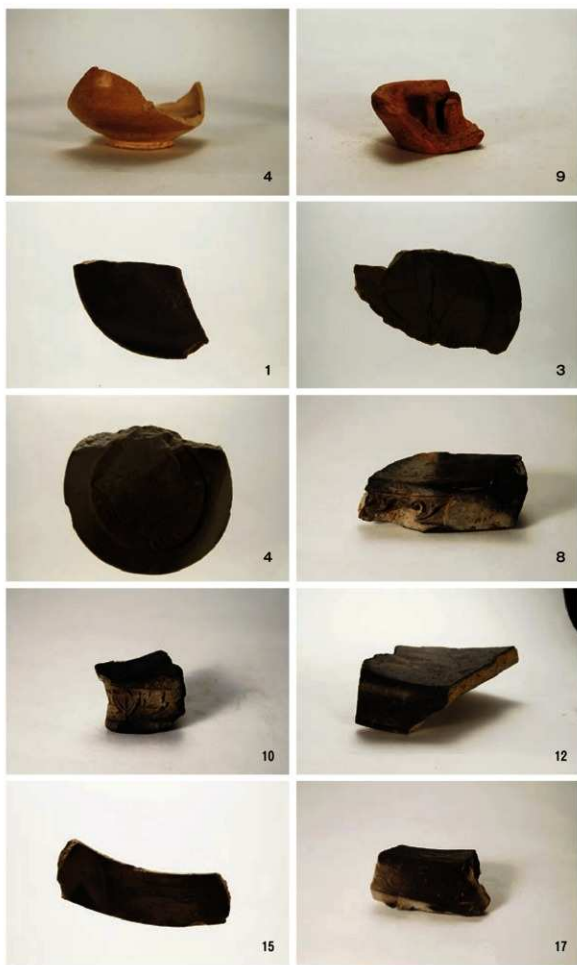
第2調査区Tr-1木製品8・11出土状況(北西から)



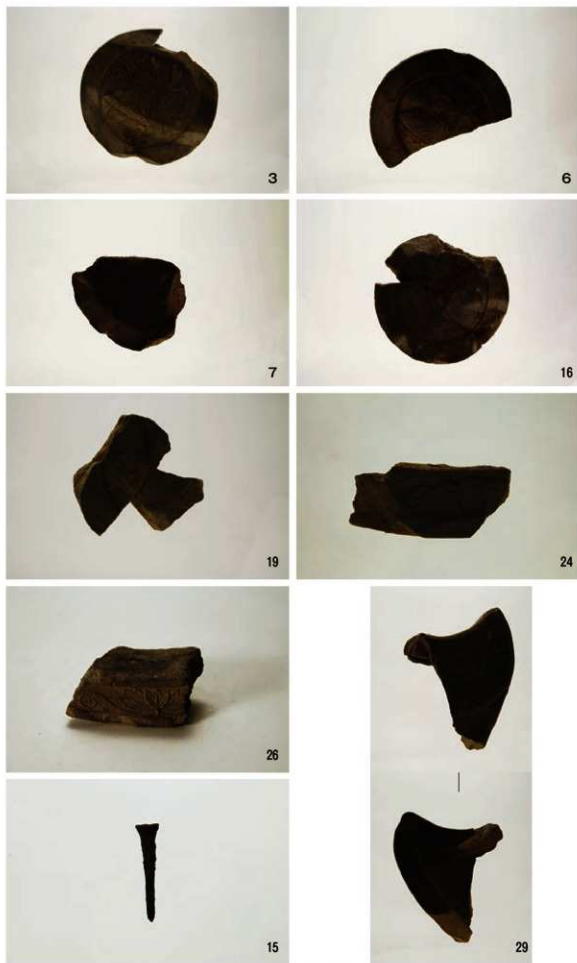
第1調査区柱2～15(北西から)



第1調査区柱16～22・66～68(北西から)

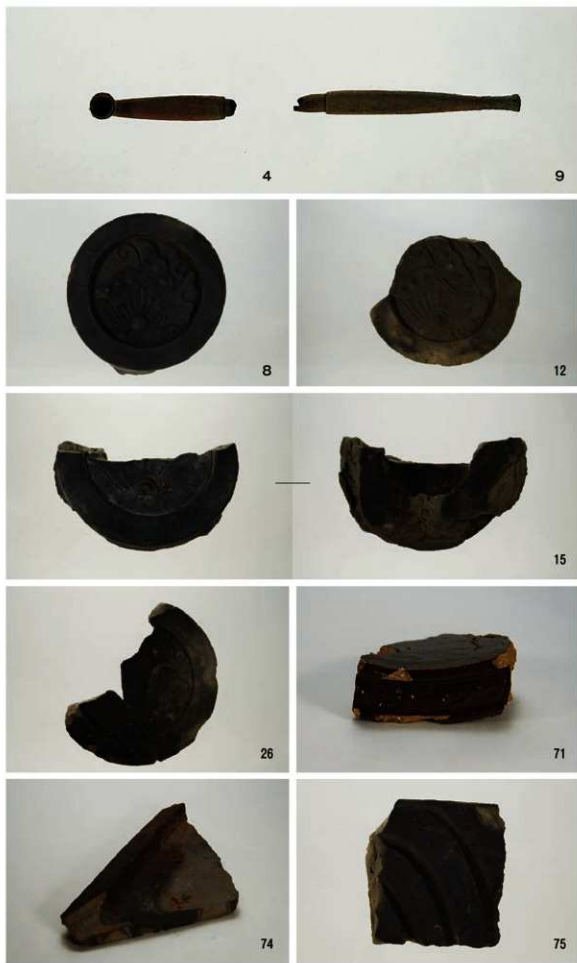


第21次調査出土遺物

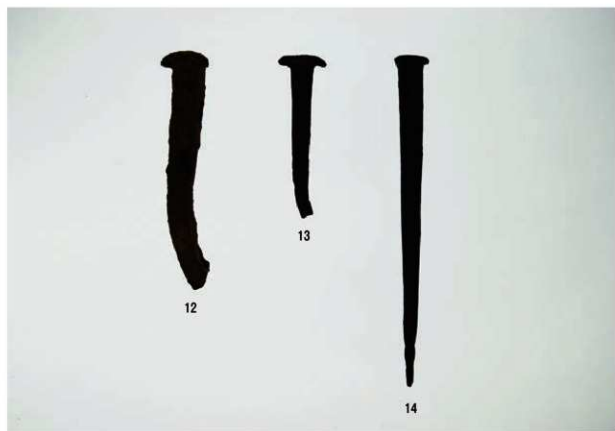
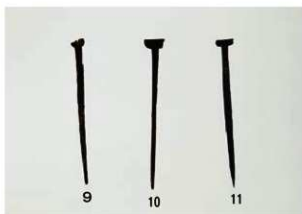
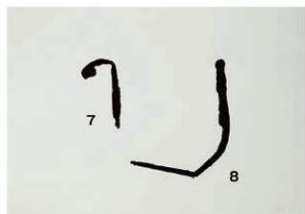
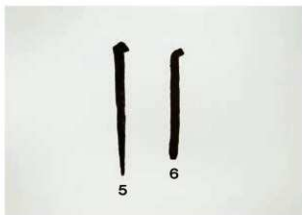
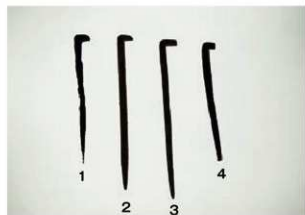




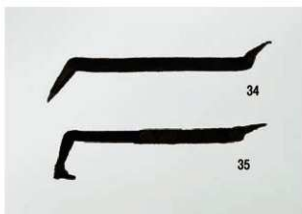
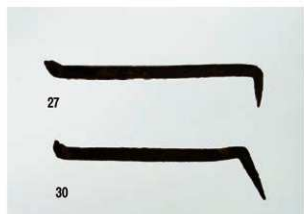
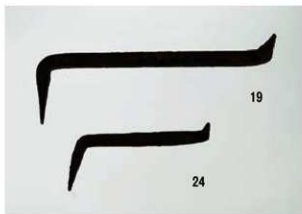
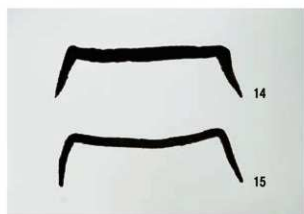
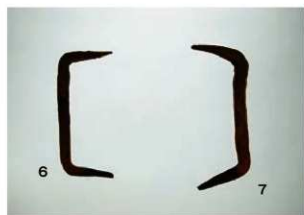
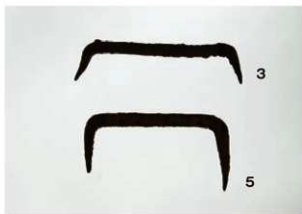
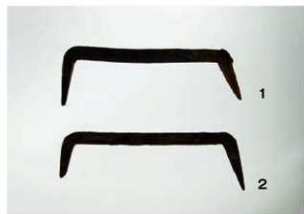
第27次調査出土遺物

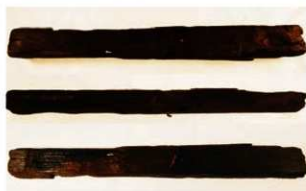
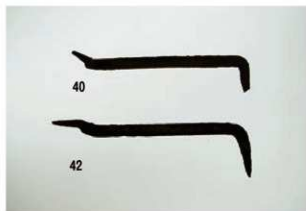






第28次調査出土遺物 1

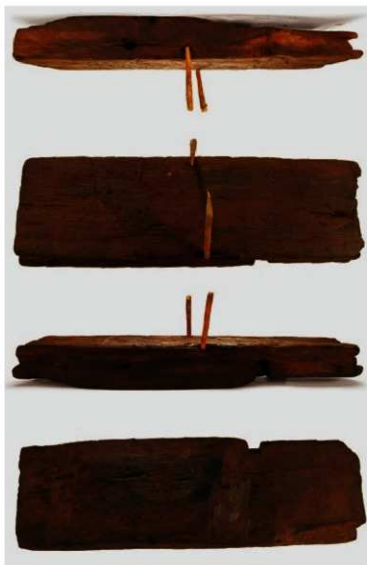




第28次調査出土遺物3



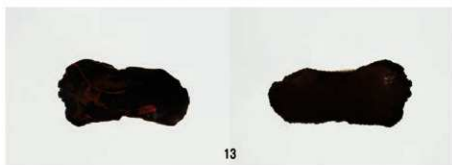
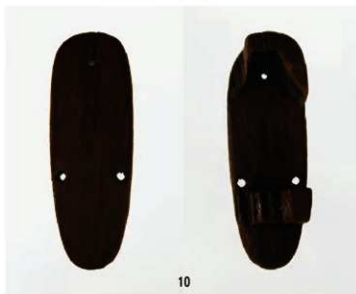
第28次調査出土遺物 4



8



9



## 報告書抄録

ふりがな	しせきとっとりじょうあとつげたりたいこうなるはくつちょうさほうこくしよ								
書名	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書								
副書名	第21・26・27・28次発掘調査								
巻次									
シリーズ名									
シリーズ番号									
編著者名	坂田邦彦								
編集機関	鳥取市教育委員会								
所在地	〒680-8571 鳥取県鳥取市上魚町39番地 TEL (0857)20-3367								
発行年月日	西暦2013年(平成25年)3月29日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間		調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号						
しせきとっとりじょうあと 史跡鳥取城跡 附太閤ヶ平	とっとりし 鳥取市 ひしよまち 東町 ちやうめ 2丁目 ちのち 地内	31201	2-0211	35° 30' 22"	134° 14' 15"	21次	20090701 ～ 20090831	60.3	史跡鳥取城跡 復元整備事業
						26次	20100701 ～ 20100831		
						27次	20101101 ～ 20110225	76.7	
						28次	20111005 ～ 20120330	480.0	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
史跡鳥取城跡 附太閤ヶ平	城郭	江戸		門遺構 橋跡 登城路 水路 石垣		陶器 磁器 鉄製品 木製品			

---

**史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書**  
**第21・26・27・28次発掘調査**

発 行 平成25(2013)年3月29日

編 集 鳥取市教育委員会  
〒680-8571 鳥取県鳥取市上魚町39番地  
電話 (0857)20-3367

印 刷 株式会社鳥取平版社

---





